

鳥鶴 田 池 遺 跡 貫 遺 跡

一般国道9号安来道路建設予定地内
埋蔵文化財発掘調査報告書 西地区Ⅶ

本文編（第2分冊）

平成9（1997）年3月

建設省松江国道工事事務所
島根県教育委員会

鳥鶴 田 池 遺 踟 貫 遺 踟

一般国道9号安来道路建設予定地内
埋蔵文化財発掘調査報告書 西地区Ⅶ

本文編（第2分冊）

平成9（1997）年3月

建設省松江国道工事事務所
島根県教育委員会

本文目次

(本文編 第2分冊)

第4章 島田池遺跡の調査

| | | |
|--------------|-------|------------|
| 第5節 6区の調査 | | (原田敏照) 1 |
| 第6節 7区の調査 | | (原田敏照) 135 |
| 第7節 8区の調査 | | (中川寧) 155 |
| 第8節 調査の成果と課題 | | (原田敏照) 184 |

第5章 鶴貫遺跡の調査 (原田敏照) 234

| | | |
|--------------|-------|-----|
| 第1節 遺構と遺物 | | 235 |
| 第2節 調査の成果と課題 | | 248 |

第6章 自然科学分析

| | | |
|------------------------|-------|------------|
| 第1節 島田池遺跡1、4区出土の人骨について | | (井上晃孝) 252 |
| 第2節 東出雲町鶴貫遺跡の層序と古環境 | | (中村唯史) 275 |



第5節 6区の調査

概要 (第214図)

本調査区は、標高22m～32m付近の南西に面した斜面に相当する。上方の尾根部分は、4及び5区として調査をおこなっている。調査前にすでに天井部が陥没した横穴墓（3号横穴墓）が存在し、また、墓道・前庭部分にあたると思われる凹みがいくつか認められたことから、斜面に横穴墓群が存在している可能性が高いものと考えられた。

調査は、重機により表土の除去から着手し地山付近まで掘り下げをおこなった。その後は、人力により精査し、遺構の検出をおこなった。その結果、横穴墓（横穴）14基を検出した。検出後の横穴墓は、前庭部主軸に沿って縦断、横断の十字の土層観察用ベルトを設定し、前庭部埋土の調査からおこなった。また、墓道・前庭部の下方に掘削時の堆土が堆積していることが、1、4区の横穴墓の調査で確認していることから、ベルトを何本か残し堆積状況についても調査した。

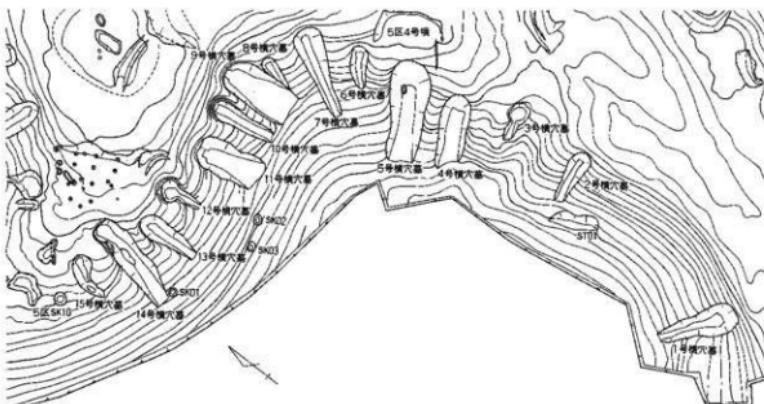
墓道・前庭部から出土した遺物については、その位置を記録して取上げた。なお、8号横穴墓については、完形の遺物が面的に出土したので、その出土状態を図化した後に取り上げた。

また、前庭部の埋土の調査は、比較的分かり易い上層が多いことから、追葬時の侵入状況を確認することができた。そのような状況から土層の剥ぎ取りを6区7、9号横穴墓についておこなった。

玄室内の調査で、流入土の除去については、玄室内を4つの小区に分割して順番に調査した。なお、区域は左側手前をA区、左側奥をB区、右側奥をC区、右側手前をD区としている。そして、玄室内の流入土は、各小区ごとにフルイをかけ玉類などの遺物の採取に努めた。

玄室内での遺物の出土状況が明らかになった時点で、主軸を設定し直し出土状況、及び遺構の図化をおこなった。

以上のような方法で調査した遺構について、次項からその詳細について述べたい。



第214図 6区遺構配置図 (S=1:600)

(1)横穴墓

[1 号横穴墓]

立 地 (第215図)

調査区の南端の標高23m付近で検出し、他の横穴墓とは、距離的に離れた位置に存在している。

墓 道 (第215図)

地山を深いところで2.5m掘削し、全長8.16mを測り、やや狭長の墓道を造りだしている。前端部床面の幅1.0m、玄門付近の幅1.6mと玄門部側が広いものである。床面は玄門部に向かって徐々に高く傾斜し、玄門から1.5mのところで1段0.2m程高くなるものである。

玄 門 (第215図)

墓道の中央よりやや右よりに穿たれ、閉塞用の割り込み（閉塞部）をもつものである。奥行1.3m、幅0.78m、高さ1.0mを測る。横断面は天井と側壁の界線が曖昧なもので、馬蹄形を呈するものである。閉塞部は、床面幅1.16m、奥行0.23m、高さ1.0mを測り、玄門部より一段天井が高くなるものである。正面から見た場合は、台形を呈するものである。また、床面には溝が掘られているが、他の横穴墓の溝と異なり、2個所に分かれているものである。2つとも上端幅8~10m、深さ6cm程のものである。

玄 室 (第215図)

主軸はN-50°-Wをとり、平面形はやや横長の長方形を呈す。規模は、奥行1.85m、幅2.15mで前壁では、右袖0.75m、左袖0.52mを測り、やや右袖が幅広のものである。

立面では、奥壁は丸みをもつて天井部にいたり、側壁は、やや直立気味に立ち上がった後に丸みをおび天井部にいたる。床面から天井部までの高さは1.05mである。

埋土堆積状況 (第219図)

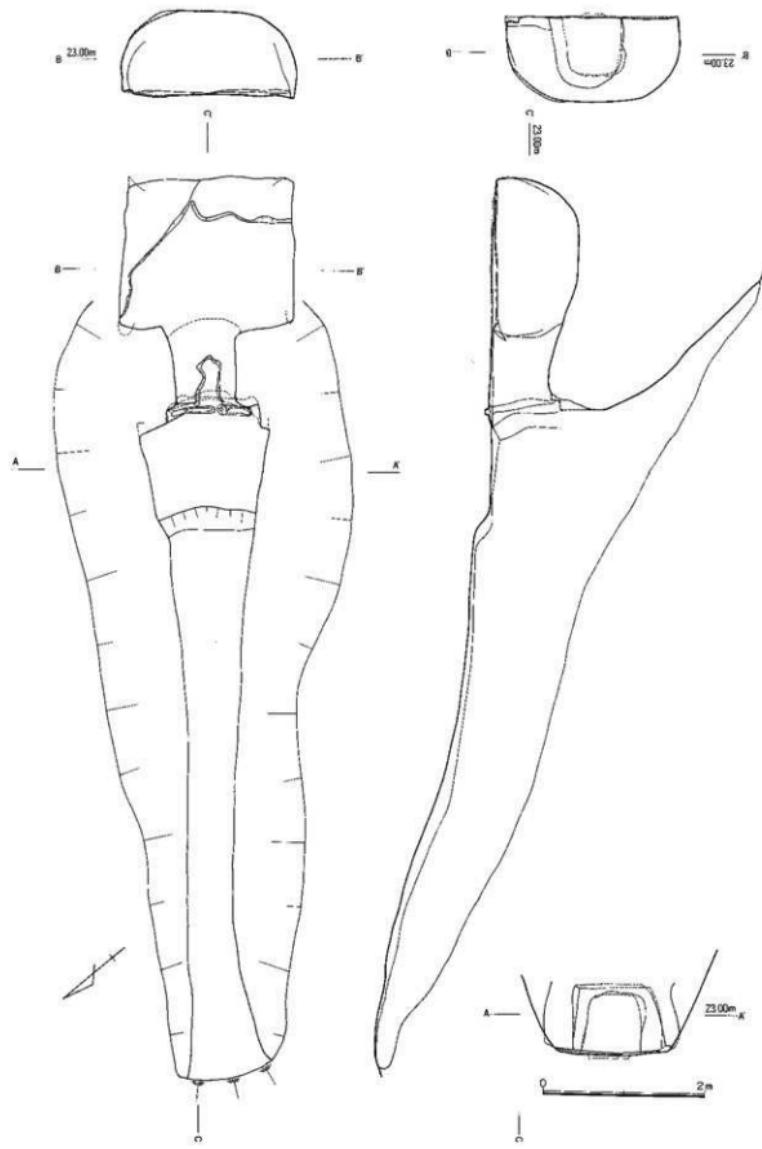
埋土は、大きく8層群に分けることができた。1層は、流入土と考えられるものである。2層は、暗褐色を呈し最終埋土の上面に形成された腐食土の可能性が考えられるものである。3a層は地山疊を含むが褐色を呈し軟らかい層であり、本来埋土であったものが玄室内へ二次的に流入したものと理解した。また、3b層は、やや硬く締まるもので、最終埋葬時の掘削時の搔き出した土と考え、その上面が埋葬面と解釈した。4層は、第5次埋葬に伴う埋土と考えたもので、4a層は腐食が著しく黒色を呈し須恵器碎片が多数出土している。5層は、第4次埋葬に伴う埋土で5次埋葬時に大部分削られているものとして考えたが、第5次埋葬時の埋土である可能性も残る。6層は、第3次埋葬に伴う埋土と考えたもので、上面の6a層は、やや腐食し、褐色呈するものである。7層は、第2次埋葬に伴う埋土で上層の7a層は、やや腐食したものである。8層は、初葬時の埋土と考えられ、この上面から須恵器が出土している。なお8b層は非常に混ざりのない地山に類似した土層であった。

以上の十層観察から最低6回の埋葬（侵入）行為が存在していたものと解釈できる。

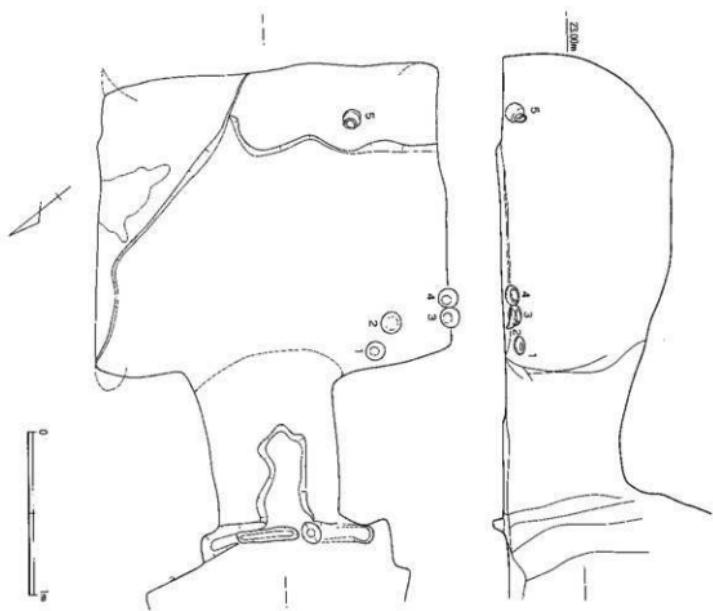
遺物出土状況 (第216、220図)

墓道では、黒色土から多数の須恵器碎片と須恵器長頸瓶（第217図8）が、8層上面（第2次埋葬面）から須恵器蓋（第217図6）が出土している。

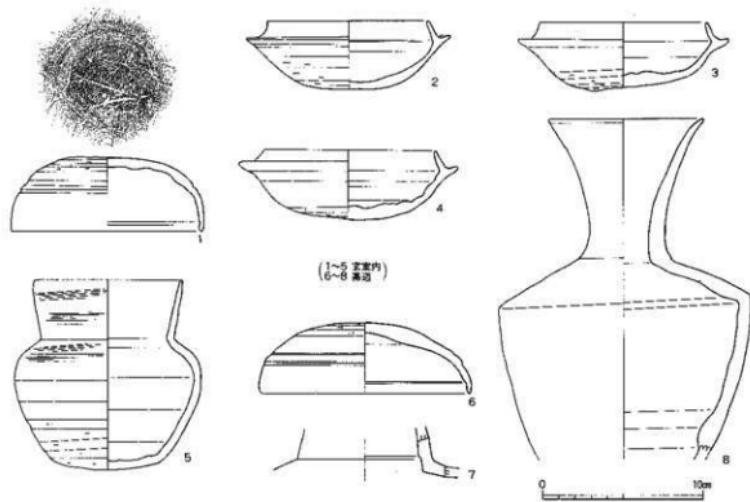
玄室内では、右壁側から須恵器直口壺（第217図5）と蓋坏（第217図1~4）が出土している。直口壺は奥壁側から、蓋坏は前壁側から出土している。また、玄室の流入土を調査中に鉄鎌（第218



第215図 6区1号横穴墓遺構実測図 ($S=1:60$)



第216図 6区1号横穴墓玄室内須恵器出土状況実測図 ($S=1:30$)



第217図 6区1号横穴墓出土須恵器実測図 ($S=1:3$)

図)が出土しているが、その位置については、不明である。

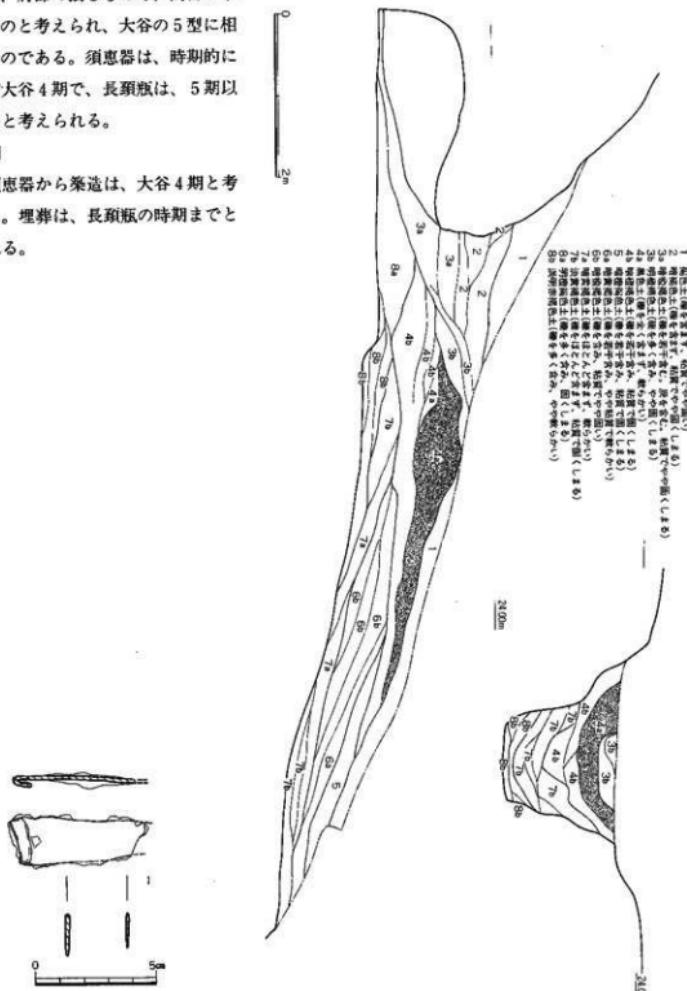
出土遺物(第217図)

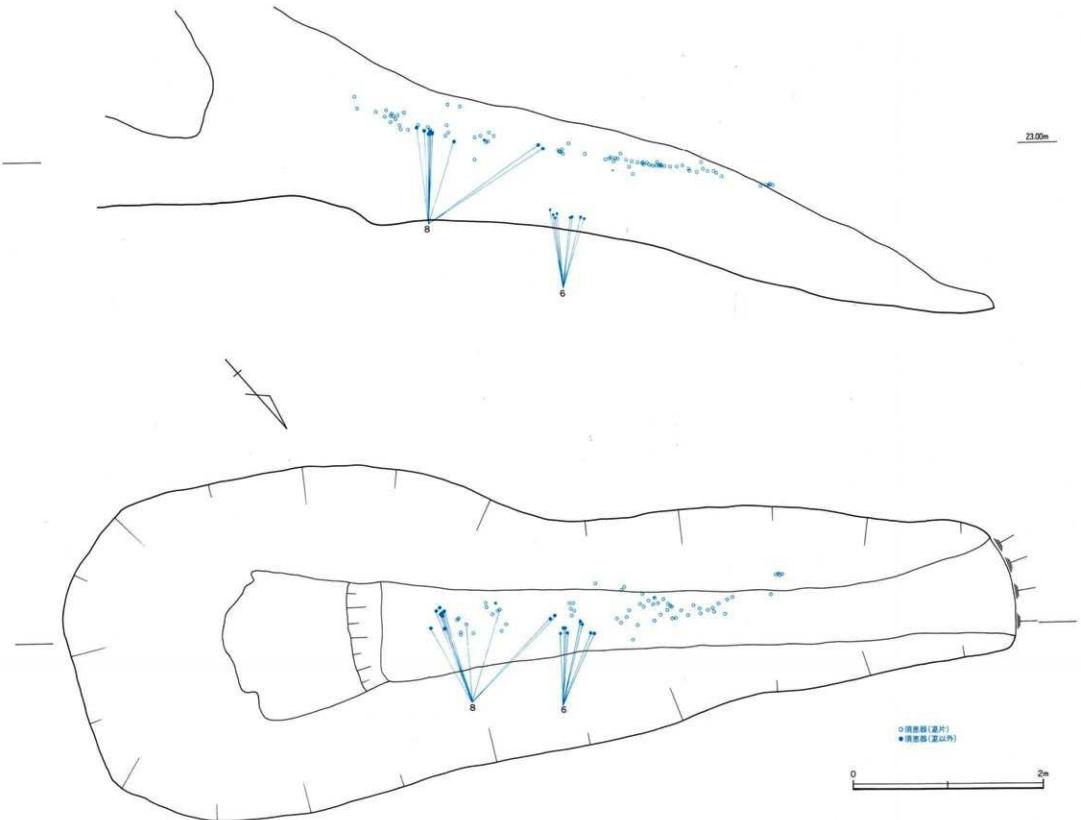
出土須恵器で、玄室内出土の蓋環(1~5)は大谷分類のA4型に対応するものと考えられる。一方、墓道出土の蓋(6)は、大井部の削りが玄室内の蓋環に比しやや粗いものである。また、長頸瓶

(8)は、肩部の張るもので、高台が本来付くものと考えられ、大谷の5型に相應するものである。須恵器は、時期的に蓋環が大谷4期で、長頸瓶は、5期以降のものと考えられる。

時 期

出土須恵器から兼造は、大谷4期と考えられる。埋葬は、長頸瓶の時期までと考えられる。





第220图 6区 1号横穴墓道遗物出土状况实测图 ($S=1:40$)

[2号横穴墓]

立 地 (第221図)

調査区の標高25m付近で検出した横穴墓である。

墓 道 (第221図)

地山を深いところで2.1m掘削し、全長5.76mを測り、やや狭長の墓道を造りだしている。前端部床面の幅0.92m、玄門付近の幅0.71mと玄門部側が狭いものである。床面は玄門部に向かって徐々に高く傾斜している。また、玄門部から0.7m手前的位置で一段幅が狭くなる部分が存在し、対応する左右両側壁に一段削り込みがあり高さ0.65mまで面を持つものである。この部分から玄門までの部分を狭道として区別することも可能だが、天井が無いので墓道の一部としてとりあえず認識している。

玄 門 (第221図)

墓道の中央に穿たれ、閉塞用の削りこみをもつものである。奥行0.84m、幅は墓道側0.65m、玄室側0.84mを削り玄室側に幅広になるものである。床面からの高さ0.84mを測り、床面は墓道より一段高くなる。横断面は天井と側壁の界線が明瞭なもので、台形を呈すものである。閉塞部は、床面幅0.75m、奥行0.17m、高さ0.95mを測り、玄門部より一段天井が高くなるものである。正面から見た場合は、台形を呈すものである。

閉 塞 石 (第222図)

凝灰岩製のものが玄門部と墓道の2箇所から出土している。玄門部手前からは切石と割石の2種類が出土している。切石のものは、最終埋葬面の上面から倒れた状態で出土し、倒されたのは、この時期と考えられる。規模は、長さ86m、幅40m、厚さ13mを測り、長方形に加工されたものである。割石のものは、床面直上から2段ほど積み上げられた状態で出土した。その上半部は、切石で閉塞を行なう埋葬以前には存在していたものと考えられ、第3次埋葬時に切石を立てた状態で閉塞していた場合には、第3次、第2次埋葬時に割石の上半部分については除去されている可能性が考えられる。

墓道からは割石のものが6個体出土している。これは、3層上面(最終埋葬面)から出土していることから、最終埋葬時に取り出されたものと考えられる。

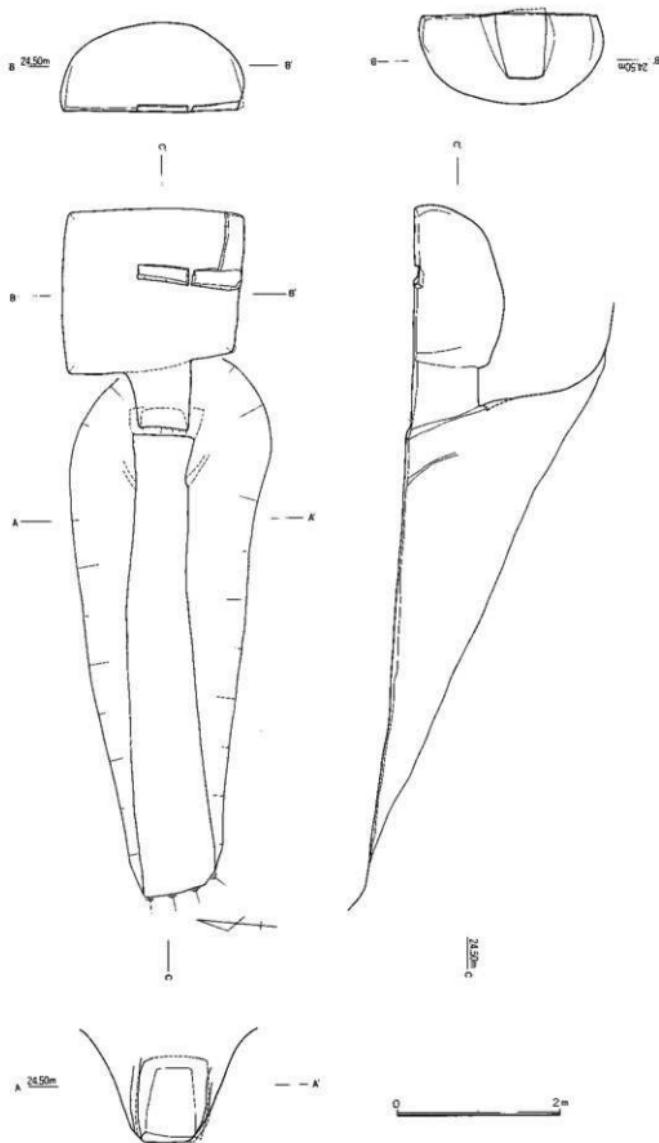
以上の玄門と墓道の出土状況から考えると、最終埋葬時に切石を倒す作業と、割石を取り除く作業が行なわれた想定でき、第3次埋葬時の閉塞には切石と割石の両者が閉塞として用いられたものと考えられる。

玄 室 (第221図)

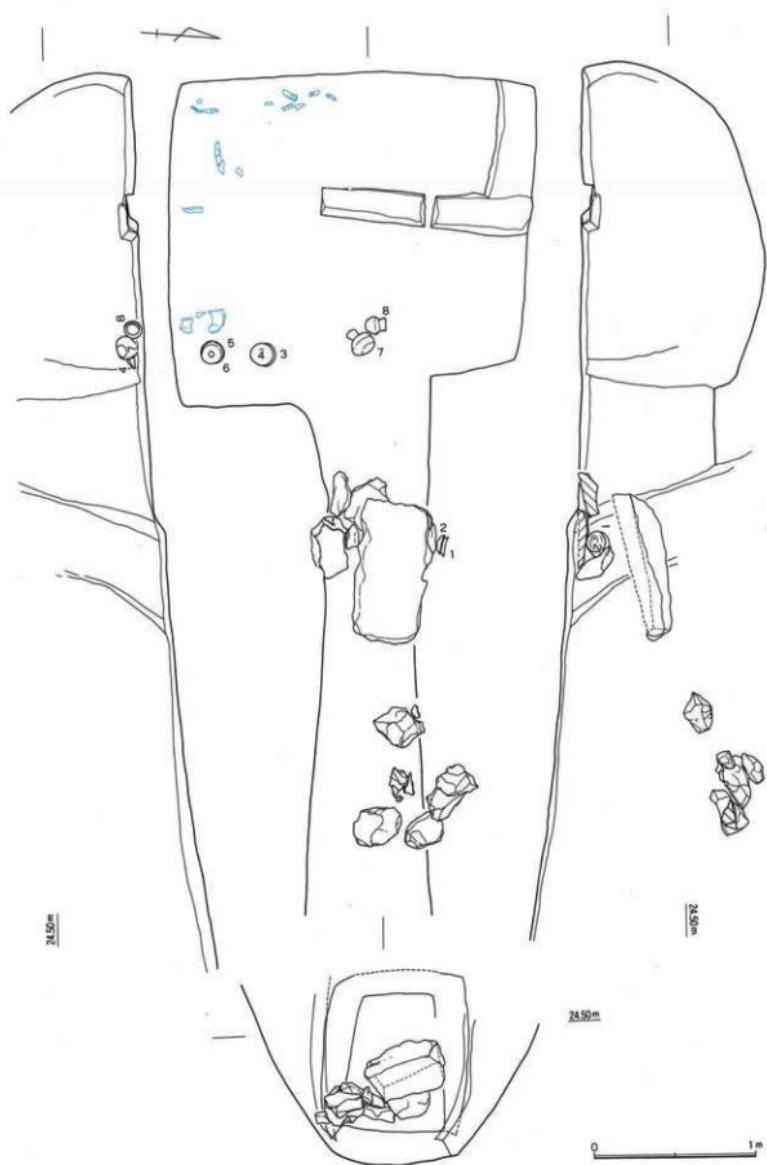
主軸はS-85°-Wをとり、規模は、奥行1.98m、幅2.2mを測る。また、奥行で右壁0.50m、左壁0.70mを測り、左壁側が広く、平面形は、やや不整形な横長の長方形を呈す。また、床面には奥壁側右コーナーに付近に帯状に削りだした仕切りが存在している。平面形はL字状を呈すもので、奥壁に平行する部分が側壁に沿った部分より一段高く削り出され、また、奥壁に平行するものは左から0.64mの地点で途切れている。規模は、奥壁に平行するものが、幅20cm、高さ6cmを測り、長さは、左側63cm、右側59cmである。左壁に沿うものは、幅23~27cm、高さ5cm、長さ72cmを測る。この床面の削りだされた仕切りは、奥壁に沿った位置に遺体を埋葬するために設けられた可能性が考えられる。

立面では、奥壁は丸みをもって天井部にいたり、両側壁も、やや丸みをもって立ち上がった後に天井部にいたる。床面から天井部までの高さは1.12mである。

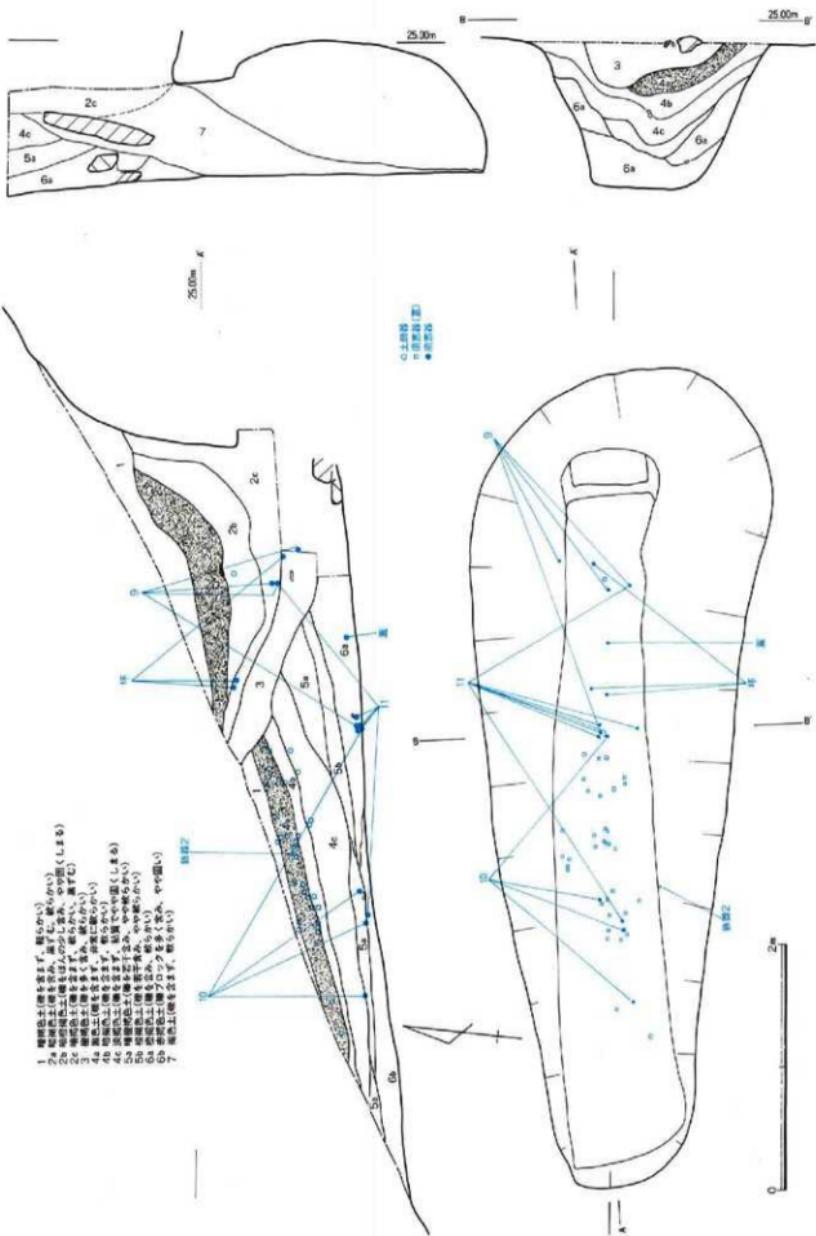
埋土堆積状況 (第223図)



第221図 6区2号横穴墓遺構測定図 ($S = 1:60$)



第222図 6区2号横穴墓閉塞石・人骨・遺物出土状況実測図 ($S=1:30$)



第223図 6区2号横穴墓土層・墓道出土状況測定図 (S=1:40)

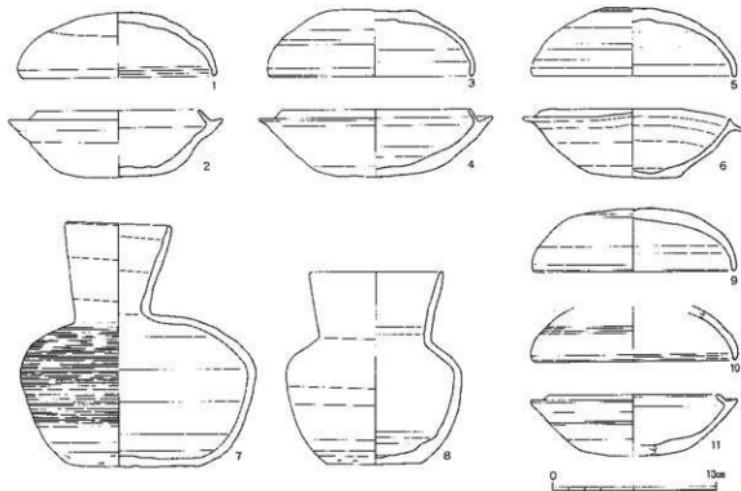
埋土は、大きく7層群に分けることができた。1層は、流入土と考えられるものである。2層は、最終埋葬に伴う埋土として考えたもので、2a層は、暗褐色を呈し最終埋土の上面に形成された腐食上と考えられる。3層は、それ以前の埋土を削りとった後の上層であり、最終埋葬の一つ前の埋葬時の埋土として捉えることも可能であるが、最終埋葬時の埋土削面により出土した土と判断した。また、そう考えた場合には、3層下面を最終埋葬時の掘削面、そしてその上面を埋葬、閉塞等をおこなった作業面として理解できる。4層は、第3次埋葬に伴う埋土として考えたもので、上層の4a層は、腐食が著しく黒色を呈している。5層は、第2次埋葬に伴う埋土として考えたもので、この下面（埋葬面）からは、須恵器が出土している。6層は、初葬時に伴う埋土で、7層は、玄室内への流入土と考えられるものである。

以上の土層観察から最低4回の埋葬行為が存在していたものと解釈している。

遺物出土状況（第222、223図）

墓道では、第3次埋葬に伴う埋土上面に形成された腐食土（4a層）から多数の須恵器破片と土師器片と鉄器（第225図2）が出土している。また、第2次埋葬面（6層上面）からは、須恵器蓋坏（第224図10、11）が2点出土し、最終埋葬面（3層上面）からは、蓋坏（第224図9）が1点出土している。ただし、9は、第2次埋葬面上の破片と接合し、本来は、この面に伴うものであった可能性が考えられるものである。

玄室内では、大きく2群に分かれて出土している。1つは、奥壁に沿った部分にあたり、左側から人骨と水晶切子玉が、削り出した仕切り上からは、水晶切子玉とガラス小玉が出土している。もう一つは、前壁側にあたり、左側から頭蓋骨と2セットの須恵器蓋坏が、玄門付近から平瓶、直口壺が出土している。須恵器蓋坏のセットの出土状態は、左側のものは伏せた壺の上に蓋をのせ、右側のもの



第224図 6区2号横穴墓出土須恵器実測図 (S=1:3)

は伏せた蓋の上に伏せた坏をのせたものであった。

また、閉塞部からも蓋坏（第224図1、2）が2点出土している。これらは、割石の閉塞石の上面から出土しているものである。

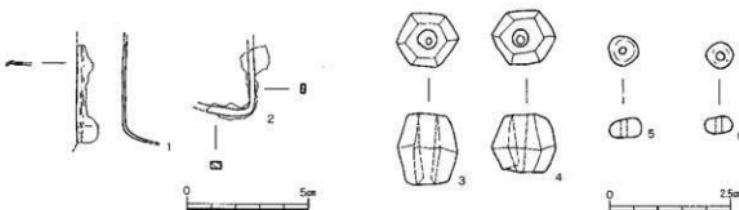
出土遺物（第224図）

出土須恵器で、蓋坏（1～6、9～11）は12点（3点は非掲載）出土し、いずれのものも蓋の口径が12.0～13.0cm程で天井部に削りが認められないものであり、大谷のA7型に相応するものと考えられる。平瓶は、C3型と考えられる。

また、出土遺物の中で、1は、薄い金箔品で表面は、鍍金を施しているように観察できるものであるが、その用途については不明である。

時期

出土須恵器の様相から築造は、大谷5期と考えられる。また、埋葬も5期より新相と考えられる須恵器が認められることから、その中で終了しているものと考えられる。



第225図 6区2号横穴墓出土金属器・玉類実測図 (S=1:2, 1:1)

[3号横穴墓]

立地

調査区の標高26m付近で検出した横穴墓で、調査前の時点では、玄室～玄門にかけての天井部が崩落しており、存在がすでに確認できていたものである。調査は、堆積している土砂を除去したのみで終了した。また、遺物の出土は、確認されなかった。

墓道（第226図）

前端部付近は、後世の掘削により失われたものと考えられ、残存長で1.7mを測る。床面幅は0.85mを測り、深さは、現状で0.95mである。おそらく、狭長の墓道であったものと考えられる。

玄門（第226図）

墓道の中央に穿たれ、閉塞用の削り込み（閉塞部）をもつものである。奥行1.4m、幅は墓道側0.56m、玄室側0.97mを測り玄室側に若干幅広になるものである。高さは、天井部が失われていることから不明であるが、現状で0.64m程を測る。

閉塞部は、床面幅0.90m、奥行0.26mを測り、床面には、幅0.22m、深さ0.03m程の溝が穿たれている。また、現状での高さは0.90mである。

閉塞石（第226図）

凝灰岩製の削石が玄門部床面上から1点出土している。本来は、いくつか存在していたものと考

えられるものである。

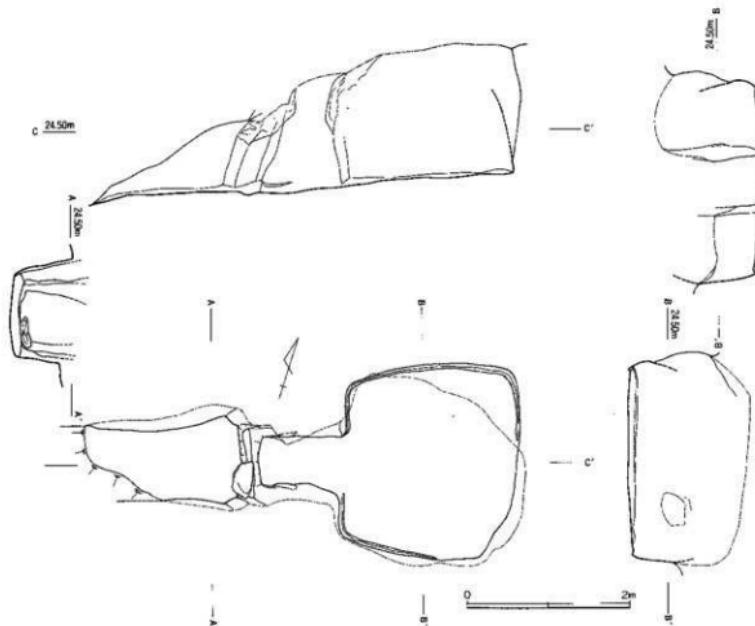
玄室（第226図）

主軸は S-74°-W をとり、規模は、奥行 2.2m、幅は奥壁で 2.4m、前壁で 1.8m を測り、やや奥壁側が幅広になるものである。床面には、右奥コーナー付近でピットが認められるが、後世のものである可能性が高い。また、床面では、四壁に沿って溝が廻り、規模は、幅 6 cm、深さ 3 cm を測るものであるが、右奥コーナー付近は、後世の改変により失われていた。

一方、立面では、奥壁は現状では垂直に近く立ち上がるが、本米は丸みをもって天井部にいたるものであったと考えられる。また、両側壁は、現状で床面から 0.5m より上は、改変が著しく詳細は不明であるが、やや丸みをもって立ち上がった後に天井部にいたるものと推測している。床面から天井部までの高さについては、天井部崩落のため不明である。

時 期

出土遺物が出土していないことから、時期については明らかにできないが、形態から見ると、本調査区で確認される大谷 3~4 期の横穴墓に類似しているものであることから、その時期である可能性が考えられる。



第226図 6区3号横穴墓遺構実測図 (S=1:60)

[4号横穴墓]

立 地

調査区の標高25m付近で検出した横穴墓で、隣接して北側には5号横穴墓が存在する。

前 庭 部 (第227図)

地山を深いところで3.3m掘削し、全長6.6mを測る。床面は平坦に加工され、前端部で幅1.1m、羨道部側で幅0.83mと羨道部側で幅がやや狭まるものである。全体的に幅広の形態をとる。

羨 道 (第227図)

前庭部の中央に穿たれ、奥行0.56m、幅0.98m、高さ0.95mを測る。天井は、平坦で玄門部より一段高くなり、横断面は台形を呈し、側壁と天井部の界線が明瞭なものである。

玄 門 (第227図)

羨道部より床面が1段高くなり、奥行き0.90m、幅0.77mを測る。天井部は、玄室に向かって徐々に高くなるもので、高さは玄室側で0.81m、羨道側で0.72mを測る。横断面は、天井部と側壁の界線が明瞭なもので、台形を呈すものである。

閉 塞 石 (第229図)

羨道部から凝灰岩の切石が2枚出土している。左側のものは倒された状態で、右側のものは立てかけられた状態で出土している。それぞの閉塞石の規模は、左側のものが、長さ0.95m、幅0.43m、厚さ0.13mで、右側のものが、長さ0.85m、幅0.40m、厚さ0.1mを測るものである。本来は、この2枚で玄門部を完全に被い閉塞していたものと考えられる。

玄 室

主軸はS-64°-Wをとり、規模は、奥行2.23mを測り、幅は奥壁で2.56m、前壁で2.43mと前壁側が幅広のものである。

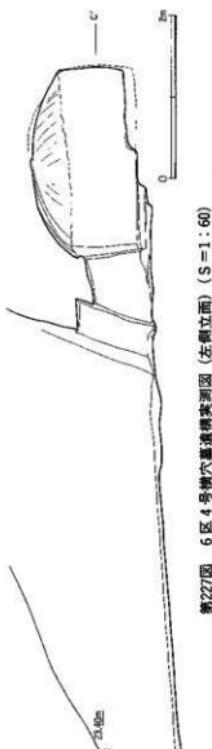
また、左右各袖部分は、左袖1.1m、右袖0.7mを測り、左袖が幅広になるものである。

床面は、4段に加工されている。奥壁に沿った位置には、有縁の高く削りだされた屍床が造られ、左壁に沿った位置から有縁屍床の前面にかけては、「T」字形の面が存在している。そして、その手前には、前壁に沿った「コ」字形の面が存在し、それより1段低い面は玄門と同一のレベルある。これらの削りだされた屍床は、出雲地方では見られないもので、その系譜が問題となるものである。

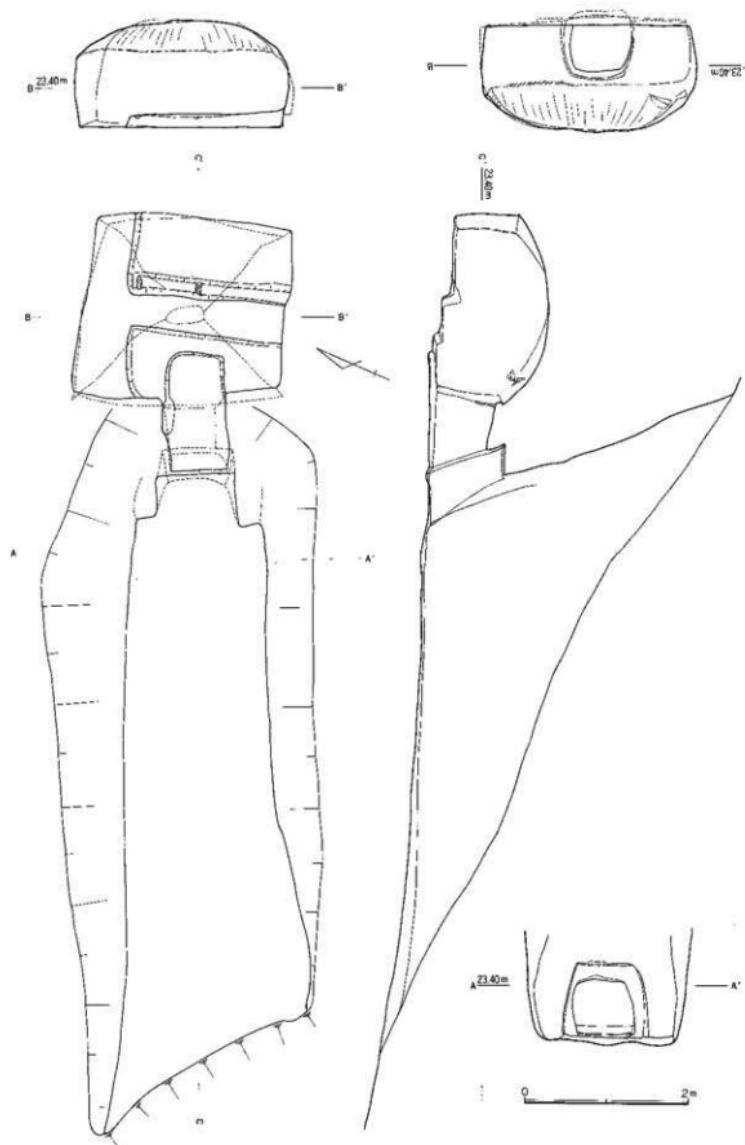
奥壁に平行した削り出しの屍床は、やや左側の幅が広い長方形を呈したものである。規模は、長さ2.0m、右側の幅0.76m、左側の幅0.78mを測り、「T」字形の面から13cm程高く削りだされている。

また、前壁側の縁は、幅10cm程の帯状に削り出されており、左側の端部と中心から左よりの2個所には、浅く削られ溝状になっている。

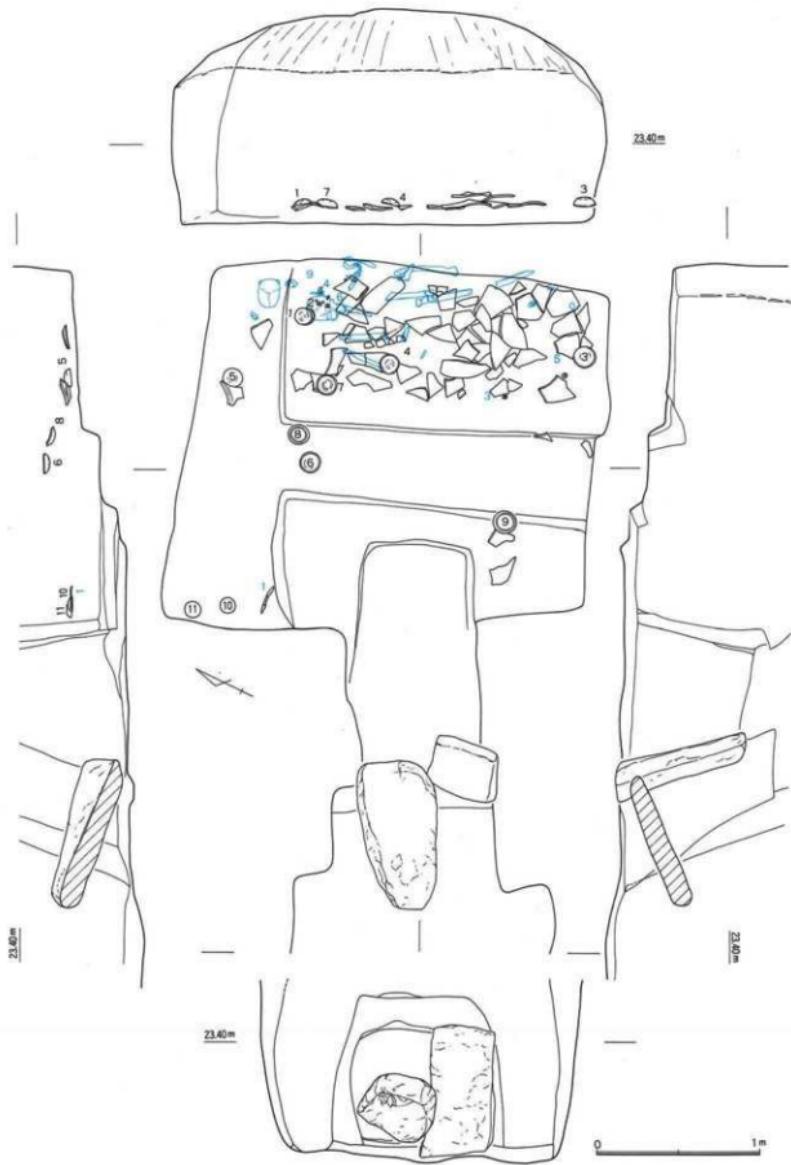
「T」字形に削りだされた面で、左壁沿いに当たる部分の幅は、奥壁側で48cm、前壁側で75cmを測



第227図 6区4号横穴墓構造実測図(左側立面) (S=1:60)



第228図 6区4号横穴墓造構実測図 (S=1:60)



第229图 6区4号横穴墓閉塞石·人骨·遺物出土状況実測図 (S=1:30)

り、前壁側が広いものである。また、有縁屍床の前側に当たる部分の幅は、右壁沿いで0.48m、左側で0.40mを測り、右側の広いものである。

以上のように床面を加工した玄室内では、奥壁に平行する空間、一段低い「T」字形の面で左壁に沿った空間と有縁屍床に沿った前側の空間の3つの埋葬可能な空間が存在していることになる。

一方、立面形では、右壁以外の各3壁と天井部の界線（軒線）が明瞭なもので、3壁は、垂直に近く立ち上がるが、右壁は、軒線が施されず、丸みを帯びている。天井部は、全体的に丸みをおびながら棟梁を呈すもので、棟はおそらく丸刃の工具によって、一回の削りで加工されたもので、幅22cm、長さ47cmを測る。また、天井部までの高さは、玄門付近の床面から1.32mを測る。

また、玄室の加工状況は、天井部に丸刃の工具による削痕が多数認められており、天井部は丸刃の工具によって大部分が仕上げられものと理解できる。

埋土堆積状況（第230図）

埋土は、大きく8層群に分けることができた。1層は、流入土と考えられるものである。2層は、養造部を覆うように堆積し、最終埋葬に伴う埋土として考えたもので、2b層は、暗褐色を呈し最終埋土の上面に形成された腐食上と考えられ、須恵器壺片が出土する。3層は、それ以前の埋土を削りとった後の土層であり、最終埋葬の一つ前の埋葬に伴う埋土として捉えることも可能であるが、最終埋葬の掘削時に出土土と判断した。そう考えた場合には、3層下面を最終埋葬時の掘削面、そしてその上面を埋葬、閉塞等をおこなった作業面として理解できる。4層は、第4次埋葬に伴う埋土として考えたもので、上層の4a層は、腐食が著しく黒色を呈している。5層は、第3次埋葬に伴う埋土として考えたもので、この下面（埋葬面）からは、須恵器が出土し、上層の5a層は若干腐食している。6層は、第2次葬に伴うものと考えられ、その下面（埋葬面）からは、須恵器と土師器が出土している。7層は、初葬に伴う埋土と考えられ、その上層の7a層は一部腐食が見られるものである。8層は玄室への流入土と考えられ、一部最終埋葬時の埋土が二次的に入り込んだものが含まれていると思われる。また、8c層上面からは、須恵器が出土している。

以上の7層観察から最低5回の埋葬行為が存在していたものと解釈できる。

遺物出土状況（第229、231図）

前庭部では、最終埋土上面に形成された腐食上（2b層）から須恵器壺片と長頸瓶片（第232図22）が出土している。また、第4次埋葬時の埋土上面の黒色上（4a層）からも多数の須恵器壺片と長頸瓶片が出土し、長頸瓶片は2b層出土のものと接合し同一個体である。第3次埋葬面（5層下面）からは、蓋環（第232図13、15、17、19～21）が破片の状態で出土し、第2次埋葬面（6層下面）からも蓋環（第232図14、16、18）が出土しているが、完形に近い状態のものである。また、第2次埋葬面からは、土師器（第232図24）も出土しているが、これは破片の状態であった。このように埋葬面によって土器の出土状態が異なる点が認められ、これは、その面でおこなわれた儀礼のありかたの相違が関係している可能性が考えられるかもしれない。

以上のほかに、4a層上面からは、直口壺（第232図23）が出土し、下方の斜面からは蓋（第232図12）が出土している。なお、12の蓋については、本横穴墓に伴わない可能性が高い。また、2c層で耳環が出土しているが位置が明確にできなかった。

玄室内では、有縁屍床上、左壁沿いの床面上、流入土上の3群に大きく分かれて出土している。

有縁屍床上には、須恵器壺片が敷かれ、その上に人骨、須恵器蓋環、刀子（第232図2）、耳環、玉

類が出土している。耳環の出土位置から考えて頭位を異にして奥側と前側に2体埋葬されていたものと考えられるもので、奥側のものは頭蓋骨が残存していた。そして頭蓋骨の周囲からは耳環、玉類、薺环が出土している。なお、須恵器床で使用された甕片は、1区1号横穴墓で検出した須恵器床の甕と接合し、同一個体であることが確認された。

左壁沿いの床面からは、奥側で頭蓋骨、蓋環、壺片が出土し、前側で刀子、蓋環が出土している。奥側の頭蓋骨は、その出土状態から原位置のものとは考えられず、2次的な移動があったものと思われる。また、奥と手前側の蓋環を比較すると型式差が認めらる。出土状態から見て、本来この空間に埋葬していた遺体に伴うものは、手前側の蓋環と刀子と考えられる。

床面より浮いて出土した蓋環は、上層で見ると、8a層上面と8b層上面の2つが存在している。6、8の蓋環は、8a層上面にあたり有縁床とは同一面で、9の蓋は8b層上面にあたり「T」字形に削りだされた面と同である。

出土遺物（第232図）

玄室内及び前庭部出土の須恵器蓋は、その径から大きく2つに分かれる。

1類(1~9、12~19)は、大形のもので、蓋の口径12~13cm、壺の口径10.5~11.5程のものである。

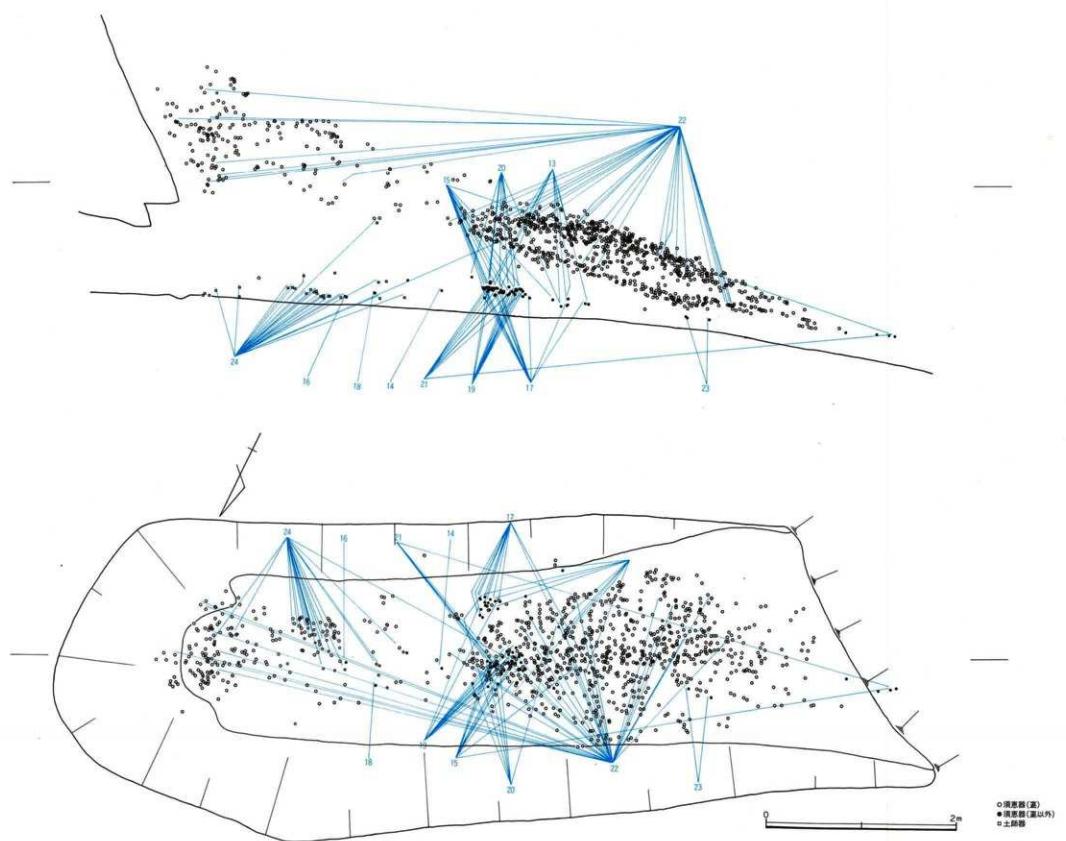
2類(10、11、20、21)は小型のもので、蓋の口径9.2~10.5cm、环の口径8.4~9.2cm程のものである。

また、1類は、新柾のものと占相に分けて考えることも可能で、古柾のものは、蓋の口径13cm前後、坏の口径11.5cm前後を測り、蓋の稜をかすかに二重の沈線で表現するものである。

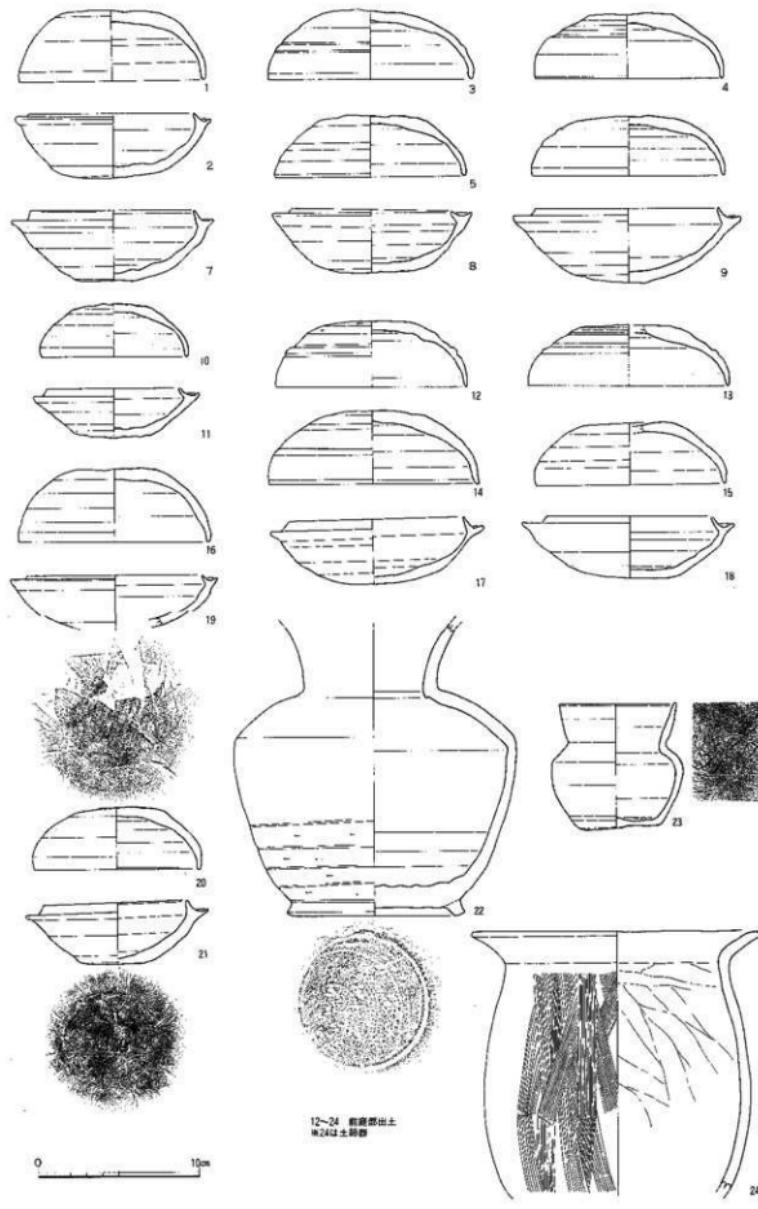
以上の分類した蓋環の前後関係は、
1類から2類に変遷しているものと考
えられる。また、大谷分類では、1類
がA 7型、2類がA 8型に対応するものであろう。



第230回 6区4号樁穴基土層実測図 ($S=1:60$)



第231図 6区4号横穴墓前部遺物出土状況実測図 (S=1:40)

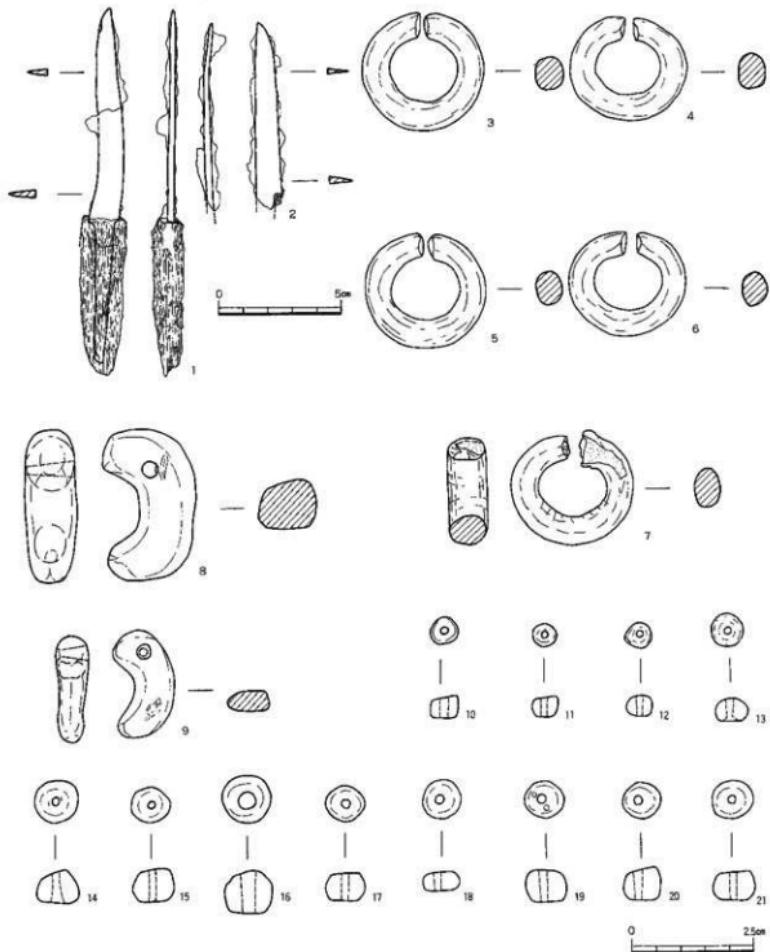


第232図 6区 4号横穴墓出土土器実測図 ($S = 1:3$)

なお、分類した須恵器の出土位置を玄室内で最検討して見ると、奥壁に平行した有縁屍床が先葬で、左壁に平行した屍床が後葬と推定できる。

時期

出土須恵器の様相から製造は、大谷5期と考えられる。そして、埋葬は6A期までと考えられる。なお、前庭部出土の高台付の長頸瓶（第232図22）は、底部に糸切り痕が残るもので、6期以降のものであるが、埋葬に伴わない層位であるから、埋葬後の儀礼に伴うものと考えている。



第233図 6区4号横穴墓玄室内出土金属器・玉類実測図 (S=1:2, 1:1)

[5号横穴墓]

立 地

調査区の谷部の最も奥まる部分の標高25m付近で検出した横穴墓である。上方の尾根部には、後背墳丘と考えられるコ字形の溝をもつ5区4号墳が立地している。

前 庭 部 (第235図)

地山を深いところで3.3m掘削し、全長9.6mを測る。床面は平坦に加工され、前端部で幅1.65m、羨道部側で幅0.95mと羨道部側で幅がやや狭まるものである。全体的には、幅広の形態をとる。また、前庭部の左奥コーナー付近では、土壠を検出している。床面精査時に確認したことから、掘り形については明確にできなかった。土壠は、楕円形を呈し、その規模は、長軸で0.5m、短軸で0.3m、深さ0.2mを測る。その床面と壁面には、多数の丸刃工具によるものと考えられる加工痕が認められた。

羨 道 (第235図)

前庭部の中央に穿たれ、奥行0.7m、高さ0.95mを測る。幅は、羨道側で0.93m、玄室側で1.2mを測り、玄室側にやや幅広になる。天井は、平坦で玄門部より一段高くなり、横断面はやや隅丸の台形を呈し、側壁と天井部の界線が明瞭なものである。

玄 門 (第235図)

羨道部より床面が1段高くなり、奥行き0.9mを測る。幅は、玄室側1.15m、羨道側で0.8mを測り、玄室に向かって広がるものである。天井部は、平坦なもので、床面からの高さは、0.7mである。横断面は、天井部と側壁の界線が明瞭なもので、やや隅丸の台形に近い形をなすものである。

閉 塞 石 (第234図)

羨道部から凝灰岩の切石が2枚倒された状態で出土し、左側の石は、右側の石の上に一部重なるものである。それぞれの閉塞石の規模は、左側のものが、長さ0.76m、幅0.46m、厚さ0.18mで、右側のものが、長さ0.88m、幅0.47m、厚さ0.14mを測るものである。本来は、この2枚で玄門部を完全に被い閉塞していたものと考えられる。

玄 室 (第235図)

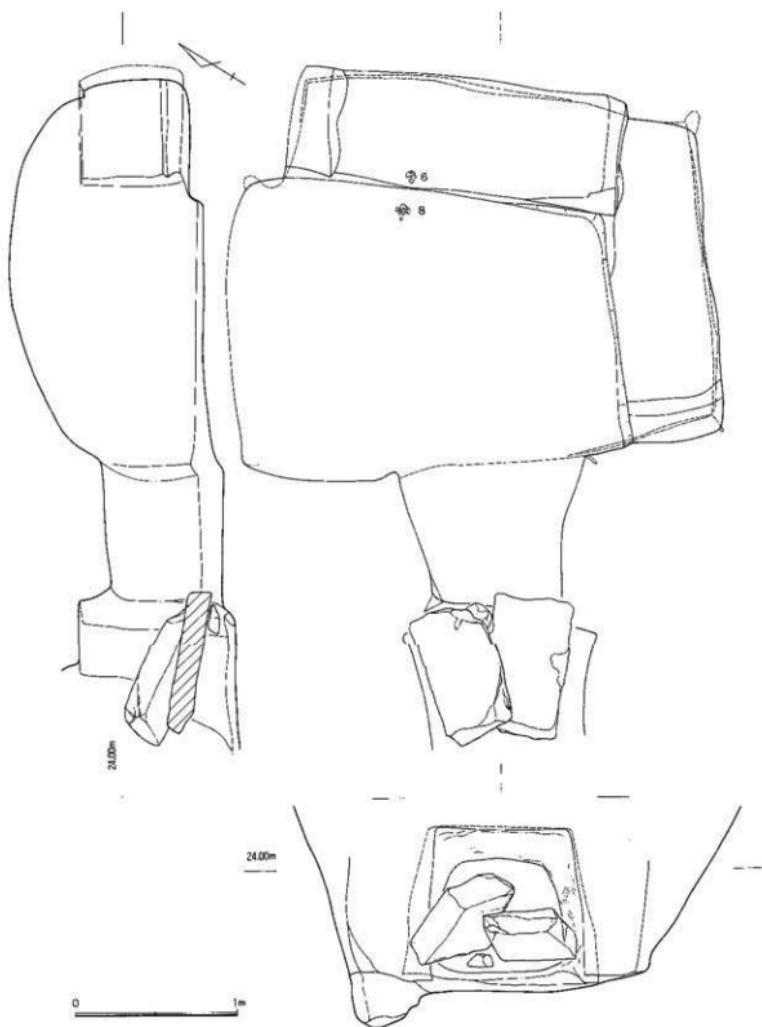
主軸はS-59°Wをとり、平面形は、奥壁と右壁にそれぞれ平行して削り出しの屍床が設けられ、そのために左壁が、やや割り込みをもつ形になる。規模は、奥行2.35mを測り、幅は奥壁で2.45m、前壁で2.95mとなり、前壁側が幅広のもので、全体的には、横長の長方形を呈す。

削り出しの屍床は奥壁と右壁にそって2個所設けられているが、奥壁のものが高く削り出されている。それぞれ、枕状に高く削りだされたものが片側に存在する。

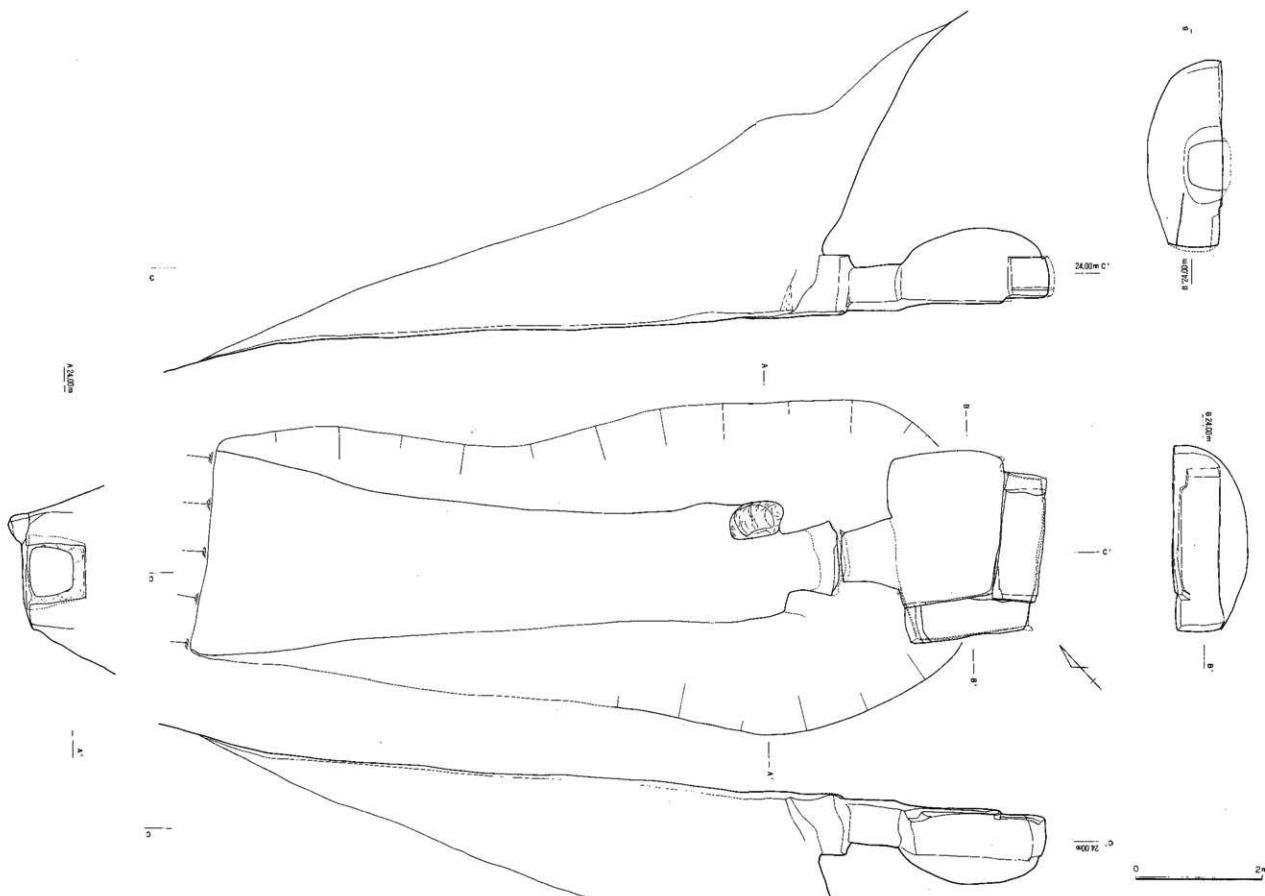
奥壁側の屍床は、長さ1.7m、幅は、左端で0.65m、右端で0.75mを測り、若干、右側が広いものである。また、左側には、幅0.25m程の帶状に削り出された一段高い部分が存在し、枕と考えられるものである。右側にも削りだされた部分が認められ、これは、幅0.1mと狭いものであり、仕切りとして削りだされたものと考えられる。

右壁側の屍床は、長さ1.72m、幅は、奥側で0.43m、前側で0.63mを測り、奥側が狭いものである。前壁側には、幅0.15m程の帶状に削り出された部分があり、枕状を呈している。

一方、立面形では、奥壁と右壁には、天井部との界線(軒線)が明瞭であるが、左壁と前壁の左側では認められない。また、右壁はほぼ直立しているが、ほかの壁は丸みをおびて天井部に至るものである。天井部は、丸いもので、棟等の表現は認められない。



第234図 6区 5号横穴墓閉塞石・鐵器出土状況実測図 (S=1:30)



第235図 6区5号機穴構造実測図 ($S=1:60$)

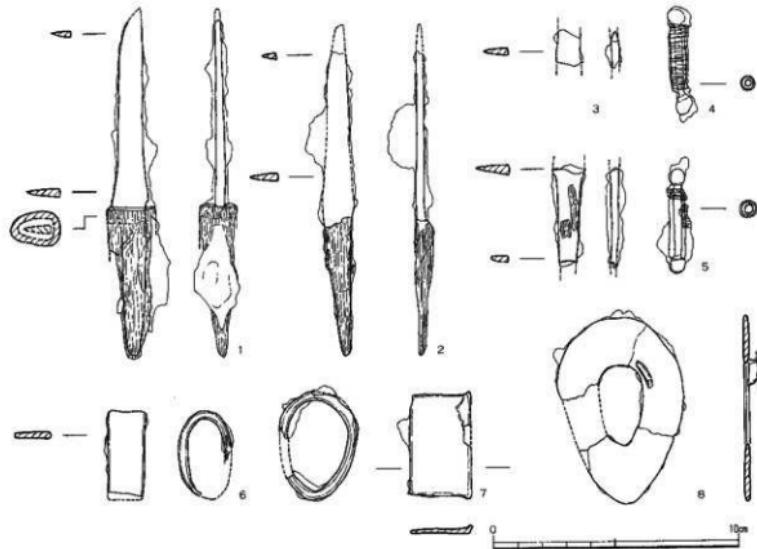
埋土堆積状況（第237図）

埋土は、複雑で非常に解釈に苦しむものであったが、大きく8層群に分けて考えている。1層は、表土及び流土と考えられるものであり、前庭部奥側に主に堆積したものである。2層は、それまでの埋土を削り取った後のもので、最終埋葬に伴う埋土として考えたものである。2a層は、さらに4つに分けて考えられ、2a層は、暗褐色を呈し最終埋土の上面に形成された腐食土と考えられ。2b層は、狭道部を覆うように堆積していることから最終埋葬終了後の埋土、2c層は掘削後の整地土、2d層は掘削時にでた排土と考えられるものである。3層は、第5次埋葬に伴う埋土として考えたもので、上層の3a層は、腐食が著しく黒色を呈し、須恵器壺片が多数出土している。4層は、第4次埋葬に伴う埋土と考えたものであり、その上面でやや腐食した部分が認められたものである。5層は、第3次埋葬に伴う埋土として考えたもので、その前端部側の上面で腐食土が認められるものである。6層は、第2次埋葬に伴う埋土として考えたもので、上層の6a層は、腐食した層で炭を含むものである。7b層は、初葬に伴う埋土として考えたものである。なお、横断土層で認められる7a層は初葬時の埋土と考えたが、横断土層の分層は困難なものであり、誤認が生じている可能性が高い。また、8層は、玄室内への流入土と考えられる。

以上の土層観察から最低6回の埋葬行為が存在していたものと解釈できる。

遺物出土状況（第234、238図）

前庭部では、最終埋土上面に形成された腐食土層（2a層）から須恵器壺片と高環（第239図24）が出土している。また、第5次埋葬の埋土上面の黒色土（3a層）からも多数の須恵器壺片が出土している。基本的に、壺片は2a層と3a層から出土している。また、3a層からは蓋環（第239図2）、



第236図 6区5号横穴墓出土鐵器実測図 (S=1:2, 4, 5は2:3)

3、7、10、13、14.)、平瓶(22)、埴(23)が出土している。第5次埋葬面(3層下面)からは、刀子(第236図3)、弓金具(4)、蓋環(第239図1、6、12、15、16、17、18、19)、長頸瓶(20)、平瓶(21)が出土している。なお、蓋環は型式差をもつものである。その他に、7C層上面から蓋環(5、8、9)が、土層不明の埋土から蓋環(4、11)が出土している。

前庭部出土遺物は、ほとんど第5次埋葬に伴う層で出土することから、この埋葬時に玄室内の遺物の大部分が持ち出されたものと考えられる。

前庭部の土壇からは、須恵器甕片、刀子(第236図1、2)、弓金具(5)が出土している。また、甕片は、敷かれた状況に近い形で出土している。

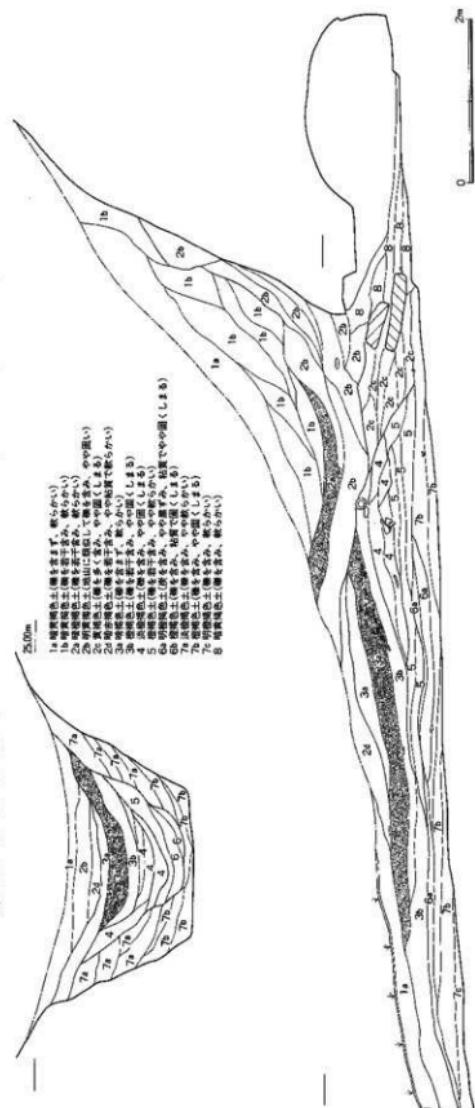
玄室内には、遺物がほとんど残されていないものであった。奥壁に平行した屍床とその手前から鍔、鉗のみが出土し、のことから大刀が副葬されていた可能性が高いものと考えられる。

出土遺物(第236、239図)

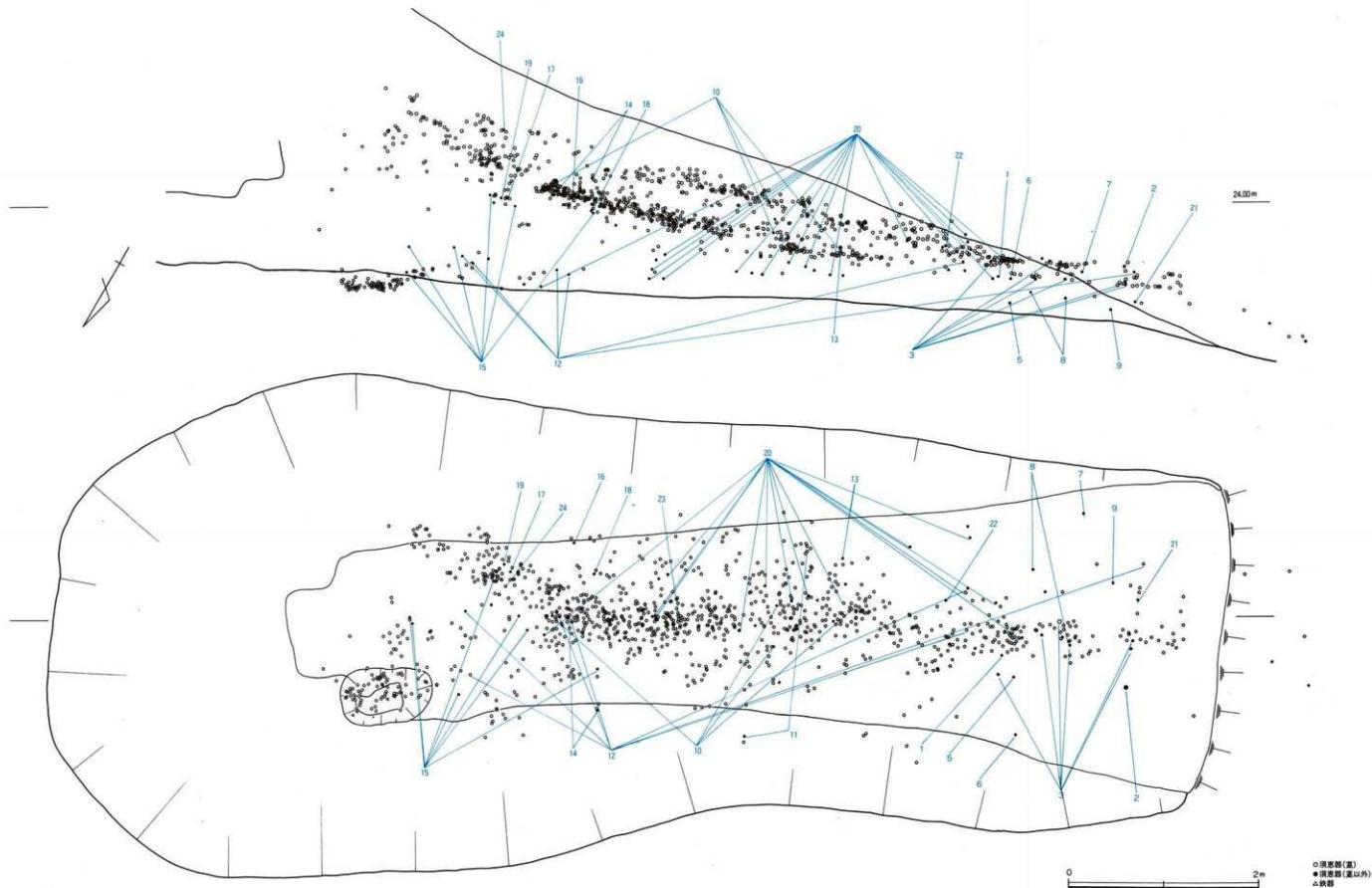
出土須恵器の蓋環は、大きく見て2つに分類可能で、1類は、付身に返りが付く蓋環(第239図1~11)である。2類(第239図12~19)は、輪状つまみ付の蓋と高台付の环のセットである。また、2類は、さらに細分が可能で、A類は、つまみの径が小さく返りのある蓋とセットの环(12~14)、B類は、つまみの径が大きく返りのない蓋とセットの环(15~17)、C類は、B類の蓋が低くなつたものとセットの环(18、19)の3つに分かれるものである。

時期

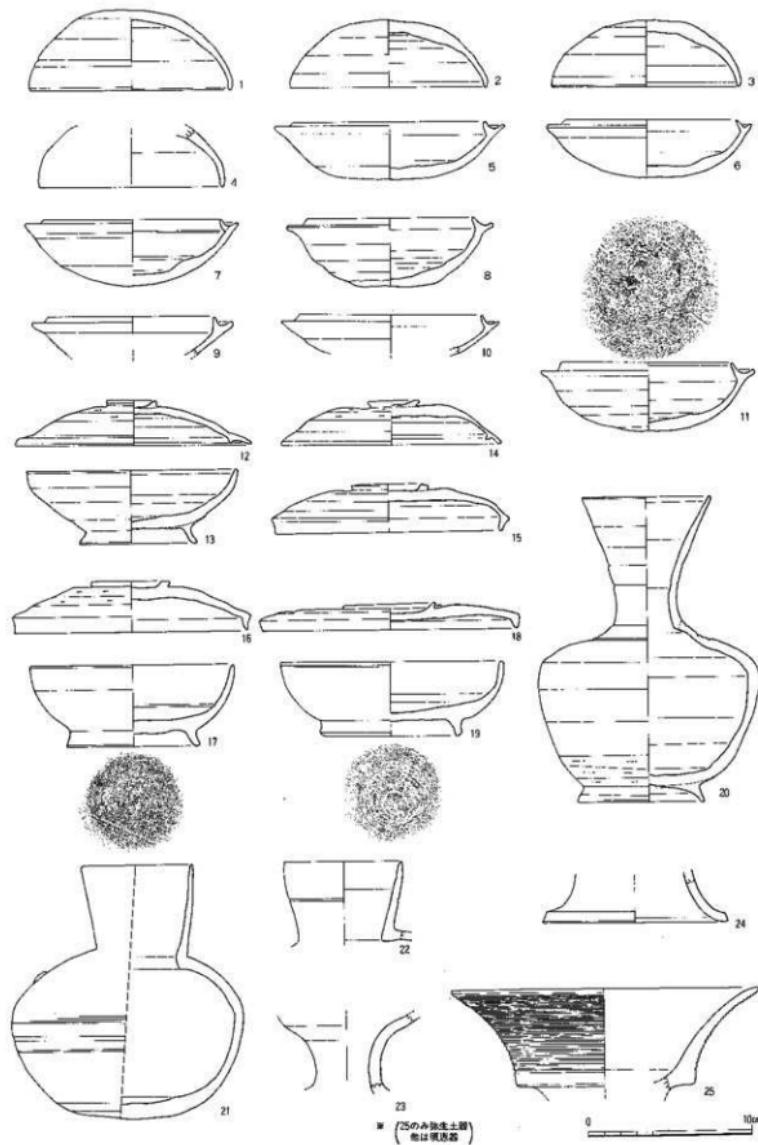
出土須恵器より大谷5期に築造し、埋葬終了は、8期頃と考えられる。



第237図 6区5号墳穴室裏実測図 (S=1:60)



第238図 6区5号横穴墓前底部遺物出土状況実測図 ($S=1:40$)



第239図 6区5号横穴墓出土土器実測図 ($S=1:3$)

[6号横穴墓]

立地

標高28m付近で検出した横穴墓で、上方の尾根部には、後背墳丘と考えられるコ字形の溝を持つ5区7号墳が立地している。

墓道(第240図)

地山を深いところで1.7m掘削し、全長4.5m、幅0.7mを測る。床面は平坦に加工され、玄門から2.5mのところで、やや南側におれるものである。全体的に短く狭い墓道である。

玄門(第240図)

墓道中央に穿たれ、閉塞用の刺込み(閉塞部)をもつものである。奥行0.9m、高さ1.1m、幅は玄室側で0.59m、墓道側で0.45mを測り、若干玄室側に広がるものである。横断面は、長方形を呈し、天井部と側壁の界線が明瞭なものである。閉塞部は、床面に幅0.2~0.3m、深さ3cmの浅い溝が掘られたもので、規模は幅1.0m、奥行0.65m、高さ1.30mを測り、正面から見ると長方形を呈す。

閉塞石(第241図)

閉塞部から凝灰岩の割石を積み上げたものを検出している。検出時の状況は、床面直上に大形の玄門部より幅広の石が置かれ、その上にやや小形の割石を3段に積み、さらに周囲を小形の石で覆ったものであった。また、2段目から上は、やや前側にせりだした状態で埋土にのった状態であった。このことから、閉塞石は、同時期に積み上げられたものでなく、2回に分けて考えられものである。

1段目の大形の閉塞石は、初葬時のものと考えられ、2段目より上の閉塞石は、上層から最終埋葬面にあたり、その時の閉塞に用いられた石と推定される。

玄室(第240図)

主軸はS-53°-Wをとり、平面形はやや奥壁側が広がる継長の長方形である。規模は、奥行2.3mを測り、幅は奥壁1.7m、前壁1.35mである。また、右袖0.47m、左袖0.28mを測り、右袖が幅広になるものである。

一方、立面形では、四壁とも丸みをおびて天井部にいたり、天井部と各壁の界線のないものである。

各壁から天井部にかけては、丸刃の工具による加工痕が多数認められている。なお、床面から天井部までは、1.14mを測る。

埋土堆積状況(第242図)

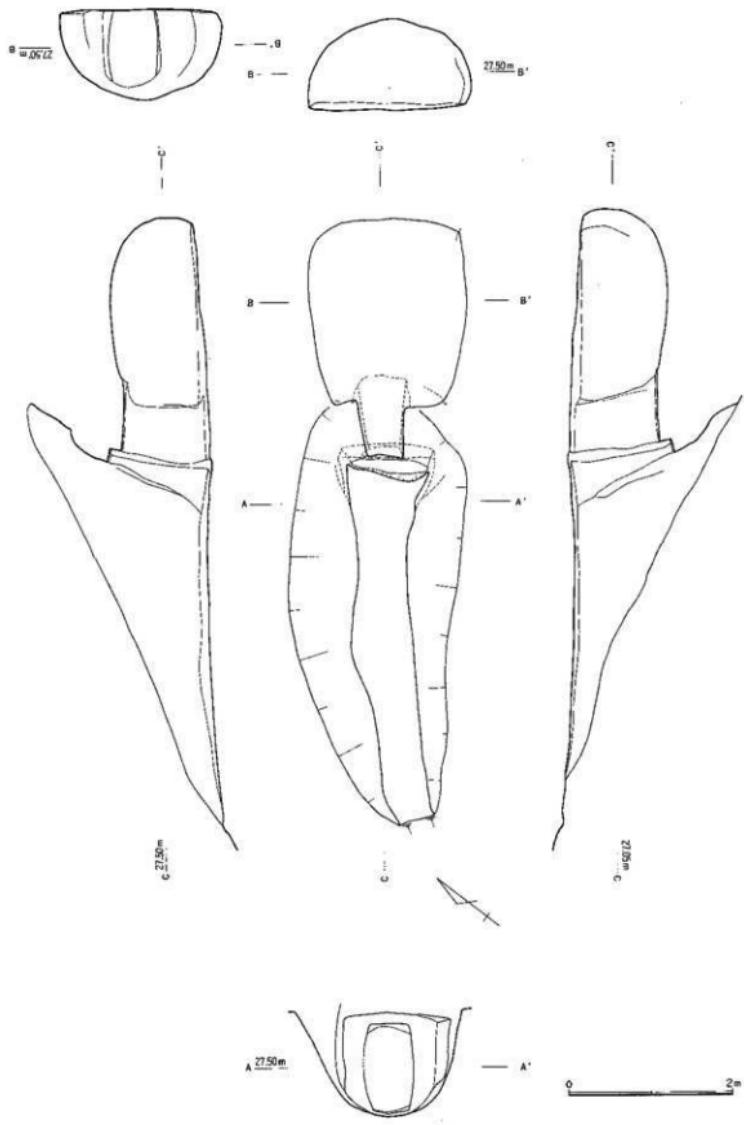
埋土は、大きく5層群に分けて考えている。1層は、表土と考えられるものである。2層は、最終埋葬に伴う埋土と考えたもので、上層の2a層は、腐食しており、最終埋土の上面に形成された土層である。また、2b・c層は玄門部を覆うように堆積している。また、埋葬面(2層下面)上から2段目より上の閉塞石が積み上げられている。3層は、初葬に伴う埋土と考えたもので、3a層は、やや腐食した土層であり、最終埋葬時に玄門付近が削り取られている。4層は玄室内へ流入した土であり、4c層上面からは須恵器が出土している。

また、墓道下方斜面に堆積している5層は、本横穴墓の築造時に出された排土と考えられるもので、地山櫛を多く含む層である。

以上の上層観察から最低2回の埋葬行為が存在していたものと解釈している。

遺物出土状況(第241、242図)

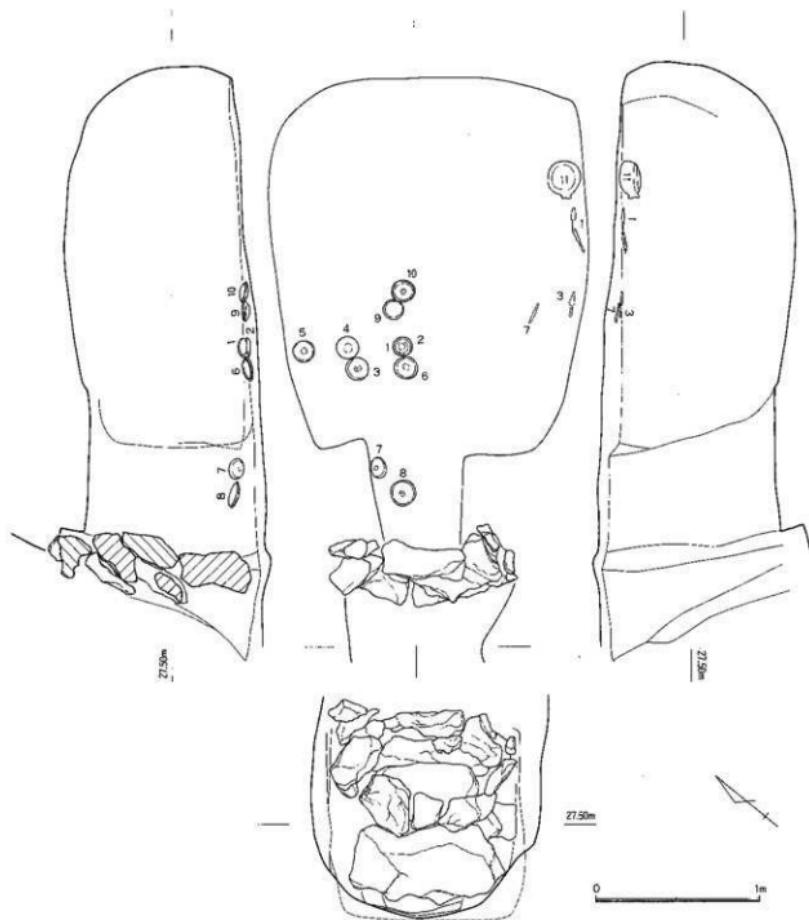
墓道では、最終埋土上面に形成された腐食土層(2a層)から須恵器片と底部を糸切りした土師



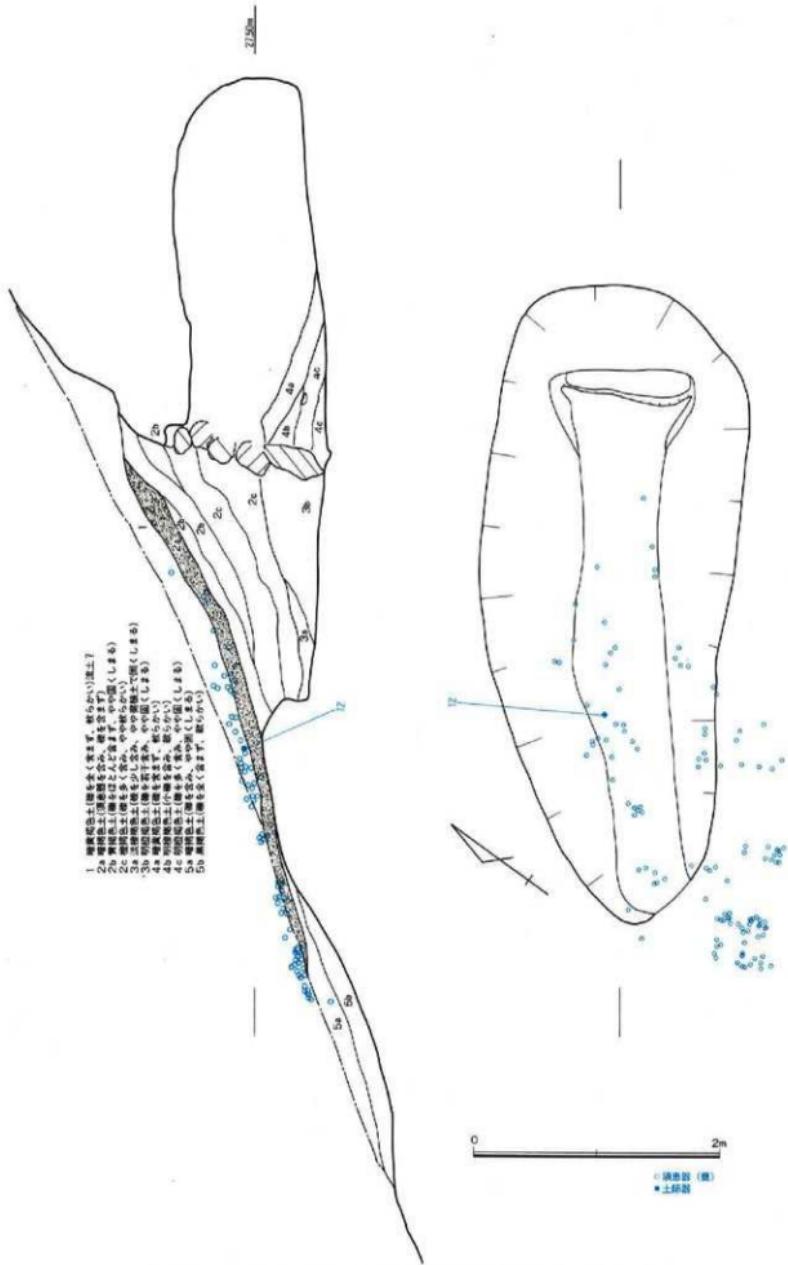
第240図 6区6号横穴窑造構実測図 ($S=1:60$)

器（第243図12）が出土し、埋土の他の層からは、遺物は出土していない。

玄室内では、須恵器（第243図1～11）、鉄鎌（第244図1～6）、刀子（第244図7）が出土している。遺物は、大きく右壁側、左壁側、玄門部の3群に分かれて出土している。右壁側からは、鉄器と



第241図 6区6号横穴墓閉塞石・遺物出土状況実測図 (S=1:30)

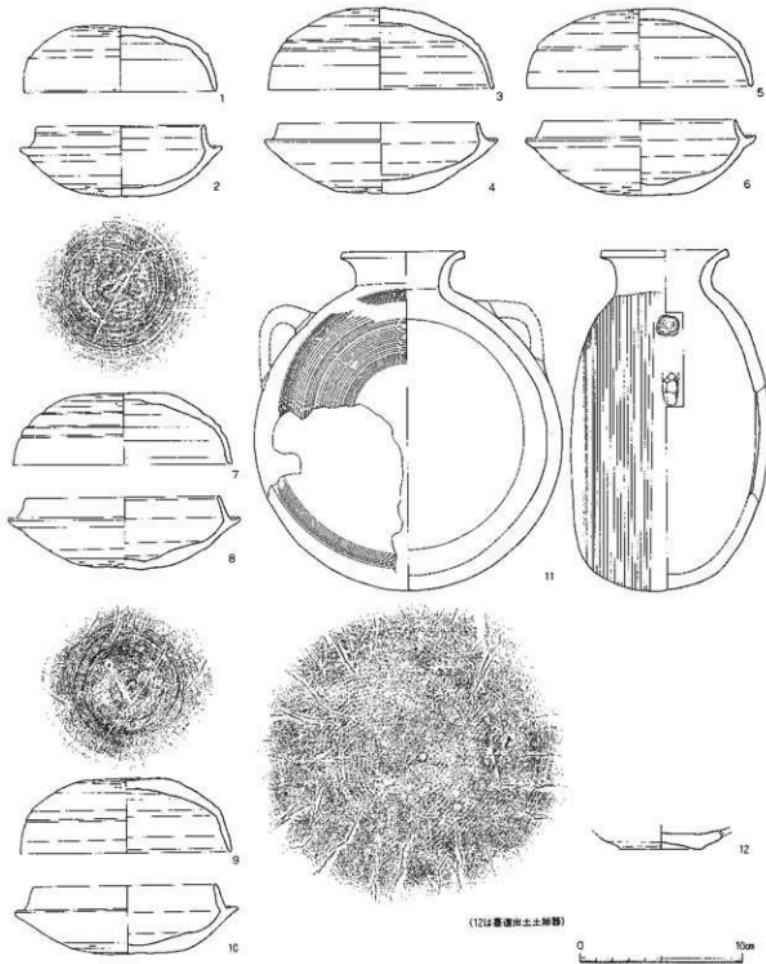


第242図 6区6号横穴墓土層・墓道遺物出土状況実測図 (S=1:40)

提瓶が出土し、提瓶は口縁端部と把手を打ち欠いたものであった。左壁側と玄門部からは蓋環が出土し、すべて蓋と环身がセットとなるものである。

出土遺物（第243、244図）

玄室内出土の須恵器蓋環（第243図）は、胎土と焼成から大きく2つに分かれる。1類（1、2）は、青灰色を呈し、焼成の良好なもので蓋の口径11.7cmと他のものに比し径が小さいものである。2類（3～10）は、焼成の甘いもので、さらに2つに細分できる。2A類（3～6）は、环身の立上り



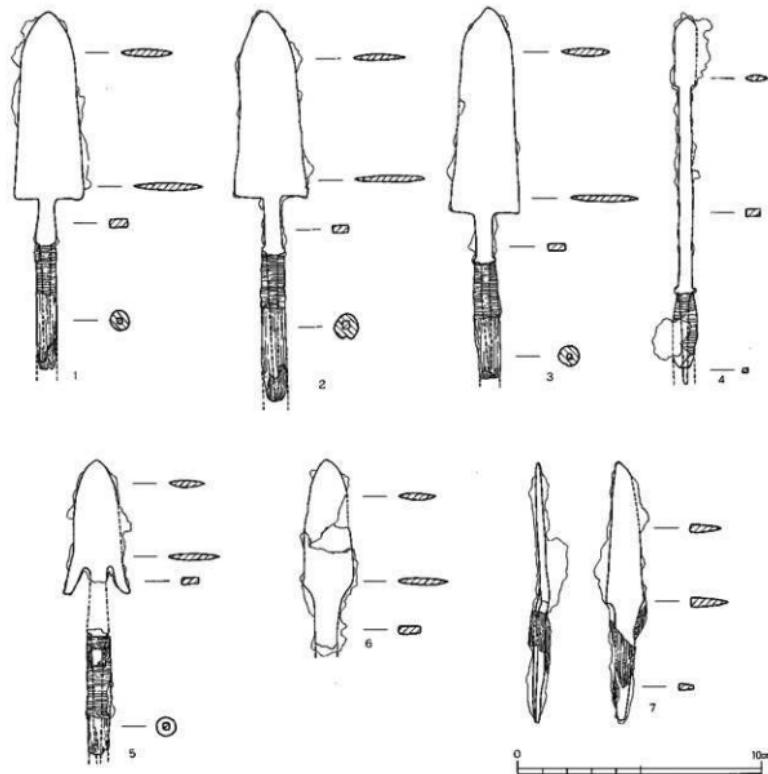
第243図 6区 6号横穴墓出土土器変測図 (S=1/3)

がやや低く、蓋の口径13.7cmを測るものである。2B類(7~10)は、环身の立上りが高く、口径13cm程度である。なお、以上の須恵器蓋坏は、細分可能なものであるが、大谷分類のA3型の範疇に含まれるものと考えられる。

また、墓道出土の底部糸切の土師器(第243図12)は、玄室内出土の遺物より時期がかなり新しいものであり、直接埋葬に関わるものではなく、後世の混入と推測される。

時 期

玄室内出土須恵器の様相から、築造期は大谷3期と推定され、また埋葬もその時期の中で終了しているものと考えられる。



第244図 6号横穴墓出土鐵器実測図 (S=1:2)

[7 号横穴墓]

立 地

標高29.5m付近で検出した横穴墓で、5区2号墳（前方後方形）の後方部直下に存在し、その主体部と考えられるものである。

墓 道（第245図）

地山を深いところで1.4m掘削し、全長10.7m、幅0.8mを測り、全体的に狭長の墓道を造り出している。床面は平坦に加工され、玄門部に向かって徐々に高く傾斜するもので、前端部と玄門付近との比高差は1.8mである。また、玄門付近の床面には、丸刃の工具によって2対の凹みが穿たれている。これは、その位置関係から閉塞に関わるものとして考えられるが、詳細については不明である。

玄 門（第245図）

墓道の中央に穿たれ、閉塞用の割り込み（閉塞部）をもつものである。規模は、奥行き1.3m、幅0.75m、高さ1.1mを測る。閉塞部側は、横断面がやや隅丸の台形であるが、玄室側にいくにつれて、天井部と側壁の界線が不明瞭になり、天井部は丸みをおびたものである。

閉塞部は、床面が玄門部より1段下がり、墓道床面に向かって緩やかに傾斜し、浅い溝状になるものである。正面から見た場合、台形を呈し、奥行0.34m、幅1.1m、高さ1.15mを測る。

閉 塞 石（第246図）

玄門部から凝灰岩の切石が1枚倒された状態で出土している。石は、台形に近い形を呈し、規模は、長さ1.15m、幅は、上端で0.83m、下端で0.92m、厚さ0.2mを測る。本来は、玄門部を覆うように立っていたものが、追葬時に倒されたものと考えられる。

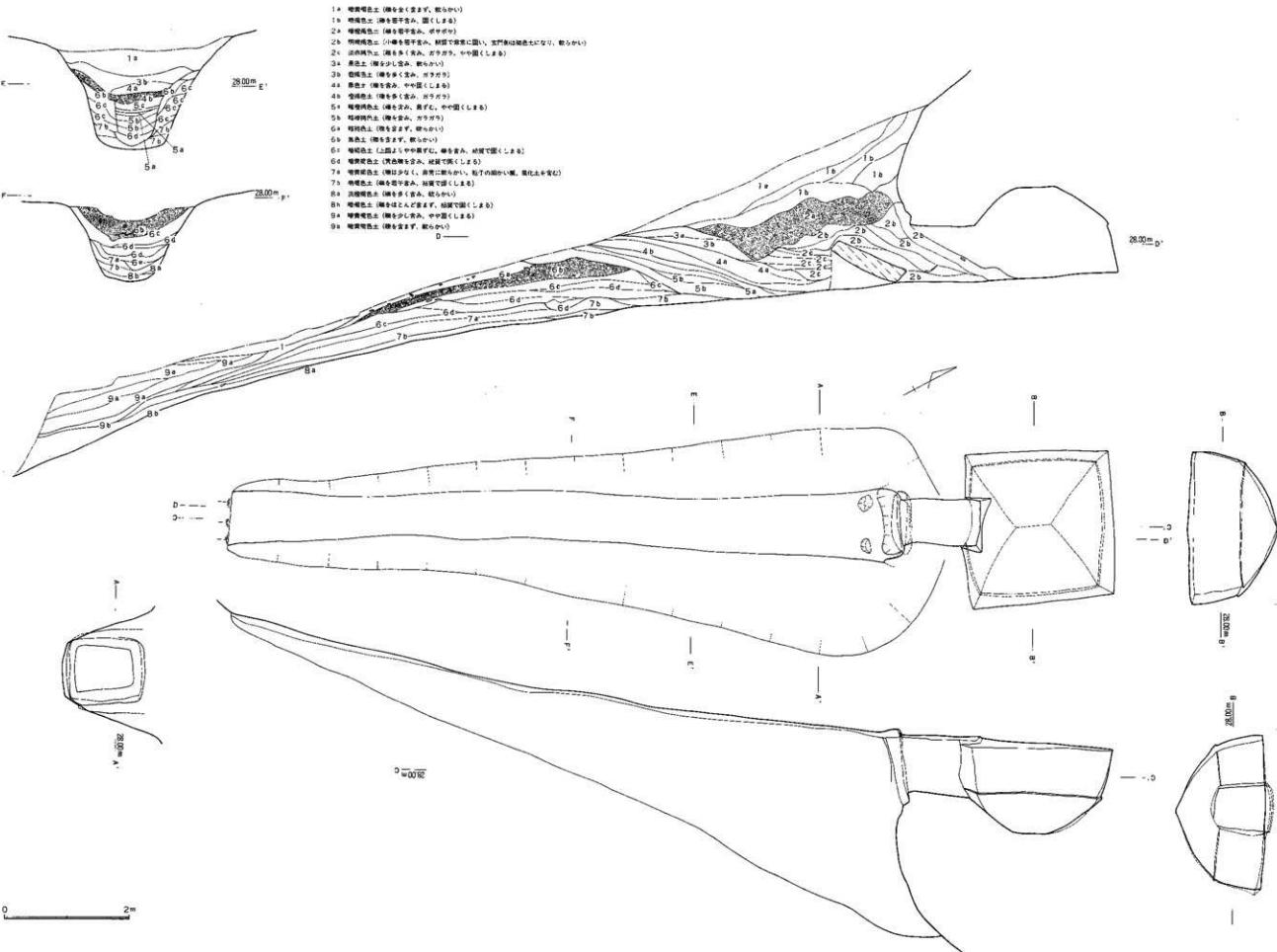
玄 室（第245図）

主軸はS-30°-Wをとり、平面形は、やや前壁側の幅が広くなる正方形に近い形のものである。規模は、奥行2.5mを測り、幅は奥壁側で2.3m、前壁側で2.5m、高さ1.45mとなる。また、前壁で右袖1.05m、左袖0.75mを測り、右袖側が幅広になるものである。

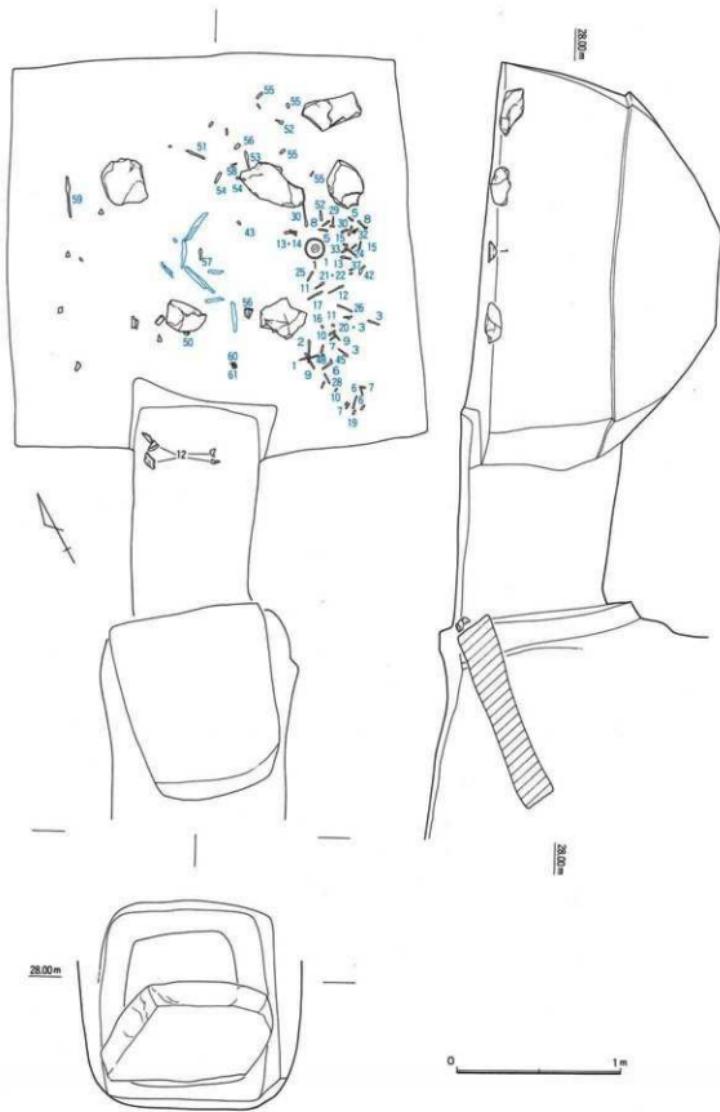
一方、立面形では、家形を呈し、四壁と天井部との界線が明瞭なもので、軒線は各壁に段状に加工されたものが認められる。また、棟線は妻側方向に施され、長さ0.57mを測る。

埋土堆積状況（第245図）

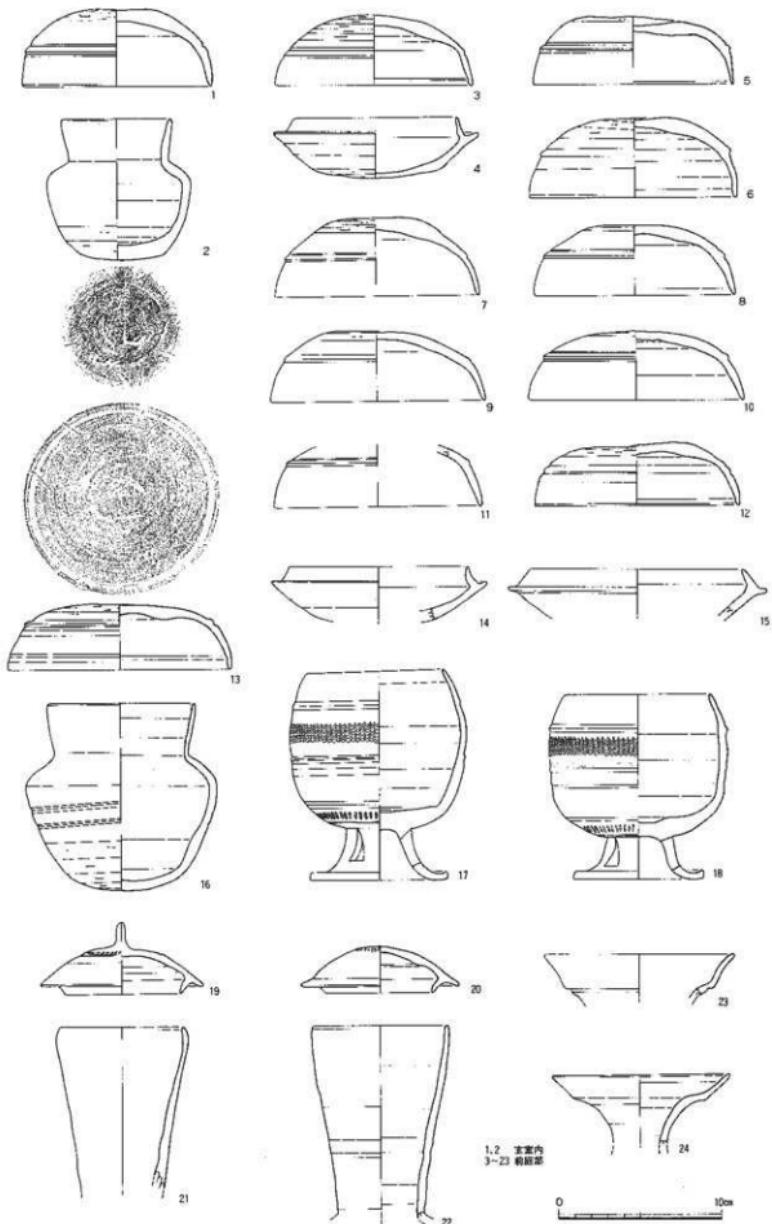
土層は、大きく9層群に分けて考えている。1層は、表土及び流土と考えられるものである。2層は、最終埋葬に伴う埋土とを考えたもので、上層の2a層は、腐食し、黒褐色を呈しており、最終埋土の上面に形成された土層である。また、2b層は玄門部を覆うように堆積したもので、明確に分層できなかったが、玄門部から玄室にかけての部分は、二次的に流入したものと考えられる。また、2c層は、閉塞石前面に、水平に近い堆積をしているもので、最終埋葬時の整地土として考えた。3層は、第6次埋葬に伴う埋土で、3a層は、腐食が著しく黒色を呈している。4層は、第5次埋葬に伴う埋土として考えたもので、4a層は腐食し黒色を呈している。5層は、第4次埋葬に伴う埋土と考えており、その上面はやや腐食したものである。6層は、第3次埋葬に伴う埋土として考えたもので、6b層は、腐食が最も著しく黒色を呈したので、須恵器壺片が多数出土している。7層は、第2次埋葬に伴う埋土で、7a層は、やや腐食したものである。8層は、初葬埋土として、とりあえず考えているものである。8a層は、腐食したものであり、墓道前端部から中ほどにかけて認められ、奥側では床面直上に堆積している。この層は、その上面を初葬時の埋葬面として考えることも可能なもので、



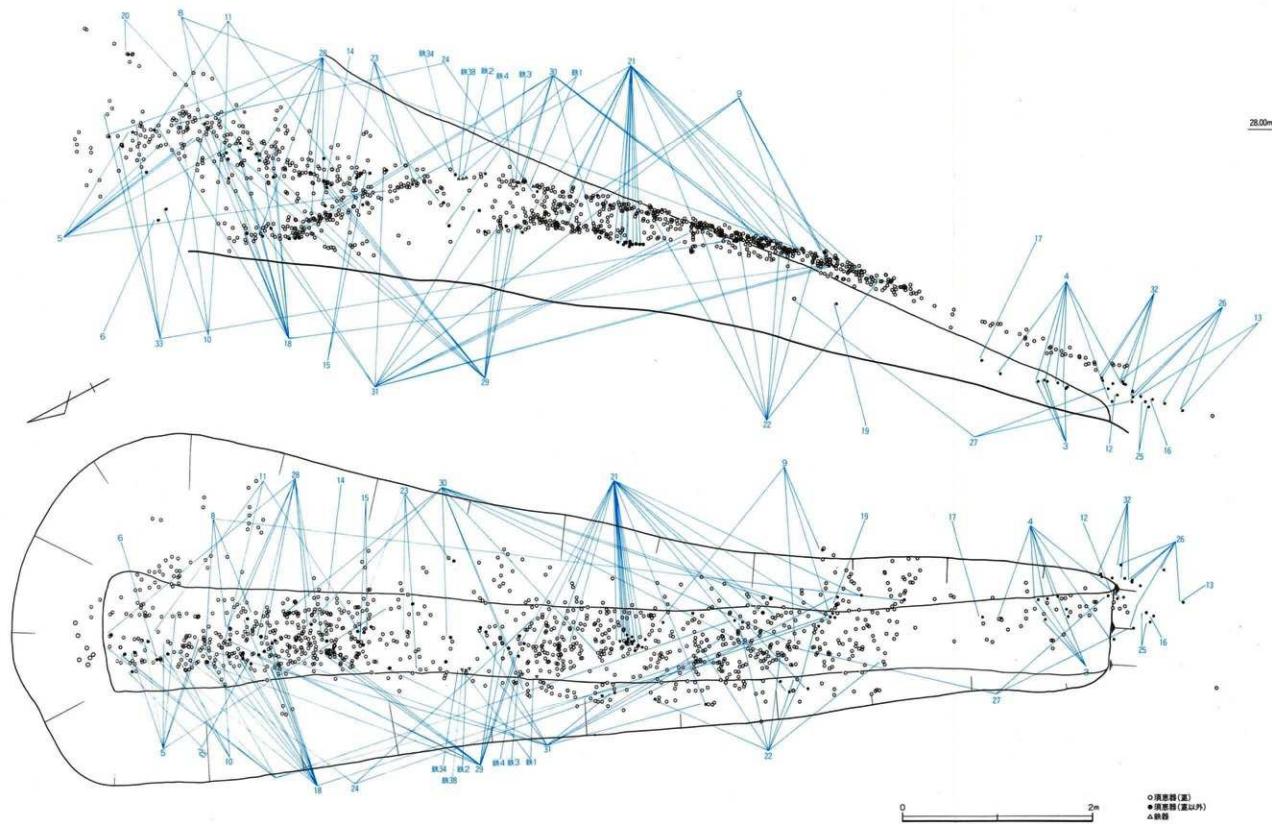
第245図 6区7号機穴基造構造測図 (S=1:60)



第246図 6区7号横穴墓閉塞石・人骨・遺物出土状況実測図 (S=1:30)



第247圖 6區7號橫穴墓出土須惠器實測圖(1) (S=1:3)



第248図 6区7号横穴墓墓道遺物出土状況実測図 ($S=1:40$)

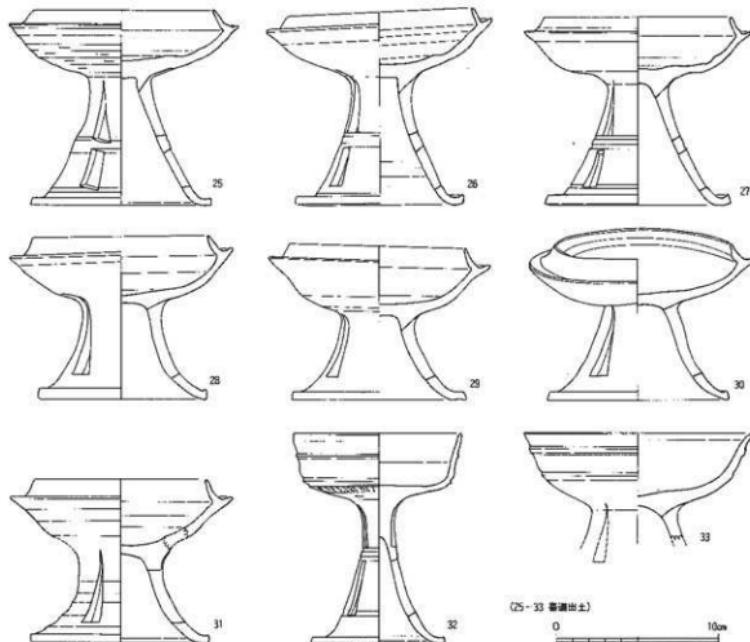
そのように考えた場合には、8 a層は、築造から初葬時までの期間に形成された腐食土として解釈される。

なお、9層は、より北側に存在する9号横穴墓築造時の掘削土で、9 b層は、旧表土である。

遺物出土状況（第246、248図）

墓道では、多数の須恵器が出土しており、その出土状況及びその解釈については、未整理な点があるが、腐食した上層から出土するものが大部分を占めている。

須恵器断片については、基本的に2 a層、4 a層、6 b層から多数の破片となって出土している。また、その他の器種は、出土層位からみて大きく3つに分類できる。一つ目は、出土層位が1つの層であるもので、8層上面（2次埋葬面）からは、第247、249図-27、17、4、32、26、13、3、12、25、16といった須恵器が出土し、7層上面（3次埋葬面）からは壺の蓋（第247図19）が出土している。2つ目は、壺が多く出土する2 a層、6 b層のもので、第247、249図-29、33、22、20、24、21、8、9の須恵器が出土している。3つ目は、接合関係の複雑なもので、2 a層と他の埋葬に伴う埋土出土のものが接合するもので第247・249図-5、6、10、11、14、15、18、23、28、30、31が挙げられる。これらは、主に第5次、第6次の埋土上面の腐食土（3 a層、4 a層）と接合するものがほとんどである。また、これらには、玄室の流上や6 b層とも接合するものが確認される。



第249図 6区7号横穴墓出土須恵器実測図（2）（S=1:3）

また、鉄鎌（第250図）が5層上面（第5次埋葬面）から出土している。これらは、玄室内から持ち出された可能性が考えられるものである。

玄室内からは、須恵器類は、ほとんど出土していないが、鉄鎌が破片の状況で多数出土している。

鉄鎌は、右壁に沿った位置で主に出土し、奥壁に沿った位置でも若干みられ、刀子もこの付近で出土している。また、左壁沿いでは、須恵器小片と鉈（第252図59）が出土している。中央付近では人骨、大刀残片、耳環、須恵器片が出土し、須恵器片（第247図7）は、玄門部で出土した小片と接合するものである。

また玄室内では、奥壁側に4つと前壁側に2つの計6個の石が出土しており、棺台の可能性も考えられるものである。石は、その出土状況から奥壁に沿った位置とその手前側に平行した2つの埋葬配置を推定することができるもので、さらにその部分の床面には、黒色に変色した部分が認められた。

出土遺物（第247、249、250、251、252図）

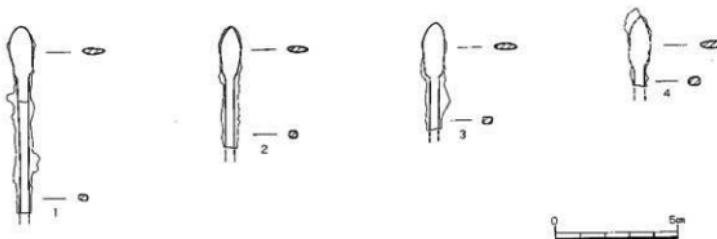
蓋環（第247図1、3～15）は、蓋で器高の高いものが殆どであるが、13は器高が低く、天井部の削りがやや雑なものである。大谷分類では、A 4型、A 5型にそれぞれ対応するものと考えられる。

有蓋高环は、透しが2段3方の1類（第249図25、26、27）と1段3方の2類（第249図28～31）の2種類が存在している。1類は、上段三角、下段長方形の透しで、2類は、三角形の透しであり、口径は、すべて11cm前後にまとまるものである。それぞれの有蓋高环は大谷分類のC型、E 2型に対応するものと考えられる。これらの有蓋高环は、大谷編年によれば3期に位置つけられ、蓋環はA 3型のものが伴うものと考えられているが、本横穴墓例では、A 4型の蓋環が出土し、A 3型は見られない。のことから考えて、有蓋高环は、A 4型とも共伴し、大谷4期にも存在しているものと考えられることがある。

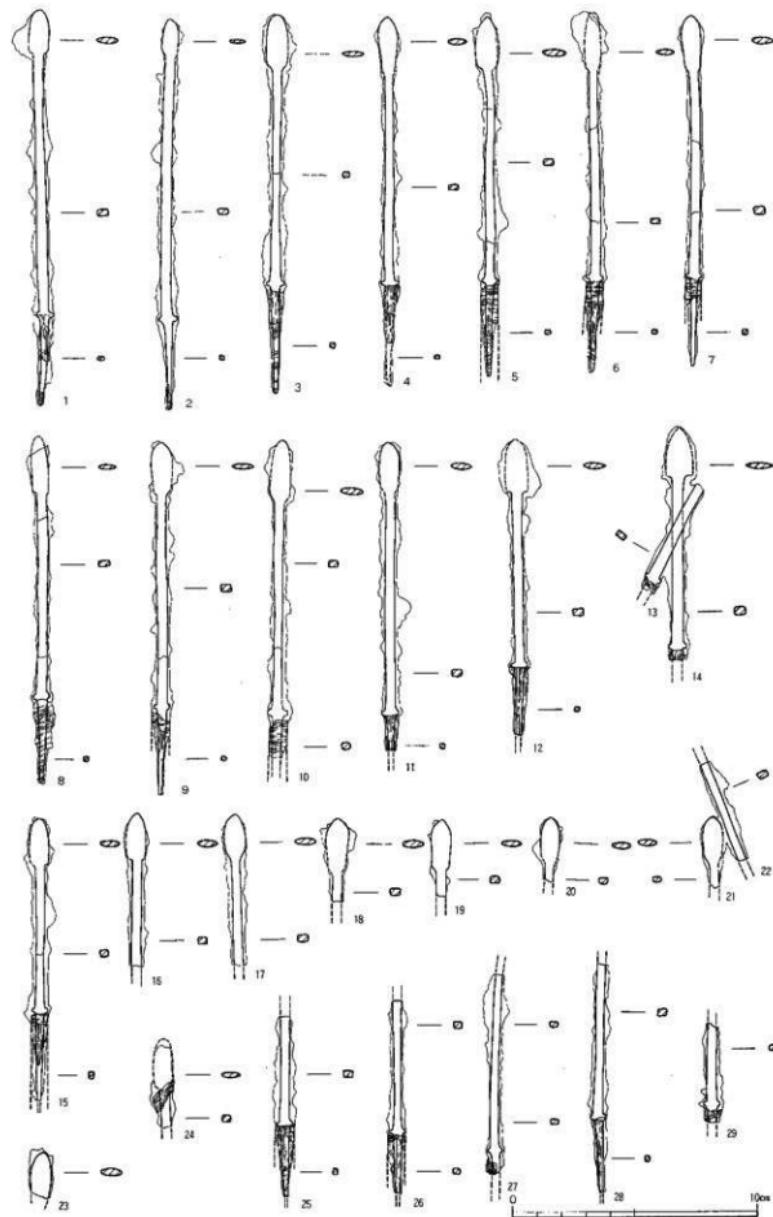
玄室内及び墓道から出土している鉄鎌（第250、251、252図1～49）は、すべて長頭鎌である点が特徴的であり、その頭部の長さで3つに分類可能なものである。1類（1、2）は、10.5cmのもの、2類（3～11）は8.5cmのもの、3類（12、14、15）は7cm以下のものである。全体の分かるものでは、2類としたものが多数を占めていることになる。また、長頭鎌のみ出土している点は、1区2号横穴墓と共通しており、また、両横穴墓とも前方後方形の墳丘を持つ等、共通点が見られる。

時期

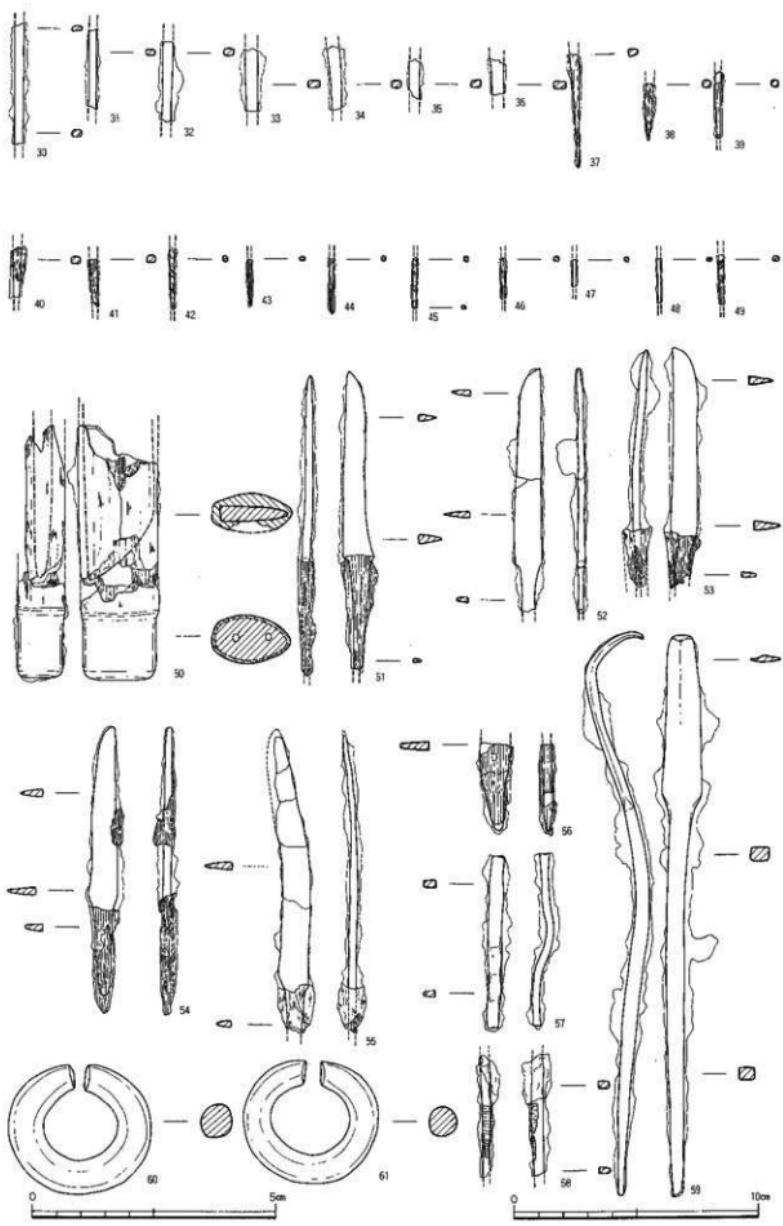
出土須恵器から築造時期は、大谷4期と考えられる。そして、埋葬は、蓋環から見れば、大谷4期で終了していると考えられるが、他の器種の様相から大谷5期までの可能性が考えられるものである。



第250図 6区7号横穴墓道出土鐵器実測図 (S=1/2)



第251図 6区7号横穴墓玄室内出土鐵器実測図 (S=1:2)



第252図 6区7号横穴墓玄室内出土鉄器・耳環実測図 ($S=1:2, 1:1$)

[8号横穴墓]

立 地

標高29m付近で検出した横穴墓で、墓道の先端部は、9号横穴墓の築造時に削られている。上方の尾根部には、後背墳丘と考えられるコ字形の溝をもつ5区8号墳が立地している。

墓 道（第253図）

地山を深いところで1.98m掘削し、床面の幅0.46mを測る。9号横穴墓の前庭部築造時に先端部から左壁にかけて削られており、全長については、明確ではない。現状では4.30mを測るものである。

玄 門（第253図）

墓道の中央に穿たれ、奥行き1.05m、幅0.5mを測り、高さは、玄室側0.96m、墓道側0.87mで、徐々に玄室側に向かって高くなるものである。天井部は、やや丸みを帯び、側壁との界線は不明瞭なものである。閉塞部は、床面に幅25cm、深さ8cmの溝が掘られたもので、正面概は、長方形を呈すものである。規模は、奥行き25cm、幅92cm、高さ120cmを測る。

閉 塞 石（第254図）

閉塞部から凝灰岩の割石を積み上げたものを検出している。これらは、その積み上げ方等によって、上、中、下段の3つに分かれるものである。上段のものは、2層上面に石の一部が置かれた状態のもので3段程積まれ、玄門部を覆うものである。中段のものは、2層下面付近から積み上げられたものである。下段は、床面から積み上げられているが、手前側で3d層上面に乗りかかるようになっているものである。

それぞれの積み上げられた石は、埋葬面に対応した面から積み上げられている。本米は、玄門部を覆うように積み上げられたものが、追葬時の度に上半部分が抜き取られ、浸入があったものと考えられる。そして、埋葬後には、残存している閉塞石の上面から積み上げたものと推定される。

玄 室（第253図）

主軸はS-19°-Eをとり、平面形は、奥行きの長い長方形を呈するものである。規模は、奥行2.3m、幅1.65mを測るものである。床面には、幅0.08m、深さ0.03mを測る溝が、前壁と右壁に沿って認められるが、右壁のものは途中でなくなっている。

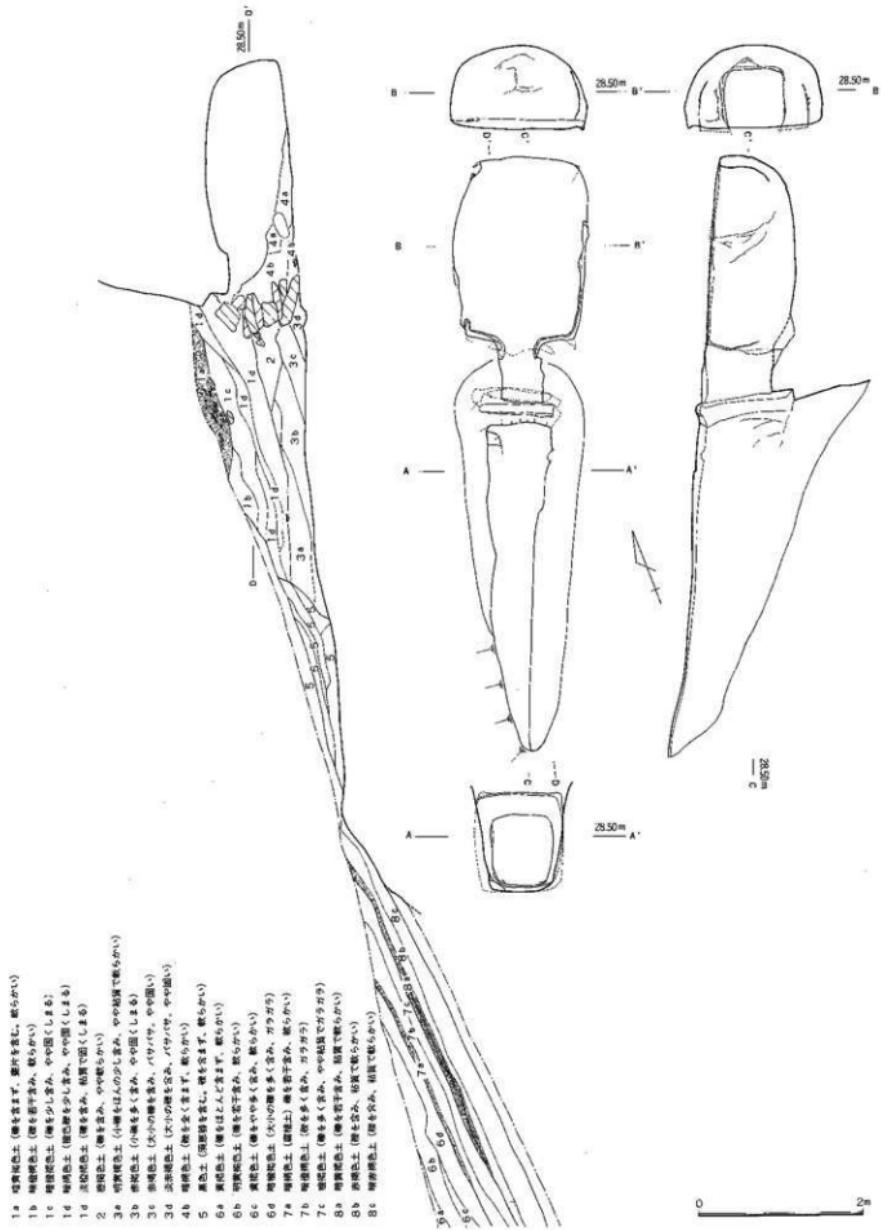
一方、立面形では、各壁と天井部の界線は、不明瞭なもので、天井部は丸いものである。床面からの高さは、1.02mを測る。

埋土堆積状況（第253図）

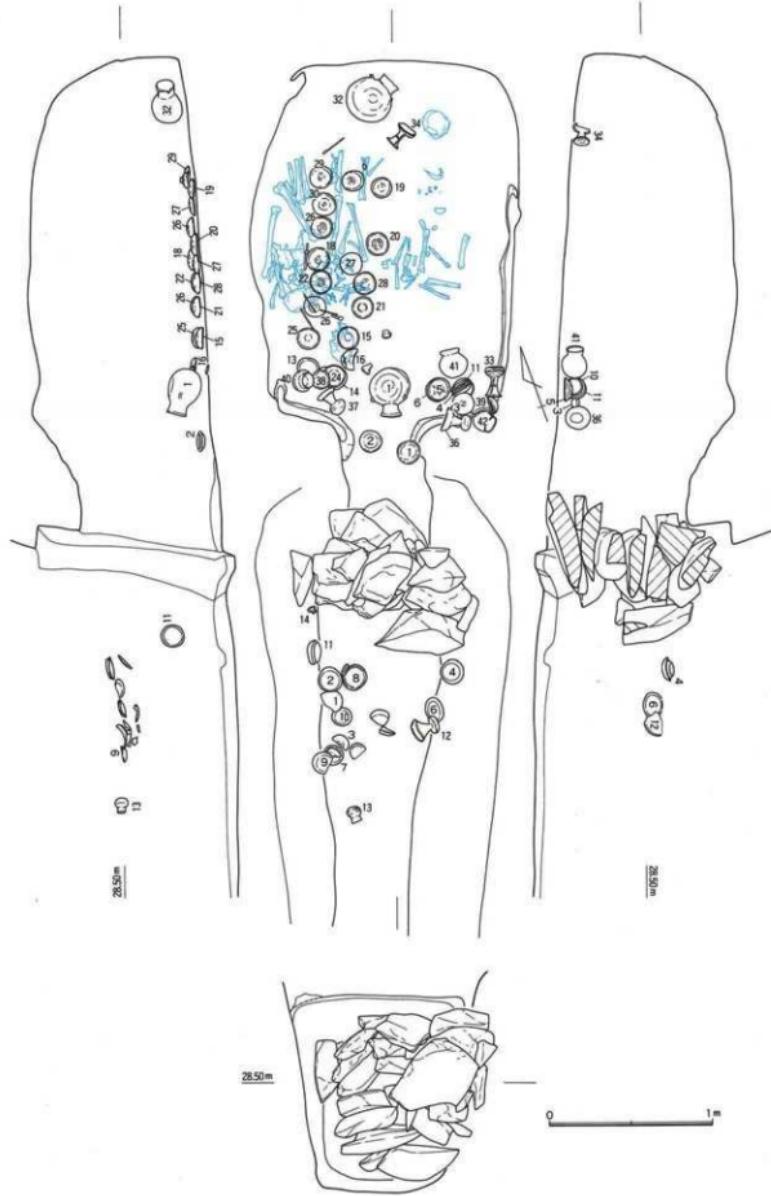
埋土は、大きく8層群に分けて考えられるものであった。1層は、最終埋葬に伴う埋土と考えられるもので、玄門部を覆うものである。この層の下面に対応して閉塞石が積み上げら、また、須恵器が一括で出土している。2層は、第2次埋葬に伴う埋土で、大部分が最終埋葬時に削られている。3層は、初葬時に伴う埋土と考えたものである。3a層は、その上面が若干腐食しているものであり、また、3d層は、その上面に閉塞石がのり、これは別の埋葬時の埋土と考えることも可能だが、明確にはできなかった。4層は、玄室内流入土として考えられるものである。

5層～8層は、直接埋葬に伴わない土層である。5層は、9号横穴墓の前庭部埋土で、6層は、9号横穴墓築造時の排土、7層は7号横穴墓の排土、8層は8号横穴墓の排土である。また、7a、8a層は、腐食している土層である。

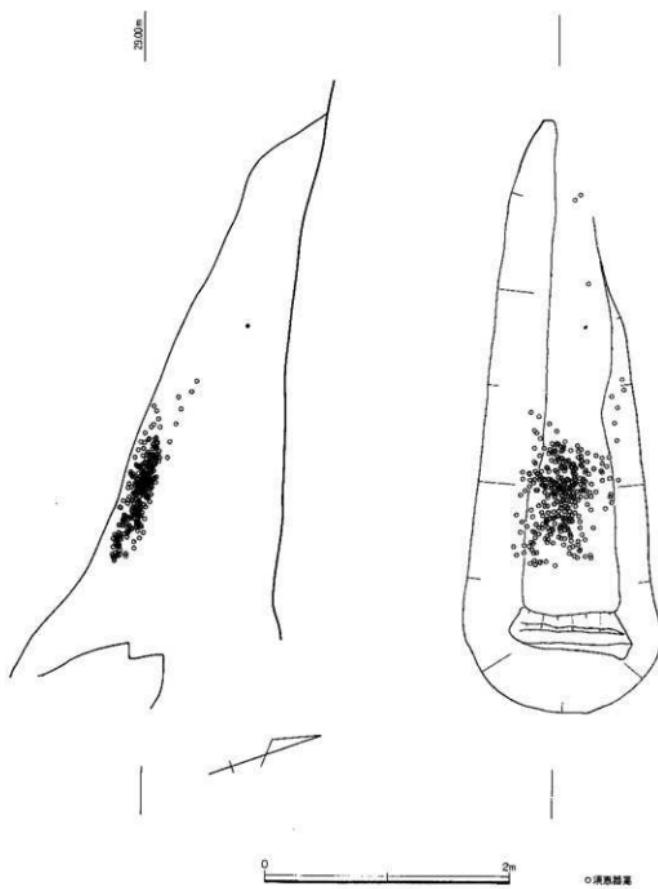
以上の上層観察から最低3回以上の埋葬行為が存在していたものと解釈できる。



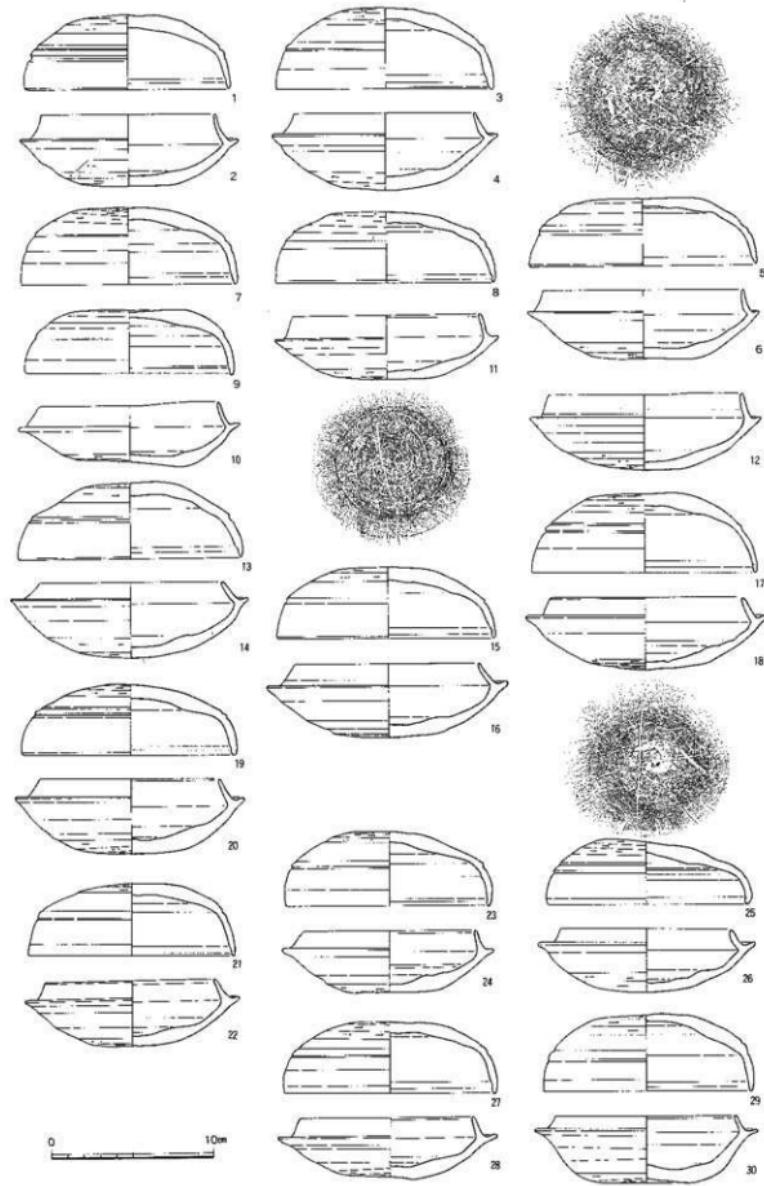
第253図 6区8号横穴造構実測図 (S=1:60)



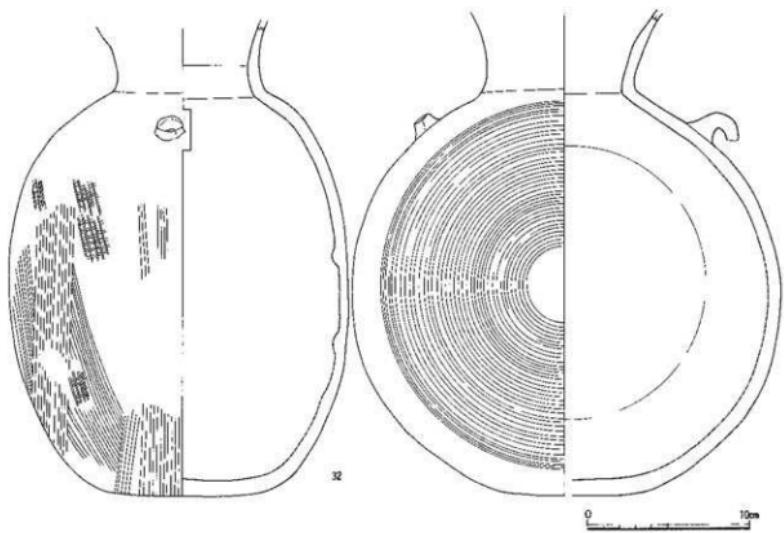
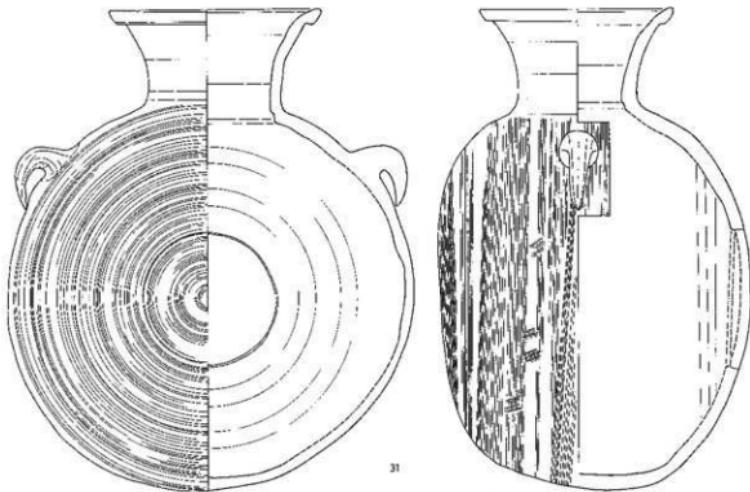
第254图 6区8号横穴墓陪葬石·人骨·遗物·出土状况实测图 (S=1:30)



第255圖 6區8號橫穴墓道遺物出土狀況測量圖 ($S=1:40$)



第256圖 6區8號橫穴墓玄室內出土土器實測圖(1) ($S=1:3$)

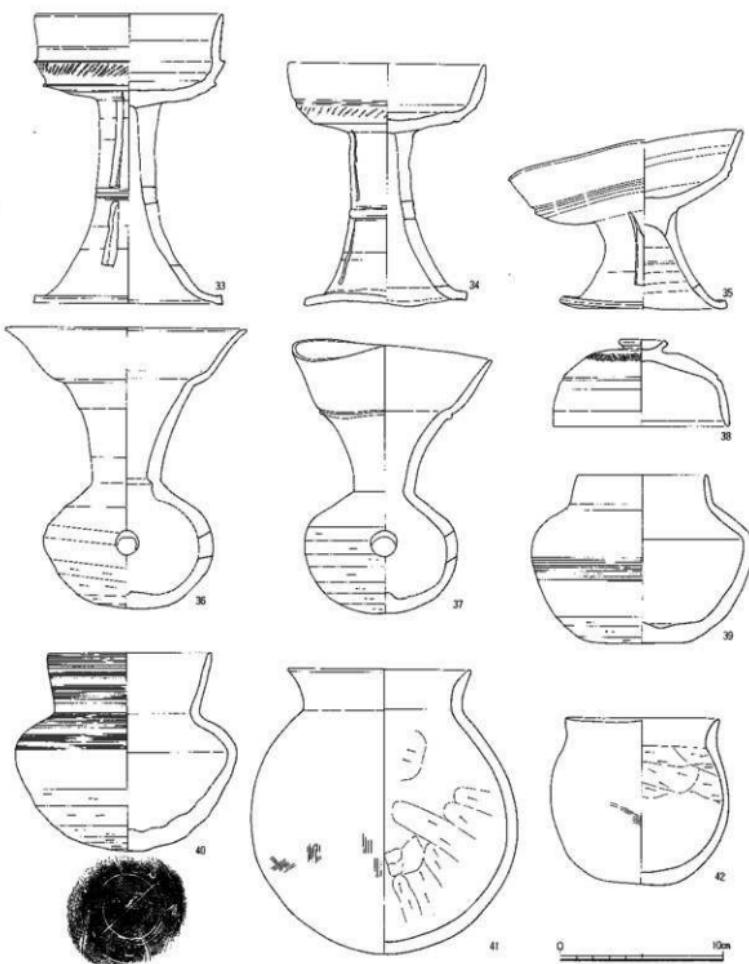


第257圖 6區8號橫穴墓玄室出土土器實測圖（2）（S=1:3）

遺物出土状況（第254、255図）

墓道では、最終埋土上層の1a層から須恵器蓋片が多数出土し、最終埋葬面（1層下面）からは、須恵器蓋環（第256図1～10）、翫（12）、直口壺（13、14）が出土している。また、第3次埋葬面（2層下面）からは、环身（11）が出土している。

玄室内からは、多数の須恵器と人骨が出土している。それらは、大きく3群に分けることが可能な



第258図 6区8号横穴墓玄室内出土土器実測図（3）（S=1:3）

もので、それは、(1) 右壁側 (2) 玄門付近、(3) 左壁側である。

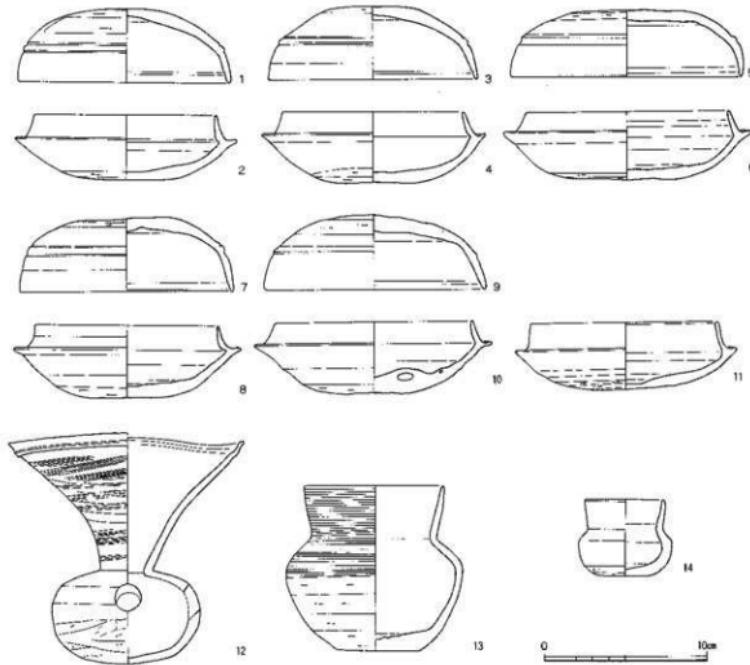
(1) では、遺物が前壁コーナ付近に集積された状態のもので、須恵器蓋環、高环、鰐、直口壺、土師器壺、小壺が出土している。また、右壁沿いの中央から奥側にかけて人骨が出土している。

(2) では、提瓶、蓋環が出土し、蓋環はすべて伏せられた状態のものであった。

(3) では、奥壁側から提瓶、高环、鐵鎌が出土し、中央では、蓋環が伏せられた状態で並べられていた。そして、前壁コーナ付近からは、蓋環、直口壺、鰐、鐵器が集積された状態で出土している。また、人骨は、蓋環が並べられた上から、頭位を玄門側に向けた状態で2体検出した。人骨で中央側の一体は、ほぼ現状に近い状態のものでその両足の間には、須恵器高环（第256図35）の脚部を失った坏部だけのものが置かれていた。

出土遺物（第256～260図）

玄室内の出土須恵器蓋環（第256図1～30）は、胎上焼成から大きく3つに分かれるものである。1類は、焼成が甘く白色に近い色調のものである。2類（7、8、11、12）は、黄灰白色を呈し、1類より焼成が良好なものである。3類は、青灰色を呈するもので最も焼成が良好なものである。また1類、3類は、細分が可能なもので、その坏身の立上りとヘラケズリ調整からA、Bの2つに分かれる。1A類（1～6）は、削りが丁寧で立上り高いもので、1B類（13～20）は、やや削りが粗く、立上



第259図 6区8号横穴墓墓道出土須恵器実測図 (S=1:3)

りの低いものである。3 A類（9、10）は、削り丁寧で立上り高く、蓋の端部に沈線を施すものであり、3 B類（21～30）は、削りやや粗く、立上りが低く、蓋内面で端部よりやや上に沈線を施すものである。以上の観察から基本的に焼成の古いものが古相で、焼成良好で青灰色を呈すものが新相を呈しているが多いことが分かる。また、これらの分類の前後関係を整理すると1 A類、2類、3 A類が古相で、3 B類が新相、1 B類がその中間に位置付けることができる。

以上の蓋環の出土状況を検討して見ると、古相としたものが右側～玄門付近で出土し、新相とその中間としたものが左側から出土している。このことから右側が先葬で、左側のものが後葬である可能性が考えられる。また、高環、鰐も右のものが古相であることから可能性は高いものと思われる。

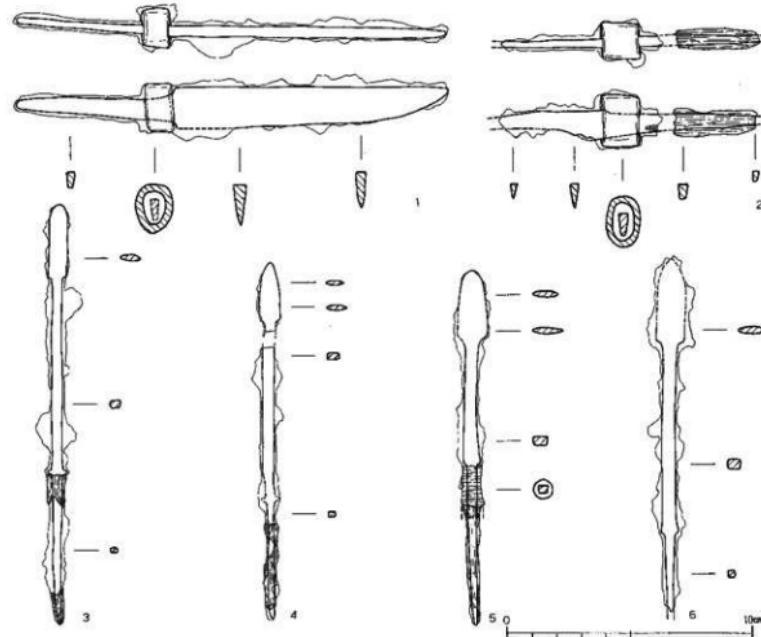
なお、墓道出土の蓋環（第259図1～11）は、全て古相に属するものと考えた1 A類（1～4）、3 A類（5～10）、2類（11）に含まれるものであった。

また、大谷編年との対応関係は、古相としたものがA 3型、それ以外のものがA 4型と思われる。

鉄器（第260図）は、刀子（1、2）と長頭鎌（3～6）が出土している。刀子は、鎌をもつものであり、鎌は、関部が台形のものと棘籠抜のものの2種類存在している。

時 期

出土須恵器の様相から大谷3期に築造したものと考えられ、埋葬は、大谷4期までおこなわれたものと考えられる。



第260図 6区8号横穴墓玄室内出土鉄器実測図 (S=1:2)

[9号横穴墓]

立地

標高28m付近で検出した横穴墓で、谷部の最奥部に存在しているものである。

前庭部（第261図）

地山を深いところで2.6m掘削し、全長8.50mを測る広大なものである。幅は前端部で4.00m、奥側で1.96mを測り、徐々に手前に向かって広がるものである。

羨道部（第261図）

前庭部中央に穿たれ、奥行き1.06m、幅1.15m、高さ1.15mを測る。横断面は、台形を呈し、天井部は平坦なもので、側壁との界線は明瞭なものである。床面は、玄門から60cmのところで1段高くなるもので、玄門沿いに左壁側には溝が掘られている。溝は、幅29cm、長さ79cm、深さ6cmのもので、閉塞石を受けるためのものと考えられる。

玄門（第261図）

床面が羨道部より1段高くなるもので、奥行1.03m、幅は玄室側で0.8m、羨道側で0.58mを測り、若干玄室側に広がるものである。横断面は、台形を呈し、天井部は平坦で、側壁との界線が明瞭なものである。また、床面は玄室付近で凹凸が認められるものである。

閉塞石（第262図）

羨道部で凝灰岩の板状の切石を2枚検出している。2つとも倒れた状態で出土しており、追跡時に倒されたものと考えられる。閉塞石の規模は、左側の石で幅63cm、長さ95cm、厚さ17cmを測り、長方形を呈すものである。また、羨道部の床面の溝はこの石と幅が同一である。そして、右側の石で幅38cm、長さ90cm、厚さ15cmを測り、これは立てられた時に上にあたる側の幅が狭いものである。

玄室（第261図）

主軸はS-14°-Eをとり、平面形は横長の長方形である。規模は、奥行2.05m、幅2.7mを測り、右袖0.61m、左袖0.95mを測り、左袖が幅広になるものである。床面は、基本的に玄門部より一段高くなるものであるが、玄門付近では同一レベルである。

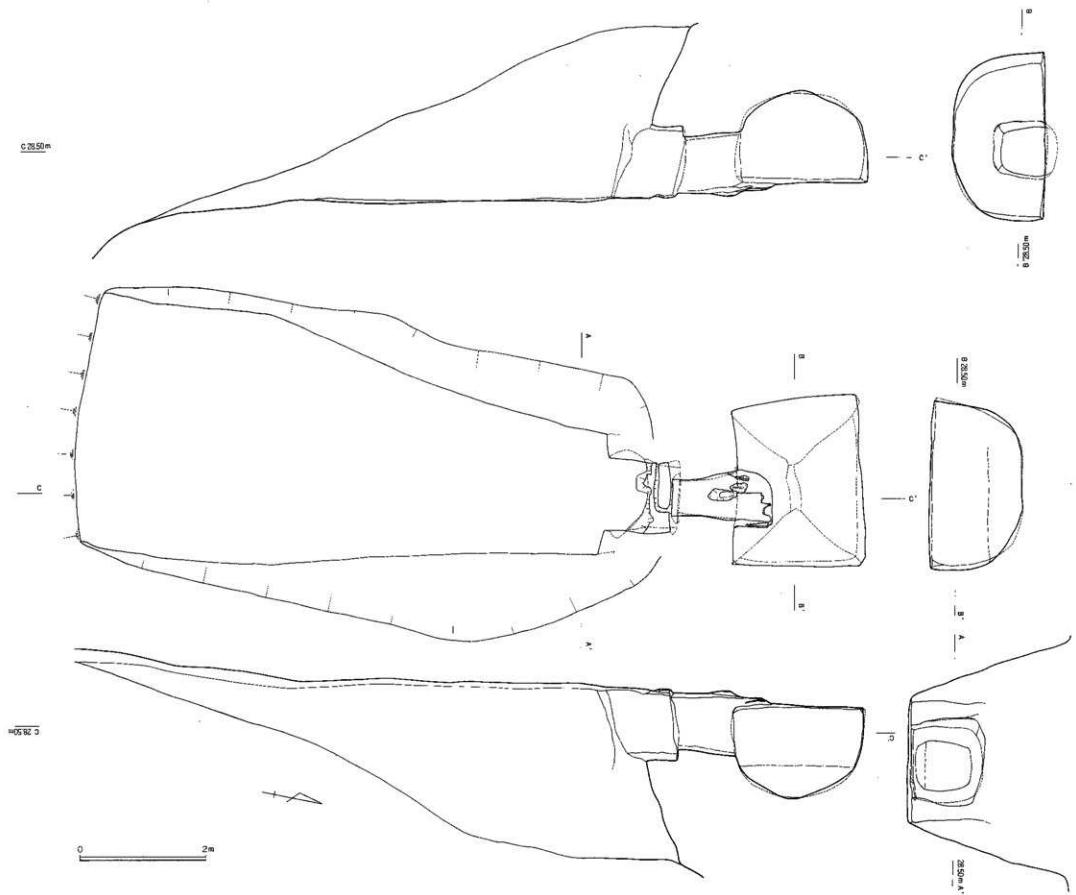
一方、立面形では、奥壁と右壁には天井部との界線（軒線）が認められるが、左壁と前壁には認められないものである。天井部には、棟を幅15~18cm、長さ70cm程度浅く掘り凹めて表現してあり、平入り家形を呈すものである。なお、床面から天井部までの高さは、1.5mである。

石床（第262図）

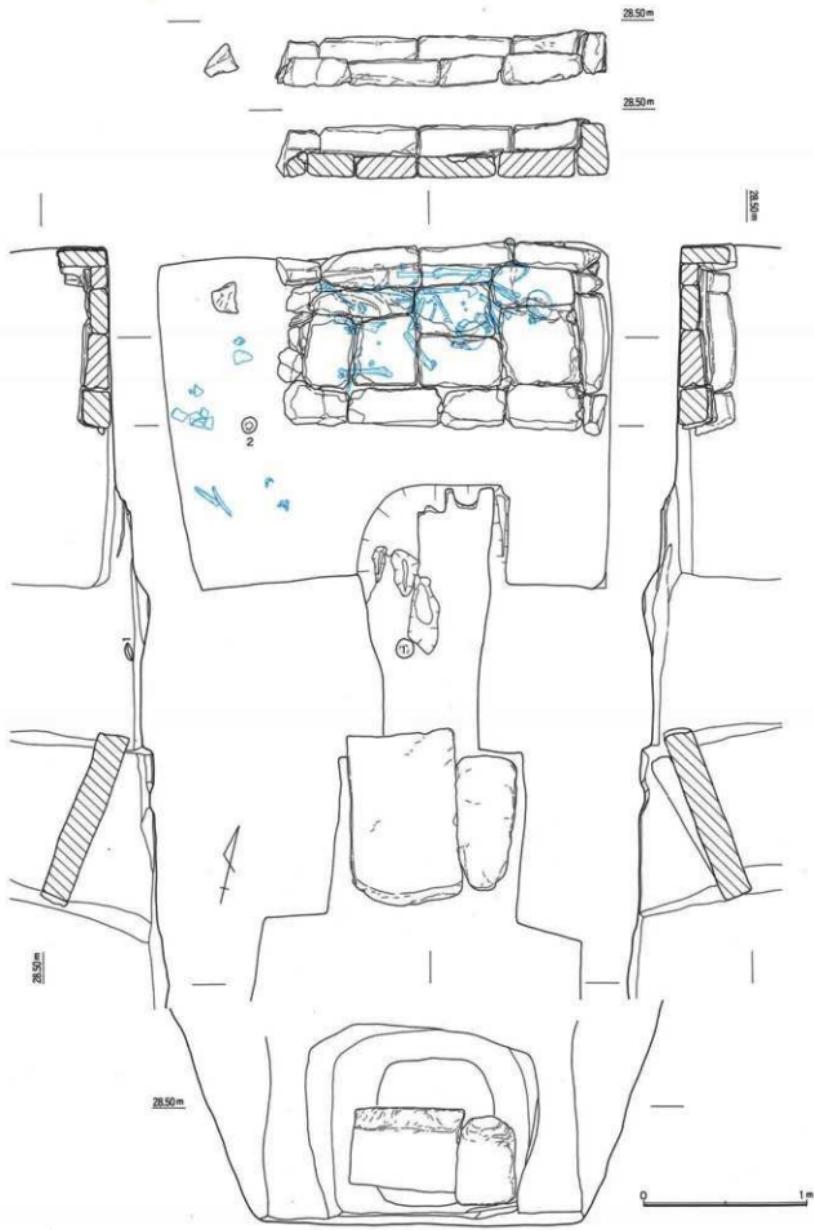
玄室内奥壁と右壁に沿って置かれたもので、凝灰岩の切石を敷き詰めたものである。凝灰岩は、中央部分に大きめの切石を、前側に角柱状の切石を置き、奥側と右側には他のものより高い切石を「L字」に囲むように置いているものである。また、「L字」に囲むように置いてある石は、段状に加工が施してあるものである。石床の規模は、外法で長さ2.00m、幅1.12mを測り、内法では、長さ1.76m、幅0.95mを測る。また、高さは、中央で16cm、高いところで35cmを測る。

埋土堆積状況（第263図）

埋土は、大きく6層群に分けて考えている。1層は表土及び流入土と考えられるものである。2層は、最終埋葬に伴う埋土として考えたもので、2b層は腐食が著しく黒色を呈するものである。また、2a層もやや腐食しているものである。2c層は、羨道部まで覆うもので、一部は室内に流入している。また2d層は整地上と考えたもので、その下面が掘削面で上面が作業面として考えられる。な



第261図 6区9号横穴墓遺構実測図 ($S=1:60$)



第262図 6区9号横穴墓閉塞石・人骨・遺物出土状況実測図 ($S=1:30$)

お、作業面は、閉塞石の上面に対応している。3層は、第3次埋葬に伴う壙上として考えられ、上層の3a層は腐食が著しく黒色を呈し、須恵器表片が多数出土している。4層は、第2次埋葬に伴う埋土として4a層はやや腐食しているものである。5層は、初葬時の埋土として考えられるもので、大部分が削られたもので、5a層がやや腐食した土層と考えられるものである。

また、6層は、玄室内への流入土と考えられる。

遺物出土状況（第262、264図）

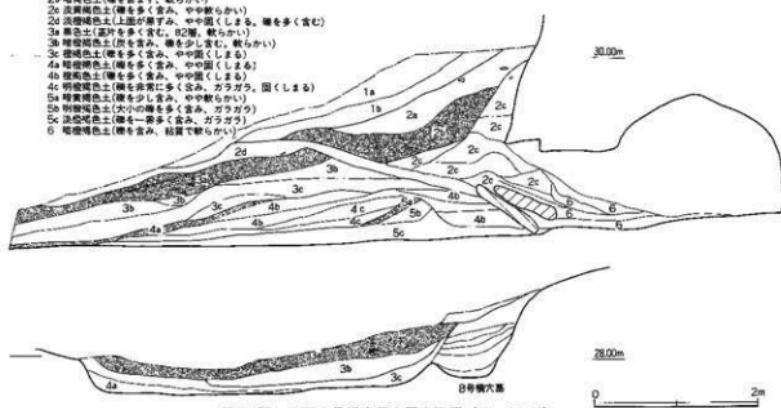
前庭部では、最終埋土上面に形成された腐食土層（2a、2b層）から須恵器表片と瓦片（第264図13）、直口壺（7）、土師器（12）が出土している。また、3次埋葬に伴う埋土上面の腐食土である3a層からは、多数の須恵器表片と平瓶（第264図10）、高环（8）が出土し、平瓶は、広く破片が散らばり、2次埋葬面出土のものとも接合するものである。3次埋葬面（4層上面）からは平瓶（9）が出土し、2次埋葬面（5層上面）からは蓋環（3～6）が出土し、また6については3a層出土のものとも接合している。

玄室内及び玄門部では、蓋環（第262図1、2）が各1点と表片が出土している。蓋環は、セットになるものである。また、石床上からは、人骨のみが出土しており頭蓋骨が2つ認められることから、2体埋葬されていたものと考えられる。人骨は、左壁側からも出土しており、この左壁沿いの範囲も埋葬空間として利用されていたものと推定される。玄室内には、殆ど遺物は残されておらず、追葬時に持ち出されている可能性が高い。

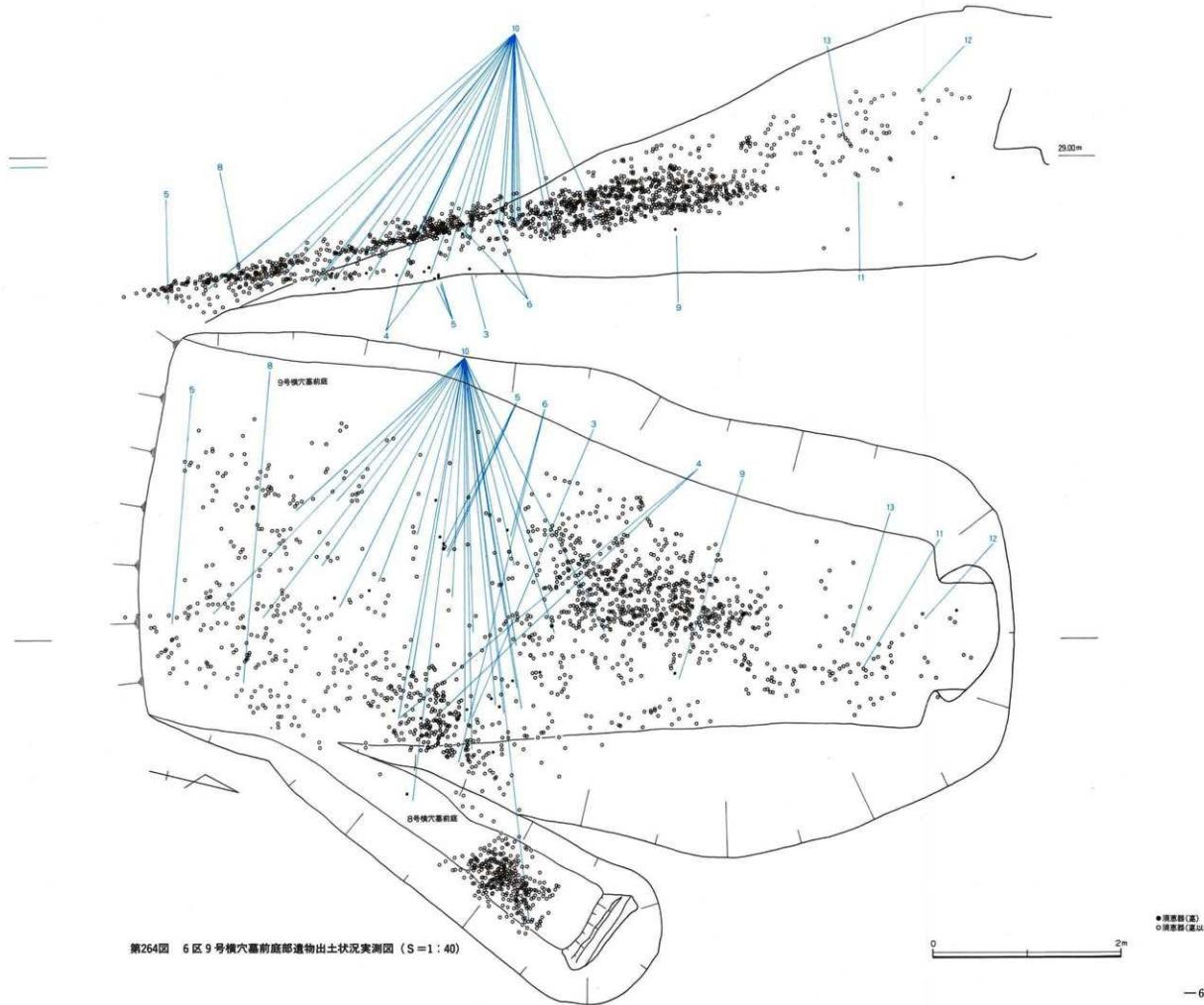
出土遺物（第265図）

玄室内及び前庭部出土の須恵器蓋環（第265図1～6）は、1類（3、4）2類（1、2）3類（5、6）の3つに分類できるものである。1類は、蓋の径11.0cmで環身の立上りが受部より少しでるるものである。2類は蓋の径10.0cmで環身の立上りが受け部から出ないものである。3類は、つまみ付の蓋とセットになる付身であり、環身底部を削るものである。それぞれ大谷分類に対応させれば、1類はA7型～A8型、2類はA8型、3類はC2型となる。

- 1 黄褐色土(塵を全く含まず、堅い)
- 1b 黄褐色土(塵を多く含む、堅い)
- 2a 植生土(塵を含まず、軟らかい)
- 2b 植生土(塵を含まず、軟らかい)
- 2c 黄褐色土(塵を多く含み、やや軟らかい)
- 2d 黄褐色土(塵を多く含み、やや軟らかい)
- 3a 黄褐色土(塵を多く含み、やや堅くしまる)
- 3b 黄褐色土(塵を多く含み、やや堅くしまる)
- 3c 黄褐色土(塵を多く含み、やや固くしまる)
- 4a 硫化物土(塵を多く含み、やや固くしまる)
- 4b 硫化物土(塵を多く含み、やや固くしまる)
- 4c 硫化物土(塵を多く含み、やや軟らかい)
- 5a 例葉状土(塵を少し含み、ガラガラ、固くしまる)
- 5b 例葉状土(塵を少し含み、ガラガラ)
- 5c 泥炭状土(塵を一層多く含み、ガラガラ)
- 6 堆積堆土(塵を含み、結晶で軟らかい)



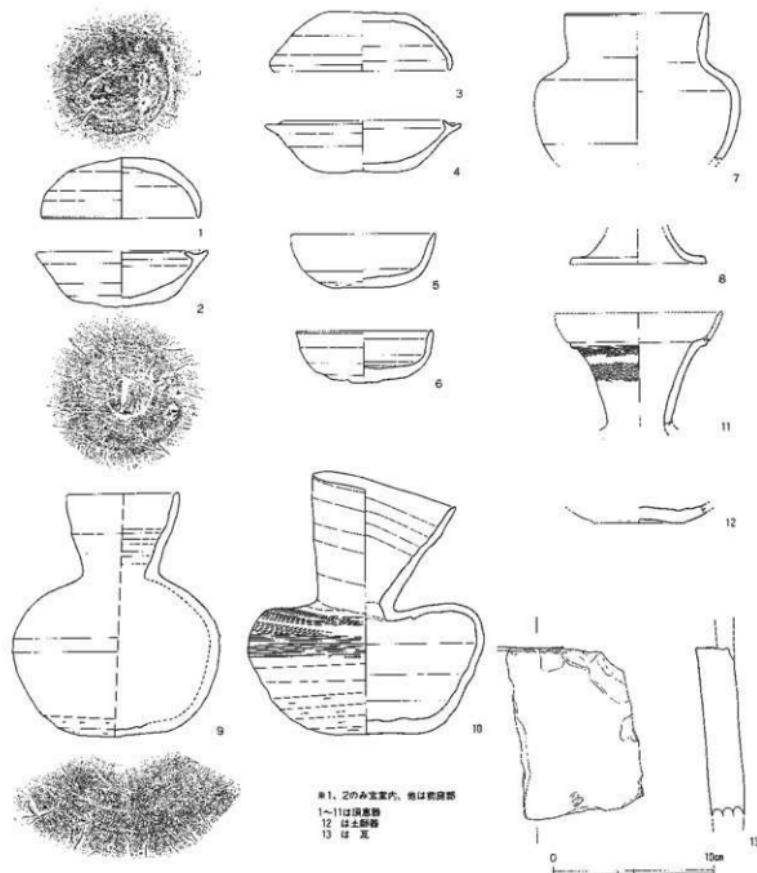
第263図 6区9号横穴墓土層実測図 (S=1:60)



13は、玉縁式丸瓦の狭端部の小片で下縁部を欠くものである。焼成は、瓦質であり凸面はなで、凹面は布目压痕が残る。

時 期

玄室内及び前庭部出土須恵器の様相から、築造期は大谷5期の新相～6期古相と考えられ、埋葬は6期の中で終了しているものと考えられる。なお、前庭部出土の埴(11)、土師器環(12)、瓦(13)は、推定される埋葬時期に矛盾するものであるが、出土層位が最終埋葬終了後の埋土より上位であることから、直接埋葬には関わらない遺物として考えている。



第265図 6区9号横穴墓出土土器・瓦実測図 ($S = 1:3$)

[10号横穴墓]

立 地

標高28.5m付近で検出した横穴墓で、主軸をほぼ南北にとるものである。

墓 道（第266図）

地山を深いところで2m掘削し、全長7.46m、幅0.74mを測り、全体的に狭長の墓道を造り出している。床面は平坦に加工され、玄門部に向かって徐々に高く傾斜するもので、前端部と玄門付近との比高差は1.3mである。

玄 門

墓道の中央に穿たれ、閉塞用の刺り込み（閉塞部）をもつものである。規模は、奥行き1.1m、幅が玄室側で1.1m、閉塞部側で0.6mを測り、玄室側に向かって広がり、傾斜しているものである。横断面は、天井部と側壁の界線が不明瞭なものであり、馬蹄形に近い形を呈している。床面からの高さは、1.0mを測る。閉塞部は、奥行が長く、床面には幅25cm、長さ90cm、深さ7cmの溝が掘られているものである。横断面は、長方形を呈すもので、規模は、奥行き0.61m、幅0.83m、高さ1.35mを測るものである。

閉 塞 石（第268図）

玄門の閉塞部と墓道の2箇所から凝灰岩の切石が各1枚出土している。閉塞部のものは、上部が壊され倒された状態で出土しており、本来の位置に残っているものは、床面から35cmほどを測る。2つの石から本来の規模を復元すると、長さ1.25m、幅0.62m、厚さ0.17mの板状の石になるものと考えられる。墓道出土の石は、角柱状を呈すもので、長さ0.75m、幅0.34m、厚さ0.21mを測るものである。なお、玄門部で倒れた状態で出土したものと墓道出土のものは、同一層位面である。

玄 室（第266図）

主軸はS-8°-Eをとり、平面形は、ほぼ正方形に近い形を呈すものである。規模は、奥行2.64m、幅2.85mを測るものである。床面中央と壁沿いには、溝が掘られており、左右に屍床を設けた形になる。中央の溝は幅33cm、深さ15cm程度のもので長さ270cmにわたる。壁沿いの溝は、前壁左側と左壁の前側部分では認められないもので、規模は、幅9cm、深さ3cmを測る。また、左側の屍床の玄室中央側には、前壁側が幅広になる長方形を呈した浅い凹みが存在し、埋葬位置を意図して掘られたものと考えられる。その規模は、長さ1.78m、幅は奥壁側で0.55m、前壁側で0.76m、深さ3cmを測る。

一方、立面形は家形を呈し、奥壁、側壁と天井部の界線（軒線）が明瞭なものである。ただし、横断面から分かるように、側壁は丸みをもって立上り、天井部も丸くおさめられるもので、丸天井に近いものである。また、天井部には棱線が表現され、長さは1.68mを測る。なお、溝の底面から天井部までの高さは1.62mである。

埋土堆積状況（第266図）

土層は、大きく7層群に分けて考えている。1層は、表土及び流土と考えられるものである。2層は、最終埋葬に伴う埋土と考えたもので、上層の2a層は、著しく腐食したものである。また、2c層は整地上と考えたもので、その上面から閉塞石が出土している。3層は、玄室内流入土である。4層は、第4次埋葬に伴う埋土で上層の4a層は黒色を呈し須恵器破片が多数出土している。5層は、第3次埋葬に伴う埋土で、5a層はやや腐食したものである。6層は、2次埋葬に伴う埋土として考えたものである。7層は、初葬埋土と考えられ、7a層の上面はやや腐食しているものである。

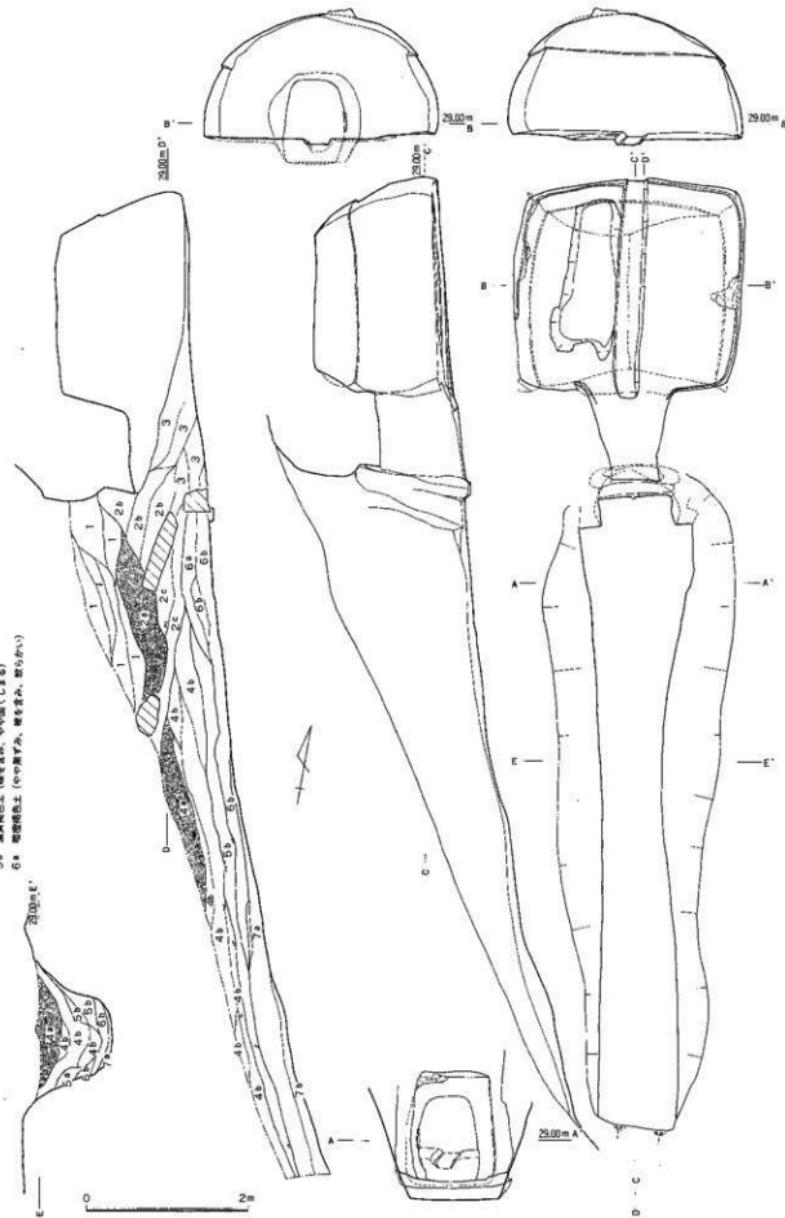
1. 黄褐色土 (磯を含む)、やや固くしまる、やや固くしまる、ガラガラ
 2-a. 黄色土 (磯を含む)、灰を含む。軟らかい
 2-b. 黄褐色土 (磯を含む)、やや固くしまる
 2-c. 黄褐色土 (磯を含む)、やや固くしまる
 3. 淡褐色土 (磯を含む)、やや固くしまる
 4-a. 黄土 (磯を含む)、堅らかい) 砂質含=82
 4-b. 黄褐色土 (磯を含む)、軟らかい)
 5-a. 黄褐色土 (磯を含む)、やや固くしまる
 5-b. 淡褐色土 (磯を含む)、やや固くしまる
 6-a. 淡褐色土 (やや堅め)、軟らかい)

7. 淡褐色土 (磯を多く含み、やや固くしまる、ガラガラ)

7-a. 淡褐色土 (磯を多く含み、やや固くしまる、やや固くしまる)

7-b. 淡褐色土 (磯を多く含み、やや固くしまる)

7-c. 淡褐色土 (磯を多く含み、やや固くしまる)



第266図 6区10号横穴墓遺構実測図 (S=1:60)

以上の土層観察から最低5回以上の埋葬行為が存在していたものと考えられる。

遺物出土状況（第268、269図）

墓道からは、2a層で多数の須恵器破片と蓋（第267図8、10）が出土し、4a層（黒色土）でも多数の須恵器破片が出土している。また、第2次埋葬面からは蓋環（6、7、12）が、第4次埋葬面からは蓋（9）と直口壺（15）が出土している。なお、下方斜面の表土から蓋（13、14）が、横穴墓掘削時の堆土上面からも蓋（11）が出土している。

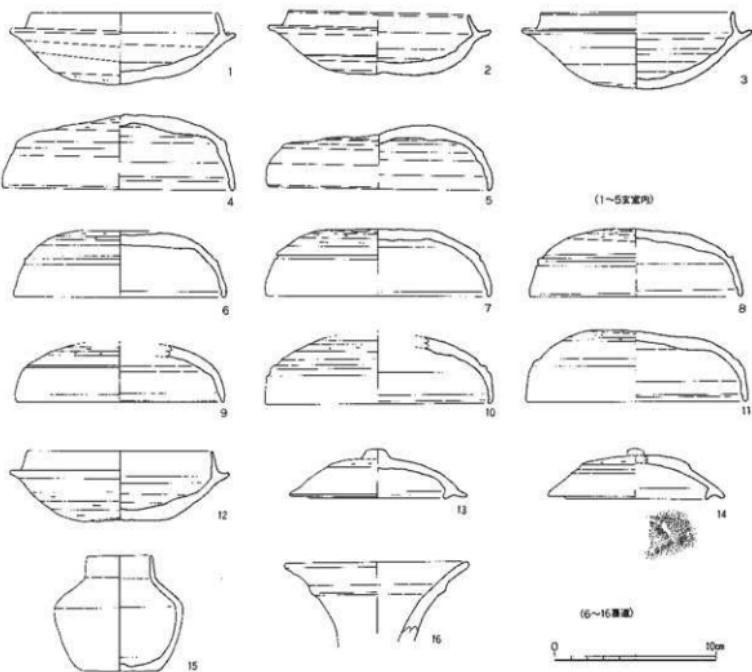
玄室内からは、須恵器5点（第267図1～5）、刀子（第272図80～84）、円金具（第272図85～98）、耳環（第273図99～102）、玉類（第273図107～128）と多数の鉄鎌（第270～272図1～78）が出土している。それぞれ散乱した状態で出土しており、かなり移動しているものと考えられるが、鉄鎌は右側と左側に集中し、玉類は右奥と左側に集中して出土している。

出土遺物（第267、270～273図）

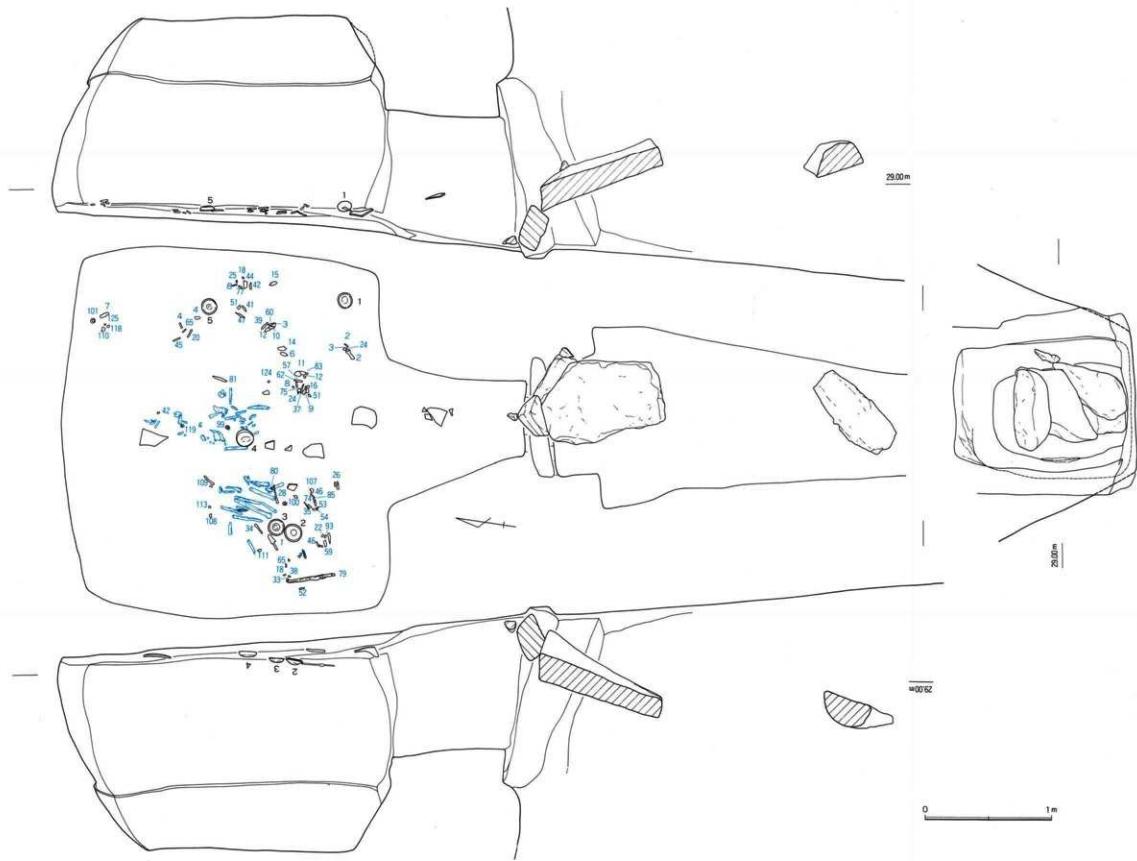
鉄鎌は、平根式（第270図1～26）と長頸式（第271・272図27～78）の2種類存在している。平根式は、鎌身関部が逆刺しとなり、鎌身が長いものと短いもののが存在している。

時期

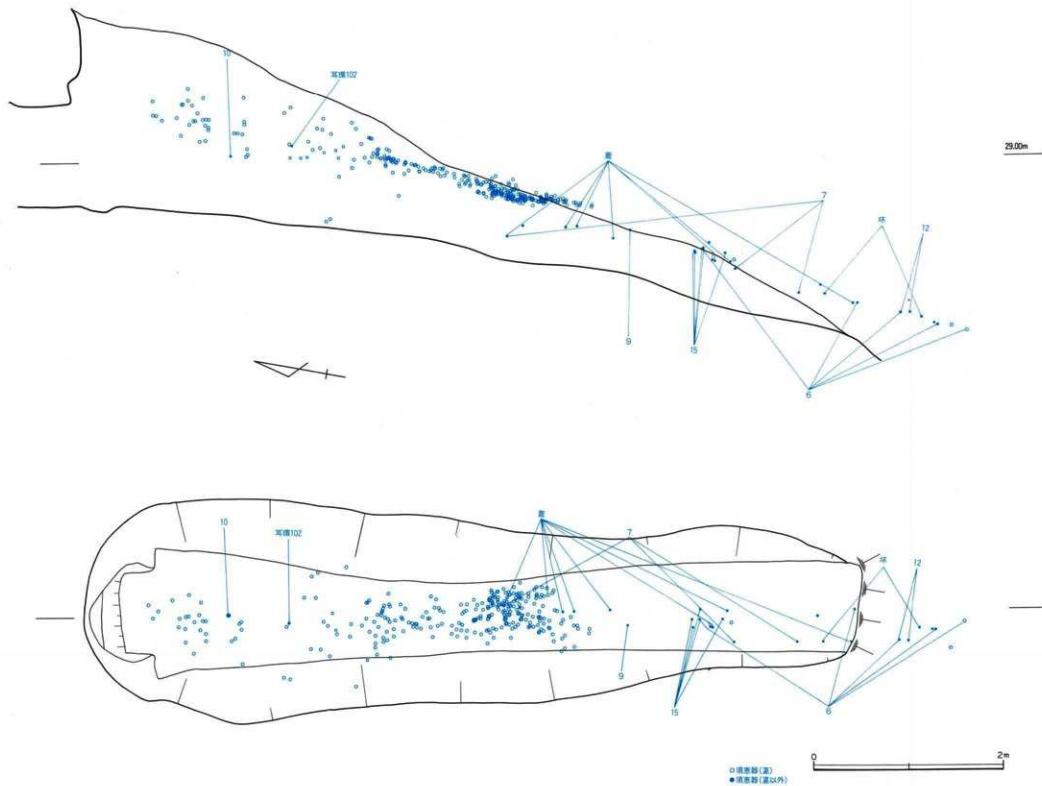
出土須恵器の様相から築造は大谷4期で、埋葬もその時期内で終了しているものと考えられる。



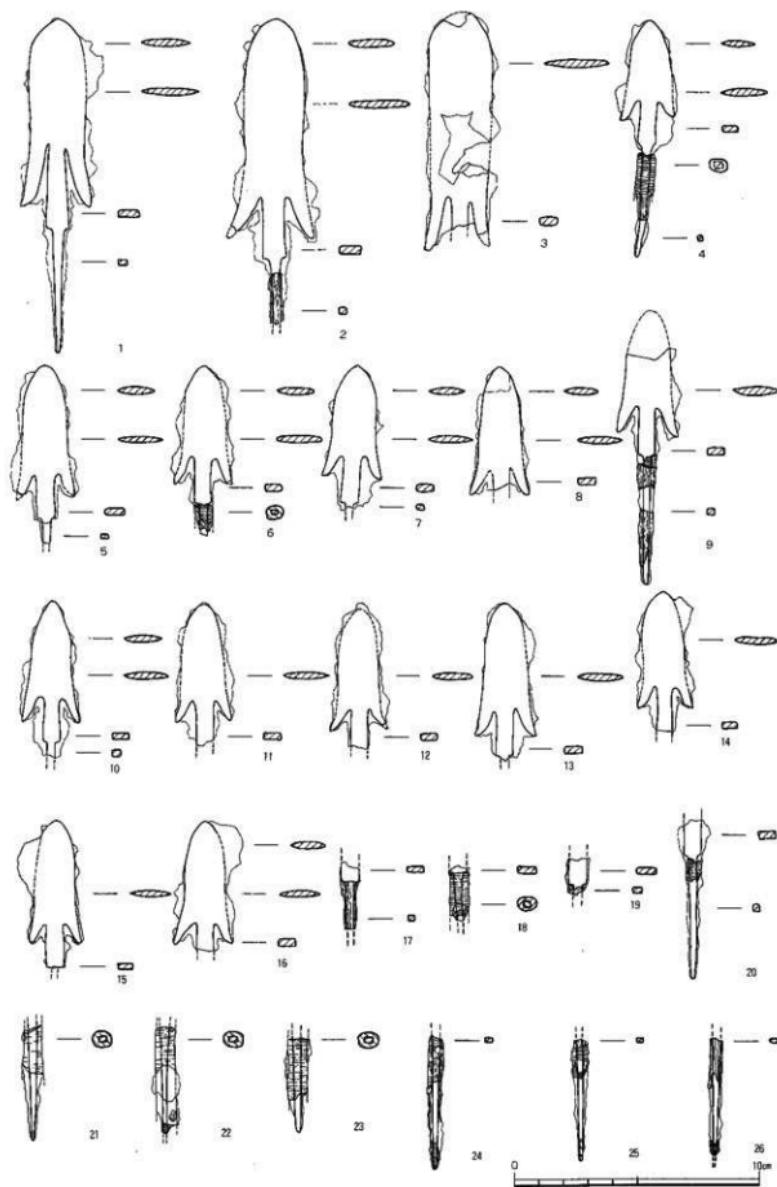
第267図 6区10号横穴墓出土須恵器実測図 (S=1:3)



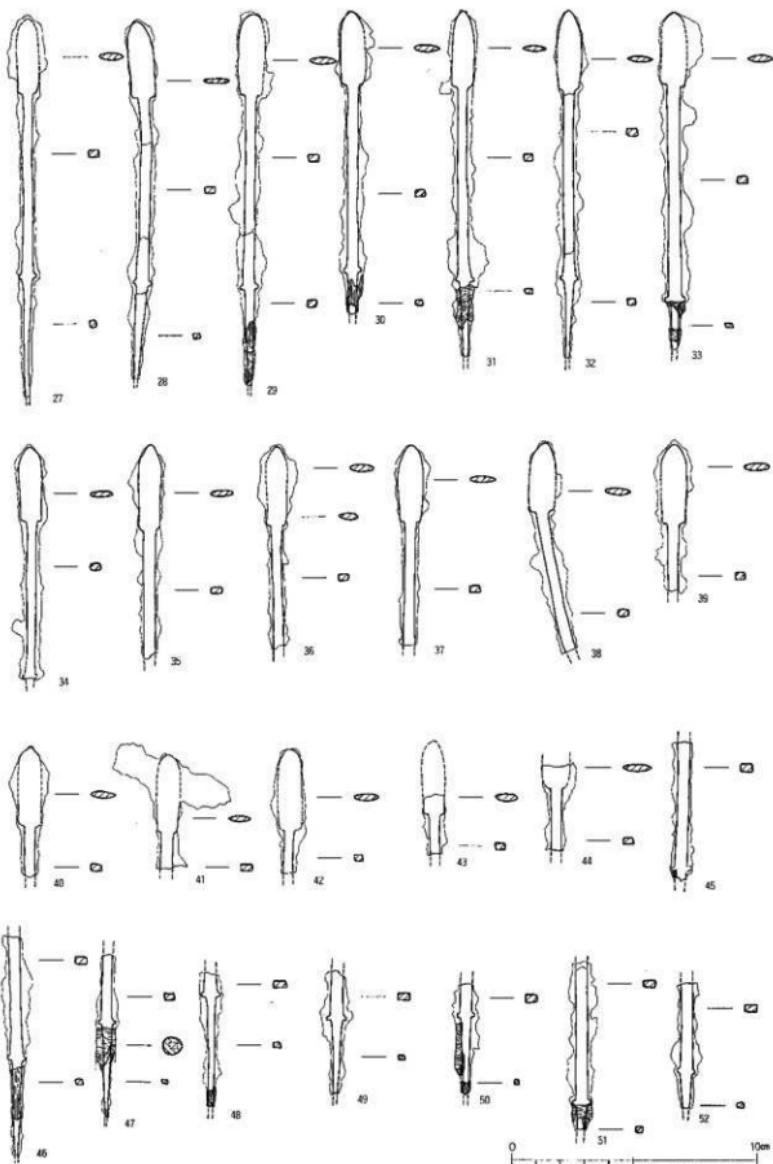
第268图 6区10号横穴墓閉塞石·人骨·遺物·出土状況実測図 (S=1:30)



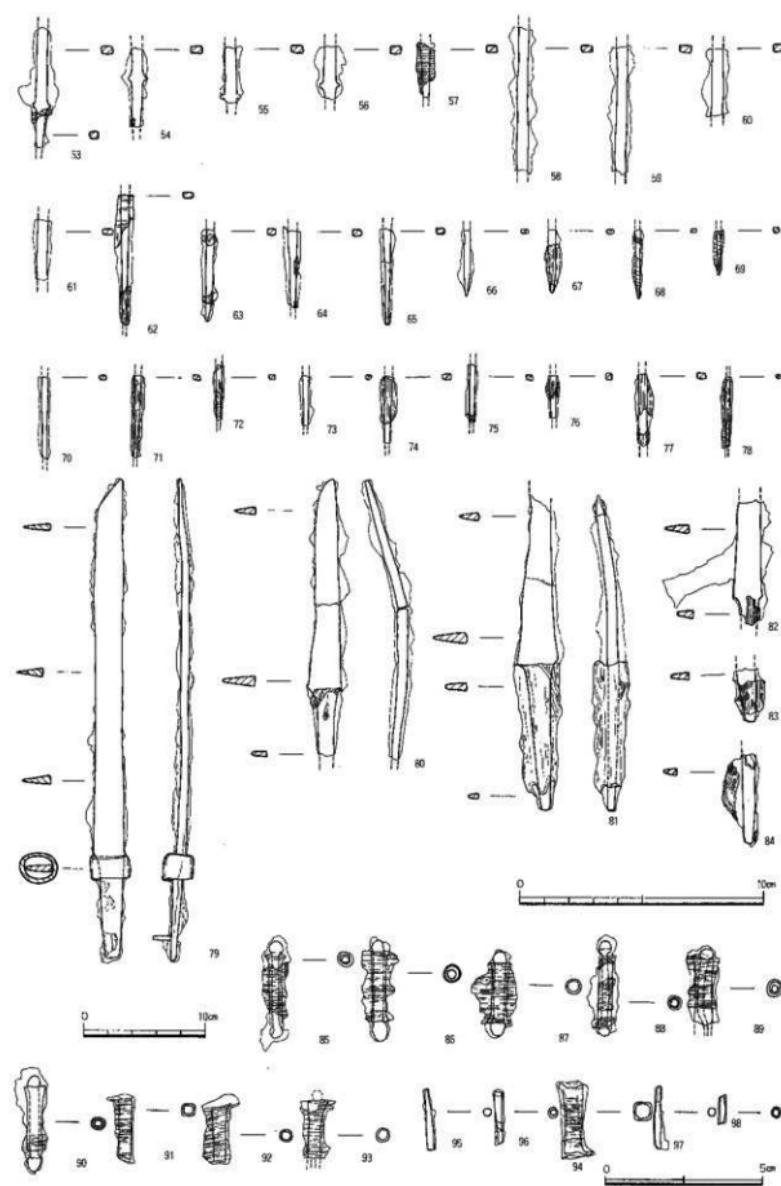
第269圖 6區10號橫穴墓道遺物出土狀況實測圖 (S=1:40)



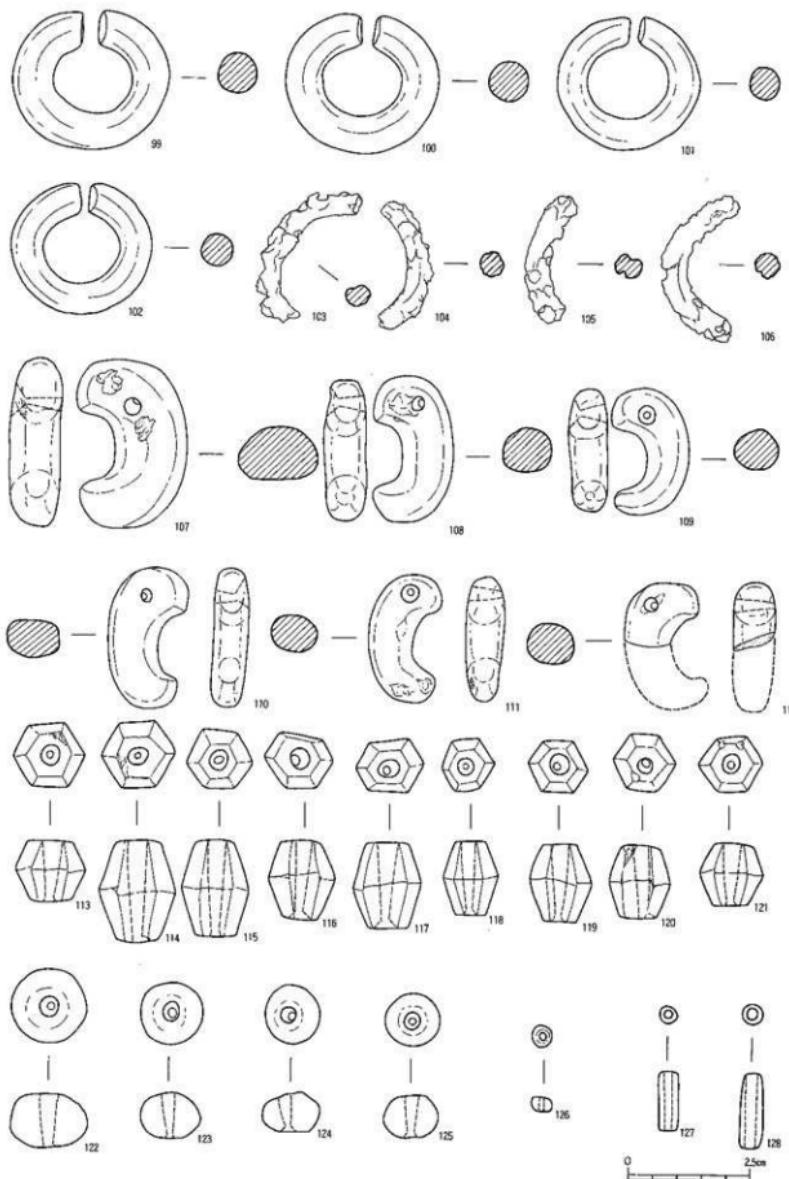
第270図 6区10号横穴墓出土鐵器実測図(1) (S=1:2)



第271図 6区10号横穴墓出土鉄器実測図(2) (S=1:2)



第272図 6区10号横穴墓出土鐵器実測図(3) (S=1:2, 2:3, 1:4)



第273図 6区10号横穴墓出土耳環・玉類・環状製品実測図 (S=1:1)

[11号横穴墓]

立 地

標高27.5m付近で検出した横穴墓で、主軸をほぼ南北方向にとるものである。

前 庭 部 (第274図)

地山を深いところで3.04m掘削し、全長7.1mを測る広大なものである。幅は前端部で3.44m、奥側で1.68mを測り、手前に向かって広がるものである。

羨 道 部 (第274図)

前庭部中央に穿たれ、奥行き0.77m、幅1.04m、高さ0.94mを測る。横断面は、天井部と側壁の界線が明瞭な台形状を呈すものである。床面は、前庭部より5cm程一段高くなるものである。

玄 門 (第274図)

奥行1.1m、幅0.85m、高さ0.7mを測り、床面は、若干玄室側に向かって高く傾斜している。横断面は、天井部と側壁の界線が不明瞭なもので、天井部は、丸くおさめるものである。

閉 塞 石 (第277図)

羨道部と前庭部で凝灰岩の板状の切石を各1枚検出している。

羨道部のものは、主軸より右側で立てられた状態で出土しているが、右側が玄門に接するもので、左側は手前にずれているものである。規模は、長さ80cm、幅45cm、厚さ17cmのもので、この1枚では玄門部を半分程度しか覆うことができないものである。

前庭部出土のものは、倒れた状態で出土したもので、4層上面から出土している。規模は、長さ65cm、幅43cm、厚さ14cmの長方形を呈すものである。この石と羨道出土の石を合わせると玄門部を覆うことが可能なものである。本来は、玄門出土の1枚とこの石の2枚で閉塞がされていたものと考えられるものである。

玄 室 (第274図)

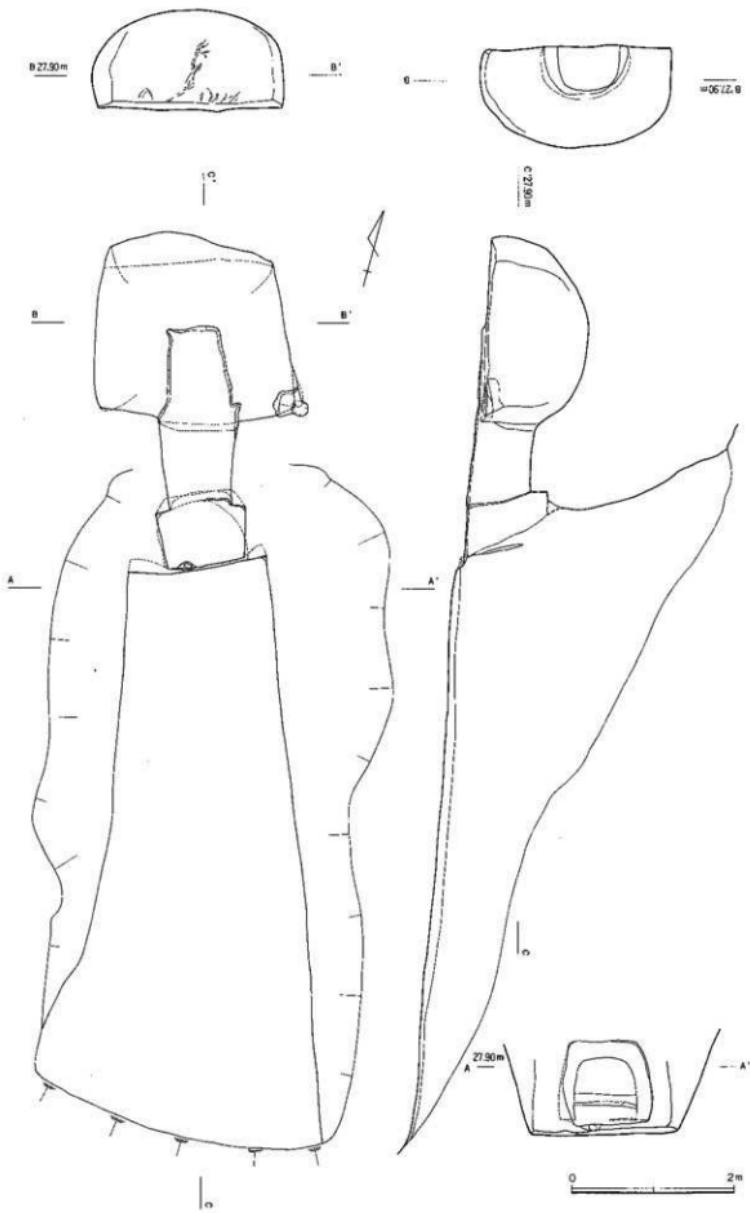
主軸はS-15°-Eをとり、平面形は不整形な方形を呈すものである。規模は、奥行2.25m、幅は奥壁側で2.12m、前壁側で2.53mを測り前壁側が広くなるものである。また、奥壁は、直線的なものではなく、曲線状になるものである。この部分の床面、及び奥壁部分を観察すると、他の壁に比し粗い加工の痕が多く、床面には奥壁のコーナー間に結ぶ直線的な浅く狭い溝が認められた。以上の状況から奥壁部分は、本來の壁を二次的に拡張している可能性が考えられる。

また、床面は、玄門付近の一部を除いて、1段高く加工されたもので、「コ」字形の屍床を呈しているものである。これはそれぞれ幅が、奥壁側1.10m、右壁側0.92m、左壁側0.81mを測るものである。

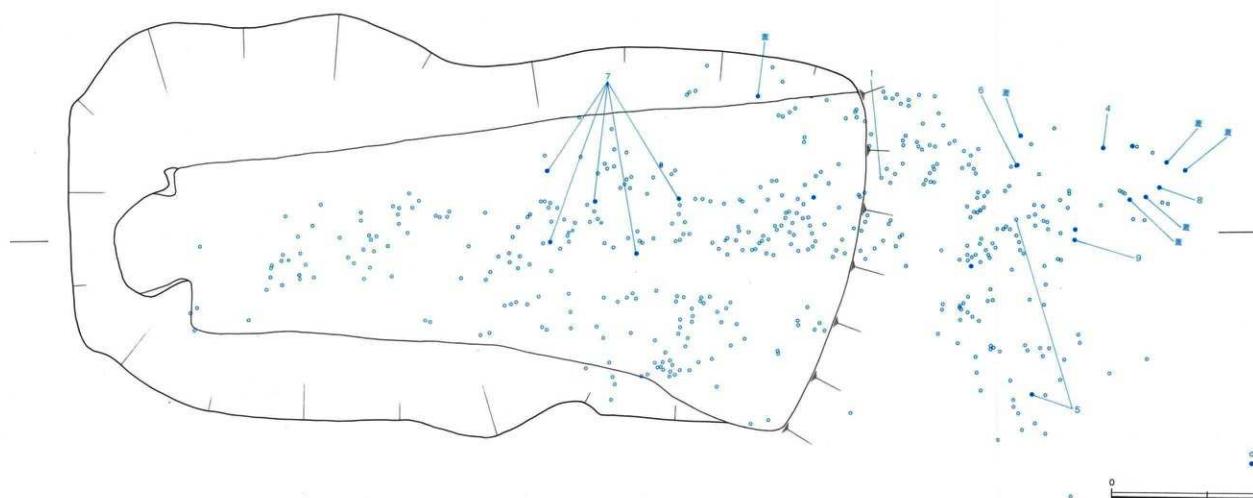
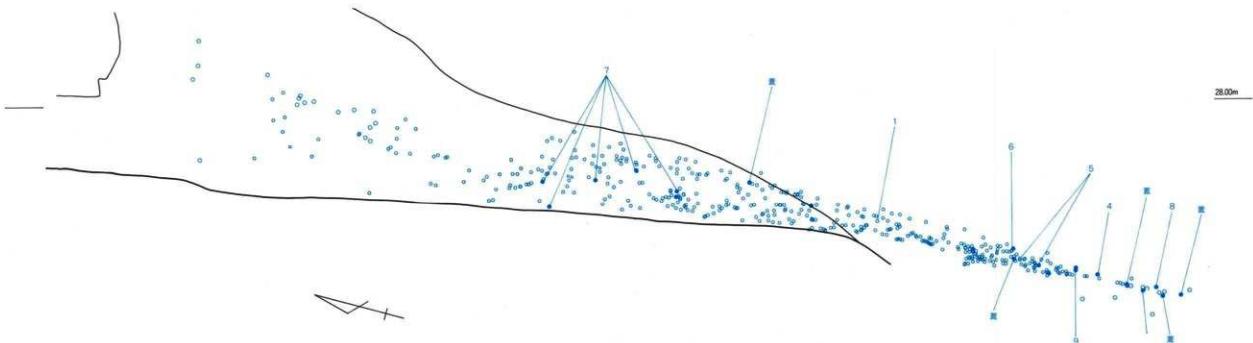
立面では、各壁とも丸みをおびて立上り、天井部も丸く仕上げられたものであり、棟線、軒線は、認められないものである。また、床面から天井部までの高さは、1.3mを測る。

埋土堆積状況 (第276図)

埋土は、大きく8層群に分けて考えている。1層は表土及び流入土と考えられるもので、前庭部の奥側に堆積したものである。2層は、最終埋葬に伴う埋土として考えたものである。最上層の2a層は黒色を呈すものであり、埋め戻し後に形成された腐食土と考えられる。2b-c層は、最終埋葬時の埋土で玄門部を覆っているものである。また、埋葬面上(2層下面)には、倒れた閉塞石がのり、最終埋葬時に閉塞石が取り除かれたものと推測される。3層は、玄門、玄室内への流入土と考えられる。4層は、礫を多く含み硬く締まる層である。明色の層と暗色の層が互層状に近いかたちで堆積し



第274図 6区11号横穴墓遺構実測図 ($S=1:60$)



第275圖 6區11號橫穴墓前部遺物出土狀況實測圖 ($S=1:40$)

ており、暗色系の層を腐食土と捉えた場合は、2段の埋葬に伴う埋土に細分できるものである。ただし、他の横穴墓に比し暗色の土は、礫を多く含み、腐食土として捉えるには問題が残るものである。

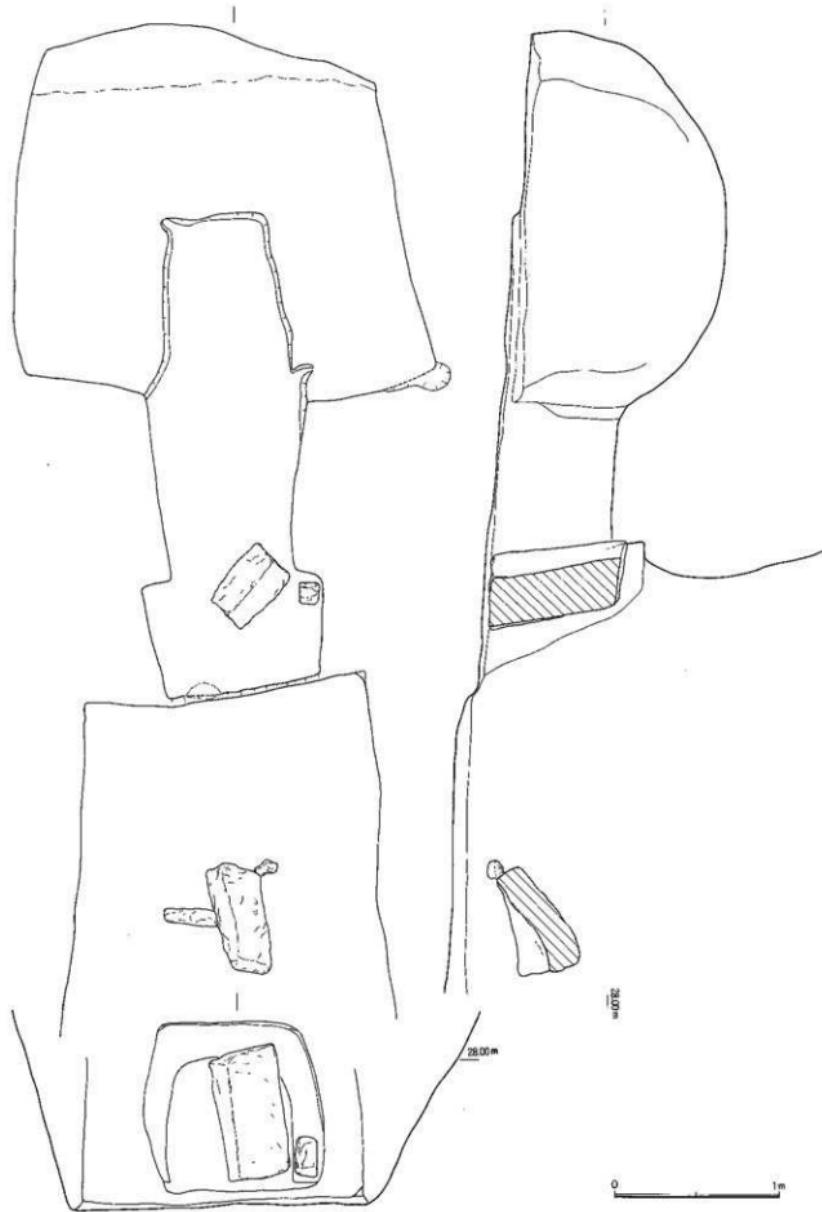
よって、4層は、最終埋葬に伴う埋土掘削時の排土又は、整地土と解釈している。また、その上面を最終埋葬時の作業面、下面を掘削面と考えている。5層は、2次埋葬に伴う埋土と考えられるものであり、上層の5a、5b層は、腐食が著しく黒色を呈し、須恵器表片を多く含み、また埋葬面（6層上面）からも須恵器が出土している。6層は、初葬に伴う埋土と考えられ、腐食土は次の埋葬時に削り取られ失われているものである。なお、6b層は、やや腐食しているものであり、これは別の埋葬に伴う埋土として解釈が可能なものであるが、厚みの無い部分的な層であるので、とりあえず6a層と同一時期の埋土として解釈している。

また7層は、前庭部下方斜面部分に堆積しているもので、横穴墓築造時の排土と考えられるものであり、III表土（8層）上に堆積しているものである。また、7g層も旧表土と考えられるものである。

遺物出土状況（第275図）

前庭部では、最終埋葬時の埋土上面に形成された腐食土層





第277图 6区 1号横穴墓闭塞石出土状况实测图 ($S = 1:30$)

(2 a 層) と第2次埋葬の埋土上面の黒色土(5 a、5 b 層)から須恵器蓋片が出土している。また、4 層からも埋土に混在するように須恵器蓋片が出土しているが、これは、本来5 a、5 b 層に含まれていたものが、埋葬時の掘削によって搅乱を受けているものと推測される。

須恵器以外の器種では、蓋坏、瓶、長颈瓶が出土している。これらは、黒色土(5 a、5 b 層)除去後の6 层上面から出土しているものである。第2次埋葬に伴っているものである。

また、下方斜面からは、蓋(第278図10)が出土しているが、これは別の横穴墓に伴うものである可能性が考えられる。なお、玄室内からは、遺物の出土は認められなかった。

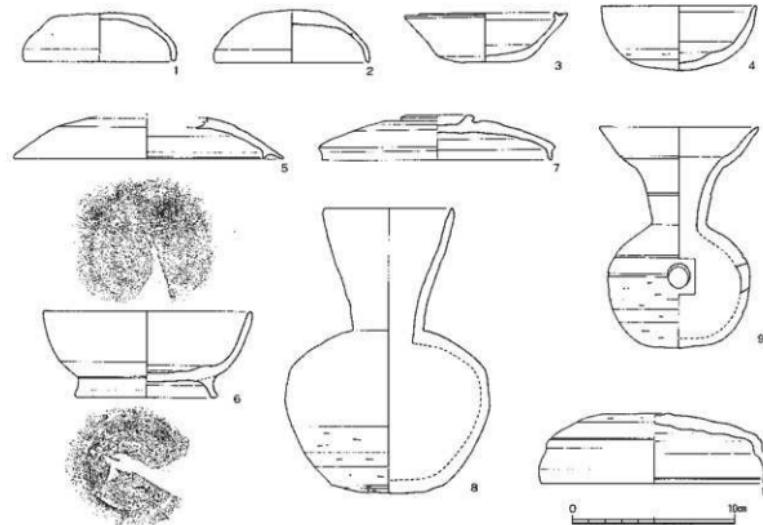
出土遺物(第278図)

前庭部から出土している蓋坏は14点存在する。その中で岡化したものは7点(1~7)である。これらは、大きく4つに分類できるものである。1類(1~3)は小型化した蓋坏で、蓋の口径9.5cm前後のものである。2類は(4)、つまみ付きの蓋とセットになる小型の坏である。3類(5、6)は、輪状つまみを持つ蓋と坏のセットであり、蓋は返りを持ち、坏は高台が付き糸切痕がみとめられるものである。4類(7)は、輪状つまみを持つ蓋で返りの無いものである。

以上の蓋坏は、大谷分類では1類がA 8型、2類がC 1型、3類がB 1型、4類がB 2型に対応すと考えられる。ただし、3類は、糸切り痕があり、厳密に対応しているとは言えないものである。

時期

前庭部出土須恵器の様相から、築造期は大谷6期と考えられ、埋葬は大谷7期の中で終了しているものと考えられる。ただし、輪状つまみの付いた蓋坏(5、6)の坏底部に糸切り痕が認められ、大谷8期まで埋葬行為が存在していた可能性は残る。



第278図 6区11号横穴墓前部出土須恵器実測図(S=1:3)

[12号横穴墓]

立 地

標高30mの尾根頂部付近で検出した横穴墓で、天井部が崩落により失われているものである。

墓 道（第279図）

地山を深いところで0.92m掘削し、長さ2.8m、床面面の幅は前端部で0.64mを測る。閉塞部より0.4m手前では、左壁に一段切り込みが認められ、この部分から閉塞部までは幅が狭くなるものである。また、この切り込みは、幅10cmで、高さは現状で72cmまで認められるものである。

玄 門（第279図）

墓道の中央に穿たれ、奥行き0.78m、幅は閉塞部側で0.71m、玄室側で0.47mを測る。高さについては、天井部が失われており明らかでないが、左側コーナー部分が辛うじて残っており、0.86mと推測される。横断面は、おそらく長方形を呈すものであったと思われる。

閉塞部は、他の横穴墓と異なり、玄門部付近で1段広がり、平坦面を残した後に溝が掘られている。そして、2段の切り込みを設けた形をなすものである。規模は、奥行き0.49m、幅は玄門付近で0.70mを測り、高さは不明である。また、床面の溝は、長さ0.88m、幅0.25m、深さ0.06mを測る。

閉 塞 石（第280図）

閉塞部から凝灰岩の切石を1枚倒れた状態で検出している。規模は、長さ1.05m、幅0.7m、厚さ0.14mを測るもので、石材は黒色のガラス質岩片を含み「荒鳥石」と呼称されているものに近似する。

玄 室（第279図）

主軸はS-12°-Eをとり、平面形は、正方形に近い形を呈し、右壁がやや湾曲したものである。規模は、奥行き1.96m、幅2.05m、高さ推定で1.1mを測る。また前壁は、右袖0.38m、左袖0.81mを測り、左側が幅広になるものである。一方、立面形は、四壁は丸みをもって立上り、天井部と各壁には軒線の認められないものである。天井部は崩落によって失われているが、丸いものと推測される。

埋土堆積状況（第281図）

埋土は、大きく3層群に分けて考えられるものであった。1層は、表土及び流土と考えられるものである。2層は、閉塞石が倒された後に堆積した土層で、最終埋葬に伴う埋土と考えられるものであり、閉塞石はこの時に倒されていると思われる。2a層は、腐食し黒色を呈すものである。また、2b層は、最終時の埋土と考えられるものであり、玄室側に2次的に移動しているものと考えられる。3層は、初葬時の埋土と考えられ、最上層の3a層は、腐食が著しいものである。4層は、天井部の崩落土及び流入土である。なお、4e層は、最終埋葬以前に流入した土と考えられる。

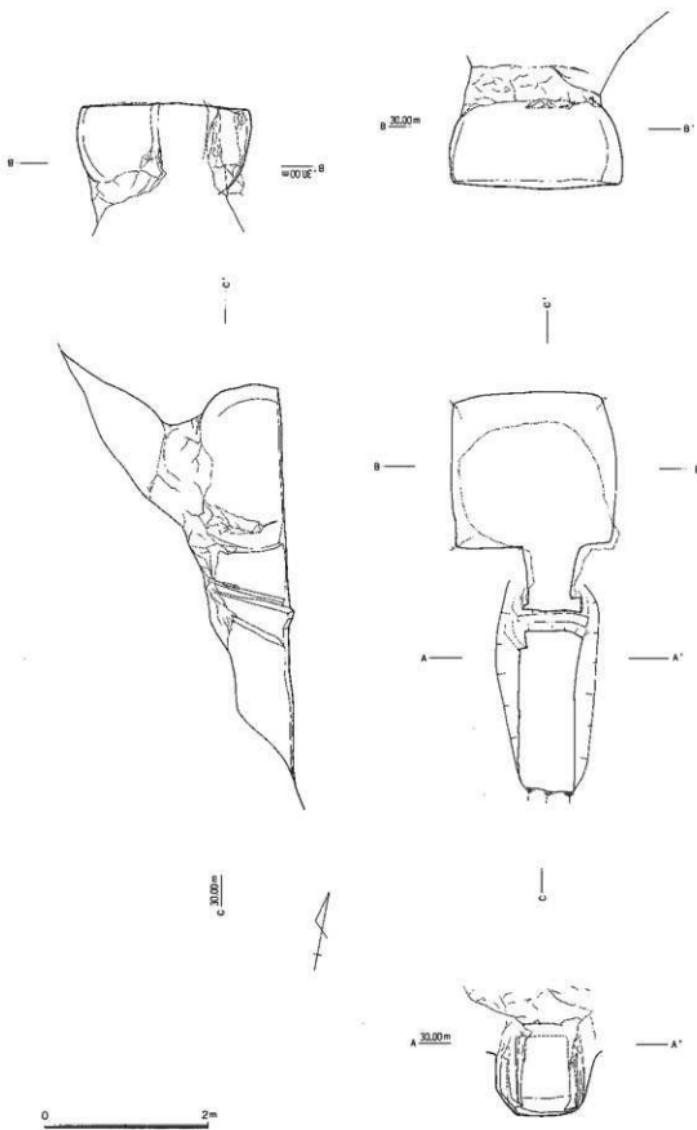
遺物出土状況（第280、281図）

墓道では、最終埋土上層の2a層から須恵器甕片と須恵器（第282図10、11）、土師器（第282図12-17、19-22）が出土している。また、3a層からも少數であるが、須恵器甕片と土師器（18）が出土している。これらの中で、須恵器は、横穴墓の時期として問題ないものであるが、土師器については、22の甕以外のものは、底部に糸切痕が認められ、横穴墓の時期とは大きくかけ離れている。

玄室では、玄門から右袖付近で須恵器の完形品が出土し、その範囲外で須恵器甕片が出土している。甕片は、玄室内流入土の4e層上面にあたり、最終埋葬時に持ち込まれている可能性が考えられる。

出土遺物（第282図）

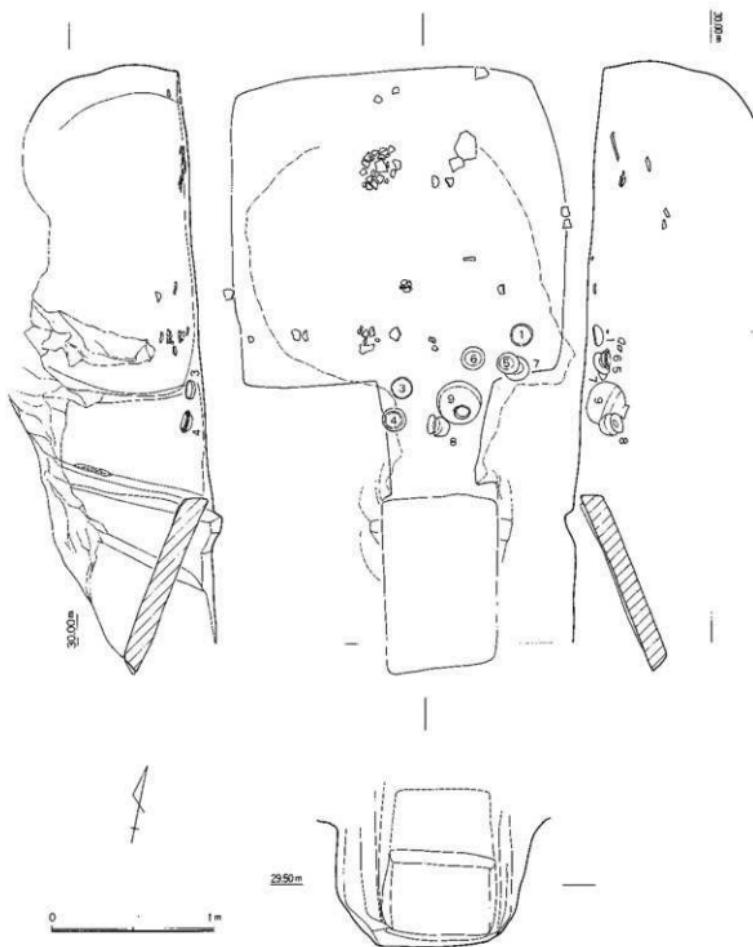
玄室内の出土須恵器蓋坏（1-7）は、その形態、調整から大谷分類のA3型に対応するものと考



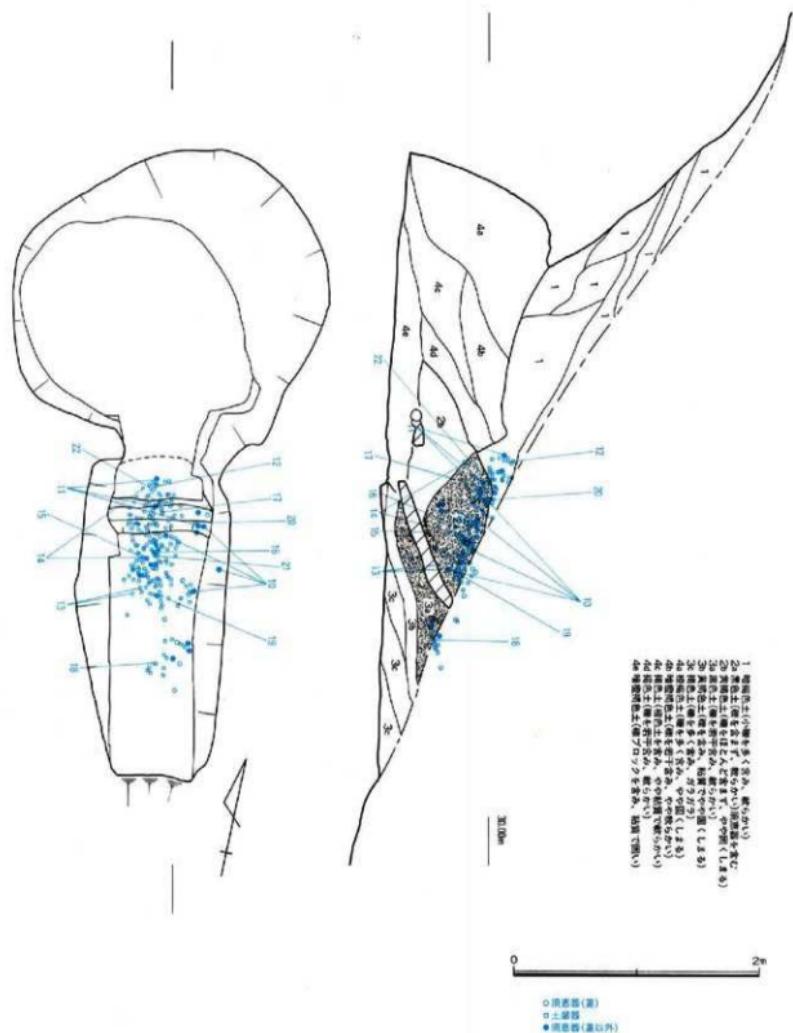
第279図 6区1.2号横穴墓遺構実測図 ($S=1:60$)

えられるが、3の蓋は口径が12.2cmと6、7が13.8cm前後であるのに比し小さいものである。よってA 4型として考えられるものかもしれない。

前庭部出土の土師器は、その形態、特徴から平安時代後半頃のものと考えられ、上方の尾根部に存在する5区S B01に伴う遺物である可能性が考えられる。



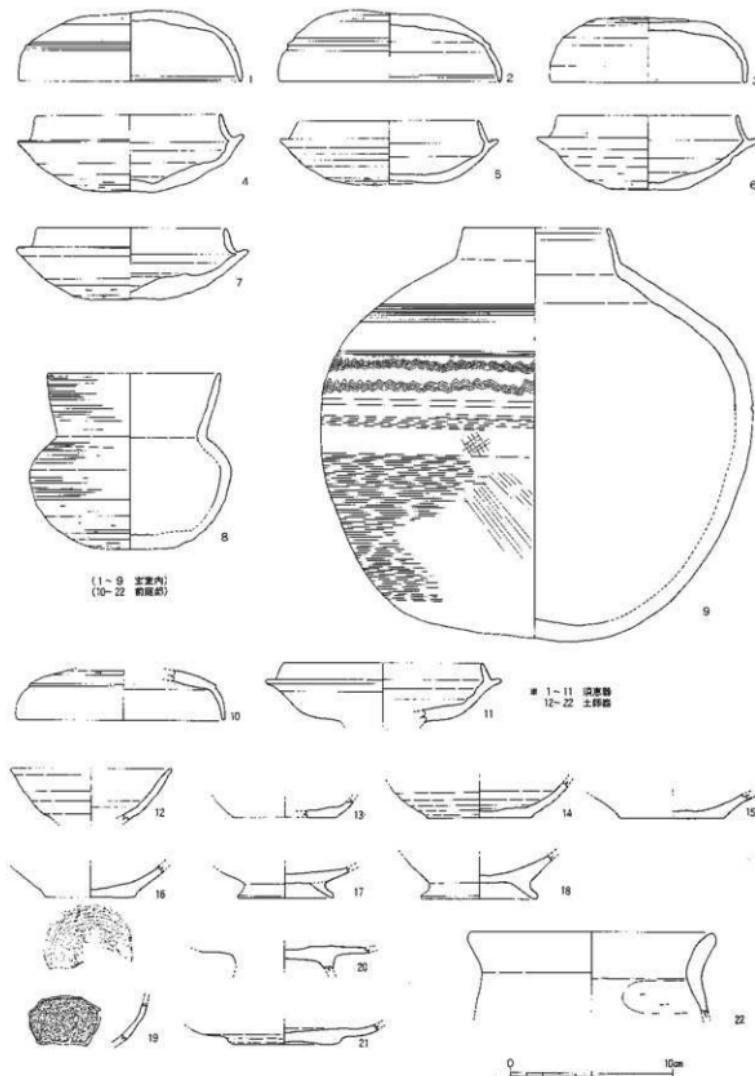
第280図 6区1号横穴墓簡略石・遺物出土状況実測図 (S=1:30)



第281図 6区1-2号横穴墓土層・墓道遺物出土状況実測図 (S=1:40)

時期

出土須恵器の様相から製造期は、大谷3期で埋葬もその時期で終了しているものと思われる。



第282図 6区12号横穴墓出土土器実測図 (S=1:3)

[13号横穴墓]

立 地

標高29mの尾根頂部付近で検出した横穴墓で、両側には隣接して12、14号横穴墓が存在している。

墓 道（第283図）

形態は狭長のもので、地山を深いところで1.05m掘削し、長さ6.1m、床面の幅は前端部付近で6.4mを測る。床面は、玄門部に向かって高く傾斜しているもので、比高差は0.9mである。

玄門・閉塞部（第283図）

玄門部は、閉塞部のやや左よりに穿たれ、奥行1.05m、高さ0.77m、幅は玄室側で0.97m、墓道側で0.49mを測り、若干玄室側に広がるものである。天井部の左側部分は崩落し、実態が不明確なものであるが、やや丸みをおびているものと考えられる。また、正面から見た場合には、長方形を呈しているが、横断面は、馬蹄形を呈すものと考えられる。

玄門部の前面には、一段幅の広がる割り込みが設けられている。これを閉塞用のものとして閉塞部と仮称しているが、奥行き0.42mと長く、狭道として解釈することも可能なものである。

閉塞部は、奥行き0.52m、幅1.00m、高さ0.95mを測り、天井部は平坦で、正面観は長方形を呈するものである。なお、閉塞に用いられた石等は検出しなかった。

玄 室

主軸はS-8°-Wをとり、平面形はやや横長の長方形を呈し、左壁側は崩落等によって失われている。規模は、奥行2.45m、幅2.7m、高さ1.15mを測る。床面は、玄門部より1段高くなり、中央主軸沿いと壁面沿いには溝が掘られている。主軸沿いの溝は、幅9cm、深さ3cmを測り、玄門から1.70mのところまで掘られ、奥壁にまで達していないものである。そして、この中央の溝よって左右に屍床を設けた形をとるものである。一方、立面形では、各壁は丸みをおびて天井部に至るものである。

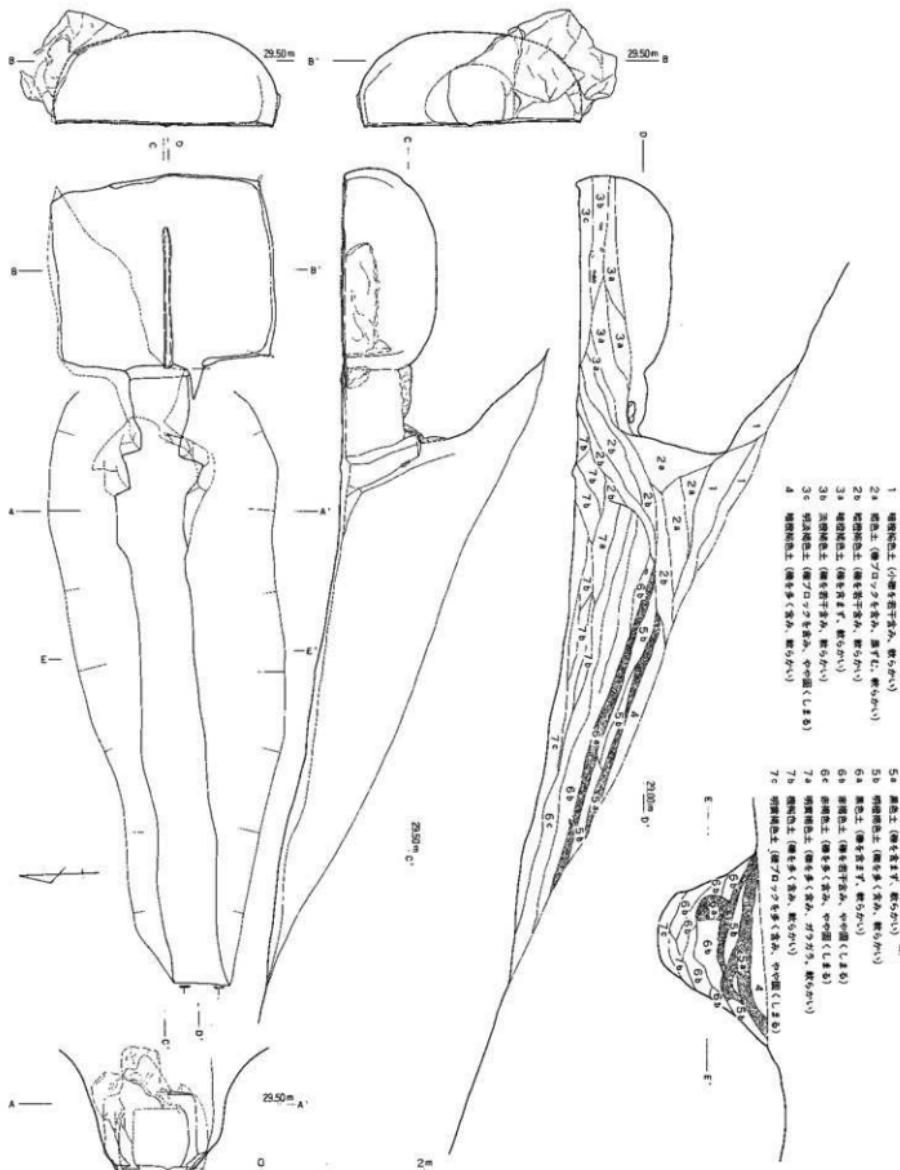
埋土堆積状況（第283図）

埋土は、大きく7層群に分けて考えている。1層は表土及び流入土と考えられるものである。2層は、礫を含む層で、最終埋葬に伴う埋土として考えたものである。3層は、玄室内に流入した土砂の層である。玄室内の土層で分層は困難であったが、3a層は、最終閉塞以後のもので、3b及び3c層は、最終閉塞以前のものと考えられる。また、3b層は、須恵器等の遺物を含む層である。4層は、最終埋葬時に出土された堆土として考えられるものである。5層は第3次埋葬に伴う埋土として考えたもので、埋土（5b層）上面に形成された腐食土の5a層は、黒色を呈している。6層は第2次埋葬に伴う埋土と考えたもので、上層の6a層は腐食しているものである。7層は、初葬時の埋土と考えられるものであり、礫を多く含むものである。

以上の観察結果から、少なくとも4回以上の埋葬行為が考えられるものである。但し、5a層から出土している遺物は、平安時代後半のものが出土しており、最終埋葬とした掘削時期は、それ以降であることは間違いく、最終埋葬としたものは、横穴墓本來の埋葬とは異なるものと推測される。

遺物出土状況（第284、285図）

墓道では、5a層、6a層といった黒色を呈す腐食土層から遺物が出土している。5a層からは、上師器（第289図62-70）、綠釉陶器（第289図71）が出土しており、70の上師器は玄室内出土の破片と接合するものである。また、出土した上師器は、横穴墓で一般的に出土する遺物と比較し、時期が非常に新しいものである。一方、6a層からは、須恵器破片が出土している。

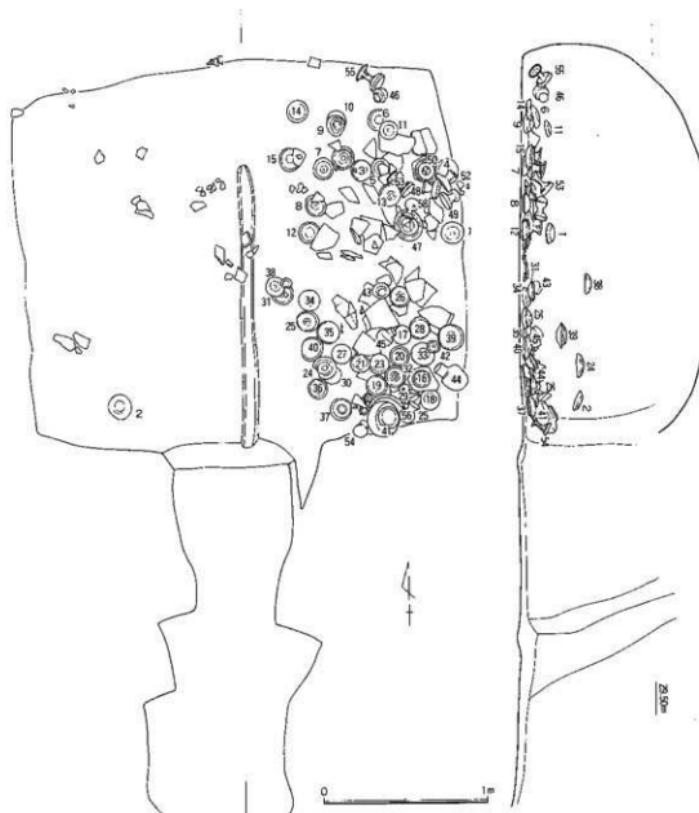


第283図 6区13号横穴墓遺構実測図 (S=1:60)

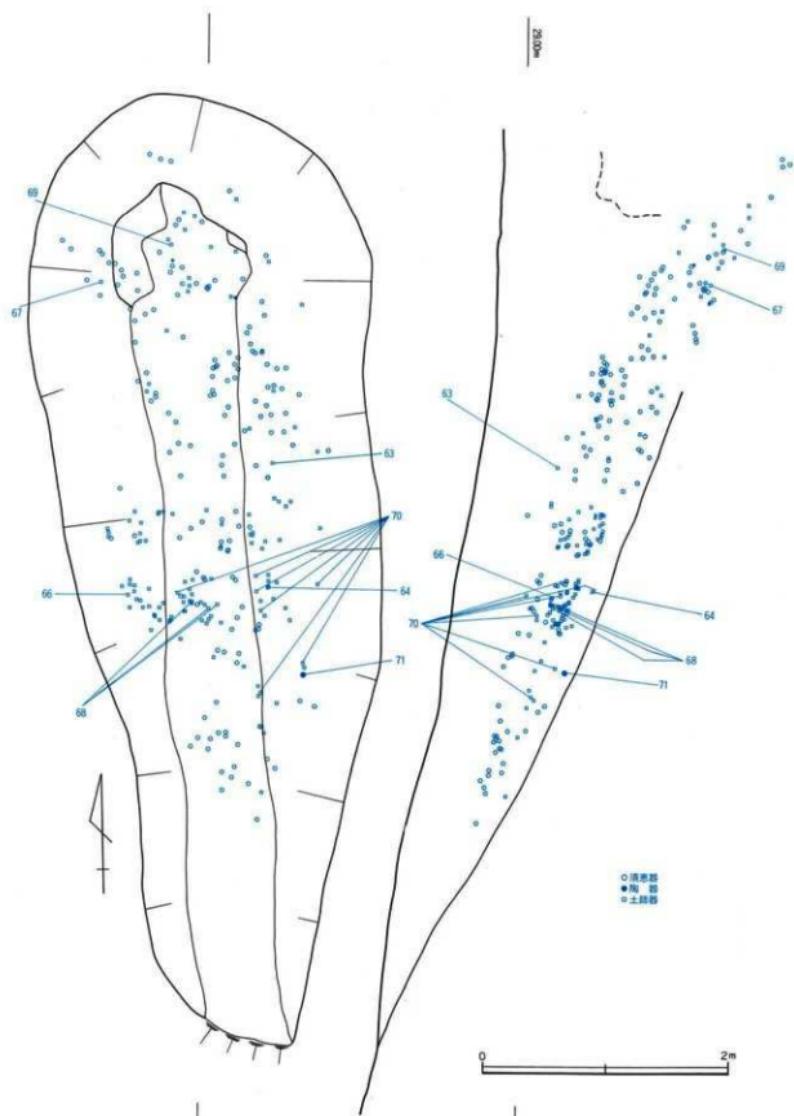
玄室内では、左右の2群に大きく遺物の出土が分かれるものである。左壁側では、床面直上からの出土は認められず、全て3c層上面付近から出土している。遺物は、須恵器蓋坏（第287図1、2、1、24、第288図38、39）、土師器（第289図59～61）、甕片が出土している。右壁側では、甕の破片を敷き並べた須恵器床が存在し、その上から周辺にかけて多数の須恵器、金属器、勾玉が出土している。また、右側出土の遺物は、さらに出土状況から奥壁側と前壁側の2つに分けることができる。

出土遺物（第286～289図）

墓道出土の土師器で甕以外の器種（第289図62～69）は、基本的に底部に回転糸切痕が認められるもので、高台の付くタイプと付かないタイプの2種類が存在している。また、綠釉陶器（第289図71）



第284図 6区13号横穴墓玄室内遺物出土状況実測図 (S=1:30)



第285图 6区13号横穴墓前底部遗物出土状况实测图 ($S=1:40$)

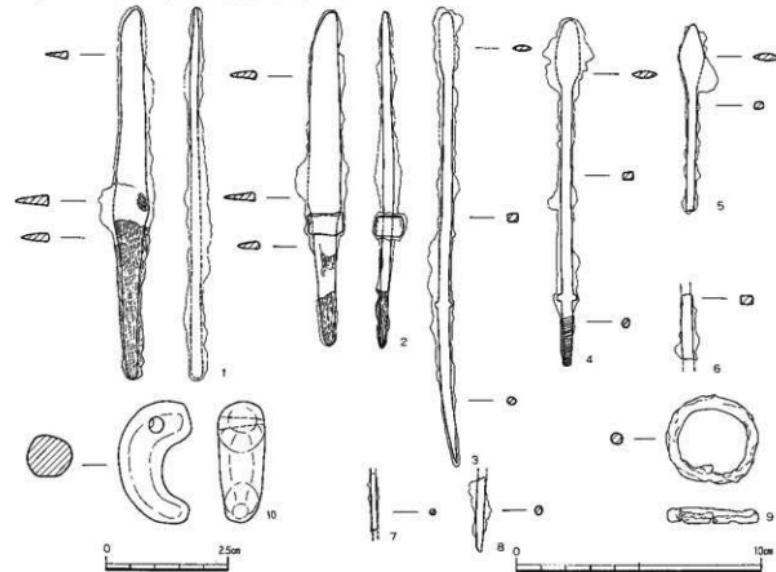
は、高台の付く小皿と推定されるものである。以上の土師器、綠釉陶器は、凡そ平安時代後半頃のものと考えられ、横穴墓の時期とかけ離れているものである。

玄室内出土の須恵器蓋環は、その形態、焼成から大きさ12に分類できるものである。1類（1、2）は、灰白色を呈し、しっかり削り、蓋口径12.9cmのセットである。2（3、4）類は、蓋のみで、しっかり削りものである。3類（5、6）は、紫灰色を呈し、しっかり削り、蓋口径13.0cmのセットである。4類（7～11）は、焼きひずみが大きいもので、しっかり削り、蓋口径12.0cm前後のものである。5類（12～15）は、内面が白色の繊状なるもので、やや荒い削りで、蓋口径12.0cm程のセットである。6類（16、17）は、紫灰色を呈し、削り荒く、蓋口径12.5cmのセットである。7類（18～23）は、緑灰色を呈し、削り荒く、蓋口径12.5cmのセットである。8類（24～26）は、蓋のみで、削り荒く、口径12.0cm前後のものである。9類（27～29）も、蓋のみで、削りは周辺を3周程度で口径12.5cmのものである。10類（30～33）は、环のみで、淡青灰色を呈し、周辺1～2周削り、立上り内面の付け根が膨らむものである。11類（34～37）は、焼成が甘く、周辺1～2周削り、蓋口径12.5cm程のセットである。12類（38～40）は、环のみで、立上り低めで、削りが周辺1周のものである。

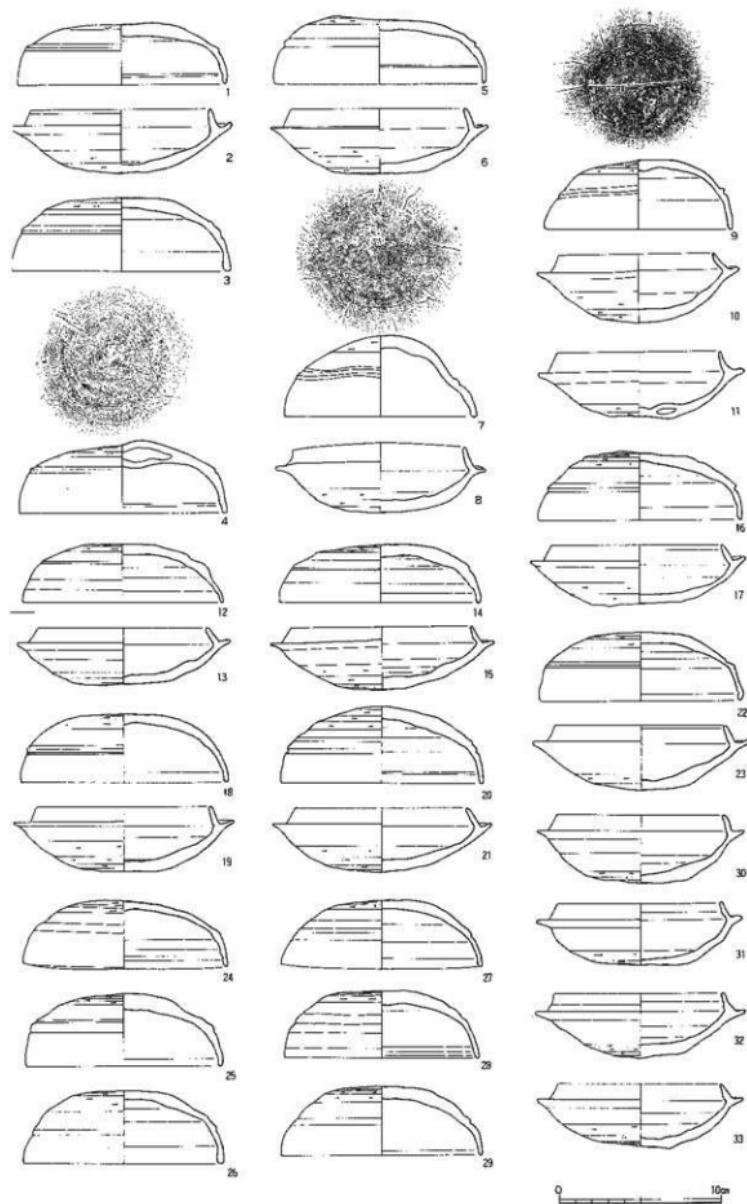
以上の分類した蓋環は、1類～10類へ型式的には変遷しているものと考えられ、これを基に玄室内須恵器床のものを再検討すると、奥側に古相のものが認められ、前側に新相のものが認められる。また、各分類ごとにまとまった出土状況が確認され、遺物の大きな移動はなかったものと思われる。

時 期

玄室内出土須恵器の様相から、築造期は大谷4期と考えられ、埋葬も4期の中で終了しているものと考えられる。また、平安時代後半に浸入行為が認められる。



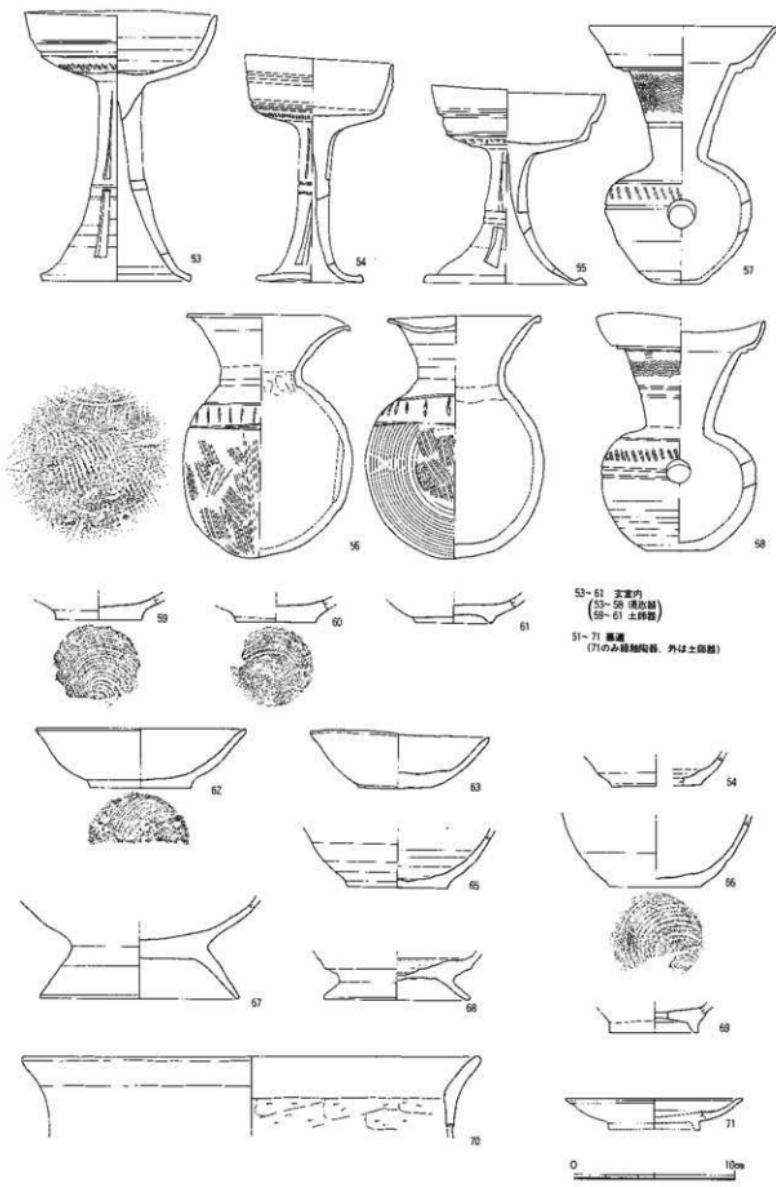
第264図 6区13号横穴墓出土金属器・玉類実測図 (S=1:2, 1:1)



第287図 6区13号横穴墓出土土器実測図(1) (S=1:3)



第288図 6区13号横穴墓出土土器実測図(2) (S=1:3)



第289図 6区13号横穴墓出土土器実測図(3) (S=1:3)

[14号横穴墓]

立 地

標高28mの尾根頂部付近で検出した横穴墓で、調査前から天井部が陥没していたものである。

墓 道（第291図）

地山を深いところで2.2m掘削し、全長9.5m、幅1.4mを測り、狭長の墓道を造り出している。床面は平坦に加工され、玄門部に向かって高く傾斜し、前端部と玄門付近との比高差は1.7mである。

玄 門（第291図）

軟弱な地山で、調査中にも崩壊し、実態が良く分からぬものである。墓道の中央に穿たれ、規模は、奥行き1.3m、幅0.76mを測る。天井部が崩落で失われており、良く分からぬが、高さは約0.95m程と推測される。また、閉塞用の割り込み（閉塞部）については、調査では確認できなかつたが、本来は、存在していた可能性が高いものと考えられる。

閉 塞 石（第290図）

玄門の手前から、凝灰岩の切石が3枚出土している。床面直上には、長さ0.76m、幅0.30m、厚さ0.12mの細長い石が置かれ、その上から長方形の板状の石が2枚出土している。左側の石は、倒れた状態で出土し、長さ0.9m、幅0.56m、厚さ0.14mを測るものである。右側の石は、立てられた状態で出土し、長さ0.84m、幅0.36m、厚さ0.15mを測るものである。なお、左右の2枚の石で本来は閉塞が行われた物と推測されるが、この2枚は、床直上の石に直接載るものでなく、1層埋土を、間に挟むものである。のことから、この2枚は、追葬時に使用された可能性が高いものである。

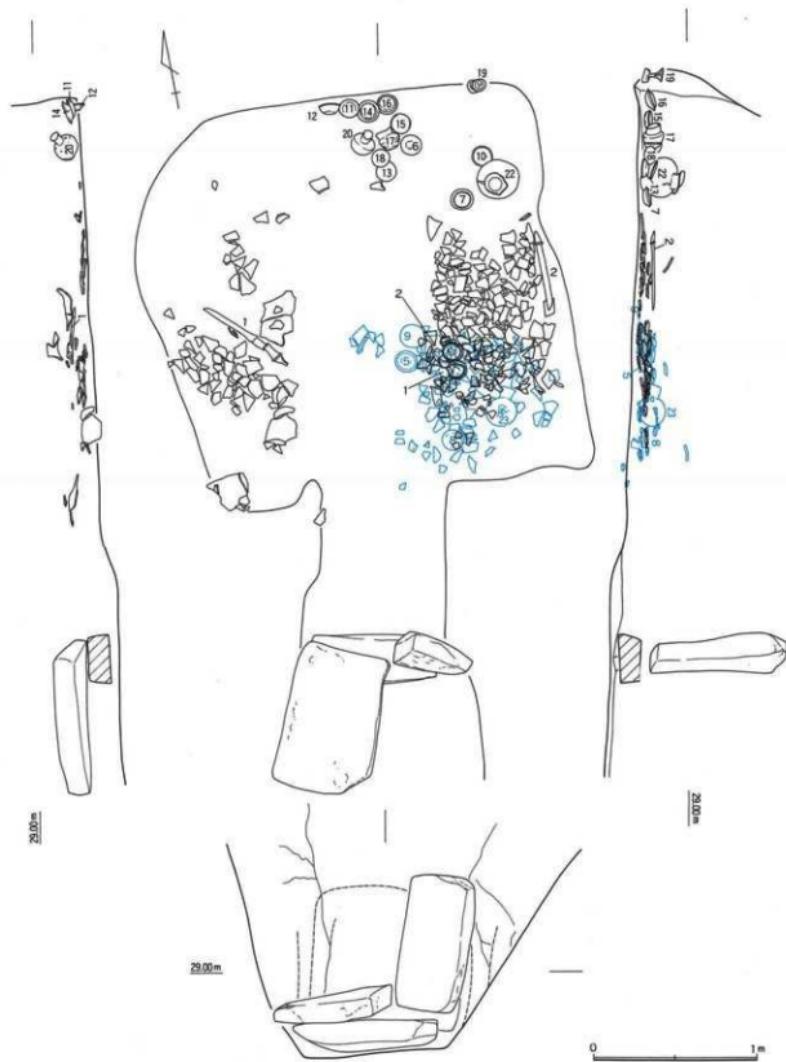
玄 室

天井部は陥没のため失われ、壁面も剥離が著しいもので、現状をかなり損なつたものである。

主軸はS-10°-Wをとり、平面形は、ほぼ正方形に近い形を呈するものである。規模は、奥行2.4m、幅2.45mを測るものである。床面は、軟弱であるため明確に検出できなかつたが、左右が1段高くなり、屍床状を呈するものであったと考えられる。また、左壁側では、奥壁側と前壁側の2個所に径20cm程のピットを検出した。覆土は、暗褐色土が堆積したもので、何らかの埋葬行為に伴うものと考えられるが、その詳細については不明である。立面は、天井部が崩落で失われ、詳細は不明であるが、界線のない丸いものと考えられる。

埋土堆積状況（第291図）

上層は、複雑で上半部を団化していないことから明確に捉え難いものであったが、10層群に分けて考えている。1、2層は、最終埋葬後の土壤状の凹みに堆積した土である。なお、土壤状の凹みの性格等については不明である。3層は、最終埋葬に伴う埋土と考えたものであり、この埋葬面（4層上面）から子持盃が出土している。4層は、第5次埋葬に伴う埋土であり、その埋葬面（4層下面）に2枚の板状の閉塞石が載るものである。5層は、第4次埋葬に伴う埋土であり、この時の埋葬は、それまでの埋土を大きく削り込むように掘削しているものと考えられる。6層は、第3次埋葬に伴う埋土であり、その上層の6a層は、黒色を呈し腐食が著しいものである。7層は、第2次埋葬に伴う埋土と考えたもので、その上面はやや黒ずみ腐食しているものである。8層は、初葬時の埋土と考えられるもので、8a層は、やや腐食しているものである。9層は、玄門部への流入土としてかんがえられ、10層は、天井部等の崩落土と考えられる。11層は、その上面が第5次埋葬面と面的につながるものであり、可能性として玄室の埋葬のための整地土である可能性が考えられる。



第290圖 6區14號橫穴墓閉塞石・遺物出土狀況實測圖 ($S=1:30$)

1a 暗褐色土 (黒を含む茶色、黒らかい)

1b 明褐色土 (黒を含み、黒らかい)

2a 黑褐色土 (黒を含み、黒らかい)

2b 黑褐色土 (まだら質、黒を含む茶色、黒らかい)

3a 淡褐色土 (黒を含む、黒らかい、きれいな茶)

3b 淡褐色土 (黒を含み、やや白っぽくして黒らかい)

4 暗褐色土 (黒を含み、やや黒くしまる) この上面から子持表出土

5a 暗褐色土 (黒を含み、やや黒くしまる)

5b 暗褐色土 (黒を含み、やや黒くしまる)

5c 暗褐色土 (黒を含み、やや黒くしまる) きれいな茶

5d 暗褐色土 (小粒を含み、やや黒くしまる)

6a 黑褐色土 (黒を含み、黒らかい)

6b 暗褐色土 (黒を含み、やや黒くしまる)

6c 淡褐色土 (黒を含み、やや黒くしまる)

7a 暗褐色土 (上面が黒み、全体はほとんど黒まず、黒らかい)

7b 明褐色土 (黒を含み、やや黒くしまる)

8a 暗褐色土 (黒を含み、やや黒くしまる)

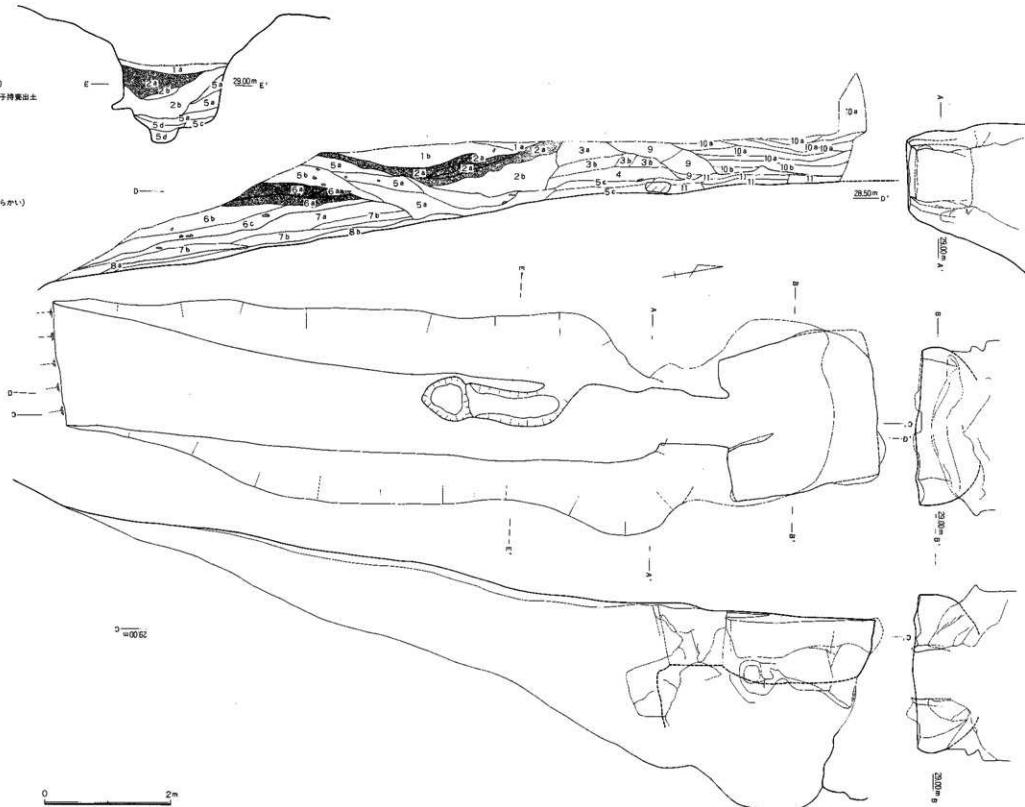
8b 暗褐色土 (黒を含み、やや黒くしまる)

9 暗褐色土 (黒を含み、黒らかい)

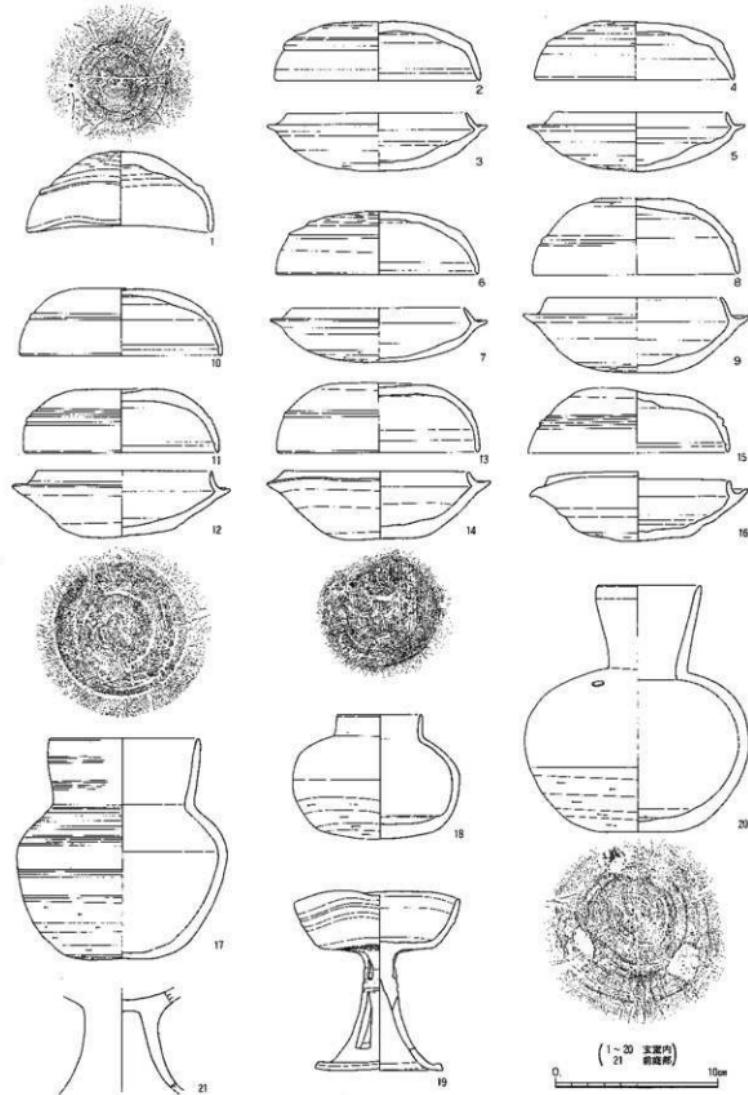
10a 淡褐色土 (黒を含み、やや黒くしまる)

10b 淡褐色土 (黒を含み、黒くしまる)

11 淡褐色土 (小粒を含み、やや黒くしまる)



第291図 6区14号横穴墓構造実測図 (S=1:60)



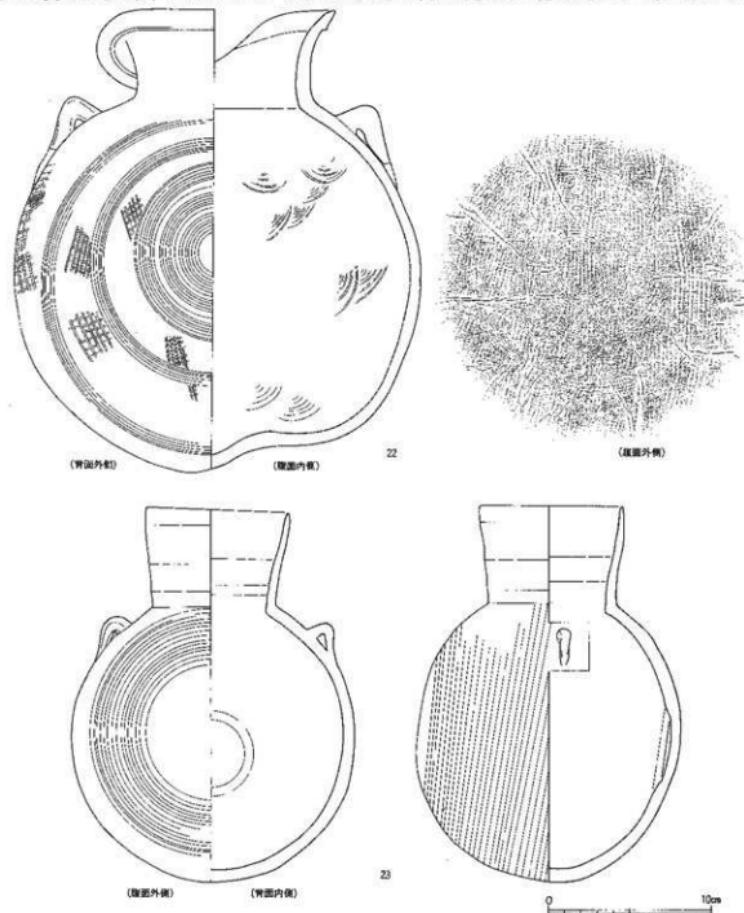
第292圖 6區14號橫穴墓出土須惠器實測圖(1) (S=1:3)

以上の土層観察から最低6回以上の埋葬行為が存在していたものと思われる。

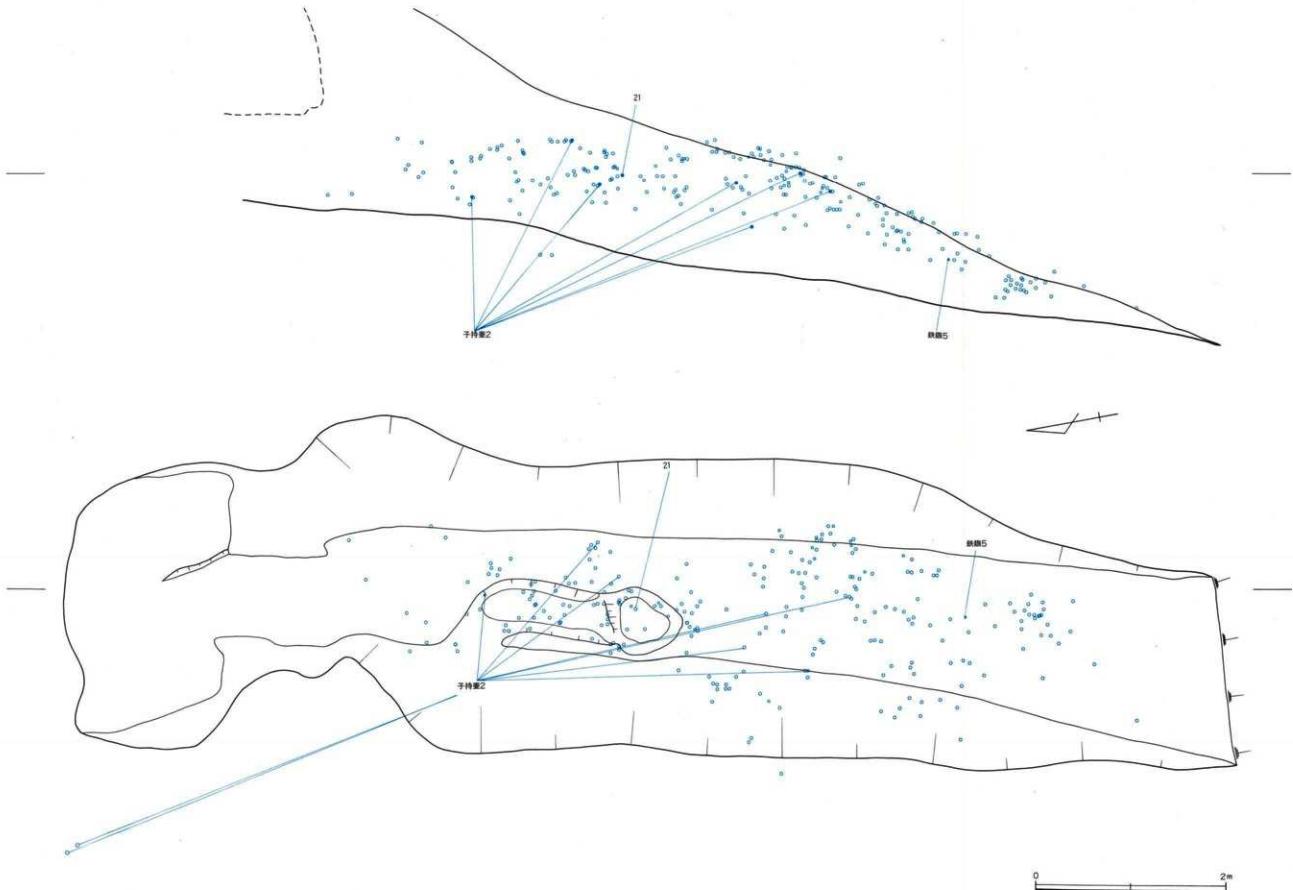
遺物出土状況（第290、294図）

墓道からは、須恵器麥片が多数出土している。麥片は、基本的に土壇内の埋土（1、2層）、第4次埋葬時埋土中（5層）、第3次埋葬埋土上面の腐食土（6a層）から出土している。また、かなり散らばった状態であり、追葬時に擾乱を多く受けているものと考えられる。また、6c層から鐵錐（第295図5）が出土し、麥片に混在するように子持壺（第298図2）が出土している。

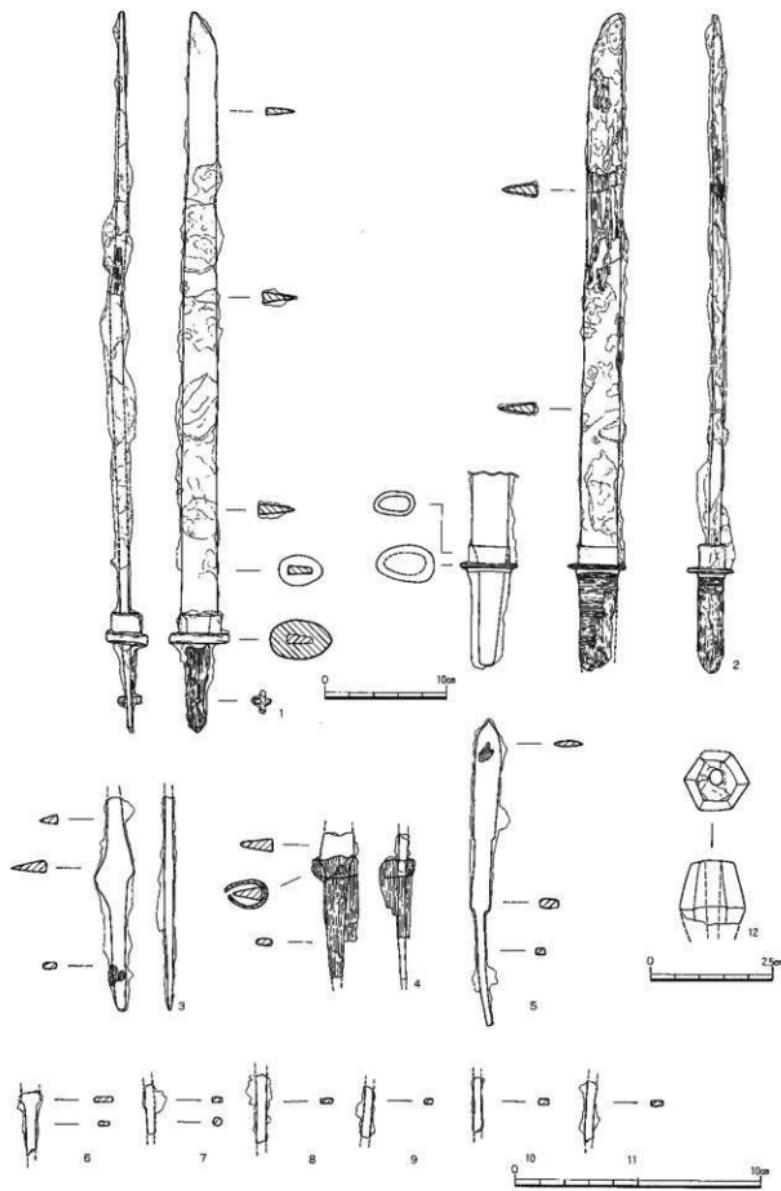
玄室内の出土状況は大きく3群に分かれるものである。それは、左右の須恵器床の上面及び周辺のものと奥壁付近に集中して出土しているものである。左側の須恵器床は範囲が狭く、埋葬当初のもの



第293図 6区14号横穴墓出土須恵器実測図（2）（S=1:3）



第294図 6区14号横穴墓墓道遺物出土状況実測図 ($S=1:40$)

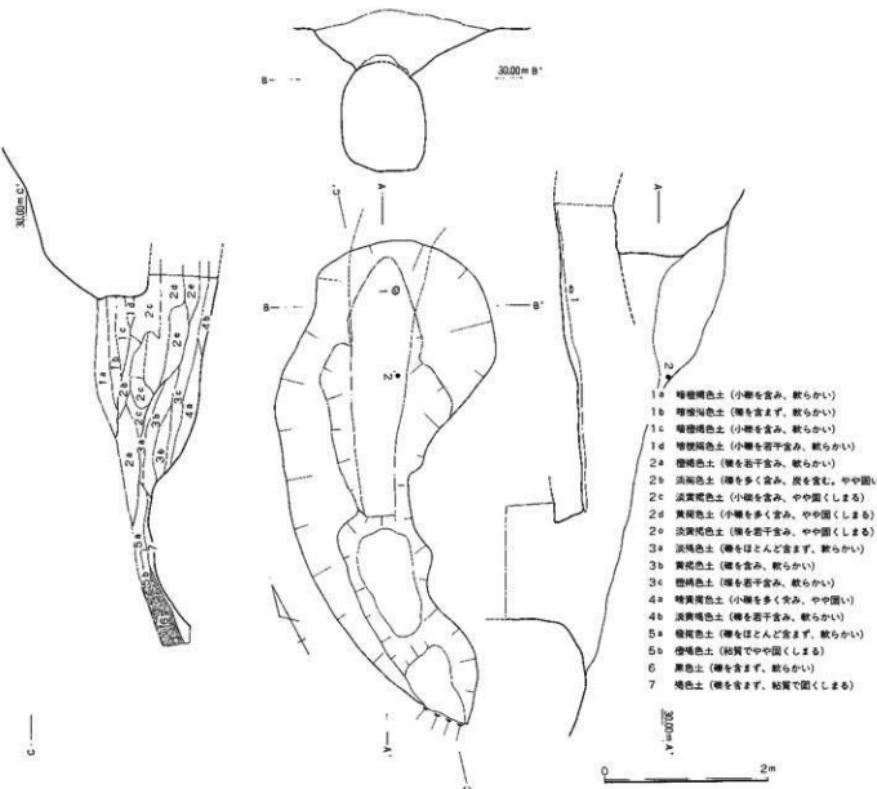


第295図 6区14号横穴墓出土鐵器・玉類実測図 ($S=1:2, 1:4, 1:1$)

が動かされている印象を受けるもので、遺物は大刀が出土し、埋土中より鉄鎌片（第295図6、10、11）と切子玉（12）を確認している。右側の須恵器床は、前壁側で上下2面存在するもので、下面の須恵器床上に薄く土で整地した後に新たに須恵器蓋が敷かれているものである。上面のものは、敷かれていた範囲が狭く、検出段階では、前壁側半分のみであった。右側須恵器床からは、須恵器、大刀、刀子と埋土中から鉄鎌片（7～9）が出土している。

出土遺物（第292、293図）

出土蓋杯は、大きく4つに分類できるもので、1類（第292図1）は、蓋のみで、焼き色が著しいものである。2類（2～7）は、内面が白色の縞状になるもので、やや粗い削りで蓋口径12.5cm程のセットである。3類（8、9）は、焼成の甘いもので、周辺1～2周削り、蓋口径12.5cmのセットである。4類（10～16）は、削らないもので、环身の立上がりが低いものである。以上の蓋杯は、隣接する13号横穴墓と同一のものが多く、1類、2類、3類は、それぞれ13号横穴墓で4類、5類、11類と



第296図 6区15号横穴遺構実測図 (S=1:60)

したものと同じものである。また、分類した蓋環の出土位置を再検討すると、1類と2類は、須恵器床下面から出土し、3類は、須恵器床上面から出土し、4類は、奥壁側に集中している。

時 期

出土須恵器の様相から築造は大谷4期で、埋葬は5期まで行われているものと考えられる。

[15号横穴]

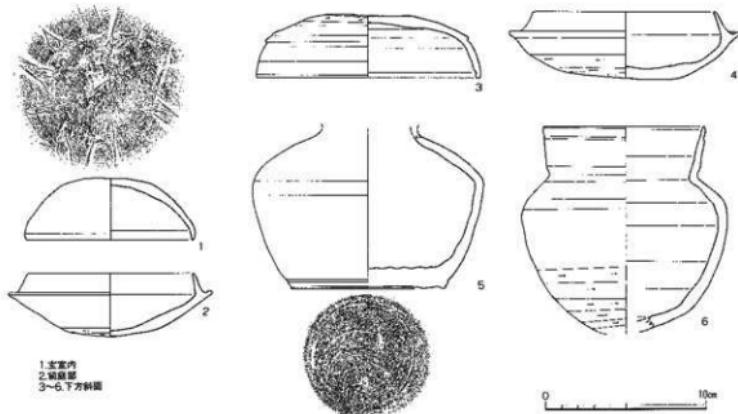
遺 構（第296図） 標高31m付近で検出した遺構で、当初横穴墓と認識していたが、調査の結果、トンネル状の横穴を穿った実態不明なものと判明し、トンネル部分は、崩落の危険から途中で検出を中止した。遺構は、非常に不明確なものだが、おそらく、南側の土壌から北に向て2段にトンネル状の横穴を穿ったものであると推測される。土壌は、不整棱円形を呈し南北1.32m、東西0.64mを測り、深さは0.94mまで確認している。また、この土壌床面から下段の横穴を穿っているものと考えられる。

上段の横穴は、北方向に向け穿たれており、南側は天井部が失われたものと考えている。床面の幅0.73mを測り、床面から天井部までの高さは0.7m程と考えられる。また、床面よりやや浮いた付近から須恵器蓋（第297図1）が出土している。

土 層（第296図） 土層ベルトが遺構から外れた位置であるため、様相が把握し難いものであるが、1層は、流土と考えられるもので、2～4層は、天井部の崩落土と流入土である。5層は、土壌内の堆積土と考えられ、6層、7層は南側の端に認められる平坦面に堆積した土で、6a層は腐食し黒色を呈し、須恵器甕片と子持壺片（第298図1）が出土している。

遺 物（第297図） 1は須恵器蓋で大谷A8型のもので、2の环は、大谷A3～A4型と考えられるものである。これらが、遺構の時期を表すものであるかについては、断言できないものである。

(2) 遺構外出土遺物



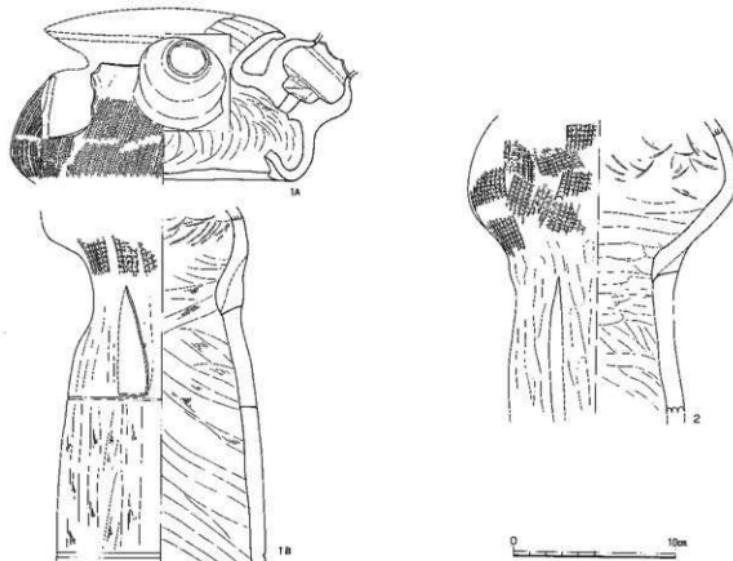
第297図 6区15号横穴・横穴墓群下方斜面出土須恵器実測図 (S=1:3)

下方斜面出土遺物（第297図 3～6）

横穴墓下方の築造時の排土調査時に出土した遺物があり、それには、蓋（3）、環（4）、長颈瓶（5）、直口壺（6）がある。3、4、6は、大谷3期～4期によく見られる須恵器であるが、5は、系切痕が底部に認められ、新しい様相を呈するものと考えられ、横穴墓に直接関わらない可能性が考えられるものである。

子持壺（第298図）

1は脚付き子持壺でA、Bは同一個体であり接点が存在するが、焼け歪が著しく別々に図化している。親壺には、胴部径7.5cm程の子壺が5個～6個付き、脚部は径17cmほどで、沈線によって3段に区分され、その上段に三角形透しが3方に施されている。調整は、親壺の下半部は外面に叩きが、内面には当て具痕が認められるものである。脚部の外面には縦方向のナデが、内面には斜め方向のナデが施されている。なお、この子持壺は、6区15号横穴とその立地する斜面の他に、近接する5区SX01、SK10から出土した破片が接合し、広い範囲で出土している。これが、意図的に散布されたものであるか、二次的に攪乱され動かされたものであるのかは、出土した遺構の性格が厳密に捉え難いもので、良く分からぬ。2も脚付き子持壺であり、親壺上半部、子壺、脚部下半部については欠損しており不明なものである。脚部には長三角形の透しが施され、親壺と脚部の接合部には突帯の付かないタイプである。調整は、親壺外面には叩きが施され、内面には当て具痕が残るが、下半部はナデによって消されている。脚部外面は、縦方向のナデが、内面には横または斜め方向のナデが施されている。なお、この子持壺は、14号横穴墓に伴うものと考えられるが、墓道周辺の斜面出土のものとも接合し、2次的に攪乱を受けている可能性も考えられる。



第298図 6区15号横穴墓出土子持壺実測図 (S=1:3)

(3) テラス状遺構

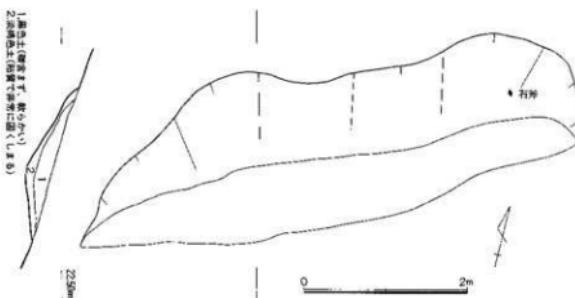
[S T 01] (第299図)

標高22.5mの付近の斜面で検出した遺構で、2号横穴墓の下方付近に位置するものである。

遺構は、地山を深さ0.35m程に浅く掘り下げ、平坦面を造り出しているものである。平坦面の規模は南北0.84m、東西6.2mを測り、細長いものである。

覆土は、下層に淡褐色土が、上層に黒色土が堆積しているもので、上層の黒色土からは、打製石斧(図版192)が出土しているものである。

時期については、明確にできない遺構であるが、出土した石斧が伴うものとした場合には、縄文時代の可能性を考えられるものである。



第299図 6区テラス状遺構 (S T 01) 実測図 ($S=1:60$)

(4) 土壙

[S K 01] (第300図)

14号横穴墓の墓道の前端部付近に位置し、標高27.0m付近の斜面に掘り込まれた土壙である。平面形は、円形に近いもので、長径1.05m、短径0.95m、深さ0.3mを測る。土壙底面は、平坦に加工されているものであり、壁面は火を受け赤く焼けているものであった。覆土は、上層に暗褐色土、下層に、炭化物を多く含む層が堆積していた。本遺構は、火を使用する行為に伴うものとして考えられるが、詳細については明らかにできない。また、時期についても遺物の出土がないことから不明である。

[S K 02] (第300図)

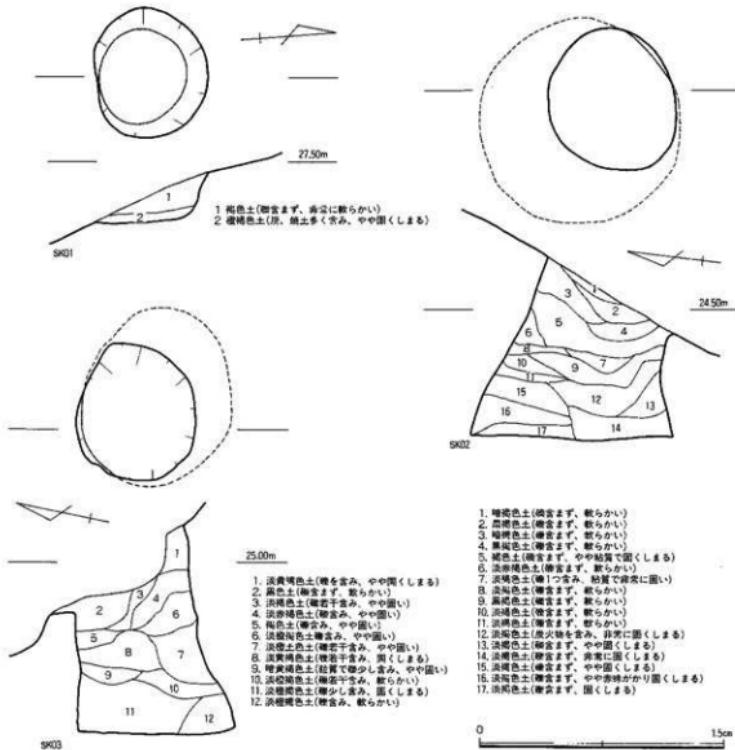
標高25m付近の斜面で検出し、11、12号横穴墓の下方の斜面に位置する遺構である。平面形は、やや不整な椭円形を呈し、規模は、上端で長径1.05m、短径1.0mを測り、深さは1.5mである。また、立面では、深くなるほど広がるものである。土壙底面は平坦ではなく円形を呈し、径1.7mを測るものである。覆土は、上層に黒褐色系のやわらかい層が堆積し、それから下は、下層ほど硬く締まった土

層となるものである。また、12層は炭化物を含むものである。

遺構の性格としては、その形状から貯蔵穴として考えることも可能であるが確証はない。また、時期についても出土遺物が認められず、詳細は不明であるが、横穴墓築造時の排土下で検出していることから、少なくとも6世紀後半以前のものとして考えることは可能である。

[SK 03] (第300図)

標高25m付近の斜面で検出し、SK 02の東側に位置するものである。平面形は、やや不整な楕円形を呈し、規模は、上端で長径1.1m、短径0.95mを測り、深さは1.2mである。また、立面では、底面が広がるものである。土壠底面は、平坦でやや不正な楕円形を呈し長径1.5m、短径1.3mを測るものである。覆土は、上層に黒色土が堆積するもので、遺物等は出土していない。なお、遺構の時期、性格については、不明であるが、SK 02と同様のものと考えられる。



第300図 6区土壤 (SK 01・02) 遺構実測図 (S=1:30)

(5)小結

以上述べてきたように本調査区では、横穴墓、テラス状造構、上塚を検出した。この中で、多数検出している横穴墓について、以下その成果と問題点について簡単に整理しておきたい。

【横穴墓】

横穴墓は、総数で14基検出した。1号横穴墓を除くと密集した状況で立地しているものである。また、大谷編年出雲3～6期の各期ごとに横穴墓が築造されており、時期の異なる横穴墓によって1小支群が構成されているものである。

時 期

各横穴墓の築造時期（初葬時）についてまとめると以下のとおりになる。

- ・大谷出雲編年3期－6号横穴墓、8号横穴墓、12号横穴墓
- ・大谷出雲編年4期－1号横穴墓、7号横穴墓、10号横穴墓、13号横穴墓、14号横穴墓
- ・大谷出雲編年5期－2号横穴墓、4号横穴墓、5号横穴墓、9号横穴墓
- ・大谷出雲編年6期－11号横穴墓

なお、3号横穴墓は、出土遺物がなく不明であるが、おそらく出雲3、4期と推測されるものである。この時期を基に横穴墓の構造、出土遺物等について検討して見たい。

形 態

墓道・前庭部について検討すると、出雲3期のものは狭くて短いものだけである。そして、出雲4期になると、幅は狭いままであるが、3期のものと比較して長くなる。出雲5期になると幅広のものとなり、床面の面積は最大となる。出雲6期も5期と同じ様相である。なお、出雲5期のものでも2号横穴墓のように4期の横穴墓と同じものが存在する。

閉塞部・羨道について検討すると、出雲3期のものは、玄門部手前の閉塞用の割り込みが短いもので、閉塞部と呼称しているものである。また、出雲4期のものは、3期と基本的に同じものである。出雲5期になると玄門部手前側の割り込みが、以前のものに比し奥行きの長いものになる。これについては、閉塞用の割り込み（閉塞部）と考えずに羨道と呼び、性格の異なるものとして区別している。

玄室について検討すると、平面形は、縦長プラン、正方形に近いプラン、横長のプランの大きさ3つのタイプに分けることができる。時期ごとに見ると、出雲3期には、縦長プランと正方形に近いプランの2つが存在している。そして、出雲4期には、正方形プランのみで、出雲5期になると横長のプランになるものである。

一方立面形を検討すると、天井部の丸いタイプ（A）と軒線を施し家形を意識しているタイプ（B）の2つのタイプが存在している。時期ごとに見ると、出雲3期では、Aタイプのみが確認でき、出雲4期では、A、Bの両タイプが存在している。そして、出雲5期と6期でもA、Bの両タイプが存在している。

以上のように各部分についての様相を時期ごとに検討したが、これらをまとめて見ると、以下のようなものと考えられる。

- ・出雲3期－幅の狭く短い墓道、縦長と正方形プランの玄室で天井部が丸いもの。
- ・出雲4期－狭くて長い墓道、正方形プランの玄室で、天井部は丸いものと家形の2タイプ。

- ・出雲5期一輪広の前庭部、羨道の付設、横長プランの玄室で、天井部は丸いものと家形の2タイプ。
閉塞石

玄門部の閉塞を行う部材として石を使用しているものが、多數見受けられる。それらは、加工状況から以下のように大きく3つに分かれるものである。

- ・Aタイプ—割石、白石を積み上げるもの（6、8号横穴墓）
- ・Bタイプ—切り石一枚で閉塞するもの（2、7、10、12号横穴墓）
- ・Cタイプ—切り石2枚で閉塞するもの（4、5、9、11、14号横穴墓）

以上の3タイプについて時期的に検討すると、Aタイプは出雲3期の横穴墓で認められるものである。Bタイプは、出雲3期、4期、5期の各期で認められるものである。Cタイプは、4期で1例認められ、他は5期以降の横穴墓で確認される。

埋葬配置

玄室内では、屍床、須恵器床、石床等の施設により埋葬されているが、それらの埋葬配置について検討すると、その配置は大きく以下の2つのタイプに分かれるものである。なお、1、3、7、12号横穴墓については、明確にできないものである。

- ・Aタイプ—基本的に左右に埋葬するもの。（6、8、10、13、14号横穴墓）
- ・Bタイプ—奥壁に平行して埋葬施設が設けられているもの。（2、4、5、9、11号横穴墓）

これらの2つのタイプについて、時期的に検討すると、Aタイプの横穴墓は、出雲3期と4期に限られ、Bタイプの横穴墓は、出雲5期、6期のものであることが確認される。

後背墳丘

横穴墓には、上方の尾根部（5区）に墳丘が存在しているものがいくつか存在している。これらの墳丘は、横穴墓を主体部とするものと考えており、それぞれをまとめると以下の通りである。

- ・5区2号墳（前方後方形、全長21m）—6区7号横穴墓（出雲4期、大刀、鉄鎌）
- ・5区4号墳（方形、全長6m×5m）—6区5号横穴墓（出雲5期、大刀、弓金具）
- ・5区5号墳（墳形不明、全長7m程）—6区12号横穴墓（出雲3期）
- ・5区7号墳（方形、全長5.5m×7m）—6区6号横穴墓（出雲3期、鉄鎌）
- ・5区6号墳（方形、全長5m×7m）—6区8号横穴墓（出雲3期、鉄鎌）

これらの様相から、墳丘を伴う横穴墓は、出雲3期から5期にかけて認められる。そして、基本的に墳丘は方形のものであるが、前方後方形を呈するもので出雲4期の横穴墓を主体部とする1例存在している。

[まとめ]

以上のように、本調査区検出の横穴墓群の調査結果から、横穴墓の形態、閉塞石、埋葬配置の変遷の様相及び、墳丘を伴う横穴墓の存在が明らかになった。これらの判明した諸様相は、他地区の横穴墓の様相を検討する上で重要な情報であった。また、鳥田池遺跡内の横穴墓群の特徴を最も良く表わしているのが本調査区内の横穴墓群であるとも考えられる。さらに、埋葬のために削りだされた屍床を設けた横穴墓は、出雲地方でも珍しいもので本横穴墓群の特異性も指摘されるものである。

なお、こららの調査結果及び、鳥田池遺跡内の横穴墓群全体の検討については、後節で述べることとしたい。

第88表 6区1号横穴墓出土鉄器観察表

(単位:cm)

| 番号 | 器種 | 全長 | 頭部長 (刀部) | 刀幅 | 頭部厚 | 刀部厚 | 頭厚 | 備考 |
|----|----|----|-------------|----|-----|-----|----|-----|
| 1 | 鉄錐 | — | — | — | — | 6.2 | — | 先端尖 |

第89表 6区1号穴横穴墓出土土器観察表

(単位:cm)

| 番号 | 器種 | 法 量 | 形 態 上 の 特 徴 | 測 定 | 色 調 査 | 分 類 | 備 考 |
|----|------------|---------------|----------------------------|-----------------------------------|-------------|--------|--------|
| 1 | 环茎 | 11.8 4.6 | 外周・朱光漆 内面・縦部に沈線1条 | 外周・丁寧な回転へら削り、回転などで、内面・均整なで、静止なで | 良好 | (A4) | |
| 2 | 环身 | 10.0 4.2 12.7 | | 外周・丁寧な回転へら削り、回転などで、内面・均整なで、静止なで | 良好 | (A4) | |
| 3 | 环台 | 10.3 4.3 13.0 | | 外周・丁寧な回転へら削り、回転などで、内面・均整なで、静止なで | 良好 | (A4) | |
| 4 | 环身 | 10.9 4.3 13.0 | | 外周・丁寧な回転へら削り、回転などで、内面・均整なで、静止なで | 良好 | (A4) | |
| 5 | 直口盡 | 9.2 7.0 11.7 | | 外周・均整なで、回転へら削り、回転などで、内面・均整なで、静止なで | 良好 | | |
| 6 | 环茎 | 13.1 4.3 | 外周・2枚比歯 内面・縦部に沈線1条 | 外周・丁寧な回転へら削り、回転などで、内面・均整なで、静止なで | 良好 | (A4) | |
| 7 | 直口盡の 一部 | — | — | 外周・均整なで、 | 良好 | | |
| 8 | 直口盡 | 9.6 — 15.7 | — | 外周・均整なで、内面・削れなで | 良好 | | |

第90表 6区2号穴横穴墓出土土器観察表

(単位:cm)

| 番号 | 器種 | 法 量 | 形 態 上 の 特 徴 | 測 定 | 色 調 査 | 分 類 | 備 考 |
|----|------------|-------------------|----------------------------|---------------------------------|-------------|--------|--------|
| 1 | 环茎 | 12.0 4.0 | 内面・縦部に沈線1条 | 外周へら切り後なで、回転などで、内面・削れなで、静止なで | 良好 | (A7) | |
| 2 | 环身 | 10.1 4.1 13.3 | | 外周へら切り後なで、回転などで、内面・削れなで、静止なで | 良好 | (A7) | |
| 3 | 环茎 | 12.6 4.1 | | 外周へら切り後なで、回転などで、内面・削れなで、静止なで | 良好 | (A7) | |
| 4 | 环身 | 11.6 4.2 14.4 | | 外周へら切り後なで、回転などで、内面・削れなで、静止なで | 良好 | (A7) | |
| 5 | 环茎 | 12.8 4.3 | | 外周へら切り後なで、回転などで、内面・削れなで、静止なで | 良好 | (A7) | |
| 6 | 环身 | 11.7 4.2 13.7 | | 外周へら切り後なで、回転などで、内面・削れなで、静止なで | 良好 | (A7) | |
| 7 | 平瓶 | 6.5 15.0 14.5 8.0 | | 外周・回転なで、かきめ、回転へら削り、内面・回転なで、静止なで | 良好 | (C3) | |
| 8 | 直口盡 | 8.1 11.9 10.8 | | 外周・回転なで、回転へら削り、内面・削れなで、静止なで | 良好 | | |
| 9 | 环茎 | 12.4 3.9 | | 外周・回転なで、回転へら削り、内面・削れなで、静止なで | 良好 | (A7) | |
| 10 | 环茎 天井部欠 | 12.4 — | 浅い沈線2条 | 外周・回転なで、回転へら削り、内面・削れなで、静止なで | 良好 | (A7) | |
| 11 | 环身 | 10.3 3.8 12.8 | | 外周・回転なで、回転へら削り、内面・削れなで、静止なで | 良好 | (A7) | |

第91表 6区2号横穴墓出土鉄器観察表

(単位:cm)

| 番号 | 器種 | 全長 | 頭部長 (刀部) | 刀幅 | 頭部厚 | 刀部厚 | 頭厚 | 備考 |
|----|-----------|-----|-------------|----|-----|-----|-----|----------|
| -1 | 不明金 製形 | 3.3 | — | — | 0.9 | — | 0.1 | 表面に金が見える |
| -2 | 鉄打? | 4.1 | — | — | — | 0.4 | — | 断面長方形の製品 |

第92表 6区2号横穴墓出土玉類観察表

(単位:mm)

| 番号 | 器種 | 材質 | 色調 | 長径 | 短径 | 孔径 | 備考 |
|----|-----|-----|-----|------|------|---------|------|
| 3 | 切子玉 | 水晶 | 半透明 | 14.2 | 10.8 | 1.0~3.7 | 片面穿孔 |
| 3 | 切子玉 | 水晶 | 半透明 | 12.5 | 11.5 | 1.9~2.9 | 片面穿孔 |
| -5 | 小玉 | ガラス | 藍 | 6.0 | 3.7 | 1.7 | |
| -6 | 小玉 | ガラス | 青 | 5.3 | 3.3 | 1.8 | |

第93表 6区4号穴横穴墓出土土器観察表

(単位:cm)

| 番号 | 器種 | 法 量 (1径 基高 幅幅 脚幅) | 形態上の特徴 | 測定 | 色調 | 分類 | 備考 |
|----|-----|----------------------------------|--------|---|----|------|--------------|
| 1 | 环盖 | 11.6 4.4 | | 外面へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで | 良好 | (A7) | |
| 2 | 环身 | 10.4 3.9 12.4 | | 外面へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで | 良好 | (A7) | |
| 3 | 环盖 | 12.8 4.2 | 浅い2条沈線 | 外面へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで | 良好 | (A7) | |
| 4 | 环盖 | 11.9 4.0 | | 外面へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで | 良好 | (A7) | |
| 5 | 环盖 | 11.7 3.8 | | 外面へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで | 良好 | (A7) | |
| 6 | 环盖 | 12.1 3.7 | | 外面へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで | 良好 | (A7) | |
| 7 | 环身 | 10.2 4.6 12.6 | | 外面へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで | 良好 | (A7) | |
| 8 | 环身 | 9.9 3.8 12.4 | | 外面へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで | 良好 | (A7) | |
| 9 | 环身 | 11.3 4.5 14.1 | | 外面へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで | 良好 | (A7) | |
| 10 | 环盖 | 9.2 3.3 | | 外面へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで | 良好 | (A7) | |
| 11 | 环身 | 8.2 10.3 3.0 | | 外面へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで | 良好 | (A7) | |
| 12 | 环盖 | 12.0 4.0 | 2条沈線 | 外面へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで | 良好 | (A7) | |
| 13 | 环盖 | 12.5 3.7 | | 外面へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで | 良好 | (A7) | |
| 14 | 环盖 | 13.0 4.5 | 2条沈線 | 外面へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで | 良好 | (A7) | |
| 15 | 环盖 | 11.6 3.6 | | 外面へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで | 良好 | (A7) | |
| 16 | 环盖 | 12.0 4.5 | | 外面へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで | 良好 | (A7) | |
| 17 | 环身 | 10.5 4.0 13.1 | | 外面へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで | 良好 | (A7) | |
| 18 | 环身 | 10.4 3.8 13.3 | | 外面へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで | 良好 | (A7) | |
| 19 | 环身 | 10.8 4.0 13.2 | | 外面へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで | 良好 | (A7) | |
| 20 | 环盖 | 10.3 3.8 | | 外面へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで | 良好 | (A7) | |
| 21 | 环身 | 8.6 3.8 11.3 | | 外面へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで | 良好 | (A7) | |
| 22 | 蓋 | - - 17.4 11.1 | | 外面・回転なで、底部回転尖り。 回転へら切り、内面・回転なで | 良好 | | |
| 23 | 直口壺 | 7.3 7.6 8.1 | | 外面・回転なで、底部のみ軽く 内面・回転なで | 良好 | | 口縁部へら 記号× |
| 24 | 甕上部 | 18.0 | 16.5 | 下部・口縁部なで、側面縦方向のけし、内面・口 縫方向のけし、底部後方のけし、側面へら直り | 良好 | | |

第94表 6区4号横穴墓出土鉄器観察表

(単位: cm)

| 番号 | 器種 | 全長 | 頭部長 (刃部) | 刃幅 | 頭部 | 刃部厚 | 頭厚 | 備考 |
|----|----|---------|-------------|-----|----|--------------|------------|-----------|
| -1 | 刀子 | 14.4 | 8.7 | 1.2 | — | 0.3 | — | 柄の木質が良く残る |
| -2 | 刀子 | 7.6(80) | 7.0 | 1.0 | 挫 | 0.3 (0.8) | 挫 (0.3) | 木質が少し残る |

第95表 6区4号横穴墓出土耳環観察表

(単位: mm)

| 番号 | 器種 | a | b | c | d | e | 備考 |
|----|----|------|------|------|-----|-----|-------------------------|
| -3 | 金環 | 24.0 | 25.9 | 13.5 | 5.9 | 7.3 | さびが著しいが金ばくが見える |
| -4 | 金環 | 21.2 | 23.9 | 13.2 | 5.1 | 7.9 | ほとんどさびでおおわれて一部金ばくが見える |
| -5 | 金環 | 13.5 | 25.2 | 13.8 | 5.5 | 7.5 | さびではなくとおおわれて、金ばくが見える |
| -6 | 金環 | 21.3 | 24.4 | 13.3 | 5.0 | 7.9 | さびで覆われて一部金ばくが見える |
| -7 | 金環 | 22.6 | 25.3 | 13.5 | 5.4 | 7.5 | 金ばくよく分かる。一部はがれている。良好に残存 |

第96表 6区4号横穴墓出土玉類観察表

(単位: mm)

| 番号 | 器種 | 材質 | 色調 | 大きさ | 短径 | 孔径 | 備考 |
|-----|----|-----|------|------|------|---------|-----------------------------|
| -8 | 勾玉 | 瑪瑙 | 淡白橙色 | 31.9 | 19.0 | 1.7~3.2 | 片面穿孔(側面)、貫通していない所はきれい。 |
| -9 | 勾玉 | 水晶 | 半透明 | 21.8 | 12.4 | 1.4~2.5 | 片面穿孔 |
| -10 | 小玉 | ガラス | 赤 | 5.4 | 3.8 | 1.8 | 丸くない。かなりいびつな形。 |
| -11 | 小玉 | ガラス | 藍 | 4.5 | 3.7 | 1.4 | |
| -12 | 小玉 | ガラス | 青 | 5.0 | 3.7 | 1.6 | しっかりした面ではなく、孔の周囲がやや凹む。 |
| -13 | 丸玉 | ガラス | 赤 | 6.6 | 4.6 | 1.7 | |
| -14 | 丸玉 | ガラス | 藍 | 8.7 | 6.5 | 1.7~2.9 | |
| -15 | 丸玉 | ガラス | 赤 | 8.1 | 5.9 | 1.7 | |
| -16 | 丸玉 | ガラス | 青 | 10.0 | 8.4 | 3.2 | |
| -17 | 丸玉 | ガラス | 青 | 7.6 | 5.0 | 1.5 | |
| -18 | 丸玉 | ガラス | 青 | 7.7 | 3.8 | 2.2 | |
| -19 | 丸玉 | ガラス | 藍 | 8.0 | 6.3 | 1.8 | 片面に径1mm、深さ0.5mm程の穴が2つ認められる。 |
| -20 | 丸玉 | ガラス | 藍 | 7.5 | 6.3 | 2.0 | |
| 21 | 丸玉 | ガラス | 赤 | 8.2 | 5.6 | 2.0 | |

第97表 6区5号穴横穴墓出土土器観察表

(単位: cm)

| 番号 | 器種 | 素 材 性 能 能 | | | 形態 | 上 の 特 徴 | 調 整 整 | 色 調 成 | 分 類 | 備 考 |
|----|----|-----------------------|--------|--------|----|------------------|------------------------------------|-------------|--------|--------|
| | | 外 形 | 内 部 | 底 性 | | | | | | |
| 1 | 环甌 | 12.4 | 4.9 | 2条化粧 | | | 外周へら切り後などで、回転などで 内面・回転などで、静止などで | 良好 | (A7) | |
| 2 | 环甌 | 12.1 | 4.2 | | | | 外周へら切り後などで、回転などで 内面・回転などで、静止などで | 良好 | (A7) | |

| | | | | | | | | |
|-----------------|------|------|------|-------------|-----------------------------------|---------------------------------|---------|--|
| 3 环基 | 11.8 | 4.1 | | | 外面・へら切り後などで、同様なで 内面・同様なで、静止などで | 良好 (A7) | | |
| 4 口縁のみ | 11.3 | — | | | 外面・へら切り後などで、同様なで 内面・同様なで、静止などで | 良好 (A7) | | |
| 5 环身 | 11.9 | 3.5 | 14.2 | | 外面・へら切り後などで、同様なで 内面・同様なで、静止などで | 良好 (A7) | | |
| 6 环身 | 10.6 | 3.6 | 12.8 | | 外面・へら切り後などで、同様なで 内面・同様なで、静止などで | 良好 (A7) | | |
| 7 环身 | 11.0 | 4.0 | 13.3 | | 外面・へら切り後などで、同様なで 内面・同様なで、静止などで | 良好 (A7) | | |
| 8 环身 | 10.2 | 4.2 | 12.7 | | 外面・へら切り後などで、同様なで 内面・同様なで、静止などで | 良好 (A7) | | |
| 9 环身 口縁のみ | 10.4 | — | 12.4 | | 外面・へら切り後などで、同様なで 内面・同様なで、静止などで | 良好 (A7) | | |
| 10 环身 口縁のみ | 11.3 | — | 13.4 | | 外面・へら切り後などで、同様なで 内面・同様なで、静止などで | 良好 (A7) | | |
| 11 环身 | 10.6 | 4.2 | 13.2 | | 外面・へら切り後などで、同様なで 内面・同様なで、静止などで | 良好 (A7) | | |
| 12 盖 | 14.6 | 2.7 | | 輪状つまみ(径3.2) | 外面・同様へら削り、同様なで 内面・同様なで、静止などで | 良好 (B1) | | |
| 13 环 高台付 | 12.9 | 4.5 | | 7.2 | 外面・同様なで 内面・同様なで、静止などで | 良好 (B1) | | |
| 14 盖 | 13.6 | 2.7 | | 輪状つまみ(径3.2) | 外面・同様へら削り、同様なで 内面・同様なで、静止などで | 良好 (B1) | | |
| 15 盖 | 13.8 | 2.9 | | 輪状つまみ(径4.8) | 外面・同様へら削り、同様なで 内面・同様なで、静止などで | 良好 (B2) | | |
| 16 盖 | 11.5 | 3.1 | | 輪状つまみ(径4.9) | 外面・同様へら削り、同様なで 内面・同様なで、静止などで | 良好 (B2) | | |
| 17 环 高台付 | 12.6 | 5.1 | | 8.2 | 外面・同様なで、底端静止あり 内面・同様なで、静止などで | 良好 (B3) | | |
| 18 盖 | 15.7 | 1.5 | | 輪状つまみ(径5.5) | 外面・同様へら削り、加減なで 内面・同様なで、静止などで | 良好 (B3) | | |
| 19 环 | 13.8 | 4.6 | | 8.8 | 外面・口縁部に波状1条 | 外面・同様なで、底端静止あり 内面・同様なで、静止などで | 良好 (B3) | |
| 20 長原蓋 | 7.9 | 18.8 | 14.5 | 7.8 | | 外面・同様なで、回転へら削り 内面・同様なで、静止などで | 良好 (M5) | |
| 21 平版 | 6.9 | 15.6 | 14.4 | | ボタン状のつまみ 網部に波状2条 | 外面・同様なで、かきめ、同様へら 削り、内面・同様なで | 良好 (C2) | |
| 22 平版 頭部のみ | 7.2 | — | — | | 網部中央に1条波状 | 外面・同様なで 内面・同様なで | 良好 (C2) | |
| 23 鏡 | — | — | — | | | 外面・同様なで 内面・同様なで | 良好 (A8) | |
| 24 高环 | — | — | — | 11.5 | | 外面・同様なで 内面・同様なで | 良好 | |
| 25 銃形器合 先生上器 | 19.0 | | | | 沈錆25条程度 | 外面・同様なで、横なで 内面・横なで | 良好 | |

第98表 6区5号横穴墓出土鉄器観察表

(単位: cm)

| 番号 | 器種 | 全長 | 頭部 (刃部) | 刀幅 | 頭部 | 刃部厚 | 頭厚 | 備考 |
|----|----------|---------------|---------------|------|-----|------|-----|--------------------|
| -1 | 刀子 | 13.7(B) | 7.6(B) | 1.5 | 1.0 | 0.35 | — | 先端欠、柄の木質が良好に残る |
| -2 | 刀子 | 12.3 | 6.2(B) | 1.2 | 1.0 | 0.3 | — | 先端欠 |
| -3 | 刀子 | 4.0 | 0.3 | 1.0 | 1.0 | 0.3 | 0.2 | 柄に木質が残る。本器分のものと刀身片 |
| -4 | 両頭 金具 | (銀芯の付) 0.3 | (銀芯の付) 0.5 | | | | | 横方向の木質が付着 |
| -5 | 両頭 金具 | 3.2 | 0.2 | 2.0 | 0.5 | | | 横方向の木質が付着 |
| -6 | 鍔 | (B) | (B) | (B) | | | | |
| -7 | 鍔 | 3.7 | 2.3 | 0.2 | | | | |
| -8 | 鍔 | (B) | (B) | 0.2 | | | | |
| | | 4.4 | 2.5 | 0.2 | | | | |
| | | 7.7 | 5.0 | 0.25 | | | | 剥離跡 |

第99表 6区6号穴横穴墓出土土器観察表

(単位:cm)

| 番号 | 器種 | 法 量 | | | 形態上 の特徴 | 調 整 | 色 調 成 | 分類 備考 |
|----|-----|--------|------|----------|--------------|-----------------------------------|-------------|---------------|
| | | 口径 | 基高 | 脚高 脚径 | | | | |
| 1 | 环盤 | 11.8 | 4.1 | | 1条沈縫 | 外面・丁寧な回転へら削り、回転などで、内面・削難なで、静止なで | 良好 | (A3) |
| 2 | 环身 | 10.2 | 4.3 | 12.4 | | 外面・丁寧な回転へら削り、回転などで、内面・削難なで、静止なで | 良好 | (A3) |
| 3 | 环蓋 | 13.7 | 5.0 | | 2条沈縫 | 外面・丁寧な回転へら削り、回転などで、内面・削難なで、静止なで | 良好 | (A3) |
| 4 | 环身 | 12.2 | 4.3 | 14.4 | | 外面・丁寧な回転へら削り、回転などで、内面・削難なで、静止なで | 良好 | (A3) |
| 5 | 环蓋 | 13.9 | 4.8 | | 1条沈縫 | 外面・丁寧な回転へら削り、回転などで、内面・削難なで、静止なで | 良好 | (A3) |
| 6 | 环身 | 11.6 | 4.5 | 14.1 | | 外面・丁寧な回転へら削り、回転などで、内面・削難なで、静止なで | 良好 | (A3) |
| 7 | 环蓋 | 13.5 | 4.3 | | 2条沈縫 | 外面・丁寧な回転へら削り、回転などで、内面・削難なで、静止なで | 良好 | (A3) |
| 8 | 环身 | 11.8 | 4.3 | 14.3 | | 外面・丁寧な回転へら削り、回転などで、内面・削難なで、静止なで | 良好 | (A3) |
| 9 | 环道 | 12.9 | 4.4 | | 2条沈縫 | 外面・丁寧な回転へら削り、回転などで、内面・削難なで、静止なで | 良好 | (A3) 大井部へら記号/ |
| 10 | 环身 | 11.1 | 4.2 | 13.7 | | 外面・丁寧な回転へら削り、回転などで、内面・削難なで、静止なで | 良好 | (A3) |
| 11 | 瓶瓶 | 7.8 | 21.0 | 19.0 | 底部に輪状欠けた把手1枚 | 背部・たき、かきめ 腹部・けずり、かきめ | 良 | (A7) |
| 12 | 环土器 | - | - | 5.0 | | 外面・削難なで、なで、底部回転永 きり、内面・削難なで、なで | 良好 | |

第100表 6区6号横穴墓出土鉄器観察表

(単位:cm)

| 番号 | 器種 | 全長 | 頭部 | | 刀幅 | 頭部 | 刀部厚 | 頭厚 | 備考 |
|----|----|---------|-------------|----|-----|-----|-----|-----|----------|
| | | | 頭部長 (刀部) | 刀部 | | | | | |
| -1 | 鉄劍 | 14.7 | 7.7 | | 2.9 | 0.8 | 0.3 | 0.3 | 矢柄が良好に残る |
| -2 | 鉄鎌 | 16.0 | 7.7 | | 2.9 | 0.7 | 0.3 | 0.3 | 矢柄が良好に残る |
| -3 | 鉄鎌 | 15.2 | 8.6 | | 2.7 | 0.7 | 0.3 | 0.3 | 矢柄が良好に残る |
| -4 | 鉄鎌 | 15.0 | 2.8 | | 0.9 | 0.6 | 0.3 | 0.3 | 矢柄が良好に残る |
| -5 | 鉄鎌 | 10.0(m) | 3.5 | | 1.5 | 0.7 | 0.3 | 0.3 | 矢柄が良好に残る |
| -6 | 鉄鎌 | 7.7(m) | 5.2 | | 2.1 | 0.9 | 0.3 | 0.3 | 矢柄が良好に残る |
| -7 | 鉄鎌 | 10.7 | 5.8 | | 1.5 | 0.6 | 0.4 | 0.3 | 柄の本質が残存 |

第101表 6区7号穴横穴墓出土土器観察表

(単位:cm)

| 番号 | 器種 | 法 量 | | | 形態上 の特徴 | 調 整 | 色 調 成 | 分類 備考 |
|----|-----|--------|-----|----------|-----------------------|------------------------------|-------------|----------|
| | | 口径 | 基高 | 脚高 脚径 | | | | |
| 1 | 环蓋 | 11.6 | 4.8 | | 2条沈縫 | 外面・やや深い削り、回転などで、内面・削難なで、静止なで | 良好 | (A4) |
| 2 | 直口壺 | 6.7 | 8.7 | 8.8 | | 外面・回転などで、回転へら削り、内面・削難なで | 良好 | |
| 3 | 环蓋 | 12.0 | 4.3 | | 外面・2条沈縫 内面・壺部に沈縫1条 | 外面・やや深い削り、回転などで、内面・削難なで、静止なで | 良好 | (A4) |
| 4 | 环身 | 10.0 | 3.7 | 12.6 | | 外面・やや深い削り、回転などで、内面・削難なで、静止なで | 良好 | (A4) |
| 5 | 环蓋 | 12.2 | 4.2 | | 外面・2条沈縫 内面・壺部に沈縫1条 | 外面・やや深い削り、回転などで、内面・削難なで、静止なで | 良好 | (A4) |
| 6 | 环蓋 | 12.8 | 4.8 | | 2条沈縫 | 外面・やや深い削り、回転などで、内面・削難なで、静止なで | 良好 | (A4) |
| 7 | 环蓋 | 12.6 | 4.9 | | 2条沈縫 | 外面・やや深い削り、回転などで、内面・削難なで、静止なで | 良好 | (A4) |

| | | | | | | | | | |
|----|------------|------|------|------|--------------------------|------------------------------------|-----------------------------------|-------------------|------|
| 8 | 环盖 | 12.4 | 4.3 | | 2条沈縫 | 外面・窓い・削り、回転などで 内面・周縁などで、静止などで | 良好 | (A4) | |
| 9 | 环盖 | 13.3 | 4.3 | | 2条沈縫 | 外面・窓い・削り、回転などで 内面・周縁などで、静止などで | 良好 | (A5) | |
| 10 | 环盖 | 13.4 | 4.2 | | 2条沈縫 | 外面・窓い・削り、回転などで 内面・周縁などで、静止などで | 良好 | (A4) | |
| 11 | 环盖 口縫のみ | 12.8 | - | | 2条沈縫 | 外面・窓い・削り、回転などで 内面・周縁などで | 良好 | | |
| 12 | 环盖 | 12.6 | 3.7 | | 外羽・2条沈縫 内面・縫部に沈縫1条 | 外面・窓い・削り、回転などで 内面・周縁などで、静止などで | 良好 | (A5) | |
| 13 | 环盖 | 13.8 | 4.1 | | 外羽・2条沈縫 内面・縫部に浅い・沈縫1条 | 外羽・丁寧な・回転から削り、回転などで、内面・周縁などで、静止などで | 良好 | (A3) 天井部にへら記号× | |
| 14 | 环身 口縫のみ | 11.0 | - | 13.3 | | 外面・回転などで 内面・回転などで、静止などで | 良好 | | |
| 15 | 环身 | 13.2 | - | 16.0 | | 外面・回転などで 内面・回転などで | 良好 | (A4) | |
| 16 | 直口奉 | 8.8 | 11.6 | 11.6 | | 外羽・回転などで | 良好 | | |
| 17 | 脚付橈 | 8.5 | 13.1 | 10.9 | 8.5 | 移部・窓2条、波状文、基部刺文 脚部・透し1段3方(三角) | 外羽・同様なで 内面・回転などで、静止などで | 良好 | |
| 18 | 脚付橈 | 9.0 | 11.4 | 11.0 | 8.0 | 移部・窓2条、波状文、基部刺文 脚部・透し1段3方(三角) | 外羽・同様なで 内面・回転などで、静止などで | 良好 | |
| 19 | 蓋 (窓) | 7.0 | 4.4 | | 翼部に刺文突 | 外羽・同様なで 内面・回転などで、静止などで | 良好 | | |
| 20 | 蓋 (窓) | 9.8 | 2.8 | | 底部周辺に刺文突 | 外羽・回転などで 内面・回転などで、静止などで | 良好 | | |
| 21 | 翼部のみ | 7.4 | - | -- | | 外羽・回転などで 内面・回転などで | 良好 | | |
| 22 | 翼部のみ | 8.3 | - | - | | 外羽・回転などで 内面・回転などで | 良好 | (B5) | |
| 23 | 透 | 11.8 | - | - | 沈縫1条 | 外羽・回転などで 内面・静止などで | 良好 | (A4) | |
| 24 | 口縫のみ | 11.1 | - | - | | 外羽・回転などで 内面・回転などで | 良好 | (A7) | |
| 25 | 有蓋高环 | 11.0 | 11.2 | 14.5 | 12.1 | 脚部・透し2段3方(上三角下四角)、沈縫2条 | 外羽・回転などで、回転から削り 内面・同様などで、静止などで | 良好 | (C型) |
| 26 | 有蓋高环 | 11.4 | 12.1 | 13.8 | 10.5 | 脚部・透し2段2段3方(上三角下四角)、沈縫3条 | 外羽・回転などで 内面・回転などで、静止などで | 良好 | (C型) |
| 27 | 有蓋高环 | 11.5 | 11.5 | 14.1 | 11.5 | 脚部・透し2段2段3方(上三角下四角)、沈縫3条 | 外羽・回転などで 内面・回転などで、静止などで | 良好 | (C型) |
| 28 | 有蓋高环 | 10.8 | 10.1 | 14.0 | 10.4 | 脚部・透し1段3方(三角) | 外羽・回転などで 内面・回転などで、静止などで | 良好 | (E2) |
| 29 | 有蓋高环 | 10.9 | 9.7 | 13.8 | 10.9 | 脚部・透し1段3方(三角) | 外羽・回転などで 内面・回転などで、静止などで | 良好 | (E2) |
| 30 | 有蓋高环 | 11.0 | 10.6 | 14.0 | 11.2 | 脚部・透し1段3方(三角) | 外羽・回転などで 内面・回転などで、静止などで | 良好 | (E2) |
| 31 | 有蓋高环 | 10.1 | 10.1 | 13.6 | 10.8 | 脚部・透し1段3方(三角) | 外羽・回転などで 内面・回転などで、静止などで | 良好 | (E2) |
| 32 | 長脚高环 | 10.5 | 13.0 | | 8.5 | 脚部・穴2条、基部刺文、脚部・透し2段3方(上三角下四角) | 外羽・回転などで 内面・静止などで | 良好 | (A4) |
| 33 | 高环 脚部大 | 14.2 | - | - | | 脚部・窓2条 脚部・透し3方(形は不明) | 外羽・回転などで 内面・静止などで | 良好 | (A3) |

第102表 6区7号横穴墓出土鉄器観察表

(単位: cm)

| 番号 | 器種 | 全長 | 脚部長 (房部) | 刃幅 | 頭部 | 脚部厚 | 頭厚 | 備考 |
|----|----|--------|-------------|-----|-----|-----|------|---------------------|
| -1 | 鉄鎌 | 16.3 | 1.7 | 0.8 | 0.4 | 0.3 | 0.3 | 欠損の木質残存。頭身形態不明確 |
| -2 | 鉄鎌 | 16.0 | 1.6mm | 0.7 | 0.4 | 0.2 | 0.3 | 木質は若干残存。頭部が長い。 |
| -3 | 鉄鎌 | 16.6 | 2.1 | 0.9 | 0.4 | 0.3 | 0.3 | 完形成、欠損の木質残存 |
| -4 | 鉄鎌 | 15.2 | 2.4 | 0.8 | 0.3 | 0.4 | 0.2 | 頭身、欠損の木質残存。頭身・間は不明確 |
| -5 | 鉄鎌 | 14.8 | 2.1 | 1.0 | 0.4 | 0.3 | 0.25 | 欠損が良好に残存。頭身の形態不明確 |
| -6 | 鉄鎌 | 14.6mm | 2.2 | 0.7 | 0.4 | 0.3 | 0.2 | |
| -7 | 鉄鎌 | 14.4 | 2.2 | 0.8 | 0.4 | 0.3 | 0.3 | 頭身、完形成 |

| | | | | | | | |
|---------|---------|--------|-----|-----|-----|-----|----------------------|
| - 8 鉄錠 | 13.8(t) | 1.8(m) | 0.8 | 0.4 | 0.3 | 0.3 | 矢柄の木質残存 |
| - 9 鉄錠 | 14.5 | | 2.2 | 0.9 | 0.4 | 0.3 | 0.3 矢柄が残存。光彩品 |
| - 10 鉄錠 | 13.0(t) | | 2.4 | 0.9 | 0.4 | 0.3 | 0.3 矢柄が残存。矢端部欠 |
| - 11 鉄錠 | 12.7 | | 1.9 | 0.9 | 0.4 | 0.3 | 0.3 矢柄が残存。基先端部欠 |
| - 12 鉄錠 | 12.0(t) | | 2.1 | 0.9 | 0.4 | 0.3 | 0.3 矢柄の木質残存。基先端部欠 |
| - 13 鉄錠 | 4.8 | — | — | — | 0.5 | — | 0.3 14と結合 |
| - 14 鉄錠 | 9.5 | 2.0 | 1.1 | 0.5 | 0.3 | 0.3 | |
| - 15 鉄錠 | 11.5(t) | | 1.9 | 0.8 | 0.3 | 0.3 | 0.3 矢柄が残存。基先端部欠 |
| - 16 鉄錠 | 6.2 | 1.7 | 0.9 | 0.4 | 0.3 | 0.3 | 鐵身～鎧被部の破片 |
| - 17 鉄錠 | 6.2(t) | | 1.7 | 0.9 | 0.4 | 0.3 | 0.3 鎧身～鎧被部の破片 |
| - 18 鉄錠 | 3.4(t) | 2.2 | — | 0.9 | 0.4 | 0.3 | 0.3 鎧身の開不明確 |
| - 19 鉄錠 | 3.2 | 2.1 | — | 0.8 | 0.4 | 0.2 | 0.2 鎧身先端部付近 |
| - 20 鉄錠 | 2.6(t) | 1.9 | — | 0.8 | 0.4 | 0.3 | 0.3 鎧身開部不明確 |
| - 21 鉄錠 | 2.9(t) | 1.8 | — | 0.8 | 0.4 | 0.3 | 0.2 22と結合 |
| - 22 鉄錠 | 4.3(t) | — | — | — | 0.4 | — | 0.3 |
| - 23 鉄錠 | 2.0(t) | 2.0 | 0.9 | — | — | 0.3 | — |
| - 24 鉄錠 | 3.4(t) | — | 1.7 | 0.8 | 0.4 | 0.2 | 0.3 鎧身または基部の一部 |
| - 25 鉄錠 | 7.5(t) | — | — | — | 0.4 | — | 0.3 矢柄の 邪残存。頭部片 |
| - 26 鉄錠 | 7.9(t) | — | — | — | 0.4 | — | 0.3 開然、基先端部欠 |
| - 27 鉄錠 | 8.2(t) | — | — | — | 0.4 | — | 0.2 頭部木質若干残存 |
| - 28 鉄錠 | 9.4(t) | — | — | — | 0.4 | — | 0.3 頭部・矢柄の木質残存 |
| - 29 鉄錠 | 4.1(t) | — | — | — | 0.4 | — | 0.25 頭部、基先端部欠、木質若干残存 |
| - 30 鉄錠 | 5.0(t) | — | — | — | 0.4 | — | 0.3 鎧被部の破片 |
| - 31 鉄錠 | 3.3(t) | — | — | — | 0.4 | — | 0.25 鎧被部の一部 |
| - 32 鉄錠 | 3.3(t) | — | — | — | 0.4 | — | 0.3 鎧被部の一部 |
| - 33 鉄錠 | 2.6(t) | — | — | — | 0.5 | — | 0.3 鎧被部の一部 |
| - 34 鉄錠 | 2.5(t) | — | — | — | 0.4 | — | 0.3 鎧被部の一部 |
| - 35 鉄錠 | 1.6(t) | — | — | — | 0.4 | — | 0.3 鎧被部の一部 |
| - 36 鉄錠 | 1.4(t) | — | — | — | 0.5 | — | 0.3 鎧被部の一部 |
| - 37 鉄錠 | 4.6(t) | — | — | — | 0.4 | — | 0.3 基部 |
| - 38 鉄錠 | 2.3(t) | — | — | — | 0.3 | — | 0.3 基部 |
| - 39 鉄錠 | 2.7(t) | — | — | — | 0.3 | — | 0.25 基部 |
| - 40 鉄錠 | 2.1(t) | — | — | — | 0.4 | — | 0.3 基部 |
| - 41 鉄錠 | 2.0(t) | — | — | — | 0.4 | — | 0.3 基部 |
| - 42 鉄錠 | 2.6(t) | — | — | — | 0.2 | — | 0.2 基部 |
| - 43 鉄錠 | 2.0(t) | — | — | — | 0.2 | — | 0.1 基部 |
| - 44 鉄錠 | 2.2(t) | — | — | — | 0.2 | — | 0.2 基部 |

| | | | | | | | | |
|-----|------|---------|------|-----|--------|------|-----|---------------|
| -45 | 鉄劍 | 2.0(m) | — | — | 0.2 | — | 0.2 | 基部 |
| -46 | 鉄劍 | 1.6(m) | — | — | 0.3 | — | 0.2 | 基部 |
| -47 | 鉄劍 | 1.1(m) | — | — | 0.2 | — | 0.1 | 基部 |
| -48 | 鉄劍 | 1.8(m) | — | — | 0.2 | — | 0.1 | 基部 |
| -49 | 鉄劍 | 2.1(m) | — | — | 0.3 | — | 0.2 | 基部 |
| -50 | 大刀 | 6.3(m) | 6.3 | 2.9 | (幅)1.7 | 0.6 | 0.3 | 切先部分、鞘木が良好に残存 |
| -51 | 刀子 | 12.2(m) | 7.5 | 1.1 | 0.9 | 0.4 | 0.3 | 柄の木質残存 |
| -52 | 刀子 | 9.9(m) | 8.0 | 1.1 | 0.5 | 0.25 | 0.2 | |
| -53 | 刀子 | 9.7(m) | 7.7 | 1.1 | 0.6 | 0.3 | 0.2 | 柄の木質残存 |
| -54 | 刀子 | 11.0 | 7.0 | 1.2 | 0.7 | 0.3 | 0.2 | |
| -55 | 刀子 | 12.3(m) | 10.3 | 1.2 | 0.6 | 0.3 | 0.2 | 柄の木質残存。先端部欠 |
| -56 | 刀 | 3.5(m) | — | — | 1.2 | — | 0.4 | 木釘穴あり。柄の木質残存 |
| -57 | 不明 鋸 | 7.0(m) | — | — | 0.5 | — | 0.3 | |
| -58 | 不明 鋸 | 4.7(m) | — | — | 0.5 | — | 0.4 | |
| -59 | 鎌 | 23.0 | — | 6.7 | 1.7 | 0.7 | 0.4 | 0.6 |

第103表 6区7号横穴墓出土耳環観察表

(単位: cm)

| 番号 | 器種 | a | b | c | d | e | 備考 |
|-----|----|------|------|------|-----|-----|--------------|
| -60 | 耳環 | 27.0 | 30.0 | 15.2 | 7.3 | 7.2 | さびが著しく全く銀か不明 |
| -61 | 耳環 | 25.6 | 28.7 | 16.1 | 6.0 | 6.0 | 銀腐の可能性はあり |

第104表 6区7号横穴墓出土鉄器観察表(墓道出土)

(単位: cm)

| 番号 | 器種 | 全長 (刀身) | 頭部長 (刀身) | 刃幅 | 頭部 | 刀部厚 | 頭厚 | 備考 |
|----|----|------------|-------------|-----|-----|-----|-----|------------|
| -1 | 鉄劍 | 7.6(m) | 2.0 | 0.9 | 0.5 | 0.3 | 0.3 | 鐵身部不正確 |
| -2 | 鉄劍 | 5.0(m) | 1.9 | 0.8 | 0.4 | 0.3 | 0.3 | 鐵身部は盤面式に近い |
| -3 | 鉄劍 | 4.4(m) | 2.2 | 0.9 | 0.4 | 0.3 | 0.3 | 鐵身へ頭部の破片 |
| -4 | 鉄劍 | 2.8(m) | 2.1 | 0.9 | 0.5 | 0.3 | 0.3 | 鐵身形態は不明確 |

第105表 6区8号穴横穴墓出土土器観察表(玄室)

(単位: cm)

| 番号 | 器種 | 法量 | | | 形態上の特徴 | 調査 | 色調 | 分類 | 備考 |
|----|----|------|-----|------|-----------------------|---------------------------------------|----|------|----|
| | | 口径 | 最高 | 底径 | | | | | |
| 1 | 環壺 | 12.8 | 4.6 | — | 外側・2条沈線 内側・壺部に沈線1条 | 外側・やや深い削り、回転などで 内側・円錐などで、静止などで | 良好 | (A3) | |
| 2 | 環身 | 10.8 | 4.5 | 13.8 | — | 外側・丁寧な回転へら削り、回転などで、 内側・回転などで、静止などで | 良好 | (A3) | |
| 3 | 環壺 | 13.3 | 4.9 | — | 外側・2条沈線 内側・壺部に沈線1条 | 外側・丁寧な回転へら削り、回転などで、 内側・回転などで、静止などで | 良好 | (A3) | |
| 4 | 環身 | 11.0 | 5.6 | 14.0 | — | 外側・丁寧な回転へら削り、回転などで、 内側・回転などで、静止などで | 良好 | (A3) | |

| 5 | 环茎 | 14.0 | 4.1 | 2条沈捕 | 外側・丁寧な回転へら割り。回転なしで、内側・回転なしで、静止なし | 良好 | (A3) | 大井部にへら記号× | |
|----|----------|------|------|-------------------------|-----------------------------------|-------------------------------------|------|-----------|----------|
| 6 | 环身 | 14.8 | 4.2 | 11.3 | 外側・丁寧な回転へら割り。回転なしで、内側・回転なしで、静止なし | 良好 | (A3) | | |
| 7 | 环茎 | 13.3 | 4.7 | 外側・2条沈捕 内側・端部に沈捕1条 | 外側・丁寧な回転へら割り。回転なしで、内側・回転なしで、静止なし | 良好 | (A3) | | |
| 8 | 环茎 | 13.6 | 4.4 | 外側・2条沈捕 内側・端部に沈捕1上位 | 外側・丁寧な回転へら割り。回転なしで、内側・回転なしで、静止なし | 良好 | (A3) | | |
| 9 | 环茎 | 12.8 | 3.9 | 外側・2条沈捕 内側・端部に沈捕1条 | 外側・丁寧な回転へら割り。回転なしで、内側・回転なしで、静止なし | 良好 | (A4) | | |
| 10 | 环身 | 11.0 | 3.4 | 13.8 | 外側・丁寧な回転へら割り。回転なしで、内側・回転なしで、静止なし | 良好 | (A3) | | |
| 11 | 环身 | 11.4 | 4.0 | 13.8 | 外側・丁寧な回転へら割り。回転なしで、内側・回転なしで、静止なし | 良好 | (A3) | 底部にへら記号✓ | |
| 12 | 环身 | 11.9 | 4.6 | 14.3 | 外側・丁寧な回転へら割り。回転なしで、内側・回転なしで、静止なし | 良好 | (A3) | | |
| 13 | 环茎 | 14.0 | 4.7 | 外側・1条沈捕 内側・端部に沈捕1条 | 外側・丁寧な回転へら割り。回転なしで、内側・回転なしで、静止なし | 良好 | (A3) | | |
| 14 | 环身 | 10.5 | 4.6 | 14.8 | 外側・1条沈捕 内側・端部に沈捕1条 | 外側・丁寧な回転へら割り。回転なしで、内側・回転なしで、静止なし | 良好 | (A3) | |
| 15 | 环茎 | 13.8 | 4.5 | 外側・2条沈捕 内側・端部に沈捕1条 | 外側・丁寧な回転へら割り。回転なしで、内側・回転なしで、静止なし | 良好 | (A3) | | |
| 16 | 环身 | 11.4 | 4.5 | 14.9 | 外側・やや長い割り。回転なしで、内側・回転なしで、静止なし | 良好 | (A3) | | |
| 17 | 环茎 | 13.8 | 4.8 | 外側・2条沈捕 内側・端部に1条沈捕 | 外側・やや長い割り。回転なしで、内側・回転なしで、静止なし | 良好 | (A3) | | |
| 18 | 环身 | 11.8 | 4.5 | 14.8 | 外側・やや長い割り。回転なしで、内側・回転なしで、静止なし | 良好 | (A3) | | |
| 19 | 环茎 | 13.5 | 4.4 | 外側・2条沈捕 内側・端部に沈捕1条 | 外側・やや長い割り。回転なしで、内側・回転なしで、静止なし | 良好 | (A3) | | |
| 20 | 环身 | 11.2 | 4.6 | 14.3 | 外側・2条沈捕 内側・端部に沈捕1条 | 外側・丁寧な回転へら割り。回転なしで、内側・回転なしで、静止なし | 良好 | (A3) | |
| 21 | 环茎 | 12.7 | 4.4 | 外側・2条沈捕 内側・端部に沈捕1条 | 外側・丁寧な回転へら割り。回転なしで、内側・回転なしで、静止なし | 良好 | (A3) | | |
| 22 | 环身 | 10.5 | 4.0 | 13.3 | 外側・2条沈捕 内側・端部に沈捕1条 | 外側・やや長い割り。回転なしで、内側・回転なしで、静止なし | 良好 | (A4) | |
| 23 | 环身 | 12.5 | 4.5 | 外側・2条沈捕 内側・端部に沈捕1条 | 外側・やや長い割り。回転なしで、内側・回転なしで、静止なし | 良好 | (A4) | | |
| 24 | 环身 | 10.0 | 3.9 | 13.1 | 外側・丁寧な回転へら割り。回転なしで、内側・回転なしで、静止なし | 良好 | (A4) | | |
| 25 | 环茎 | 12.6 | 4.0 | 外側・2条沈捕 内側・端部に沈捕1条 | 外側・丁寧な回転へら割り。回転なしで、内側・回転なしで、静止なし | 良好 | (A4) | 天井部にへら記号× | |
| 26 | 环身 | 10.5 | 3.9 | 13.5 | 外側・丁寧な回転へら割り。回転なしで、内側・回転なしで、静止なし | 良好 | (A4) | | |
| 27 | 环茎 | 13.1 | 4.4 | 外側・2条沈捕 内側・端部に沈捕1条 | 外側・やや長い割り。回転なしで、内側・回転なしで、静止なし | 良好 | (A4) | | |
| 28 | 环身 | 10.6 | 3.6 | 13.6 | 外側・2条沈捕 内側・端部に浅い沈捕1条 | 外側・やや長い割り。回転なしで、内側・回転なしで、静止なし | 良好 | (A4) | |
| 29 | 环茎 | 12.8 | 4.6 | 外側・2条沈捕 内側・端部に浅い沈捕1条 | 外側・丁寧な回転へら割り。回転なしで、内側・回転なしで、静止なし | 良好 | (A4) | | |
| 30 | 环身 | 11.1 | 4.1 | 13.7 | 外側・丁寧な回転へら割り。回転なしで、内側・回転なしで、静止なし | 良好 | (A4) | | |
| 31 | 提瓶 | 12.2 | 29.5 | 19.2 | 脚部に棘状つまみ1脚 | 口縁部・回転なしで、腹部・かきめ、たたき、背部・かきめ、なで | 良好 | | |
| 32 | 提瓶 | | 26.3 | 21.0 | 肩部に棘状つまみ1脚(一部欠損) | 口縁部・回転なしで、腹部・かきめ、たたき、背部・かきめ、なで | 良好 | | |
| 33 | 良脚高脚 | 11.6 | 17.9 | 11.7 | 脚部・2条、前突文、脚部・沈捕2条、通しは2段5片(上下四角) | 外側・回転なしで、内側・回転なしで、静止なし | 良好 | A2b | |
| 34 | 良脚高脚 | 12.0 | 15.0 | 10.2 | 脚部・前突文、沈捕1条、脚部・沈捕3条、通しは2段3片(切り込み) | 外側・回転なしで、内側・回転なしで、静止なし | 良好 | (A3) | |
| 35 | 高脚 | 14.8 | 11.1 | 19.3 | 脚部・沈捕2条、脚部・通しは1段2片(二角) | 外側・回転なしで、内側・回転なしで、静止なし | 良好 | (A4) | 並み大きい |
| 36 | 雌 | 15.0 | 17.4 | 10.5 | | 外側・回転なしで、回転へら割り 内側・回転なしで | 良好 | (B1) | |
| 37 | 雌 | 12.0 | 11.9 | 9.4 | 口部後1条 | 外側・回転なしで、回転へら割り 内側・回転なしで | 良好 | | |
| 38 | 雄 | 10.9 | 5.4 | | つまみ、犬脚部周辺刺突 沈捕1条 | 外側・回転なしで、回転へら割り 内側・回転なしで、静止なし | 良好 | | |
| 39 | 幼頭蓋 | 7.9 | 10.5 | 13.7 | | 外側・回転なしで、胸部・かきめ、回転へら割り、内側・回転なしで静止なし | 良好 | | |
| 40 | 直口茎 | 9.8 | 12.2 | 13.8 | | 外側・丁寧な割り、内側・回転なしで静止なし | や良好 | | 直口にへら記号✓ |
| 41 | 要 虫頭部 | 11.3 | 17.6 | 16.5 | | 外側・なで、はけの、内側・へら割り、横なで | 良好 | | |

| | | | | | | | | |
|---|----|-----|------|------|--|---------------------------|----|--|
| 径 | 高さ | 9.4 | 10.2 | 10.9 | | 外側・横なで、はげめ 内側・横なで、へら削り | 良好 | |
|---|----|-----|------|------|--|---------------------------|----|--|

第106表 6区8号穴横穴墓出土土器観察表(墓道)

(単位:cm)

| 番号 | 器種 | 法量 | | | 形態上の特徴 | 調整 | | 色調成 | 分類 | 備考 |
|----|-----|------|------|------|-----------------------|-----------------------------------|----|------|------|----|
| | | 口径 | 基高 | 腹幅 | | 外側 | 内側 | | | |
| 1 | 环盖 | 13.2 | 4.6 | | 外側・2条沈縫 内側・端部に沈縫1条 | 外側・丁寧な回転へら削り、回転などで、内側・回転などで、静止などで | | 不良 | (A3) | |
| 2 | 环身 | 11.0 | 4.1 | 13.7 | | 外側・丁寧な回転へら削り、回転などで、内側・回転などで、静止などで | | 不良 | (A3) | |
| 3 | 环蓋 | 12.8 | 4.5 | | 外側・2条沈縫 内側・端部に沈縫1条 | 外側・丁寧な回転へら削り、回転などで、内側・回転などで、静止などで | | 不良 | (A3) | |
| 4 | 环身 | 11.2 | 4.4 | 13.9 | | 外側・丁寧な回転へら削り、回転などで、内側・回転などで、静止などで | | 不良 | (A3) | |
| 5 | 环蓋 | 14.4 | 4.1 | | 外側・2条沈縫 内側・端部に沈縫1条 | 外側・丁寧な回転へら削り、回転などで、内側・回転などで、静止などで | | 良好 | (A3) | |
| 6 | 环身 | 12.5 | 4.2 | 15.3 | | 外側・丁寧な回転へら削り、回転などで、内側・回転などで、静止などで | | 良好 | (A3) | |
| 7 | 环蓋 | 13.2 | 4.5 | | 外側・2条沈縫 内側・端部に沈縫1条 | 外側・丁寧な回転へら削り、回転などで、内側・回転などで、静止などで | | 良好 | (A3) | |
| 8 | 环身 | 13.2 | 4.5 | 14.1 | | 外側・丁寧な回転へら削り、回転などで、内側・回転などで、静止などで | | 良好 | (A3) | |
| 9 | 环蓋 | 13.8 | 4.6 | | 外側・1条沈縫 内側端部に沈縫1条 | 外側・やや荒い削り、回転などで、内側・回転などで、静止などで | | やや良好 | (A3) | |
| 10 | 环身 | 12.3 | 4.6 | 14.7 | | 外側・丁寧な回転へら削り、回転などで、内側・回転などで、静止などで | | やや不良 | (A3) | |
| 11 | 环身 | 11.5 | 4.1 | 13.6 | | 外側・丁寧な回転へら削り、回転などで、内側・回転などで、静止などで | | 良好 | (A3) | |
| 12 | 冠 | 14.6 | 14.2 | 9.1 | 新部・罐底状に沈縫が残る | 外側・罐底をきめ状の凹縫などで、削り跡へら削り、内側・回転などで | | 良好 | | |
| 13 | 直口盖 | 8.5 | 10.2 | 10.9 | | 外側・かきめ、回転へら削り 内側・回転などで、静止などで | | 良好 | | |
| 14 | 直口蓋 | 3.0 | 4.8 | 5.8 | | 外側・回転などで、回転へら削り 内側・回転などで、静止などで | | 良好 | | |

第107表 6区8号横穴墓出土鉄器観察表

(単位:cm)

| 番号 | 器種 | 全長 | 頭部長 (刃部) | 刃幅 | 頭部 | 刃部厚 | 頭厚 | 備考 | | |
|----|----|---------|-------------|-----|-----|-----|-----|------------|---|---|
| | | | | | | | | 偏 | 偏 | 偏 |
| -1 | 刀子 | 17.8 | 11.3 | 1.7 | 1.0 | 0.4 | 0.3 | 大型 | | |
| -2 | 刀子 | 10.0(8) | 4.2(8) | 1.0 | 0.7 | 0.3 | 0.4 | 圓あり | | |
| -3 | 鉄鎌 | 17.3 | 3.0 | 0.8 | 0.5 | 0.3 | 0.3 | 完形品 | | |
| -4 | 鉄鎌 | 13.9以上 | 2.8 | 0.8 | 0.5 | 0.3 | 0.3 | 少柄の木質が若干付着 | | |
| -5 | 鉄鎌 | 14.5 | 2.8 | 1.2 | 0.6 | 0.3 | 0.4 | 少柄残存 | | |
| -6 | 鉄鎌 | 11.5(8) | 3.4 | 1.2 | 0.5 | 0.3 | 0.4 | | | |

第108表 6区9号穴横穴墓出土土器観察表

(単位:cm)

| 番号 | 器種 | 法量 | | | 形態上の特徴 | 調整 | | 色調成 | 分類 | 備考 |
|----|----|------|-----|------|--------|---------------------------------|----|-----|------|--------------|
| | | 口径 | 基高 | 腹幅 | | 外側 | 内側 | | | |
| 1 | 环蓋 | 10.0 | 3.7 | | | 外側・へら切り後なで、回転などで、内側・回転などで、静止などで | | 良好 | (A3) | 天部にへら 記号川 |
| 2 | 环身 | 7.8 | 3.4 | 10.7 | | 外側・へら切り後なで、回転などで、内側・回転などで、静止などで | | 良好 | (A3) | 天部にへら 記号川 |
| 3 | 环蓋 | 11.0 | 3.6 | | | 外側・へら切り後なで、回転などで、内側・回転などで、静止などで | | 良好 | (A3) | |
| 4 | 环身 | 10.0 | 3.1 | 12.7 | | 外側・へら切り後なで、回転などで、内側・回転などで、静止などで | | 良好 | (A3) | |

| | | | | | | | | |
|----|------------|-----|------|------|------------------------------------|----|------|----------|
| 5 | 16 | 9.0 | 3.3 | | 外面・削れへら割り、回転なし 内面・削れなし、静止なし | 良好 | (C2) | |
| 6 | 斧 | 8.6 | 3.2 | | 外面・削れへら割り、回転なし 内面・削れなし、静止なし | 良好 | (C2) | |
| 7 | 直口鋤 | 9.0 | | 12.8 | 外面・削れなし 内面・削れなし | 良好 | | |
| 8 | 高耳 削鉈のみ | - | - | 8.5 | 外面・削れなし 内面・削れなし | 良好 | (A7) | |
| 9 | 平鋤 | 7.0 | 15.0 | 12.9 | 外面・削れなし、回転へら割り 内面・削れなし | 良好 | (C3) | 背面にへら記号× |
| 10 | 平鋤 | 9.0 | 16.0 | 14.6 | 外面・削れなし、かきめ、削れへら割り 内面・削れなし、静止なし | 良好 | (C3) | |
| 11 | 鋤 | - | - | - | 外面・削れなし 内面・なし | 良好 | (A5) | |
| 12 | 环 土陣器 | - | - | - | 外面・なし、底部削れあり 内面・なし | 良好 | | |
| 13 | 丸瓦 | | | | | | | 8世紀後半代 |

第109表 6区10号穴横穴墓出土土器観察表

(単位:cm)

| 番号 | 器種 | 法 径 | | | 形態上 の特徴 | 調 査 | 色 調成 分類 | 備 考 | |
|----|------------|--------|-----|------|--------------------------|-----------------------------------|-----------------------------------|--------|------|
| | | 口径 | 口高 | 底径 | | | | | |
| 1 | 环身 | 11.5 | 4.5 | 13.9 | | 外面・丁寧な回転へら割り、回転なし 内面・削れなし、静止なし | 良好 | (A4) | |
| 2 | 环身 | 11.2 | 3.7 | 13.8 | | 外面・丁寧な回転へら割り、回転なし 内面・削れなし、静止なし | 良好 | (A4) | |
| 3 | 环身 | 12.0 | 4.7 | 14.2 | | 外面・やや深い削り、回転なし 内面・削れなし | 良好 | (A4) | |
| 4 | 环蓋 | 14.5 | 4.6 | | 外面・2条化粧 内面・底部に浅い洗練1条 | 外面・丁寧な回転へら割り、回転なし 内面・削れなし、静止なし | 良好 | (A4) | |
| 5 | 环蓋 | 14.0 | 4.0 | | 外面・2条化粧 | 外面・丁寧な回転へら割り、回転なし 内面・削れなし、静止なし | 良好 | (A4) | |
| 6 | 环蓋 | 13.0 | 5.3 | | 外面・2条化粧 内面・たんぶに浅い洗練1条 | 外面・やや深い削り、回転なし 内面・削れなし、静止なし | 良好 | (A4) | |
| 7 | 环蓋 | 13.9 | 4.1 | | 外面・2条化粧 内面・底部に浅い洗練1条 | 外面・丁寧な回転へら割り、回転なし 内面・削れなし、静止なし | 良好 | (A3a) | |
| 8 | 环蓋 | 13.2 | 4.2 | | 外面・2条化粧 内面・縫隙が削くなっている | 外面・やや深い削り、回転なし 内面・削れなし、静止なし | 良好 | (A4) | |
| 9 | 环蓋 | 12.9 | - | | 外面・1条化粧 内面・縫隙が削くなっている | 外面・丁寧な回転へら割り、回転なし 内面・削れなし、静止なし | 良好 | (A3a) | |
| 10 | 环蓋 | 13.8 | 4.5 | | 2条化粧 | 外面・やや深い削り、回転なし 内面・削れなし、静止なし | 良好 | (A4) | |
| 11 | 环蓋 | 13.6 | 4.4 | | 2条化粧 | 外面・やや深い削り、回転なし 内面・削れなし、静止なし | 良好 | (A4) | |
| 12 | 环身 | 11.3 | 4.3 | 13.5 | | 外面・削れなし 内面・削れなし | 外面・丁寧な回転へら割り、回転なし 内面・削れなし、静止なし | 良好 | (A4) |
| 13 | 蓋 | 8.4 | 3.0 | | ボタン状つまみ付 | 外面・回転なし 内面・削れなし | 良好 | (C2) | |
| 14 | 蓋 | 8.8 | | | ボタン状つまみ | 外面・削れなし、回転へら割り、 内面・削れなし、なし | 良好 | (C2) | |
| 15 | 直口鋤 | 4.0 | 7.1 | 7.8 | | 外面・回転なし 内面・削れなし | 良好 | | |
| 16 | 高耳 削鉈のみ | - | - | 11.5 | | 外面・回転なし 内面・削れなし | 良好 | | |

第110表 6区10号横穴墓出土鉄器観察表

(単位:cm)

| 番号 | 器種 | 全 長 | 頭部長 (刀部) | 刀 幅 | 頭 部 | 刀部厚 | 頭 厚 | 備 考 | |
|----|----|---------|-------------|--------|--------|-----|--------|--------|-----------------|
| | | | | | | | | 頭部 | 刀部 |
| -1 | 鉄鎌 | 13.7 | | 7.7 | 1.4 | 0.9 | 0.3 | 0.3 | 完形 |
| 2 | 鉄鎌 | 12.5(8) | | 9.1 | 2.5 | 0.9 | 0.3 | 0.3 | 草端欠 失物の木質着付棒 |
| -3 | 鉄鎌 | 9.7(8) | | 9.7 | 2.7 | 0.7 | 0.3 | 0.3 | |
| -4 | 鉄鎌 | | | 9.7 | 4.1 | 1.9 | 0.7 | 0.3 | 久柄残存 |
| -5 | 鉄鎌 | 7.3(8) | | 5.3 | 1.8 | 0.8 | 0.3 | 0.3 | |

| | | | | | | | |
|------|----|---------|--------|-----|--------|-----|------------------|
| - 6 | 鉄錆 | 6.9(m) | 4.8 | 1.8 | 0.7 | 0.3 | 0.3 |
| - 7 | 鉄錆 | 5.8(m) | 4.6 | 1.8 | 0.7 | 0.3 | 0.3 茎部欠 |
| - 8 | 鉄錆 | 5.1(m) | 5.2 | 1.8 | 0.7 | 0.3 | 0.3 木質残存 根身先欠 |
| - 9 | 鉄錆 | 9.7(m) | 3.6(m) | 1.9 | 0.7 | 0.3 | 0.3 根身先欠 |
| - 10 | 鉄錆 | 6.4(m) | 5.0 | 1.8 | 0.7 | 0.3 | 0.3 茎部欠 |
| - 11 | 鉄錆 | 5.8(m) | 4.8 | 1.8 | 0.7 | 0.3 | 0.3 茎部欠 |
| - 12 | 鉄錆 | 5.7(m) | 4.9 | 1.7 | 0.7 | 0.3 | 0.3 茎部欠 |
| - 13 | 鉄錆 | 6.5(m) | 5.5 | 1.4 | 0.7 | 0.3 | 0.3 茎部欠 |
| - 14 | 鉄錆 | 5.8(m) | 4.8 | 1.8 | 0.6 | 0.3 | 0.3 茎部欠 |
| - 15 | 鉄錆 | 6.0(m) | 5.0 | 1.7 | 0.7 | 0.3 | 0.3 茎部欠 |
| - 16 | 鉄錆 | 5.3(m) | 5.1 | 1.7 | 0.7 | 0.3 | 0.3 茎部欠 |
| - 17 | 鉄錆 | 2.7(m) | — | — | 0.7 | — | 0.2 久柄残存 |
| - 18 | 鉄錆 | 2.2(m) | — | — | 0.8 | — | 0.3 久柄残存 |
| - 19 | 鉄錆 | 1.5(m) | — | — | 0.8 | — | 0.3 久柄残存 |
| - 20 | 鉄錆 | 5.5(m) | — | — | 0.7 | — | 0.3 欠柄若干残存 |
| - 21 | 鉄錆 | 4.7(m) | — | — | 0.4 | — | 0.2 茎部先端 |
| - 22 | 鉄錆 | 4.3(m) | — | — | 0.3(m) | — | 0.2(m) 茎部先端 |
| - 23 | 鉄錆 | 3.8(m) | — | — | 0.3(m) | — | 0.2(m) 茎部先端 |
| - 24 | 鉄錆 | 5.5(m) | — | — | 0.3 | — | 0.2 茎部先端 |
| - 25 | 鉄錆 | 4.9(m) | — | — | 0.3 | — | 0.2 茎部先端 |
| - 26 | 鉄錆 | 4.8(m) | — | — | 0.4 | — | 0.2 茎部先端 |
| - 27 | 鉄錆 | 15.5(m) | 3.6 | 1.0 | 0.4 | 0.3 | 0.3 茎先端部欠 |
| - 28 | 鉄錆 | 14.7(m) | 3.2 | 1.0 | 0.4 | 0.3 | 0.3 茎先端部欠 |
| - 29 | 鉄錆 | 15.3(m) | 3.3 | 1.1 | 0.4 | 0.3 | 0.3 茎先端部欠 |
| - 30 | 鉄錆 | 12.5(m) | 3.6 | 1.0 | 0.4 | 0.3 | 0.3 欠柄木質残存、茎先端部欠 |
| - 31 | 鉄錆 | 14.2(m) | 3.1 | 1.0 | 0.4 | 0.3 | 0.3 久柄残存 |
| - 32 | 鉄錆 | 14.3(m) | 3.3 | 1.0 | 0.4 | 0.3 | 0.3 茎先端部欠 |
| 33 | 鉄錆 | 14.8(m) | 3.6 | 1.0 | 0.4 | 0.3 | 0.3 久柄残存、茎先端部欠 |
| - 34 | 鉄錆 | 9.5(m) | 3.6 | 0.9 | 0.4 | 0.3 | 0.3 茎先端部欠 |
| - 35 | 鉄錆 | 8.8(m) | 3.5 | 0.9 | 0.4 | 0.3 | 0.3 茎部欠 |
| - 36 | 鉄錆 | 8.3(m) | 3.2 | 0.9 | 0.4 | 0.3 | 0.3 茎部欠 |
| - 37 | 鉄錆 | 8.2(m) | 3.1 | 1.1 | 0.4 | 0.3 | 0.3 茎部欠 |
| - 38 | 鉄錆 | 8.6(m) | 2.9 | 1.1 | 0.5 | 0.3 | 0.3 茎部欠 |
| - 39 | 鉄錆 | 6.0(m) | 3.2 | 1.0 | 0.4 | 0.3 | 0.3 茎部欠 |
| 40 | 鉄錆 | 5.4(m) | 3.2 | 1.0 | 0.4 | 0.3 | 0.3 茎部欠 |
| - 41 | 鉄錆 | 4.5(m) | 3.2 | 1.0 | 0.5 | 0.3 | 0.3 刀子と結合 |
| - 42 | 鉄錆 | 5.1(m) | 3.4 | 1.0 | 0.4 | 0.3 | 根身部のみ |

| | | | | | | | | |
|-----|----|--------|------|-----|-----|-----|------|-------------------|
| -43 | 鉄錆 | 2.4(m) | 0.8 | 0.9 | 0.4 | 0.3 | 0.3 | 錆身先端欠 |
| -44 | 鉄錆 | 3.5(m) | 1.0 | 1.2 | 0.4 | 0.3 | 0.3 | 錆身先端欠 |
| -45 | 鉄錆 | 5.6(m) | — | — | 0.5 | — | 0.35 | 基部上下欠 |
| -46 | 鉄錆 | 9.0(m) | — | — | 0.5 | — | 0.3 | 錆被膜のみ |
| -47 | 鉄錆 | 6.7(m) | — | — | 0.4 | — | 0.3 | 矢柄残存 |
| -48 | 鉄錆 | 5.5(m) | — | — | 0.5 | — | 0.3 | 矢柄残存 |
| -49 | 鉄錆 | 5.0(m) | — | — | 0.5 | — | 0.3 | |
| -50 | 鉄錆 | 4.5(m) | — | — | 0.5 | — | 0.3 | 矢柄残存 |
| -51 | 鉄錆 | 6.7(m) | — | — | 0.5 | — | 0.3 | 矢柄残存 |
| -52 | 鉄錆 | 5.1(m) | — | — | 0.5 | — | 0.3 | |
| -53 | 鉄錆 | 4.9(m) | — | — | 0.4 | — | 0.3 | 矢柄者下残存 |
| -54 | 鉄錆 | 3.2(m) | — | — | 0.4 | — | 0.3 | 矢柄者下残存 |
| -55 | 鉄錆 | 2.3(m) | — | — | 0.5 | — | 0.3 | 錆被膜のみ |
| -56 | 鉄錆 | 2.2(m) | — | — | 0.4 | — | 0.3 | |
| -57 | 鉄錆 | 2.3(m) | — | — | 0.4 | — | 0.3 | 桙皮巻残存 |
| -58 | 鉄錆 | 5.9(m) | — | — | 0.4 | — | 0.3 | 錆被部の破片 |
| -59 | 鉄錆 | 5.3(m) | — | — | 0.4 | — | 0.3 | 錆被部の破片 |
| -60 | 鉄錆 | 2.7(m) | — | — | 0.4 | — | 0.3 | 錆被部の破片 |
| -61 | 鉄錆 | 2.5(m) | — | — | 0.4 | — | 0.3 | 基部の破片 |
| -62 | 鉄錆 | 5.3(m) | — | — | 0.4 | — | 0.3 | 樹皮巻木質若干残存 |
| -63 | 鉄錆 | 3.8(m) | — | — | 0.3 | — | 0.2 | 樹皮巻木質若干残存 |
| -64 | 鉄錆 | 3.1(m) | — | — | 0.4 | — | 0.3 | 木質若干残存 |
| -65 | 鉄錆 | 3.9(m) | — | — | 0.3 | — | 0.2 | 木質若干残存 |
| -66 | 鉄錆 | 2.7(m) | — | — | 0.3 | — | 0.2 | 基部先端 |
| -67 | 鉄錆 | 2.5(m) | — | — | 0.3 | — | 0.2 | 基部先端 |
| -68 | 鉄錆 | 2.8(m) | — | — | 0.3 | — | 0.2 | 基部先端 |
| -69 | 鉄錆 | 1.8(m) | — | — | 0.2 | — | 0.2 | 基部先端 |
| -70 | 鉄錆 | 3.4(m) | — | — | 0.3 | — | 0.2 | 基部先端付近 |
| -71 | 鉄錆 | 3.3(m) | — | — | 0.3 | — | 0.2 | 基部先端付近 |
| -72 | 鉄錆 | 2.3(m) | — | — | 0.3 | — | 0.2 | 基部先端付近 |
| -73 | 鉄錆 | 2.0(m) | — | — | 0.3 | — | 0.2 | 基部先端付近 |
| -74 | 鉄錆 | 2.7(m) | — | — | 0.4 | — | 0.3 | 基部先端付近 |
| -75 | 鉄錆 | 2.4(m) | — | — | 0.2 | — | 0.2 | 基部先端付近 |
| -76 | 鉄錆 | 1.8(m) | — | — | 0.2 | — | 0.2 | 基部先端付近 |
| -77 | 鉄錆 | 2.8(m) | — | — | 0.4 | — | 0.2 | 基部片 |
| -78 | 鉄錆 | 2.9(m) | — | — | 0.2 | — | 0.1 | 基部先端付近 |
| -79 | 大刀 | 40.1 | 31.2 | 2.5 | 1.9 | 0.8 | 0.9 | 目打残存、基部は一文字足、柄形の握 |

| | | | | | | | | |
|-----|------|----------------|-------------|---------------|-------------|-----|-----|--------------------|
| -80 | 刀子 | 11.5(m) | 8.9 | 1.3 | 0.6 | 0.4 | 0.2 | 折れ曲がる。底部先端欠、木質若干付着 |
| -81 | 刀子 | 11.8(m) | 6.9 | 1.6 | 0.9 | 0.4 | 0.4 | |
| -82 | 鉄鏃 | 3.0(m) | 4.0 | 1.0 | 0.7 | 0.3 | 0.3 | 底部先端欠 |
| -83 | 鉄鏃 | 2.2(m) | — | — | 0.7 | — | 0.3 | 基部先端欠 木質残存 |
| -84 | 鉄鏃 | 3.7(m) | — | — | 0.6 | — | 0.3 | 底部先端 |
| -85 | 内鋼金具 | (鉄芯) 3.0 | (鉄管) 2.2 | (鉄芯管) 0.25 | (鉄管) 0.5 | — | — | 鉄芯・鉄管とも縫のため一部欠 |
| -86 | 内鋼金具 | — | 3.1 | 2.7 | 0.3 | 0.5 | — | 横方向の木目残存 |
| -87 | 内鋼金具 | 2.6 | — | 1.8 | 0.3 | 0.4 | — | 横方向の木目残存 |
| -88 | 内鋼金具 | 3.0 | — | 2.1 | 0.2 | 0.4 | — | 横方向の木目残存 |
| -89 | 内鋼金具 | — | 2.4 | 2.2 | 0.2 | 0.5 | — | 横方向の木目残存 |
| -90 | 内鋼金具 | — | 2.9 | 2.1 | 0.3 | 0.5 | — | 横方向の木目芯は欠 |
| -91 | 内鋼金具 | — | — | 2.0 | — | 0.4 | — | 横方向の木目芯は欠 |
| -92 | 内鋼金具 | — | — | 1.6 | — | 0.4 | — | 横方向の木目芯は欠 |
| -93 | 内鋼金具 | — | — | 1.7 | — | 0.4 | — | 横方向の木目芯は欠 |
| -94 | 内鋼金具 | — | — | 2.3 | — | 0.6 | — | 横方向の木目芯は欠 |
| -95 | 内鋼金具 | 1.9 | — | — | 0.2 | — | — | 鉄芯のみ 上・下端部欠 |
| -96 | 内鋼金具 | (鉄芯) 1.7(m) | (鉄管) — | (鉄芯) 0.2 | (鉄管) — | — | — | 鉄芯のみ 上・下端部欠 |
| -97 | 内鋼金具 | 2.0(m) | — | — | 0.3 | — | — | 鉄芯のみ 上・下端部欠 |
| -98 | 内鋼金具 | 0.9(m) | — | — | 0.2 | — | — | 鉄芯のみ 上・下端部欠 |

第111表 6区10号横穴墓出土耳環観察表

(単位:mm)

| 番号 | 器種 | a | b | c | d | e | 備考 |
|------|-----|---|------|------|------|------|--------------------------|
| -99 | 耳環 | — | 29 | 33 | 16 | 9 | 8 全体的に経年が広がりその上に泥が付着している |
| -100 | 耳環 | — | 28.7 | 32.4 | 16 | 8 | 8 全体的に経年が広がりその上に泥が付着している |
| -101 | 耳環 | — | 27 | 29 | 16.5 | 6 | 6 さびが全体的についている |
| -102 | 耳環 | — | 26.5 | 28.9 | 15.8 | 11.6 | 11.8 ほとんどのところが黒色化している |
| -103 | 金属環 | — | — | — | — | 5.2 | 5.5 金属が腐食している |
| -104 | 金属環 | — | — | — | — | 5.3 | 5.0 |
| -105 | 金属環 | — | — | — | — | 5.2 | 4.9 |
| -106 | 金属環 | — | — | — | — | 5.2 | 5.1 |

第112表 6区10号横穴墓出土玉類観察表

(単位:mm)

| 番号 | 器種 | 材質 | 色調 | 直径 | 短径 | 孔径 | 備考 |
|------|----|----|-----|------|------|---------|------|
| -107 | 勾玉 | 瑪瑙 | 淡褐色 | 29.0 | 16.1 | 1.1~2.4 | 片面穿孔 |
| -108 | 勾玉 | 瑪瑙 | 暗褐色 | 26.3 | 14.3 | 1.4~2.4 | 片面穿孔 |

| | | | | | | | |
|------|-----|-----|---------|---------|------|---------|----------|
| -109 | 勾玉 | 瑪瑙 | 淡紫紅色 | 34.7 | 23.2 | 1.4~3.0 | 片面穿孔 |
| -110 | 勾玉 | 瑪瑙 | 暗藍綠色 | 26.1 | 16.0 | 1.1~4.0 | 片面穿孔 |
| -111 | 勾玉 | 瑪瑙 | 淡綠色 | 29.8 | 16.9 | 1.0~2.8 | 片面穿孔 |
| -112 | 勾玉 | 瑪瑙 | 淡藍綠色 | 13.2(6) | 15.1 | 1.2~2.5 | 片面穿孔上第のみ |
| -113 | 切子玉 | 水晶 | 半透明 | 12.3 | 14.4 | 1.2~3.5 | 片面穿孔 |
| -114 | 切子玉 | 水晶 | 半透明 | 20.5 | 15.5 | 1.9~3.7 | 片面穿孔 |
| -115 | 切子玉 | 水晶 | 半透明 | 19.5 | 13.7 | 1.5~3.3 | 片面穿孔 |
| -116 | 切子玉 | 水晶 | 半透明 | 16.0 | 13.4 | 1.3~3.2 | 片面穿孔 |
| -117 | 切子玉 | 水晶 | 半透明 | 17.3 | 14.0 | 1.5~3.5 | 片面穿孔 |
| -118 | 切子玉 | 水晶 | 半透明 | 15.3 | 11.2 | 1.2~3.6 | 片面穿孔 |
| -119 | 切子玉 | 水晶 | 半透明 | 16.2 | 12.2 | 1.4~3.3 | 片面穿孔 |
| -120 | 切子玉 | 水晶 | 半透明 | 14.8 | 13.0 | 1.7~3.1 | 片面穿孔 |
| -121 | 切子玉 | 水晶 | 半透明 | 12.8 | 12.8 | 1.4~2.9 | 片面穿孔 |
| -122 | 丸玉 | 水晶 | 半透明 | 15.9 | 11.1 | 2.3~3.7 | 片面穿孔 |
| -123 | 丸玉 | ガラス | 半透明 | 13.2 | 9.6 | 1.5~3.0 | 片面穿孔 |
| -124 | 丸玉 | 水晶 | 半透明 | 12.0 | 8.3 | 1.2~2.9 | 片面穿孔 |
| -125 | 丸玉 | 水晶 | 半透明 | 11.0 | 8.9 | 1.4~3.2 | 片面穿孔 |
| -126 | 小玉 | ガラス | コピルトブルー | 4.3 | 3.2 | 1.1 | |
| -127 | 小玉 | 碧玉 | 明緑色 | 11.8 | 3.9 | 1.3~1.6 | 片面穿孔で補修 |
| -128 | 小玉 | 碧玉 | 淡緑色 | 15.0 | 4.5 | 2.2 | 片面穿孔で補修 |

第113表 6 区11号穴横穴墓出土土器觀察表

(単位: cm)

| 番号 | 品種 | 法 量 | | | 形態上 の特徴 | 調 整 | 色 高 度 成 | 分類 | 備 考 |
|----|----------|--------|------|------|-----------------------|------------------------------------|------------------|----|--------|
| | | 内径 | 基高 | 輪柱 | | | | | |
| 1 | 環葉 | 9.4 | 3.0 | | | 外面へら切り後などで、回転などで内面へら切りなど、静止などで | | 良好 | (A8) |
| 2 | 環葉 | 9.6 | 3.2 | | | 外面へら切り後などで、回転などで内面へら切りなど、静止などで | | 良好 | (A8) |
| 3 | 環身 | 8.5 | 3.1 | 19.2 | | 外側へら切り後などで、回転などで内面へら切りなど、静止などで | | 良好 | (A8) |
| 4 | 環葉 | 9.7 | 4.0 | | | 外側へら切り後などで、回転などで、内面へら切りなど、静止などで | | 良好 | (A8) |
| 5 | 環葉 | 17.0 | - | | | 外側へら切り後などで、回転などで内面へら切りなど、静止などで | | 良好 | (B1) |
| 6 | 环 高台付 | 13.0 | 5.3 | | | 外側へら切りなどで、底部折断あり内面へら切りなどで、機械工具のなどで | | 良好 | (B2) |
| 7 | 環 | 14.6 | 2.8 | | 輪状つまみ(径4.5) | 外側へら切り後などで、回転などで内面へら切りなど、静止などで | | 良好 | (B2) |
| 8 | 丸葉頭 | 7.8 | 17.5 | | | 外側へら切り後などで、回転などで内面へら切りなど、静止などで | | 良好 | (I型) |
| 9 | 輪 | 9.7 | 13.6 | 8.8 | 輪幅・汎輪2条、銅幕・汎輪2条 | 外側へら切りなどで、回転へら切り内面へら切りなどで | | 良好 | (A7) |
| 10 | 環葉 | 14.0 | 4.2 | | 汎輪2・朱赤織 内面・汎輪に汎輪1条 | 外側へら切り後などで、回転などで内面へら切りなどで、静止などで | | 良好 | (A3) |

第114表 6区12号穴横穴墓出土土器観察表

(単位: cm)

| 番号 | 器種 | 法 量 | | | 形 態 上 の 特 徴 | 調 査 | 色 調 成 | 分 類 | 備 考 |
|----|--------------|--------|------|------|----------------------------|-----------------------------------|-------------|----------------|--------|
| | | 口径 | 底径 | 高さ | | | | | |
| 1 | 环釜 | 13.7 | 4.4 | | 外腹・2条沈線 内腹・瘤部に沈線1条 | 外腹・やや窓い割り、回転なし 内腹・回転なし、静止なし | 良好 | (A3) | |
| 2 | 环釜 | 13.8 | 4.4 | | 外腹・2条沈線 内腹・瘤部に沈線1条 | 外腹・丁寧な回転へら削り、回転なし 内腹・回転なし、静止なし | 良好 | (A3) | |
| 3 | 环釜 | 12.0 | 4.0 | | 1条沈線 | 外腹・丁寧な回転へら削り、回転なし 内腹・回転なし、静止なし | 良好 | (A4) | |
| 4 | 环身 | 11.3 | 4.8 | 14.0 | | 外腹・丁寧な回転へら削り、回転なし 内腹・回転なし、静止なし | 良好 | (A3) | |
| 5 | 环身 | 11.0 | 3.9 | 13.4 | | 外腹・丁寧な回転へら削り、回転なし 内腹・回転なし、静止なし | 良好 | (A3) | |
| 6 | 环身 | 11.0 | 4.6 | 13.6 | | 外腹・丁寧な回転へら削り、回転なし 内腹・回転なし、静止なし | 良好 | (A3) | |
| 7 | 环身 | 11.6 | 4.3 | 14.3 | | 外腹・丁寧な回転へら削り、回転なし 内腹・回転なし、静止なし | 良好 | (A4) | |
| 8 | 直口釜 | 10.6 | 10.9 | 12.4 | | 外腹・かきめ、回転へら削り 内腹・回転なし、静止なし | 良好 | | |
| 9 | 短脚釜 | 8.9 | 25.5 | 26.5 | 沈線3条、波状文、 | 外腹・かきめ、たたき 内腹・回転なし、なで | 良好 | | |
| 10 | 环釜 | 12.7 | — | | 1条沈線 | 外腹・丁寧な回転へら削り、回転なし 内腹・回転なし、静止なし | 良好 | (A4) | |
| 11 | 有蓋高环 环釜のみ | 12.2 | — | 11.6 | | 外腹・回転なし 内腹・回転なし、静止なし | 良好 | | |
| 12 | 环 土師器 | 6.0 | — | | | 外腹・回転なし 内腹・回転なし | 良好 | | |
| 13 | 环 土师器 | — | — | 6.4 | | 外腹・内腹とも風化により表面不規 | 良好 | | |
| 14 | 环 土師器 | — | — | 6.4 | | 外腹・回転なし、底部回転赤きり 内腹・回転なし | 良好 | | |
| 15 | 环 土師器 | — | — | 6.4 | | 外腹・なで、底部回転赤きり 内腹・風化により調整不明 | 良好 | | |
| 16 | 环 土師器 | — | — | 5.6 | | 外腹・回転なし、底部回転赤きり 内腹・回転なし | 良好 | | |
| 17 | 环 土師器 | — | — | 6.0 | 高台付 | 外腹・回転なし、内腹・風化により調 整不明 | 良好 | | |
| 18 | 环 土師器 | — | — | 6.0 | 高台付 | 外腹・回転なし、内腹・回転なし | 良好 | | |
| 19 | 环 土師器 | — | — | — | | 内腹・外腹とも風化により調整不明 | 良好 | タール状のもの が付着 | |
| 20 | 环 土師器 | — | — | 6.0 | | 外腹・なで 内腹・回転なし | 良好 | | |
| 21 | 环 土师器 | — | — | 6.5 | | 外腹・なで、底部回転赤きり 内腹・回転なし | 良好 | | |
| 22 | 盖 土師器 | 15.2 | — | — | | 外腹・口縁部横なで 内腹・横方向のへら削り | 良好 | | |

第115表 6区13号横穴墓出土鉄器観察表

(単位: cm)

| 番号 | 器種 | 全 長 | 頭部及 (刃部) | 刀 幅 | 頭 部 | 刃部厚 | 頭 厚 | 備 考 | |
|----|------|---------|-------------|--------|--------|-----|--------|-------------------|----|
| | | | | | | | | 頭部厚 | 頭部 |
| —1 | 刀子 | 15.3 | 8.4 | 1.2 | 0.9 | 0.3 | 0.4 | 木質残存 | |
| —2 | 刀子 | 13.2 | 8.3 | 1.3 | 0.9 | 0.4 | 0.3 | 木質残存 頭被存 | |
| 3 | 鉄錐 | 18.7 | 2.5 | 0.6 | 0.4 | 0.2 | 0.3 | 頭被部断面方形 基部断面円形 | |
| —4 | 鉄錐 | 14.2(m) | 2.8 | 1.0 | 0.4 | 0.3 | 0.3 | 剝皮巻残存 | |
| —5 | 鉄錐 | 7.7(m) | 2.8 | 1.0 | 0.4 | 0.2 | 0.3 | 基部欠 | |
| —6 | 鉄錐 | 2.7(m) | — | — | 0.5 | — | 0.4 | 頭被部のみ | |
| —7 | 鉄錐 | 2.4(m) | — | — | 0.2 | — | 0.2 | 基部のみ | |
| —8 | 鉄錐 | 3.0(m) | — | — | 0.3 | — | 0.3 | 基部のみ | |
| —9 | 薄状製品 | 3.7 | — | — | — | 0.6 | — | | |

第116表 6区13号横穴墓出土玉類観察表

(単位:mm)

| 番号 | 器種 | 材質 | 色調 | 長径 | 短径 | 孔径 | 備考 |
|-----|----|----|-----|------|------|---------|-------------------|
| -10 | 勾玉 | 碧玉 | 青緑色 | 25.4 | 14.8 | 1.4~2.7 | 片面穿孔 両側面とも欠損なし |

第117表 6区13号穴横穴墓出土土器観察表

(単位:cm)

| 番号 | 器種 | 法 量 | 形 態 | 上 の 特 徴 | 調 査 | 色 調 成 | 分 類 | 備 考 |
|----|----|---------------|-----------------------|-------------------------------------|--------|-------------|-----------|--------|
| 1 | 環壺 | 12.6 3.7 | 外面-2条沈縫 内面-端部に沈縫1条 | 外削-丁寧な回転へら削り、回転などで、内削-回転などで、静止なし | 良好 | (A4) | | |
| 2 | 環身 | 11.0 3.9 13.8 | | 外削-丁寧な回転へら削り、回転などで、内削-回転などで、静止なし | 良好 | (A4) | | |
| 3 | 環壺 | 13.6 4.5 | 2条沈縫 | 外削-丁寧な回転へら削り、回転などで、内削-回転などで、静止なし | 良好 | (A4) | | |
| 4 | 環壺 | 13.0 4.2 | 外削-2条沈縫 内削-沈縫1条 | 外削-丁寧な回転へら削り、回転などで、内削-回転などで、静止なし | 良好 | (A4) | 天井部にへら記号× | |
| 5 | 環壺 | 13.0 4.0 | 外削-2条沈縫 内削-沈縫1条 | 外削-今や削り、削り、回転などで、内削-回転などで、静止なし | 良好 | (A4) | | |
| 6 | 環身 | 10.8 4.0 13.4 | | 外削-丁寧な回転へら削り、回転などで、内削-回転などで、静止なし | 良好 | (A4) | | |
| 7 | 環壺 | 12.0 5.0 | 外削-2条沈縫 内削-沈縫1条 | 外削-丁寧な回転へら削り、回転などで、内削-回転などで、静止なし | 良好 | (A4) | 天井部にへら記号/ | |
| 8 | 環身 | 10.8 4.3 13.0 | | 外削-やや深い削り、回転などで、内削-回転などで、静止なし | 良好 | (A4) | | |
| 9 | 環壺 | 11.8 3.8 | 2条沈縫 | 外削-丁寧な回転へら削り、回転などで、内削-回転などで、静止なし | 良好 | (A4) | 火葬部にへら記号/ | |
| 10 | 環身 | 9.6 4.3 12.6 | | 外削-丁寧な回転へら削り、回転などで、内削-回転などで、静止なし | 良好 | (A4) | | |
| 11 | 環身 | 10.1 4.2 12.7 | | 外削-やや深い削り、削り、回転などで、内削-回転などで、静止なし | 良好 | (A4) | | |
| 12 | 環壺 | 12.5 3.6 | 1条沈縫 | 外削-やや深い削り、回転などで、内削-回転などで、静止なし | 良好 | (A4) | | |
| 13 | 環身 | 10.4 3.4 13.2 | | 外削-やや深い削り、削り、回転などで、内削-回転などで、静止なし | 良好 | (A4) | | |
| 14 | 環壺 | 12.6 4.5 | 2条沈縫 | 外削-やや深い削り、回転などで、内削-回転などで、静止なし | 良好 | (A4) | | |
| 15 | 環身 | 11.2 3.9 13.8 | | 外削-やや深い削り、削り、回転などで、内削-回転などで、静止なし | 良好 | (A4) | | |
| 16 | 環壺 | 12.8 4.1 | 外削-2条沈縫 内削-端部に沈縫1条 | 外削-やや深い削り、削り、回転などで、内削-回転などで、静止なし | 良好 | (A4) | | |
| 17 | 環身 | 10.8 3.6 12.4 | | 外削-丁寧な回転へら削り、回転などで、内削-回転などで、静止なし | 良好 | (A4) | | |
| 18 | 環壺 | 12.8 4.2 | 2条沈縫 | 外削-丁寧な回転へら削り、回転などで、内削-回転などで、静止なし | 良好 | (A4) | | |
| 19 | 環身 | 10.8 4.0 13.6 | | 外削-丁寧な回転へら削り、回転などで、内削-回転などで、静止なし | 良好 | (A4) | | |
| 20 | 環壺 | 12.7 4.8 | 外削-2条沈縫 内削-端部に沈縫1条 | 外削-丁寧な回転へら削り、回転などで、内削-回転などで、静止なし | 良好 | (A4) | | |
| 21 | 環身 | 11.0 3.9 13.6 | | 外削-やや深い削り、削り、回転などで、内削-回転などで、静止なし | 良好 | (A4) | | |
| 22 | 環壺 | 12.8 4.2 | 外削-2条沈縫 内削-端部に沈縫1条 | 外削-やや深い削り、削り、回転などで、内削-回転などで、静止なし | 良好 | (A4) | | |
| 23 | 環身 | 10.6 4.0 13.4 | | 外削-やや深い削り、削り、回転などで、内削-回転などで、静止なし | 良好 | (A4) | | |
| 24 | 環壺 | 12.0 4.2 | 内削-端部に沈縫1条 | 外削-丁寧な回転へら削り、削り、回転などで、内削-回転などで、静止なし | 良好 | (A4) | | |
| 25 | 環壺 | 12.2 4.4 | 2条沈縫 | 外削-丁寧な回転へら削り、削り、回転などで、内削-回転などで、静止なし | 良好 | (A4) | | |
| 26 | 環壺 | 12.5 4.5 | | 外削-やや深い削り、削り、回転などで、内削-回転などで、静止なし | 良好 | (A4) | | |
| 27 | 環壺 | 12.6 4.3 | 外削-1条沈縫 内削-端部に沈縫1条 | 外削-やや深い削り、削り、回転などで、内削-回転などで、静止なし | 良好 | (A5) | | |
| 28 | 環壺 | 12.3 4.1 | 外削-2条沈縫 内削-端部に沈縫2条 | 外削-やや深い削り、削り、回転などで、内削-回転などで、静止なし | 良好 | (A5) | | |
| 29 | 環壺 | 12.6 4.2 | 2条沈縫 | 外削-やや深い削り、削り、回転などで、内削-回転などで、静止なし | 良好 | (A5) | | |

| | | | | | | | | | | |
|----|----------|------|------|------|---|-----------------------------|--|----|-------|----------|
| 30 | 环身 | 10.4 | 4.2 | 12.9 | 4 | | 外顎・無い削り、回転なし 内顎・回転なしで、静止なし | 良好 | (A5) | |
| 31 | 环身 | 10.2 | 3.8 | 12.7 | * | | 外顎・少ない回転から削り、回転なしで、静止なし 内顎・回転なしで、静止なし | 良好 | (A5) | |
| 32 | 环身 | 10.5 | 4.0 | 13.0 | * | | 外顎・無い削り、回転なし 内顎・回転なしで、静止なし | 良好 | (A5) | |
| 33 | 环身 | 10.2 | 3.9 | 12.8 | | | 外顎・やや多い削り、回転なし 内顎・回転なしで、静止なし | 良好 | (A5) | |
| 34 | 环茎 | 12.8 | 4.9 | 2 | 2柔沈継 | | 外顎・無い削り、回転なし 内顎・回転なしで、静止なし | 良好 | (A5) | |
| 35 | 环身 | 10.4 | 4.7 | 13.8 | | | 外顎・やや多い削り、回転なし 内顎・回転なしで、静止なし | 良好 | (A5) | |
| 36 | 环茎 | 12.2 | 4.4 | 2柔沈継 | | | 外顎・無い削り、回転なし 内顎・回転なしで、静止なし | 良好 | (A5) | |
| 37 | 环身 | 10.6 | 4.2 | 13.2 | | | 外顎・やや多い削り、かな 内顎・回転なしで、静止なし | 良好 | (A5) | |
| 38 | 环身 | 10.3 | 3.8 | 12.8 | | | 外顎・中心部を残す削り、回転なし 内顎・回転なしで、静止なし | 良好 | (A6) | 底面にへら記号× |
| 39 | 环身 | 10.6 | 3.7 | 13.1 | | | 外顎・ふら切り後なし、回転なし 内顎・回転なしで、静止なし | 良好 | (A6) | |
| 40 | 环身 | 10.0 | 4.2 | 12.9 | | | 外顎・長い削り、回転なし 内顎・回転なしで、静止なし | 良好 | (A6) | |
| 41 | 広口座 | 12.2 | 16.5 | 18.8 | 脣部・沈継2条の間に刺突文 | | 外顎・回転なしで、刺突かきめの後た き、内顎・回転なしで、たたき | 良好 | | |
| 42 | 盡の茎 | 8.6 | 3.2 | | 輪状つまみ 4柔沈継、刺突文 | | 外顎・回転なしで、内顎・回転なしで | 良好 | | |
| 43 | 短頭盡 | 6.4 | 10.1 | 12.3 | | | 外顎・回転なしで、内顎かきめ 内顎・回転なしで、静止なし | 良好 | | |
| 44 | 盡 | 9.6 | 18.4 | 14.6 | 脣部・沈継2条の間に刺突文 | | 外顎・回転なしで、かきめ、内顎へら 削り、内顎・回転なしで、静止なし | 良好 | | |
| 45 | 底口座 | 8.8 | 12.4 | 12.0 | | | 外顎・回転なしで、内顎へら削り、回転なしで 内顎・回転なしで | 良好 | | |
| 46 | 底口座 | 6.0 | 8.7 | 8.8 | | | 外顎・回転なしで、内顎なしで、静止なし | 良好 | | |
| 47 | 有道高坏 | 10.8 | 10.8 | 14.0 | 10.8 (包角)、沈継1条 | 脚部・通しは2段3分(△三角、下) | 外顎・回転なしで 内顎・回転なしで、静止なし | 良好 | (C) | |
| 48 | 有道高坏 | 11.7 | 9.9 | 14.4 | 10.8 脚部・通しは1段3分(△角) | | 外顎・回転なしで 内顎・回転なしで、静止なし | 良好 | (E2) | |
| 49 | 高坏 | 14.2 | 10.8 | | 11.8 脚部・通しは1段3分(△角) | | 外顎・回転なしで 内顎・回転なしで、静止なし | 良好 | (A3) | |
| 50 | 高坏 | 13.8 | 11.7 | | 10.6 脚部・通しは1段3分(△角) | | 外顎・回転なしで 内顎・回転なしで、静止なし | 良好 | (A3) | |
| 51 | 高坏 | 13.8 | 9.8 | | 10.6 脚部・通しは2段2方(△角) | | 外顎・回転なしで 内顎・回転なしで | 良好 | (A4) | |
| 52 | 高坏 | 14.4 | 10.6 | | 9.8 脚部・1段2方(△角) | | 外顎・回転なしで 内顎・回転なしで | 良好 | (A4) | |
| 53 | 長脚高坏 | 12.0 | 16.7 | | 9.2 脣部・沈継2条、茎部刺突文、脚部 脚部・通しは2段3分(上三角下四角) | | 外顎・回転なしで 内顎・回転なしで | 良好 | (A3) | |
| 54 | 長脚高坏 | 9.1 | 13.8 | | 6.6 | | 外顎・回転なしで 内顎・回転なしで | 良好 | (A4) | |
| 55 | 長脚高坏 | 10.8 | 12.0 | | 16.0 | | 外顎・回転なしで 内顎・回転なしで | 良好 | (A4) | |
| 56 | 提尻 | 9.3 | 15.1 | 11.0 | 脣部・沈継2条、怖揚文 | | 脣部・かきめ、たたき 脣部・たたきのちななし | 良好 | ミニチュア | |
| 57 | 越 | 11.8 | 16.0 | | 10.5 | 口縫部・沈継1条、後後文 脚部・沈継2条、刺突文 | 外顎・回転なしで、回転へら削り 内顎・回転なしで | 良好 | (A4) | |
| 58 | 越 | 10.2 | 14.3 | 9.6 | | 脣部・波状文、沈継2条、脚部・沈 継3条、刺突文 | 外顎・回転なしで 内顎・回転なしで | 良好 | (A5) | |
| 59 | 耳 土師器 | - | - | | 5.2 | | 外顎・回転なしで、底部回転あり 内顎・回転なしで | 良好 | | |
| 60 | 耳 土師器 | - | - | | 3.1 | | 外顎・奥部回転あり 内顎・なし | 良好 | | |
| 61 | 耳 土師器 | - | - | | 4.8 | | 外顎・回転なしで 内顎・強化により調整不明 | 良好 | | |
| 62 | 耳 土師器 | 13.0 | 3.7 | | 6.2 | | 外顎・回転なしで、なで、底部回転あ り 内顎・回転なしで | 良好 | | |
| 63 | 耳 土師器 | 11.1 | 3.3 | | 4.0 | | 外顎・回転なしで、底部回転あり 内顎・なし | 良好 | | |
| 64 | 耳 土師器 | - | - | | 3.6 | | 外顎・回転なしで 内顎・回転なしで | 良好 | | |
| 65 | 耳 土師器 | - | - | | 6.2 | | 外顎・回転なしで、底部回転あり 内顎・なし | 良好 | | |
| 66 | 耳 土師器 | - | - | | 5.6 | | 外顎・回転なしで、底部回転あり 内顎・強化により調整不明 | 良好 | | |

| | | | | | | |
|----|-------------|------|------|---------------------------|----|--|
| 67 | 低脚環 上部器 | | 12.8 | 外面・同様なで、底部回転あり 内面・回転なし | 良好 | |
| 68 | 16 上部器 | | 9.0 | 外面・なし、底部回転あり 内面・回転なし | 良好 | |
| 69 | 16 上部器 | | 5.6 | 外面・内面とも風化により調整不明 | 良好 | |
| 70 | 壺口縁部 上部器 | 28.2 | - | 外面・横なで 内面・横なで、横方向のへら削り | 良好 | |
| 71 | 直 縁柱面 | 11.0 | - | 外面・同様なで 内面・回転なし | 良好 | |

第118表 6区14号穴横穴墓出土土器観察表

(単位: cm)

| 番号 | 器種 | 法 量 | 形態 | 土の特徴 | 調査 | | 備考 | |
|----|------------|--------------|------|---|-----------------------------------|---|-------------|----------|
| | | | | | 口径 | 高さ | | |
| 1 | 环壺 | 11.6 (38) | 5.5 | 2条沈継 | 外面・丁寧な回転へら削り、回転なし 内面・同様なし、静止なし | 良好 (A4) | 天井部にへら記号/ | |
| 2 | 环壺 | 13.0 | 3.6 | 2条沈継 | 外面・やや深い削り、回転なし、内面・回転なし、静止なし | 良好 (A4) | | |
| 3 | 环壺 | 11.2 | 3.6 | 13.7 | 外面・やや深い削り、回転なし 内面・回転なし、静止なし | 良好 (A4) | | |
| 4 | 环壺 | 12.3 | 3.6 | 1条沈継 | 外面・やや深い削り、回転なし 内面・回転なし、静止なし | 不良 (A4) | | |
| 5 | 环身 | 10.6 | 3.6 | 13.5 | 外面・やや深い削り、回転なし 内面・回転なし、静止なし | 良好 (A4) | | |
| 6 | 环蓋 | 12.8 | 4.0 | 1条沈継 | 外面・やや深い削り、回転なし 内面・回転なし、静止なし | 良好 (A4) | | |
| 7 | 环身 | 10.6 | 3.3 | 13.4 | 外面・やや深い削り、回転なし 内面・回転なし、静止なし | 良好 (A4) | | |
| 8 | 环蓋 | 12.7 | 4.8 | 2条沈継 | 外面・やや深い削り、回転なし 内面・同様なし、静止なし | やや不良 (A4) | | |
| 9 | 环身 | 10.8 | 4.6 | 13.9 | 外面・やや深い削り、回転なし 内面・同様なし、静止なし | やや不良 (A5) | | |
| 10 | 环蓋 | 12.5 | 4.1 | 外面・2条沈継 内面・端部に沈継1条 | 外面・へら切り後なし、回転なし 内面・回転なし、静止なし | 良好 (A6) | | |
| 11 | 环蓋 | 12.0 | 3.8 | 外面・3条沈継 内面・端部に沈継1条 | 外面・へら切り後なし、回転なし 内面・回転なし、静止なし | 良好 (A6) | | |
| 12 | 环身 | 11.0 | 4.1 | 13.5 | 外面・へら切り後なし、回転なし 内面・回転なし、静止なし | 良好 (A6) | 底部板状工具によるなし | |
| 13 | 环蓋 | 12.5 | 4.4 | 外面・2条沈継 | 外面・へら切り後なし、回転なし 内面・回転なし、静止なし | 良好 (A6) | | |
| 14 | 环身 | 11.3 | 4.1 | 14.0 | 外面・へら切り後なし、回転なし 内面・回転なし、静止なし | 良好 (A6) | 底部板状工具によるなし | |
| 15 | 环蓋 | 12.5 | 4.0 | 外面・2条沈継 内面・端部に沈継1条 | 外面・へら切り後なし、回転なし 内面・回転なし、静止なし | 良好 (A6) | | |
| 16 | 环身 | 11.2 | 4.3 | | 外面・細刃切り、回転なし 内面・回転なし、静止なし | 良好 (A6) | | |
| 17 | 直口壺 | 9.3 | 18.5 | 13.0 | 外面・かきめ、回転へら削り 内面・回転なし、静止なし | 良好 | | |
| 18 | 板頭壺 | 5.0 | 7.5 | 10.4 | 外面・回転なし、へら削り 内面・回転なし、静止なし | 良好 | | |
| 19 | 良脚高杯 | 10.3 | 11.0 | 7.9 基部・孔2本、茎部・斜交溝、腰部・沈継溝、 邊縁は段2方(上)切り込み、下三角 | 外面・回転なし 内面・回転なし、静止なし | 良好 (A4) | | |
| 20 | 平瓶 | 6.3 | 15.2 | 13.8 | 基部・ボタン状の把手が1付 | 外面・回転なし、へら削り 内面・回転なし、静止なし | 良好 (C2) | 底部にへら記号/ |
| 21 | 高杯 脚部のみ | - | - | - | 外面・回転なし 内面・回転なし | 不良 | | |
| 22 | 提瓶 | 15.0 | 28.6 | 25.2 | 肩部・輪状把手1付 | 底部・回転なし、背面・たたき、かきめ、腹部・たたき、かきめ 内面・回転なし、静止なし | 良好 (B2) | |
| 23 | 提瓶 | 9.0 | 23.2 | 17.5 | 肩部・輪状把手1付 | 底部・回転なし、背面・かきめ、たたき、腹部・かきめ、たたき | 良好 (C2) | |

第119表 6区14号穴横穴墓出土鉄器観察表

(単位: cm)

| 番号 | 器種 | 全長 | 頭部(刀部) | 刃幅 | 頭部 | 刀部厚 | 刃厚 | 備考 | |
|----|----|------|--------|------|-----|-----|-----|-----|----------------------------------|
| | | | | | | | | 頭部 | 刀部 |
| -1 | 大刀 | 39.5 | | 49.7 | 3.1 | 1.9 | 0.9 | 0.6 | 柄に目印と木質残存。茎は中部で、基尾はやや丸みを帯び、端部は直線 |

| | | | | | | | | |
|-----|----|---------|--------|-----|-----|-----|-----|---|
| -2 | 大刀 | 56.4 | 43.6 | 3.1 | 2.0 | 0.9 | 0.6 | 柄の本質残存。さやの木質一部残存、茎尻はやや丸みを帯び、尻に向かってやや細くなる。 |
| -3 | 刀子 | 8.6(0) | 2.1(0) | — | 1.4 | 1.1 | 0.3 | 0.3 木質-部残存 |
| -4 | 刀子 | 5.9(0) | 1.0(0) | — | 1.3 | 1.0 | 0.5 | 0.3 木質-部残存 |
| -5 | 鉄鎌 | 12.6(0) | 7.9 | — | 1.1 | 0.4 | 0.3 | 0.4 |
| -6 | 鉄鎌 | 2.7(0) | — | — | — | 0.4 | 0.8 | 0.2 基部部のみ |
| 7 | 鉄鎌 | 2.0(0) | — | — | — | 0.4 | — | 0.4 基部のみ |
| -8 | 鉄鎌 | 2.8(0) | — | — | — | 0.5 | — | 0.2 基部のみ |
| -9 | 鉄鎌 | 2.1(0) | — | — | — | 0.4 | — | 0.2 基部のみ |
| -10 | 鉄鎌 | 2.3(0) | — | — | — | 0.4 | — | 0.2 基部のみ |
| -11 | 鉄鎌 | 2.5(0) | — | — | — | 0.4 | — | 0.2 基部部のみ |

第121表 6区15号穴出土土器観察表

(単位: cm)

| 番号 | 器種 | 法 量 | | | 形態上の特徴 | | 調 整 | 色 調 成 | 分類 | 備 考 |
|----|-----|--------|------|------|--------|-----------------------|--|-------------|---------------|--------|
| | | 口径 | 基高 | 底径 | 側径 | | | | | |
| 1 | 环重 | 19.4 | 3.8 | — | — | — | 外面-回転なで、天井部調整不明 内面-回転へら削り、回転なで、静止なで | やや不良 | 板状工具によ るなで | |
| 2 | 环身 | 19.2 | 3.9 | 12.7 | — | — | 外面-回転へら削り、回転なで、静止なで 内面-回転なで、静止なで | 良好 | | |
| 3 | 环重 | 13.8 | 3.8 | — | — | 外面-2条沈線 内面-端部に沈線1条 | 外面-回転へら削り、回転なで 内面-回転なで、静止なで | 良好 | | |
| 4 | 环身 | 11.4 | 4.2 | — | — | — | 外面-回転へら削り、回転なで、静止なで 内面-回転なで、静止なで | 良好 | | |
| 5 | 豆類重 | — | — | 14.4 | 9.5 | — | 外面-回転へら削り、回転なで、底 部-回転系きり、内面-回転なで、 | 良好 | | |
| 6 | 底口重 | 10.1 | 12.8 | — | 9.1 | — | 外面-回転なで、回転へら削り 内面-回転なで | 良好 | | |

第122表 6区出土子持壺観察表

(単位: cm)

| 番号 | 器種 | 法 量 | | | 形態上の特徴 | | 調 整 | 色 調 成 | 分類 | 備 考 |
|-----|-------------|--------|----|------|--------|--|---------------------------------------|-------------|----|--------|
| | | 口径 | 基高 | 底径 | 側径 | | | | | |
| 1-A | 子持壺 全部 | 29.0 | — | — | — | 子壺は5-6個、 子壺のたたき、山根部-削りもで、内面-たた き-削り部の摩耗も見られ、底孔二つになっている | 良好 | | | |
| 1-B | 子持ち壺 脚部 | — | — | — | 17.5 | 沈線2条、透しは3方形は不明 | 外面-底部なで、 内面-脚部方向になで | 良好 | | |
| 2 | 子持壺 底部下方 | — | — | 16.5 | 11.9 | — | 外面-底部のたたき、焼-方向の粗な で、内面-底部たたき、脚部なで、 | 良好 | | |

第6節 7区の調査

概要

本調査区は、標高25m～30mの北西にのびる尾根頂部に相当する。北側に派生する短めの尾根の付け根部分までを鳥田池遺跡とし、それから西側については「岸尾遺跡」として調査を95年度におこなっている。なお、1992年度のトレンチ調査によって、木棺墓と溝状遺構をすでに検出しており、木棺墓群等の遺構がいくつか存在している可能性が考えられていたものである。

1994年度の調査開始時点において、全面的に伐採をおこなった結果、調査区西端部に低いマウンドをもつ古墳と推定される高まりを確認し、さらに、尾根主軸に直交して溝状に凹む個所がいくつか認められた。この調査前の地形状況から92年度に検出した木棺墓は、溝によって区切られた古墳の主体部である可能性が考えられ、また、同様の古墳がいくつか存在しているものと推定された。

そして、いくつかの古墳が存在している可能性が考えられたことから、調査前の地形測量を行い、ある程度、古墳の実態を把握した後に発掘調査を行うこととした。

調査前の地形状況（第301図）

地形測量は、25cmセンターによる1/100スケールでおこなった。測量の結果、西端の尾根頂部の広がる部分で円形を呈する高さの低い古墳1基とそれより東側で、溝によって区画された古墳4基を確認した。

西端で確認した古墳は、その北側部分に傾斜の変わら部分が認められ、狭いテラスが廻っている状況であった。南側部分は、コンタが乱れており、後世の改変を受けているものと思われ、明瞭に墳裾部が確認できるものではなかった。

東側で確認した古墳は、北東側の斜面で、傾斜の変わら部分が認められ、墳裾と推定されるものであった。また、それに対応するように尾根主軸に直交して溝状の凹みが3個認められた。溝状の凹みは、尾根主軸より南西側では認められず、この部分は広い平坦面が存在していた。おそらく、古墳の南北側は、後世の削平で改変され、現状を留めていない可能性が推定された。

以上のように、5基の古墳によって構成される古墳群の存在が明らかになり、尾根頂部の平坦部は後世の改変によるものであると判明し、その部分にかかる古墳は現状が損なわれているものと考えられた。なお、古墳は、東側から順番に1号、2号、3号、4号、5号墳と呼称することとした。

調査の方法

調査は、尾根の主軸に沿って土層観察用のベルトを設け、さらに、尾根を横断する形で10mごとに土層観察用のベルトを設けて調査を行うこととした。そして、遺物が出土した場合には、遺構に伴わないものは、そのまま取上げ、遺構に伴うものは、その位置を記録して取り上げた。

また、主体部検出時には、新たに主軸を設定して4分法によって調査することとした。

検出遺構（第303図）

調査の結果、木棺等を含めた主体部をもつ古墳5基を検出し、古墳を区画している溝状遺構を5条確認した。この各遺構について詳細を次項から述べることとした。

(1)溝状遺構

検出した溝状遺構は5条存在し、東側からS D01、02、03、04、05と呼称している。溝状遺構は、すべて占墳を区画する性格をもつものである。

[S D01] (第303図)

調査区の北端の標高29m付近で検出し、この付近から尾根は傾斜が変わり、やや急傾斜になり、5区の尾根最頂部にいたる。また、1号墳を区画する性格をもつ溝である。

平面形は、北東部分で北側に若干折れるL字状を呈し、幅0.4~1.8m、深さ0.2mを測り、全長6.2mにわたるものである。断面はU字形を呈し、黒褐色土(第302図2層)が堆積していた。遺物等は、出土していない。

[S D02] (第303図)

標高28m付近で検出したもので、1、2号墳を区画している溝である。平面形は、北東側で北側に折れるもので、L字状に近い形を呈するものである。規模は、幅1.1m、深さ0.1~0.4mを測り、全長8.0mにわたるものである。断面は、U字形を呈し、覆土は褐色土・暗黒褐色土・暗赤褐色土(第302図3~5層)が堆積しているものである。なお、遺物等は出土しなかった。

[S D03] (第304図)

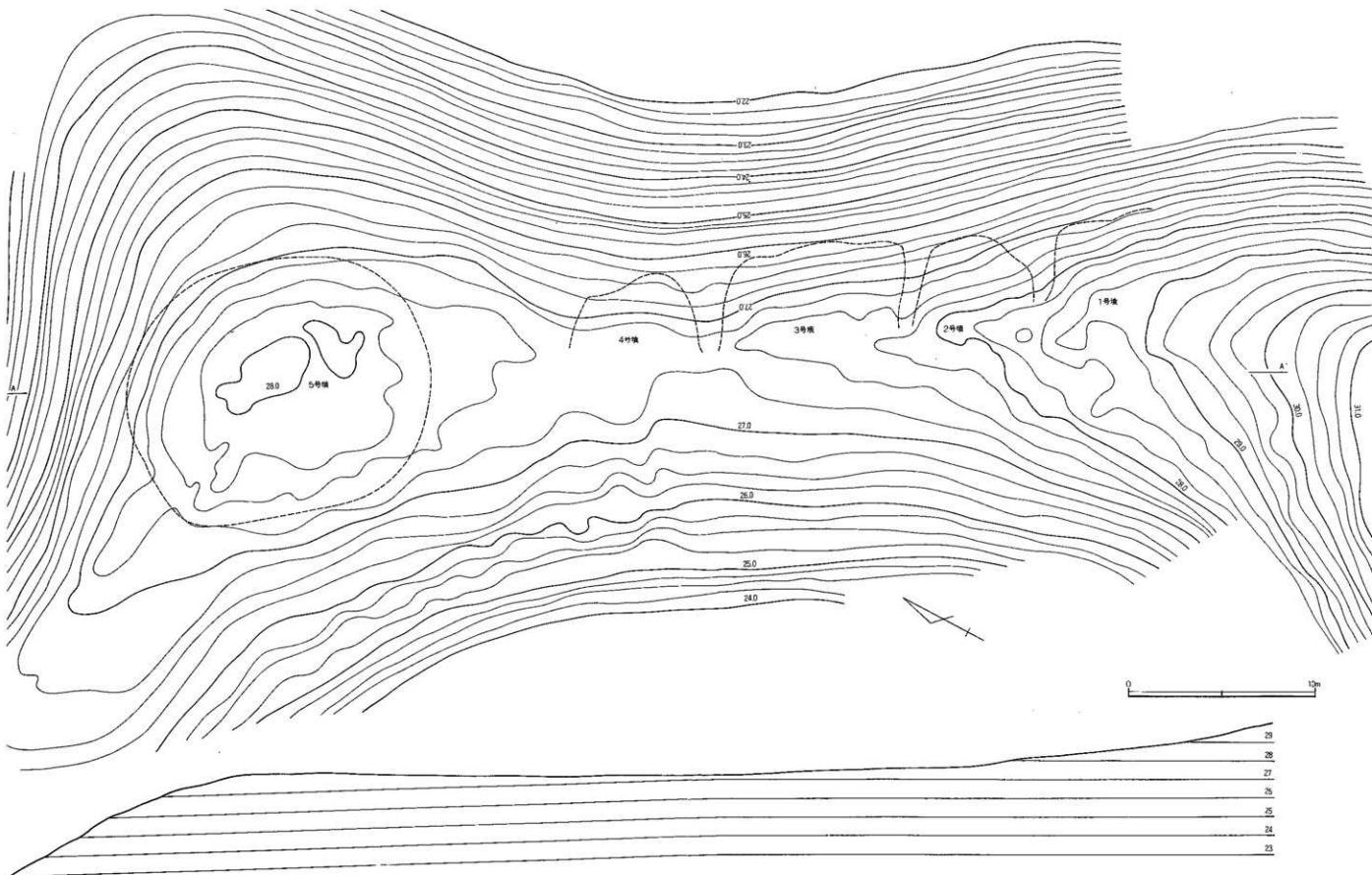
標高27.5m付近で検出したもので、2、3号墳を区画している溝である。平面形は、直線的なもので、規模は、幅1.0~1.8m、深さ0.1~0.3mを測り、全長7.4mにわたる。断面は、U字形で、覆土は褐色土・暗橙褐色土・暗黒褐色土・暗赤褐色土(第302図6~9層)が堆積している。遺物は、暗黒褐色土から土師器が出土している(第313図)。土師器は小片で、詳細については不明である。

[S D04] (第304図)

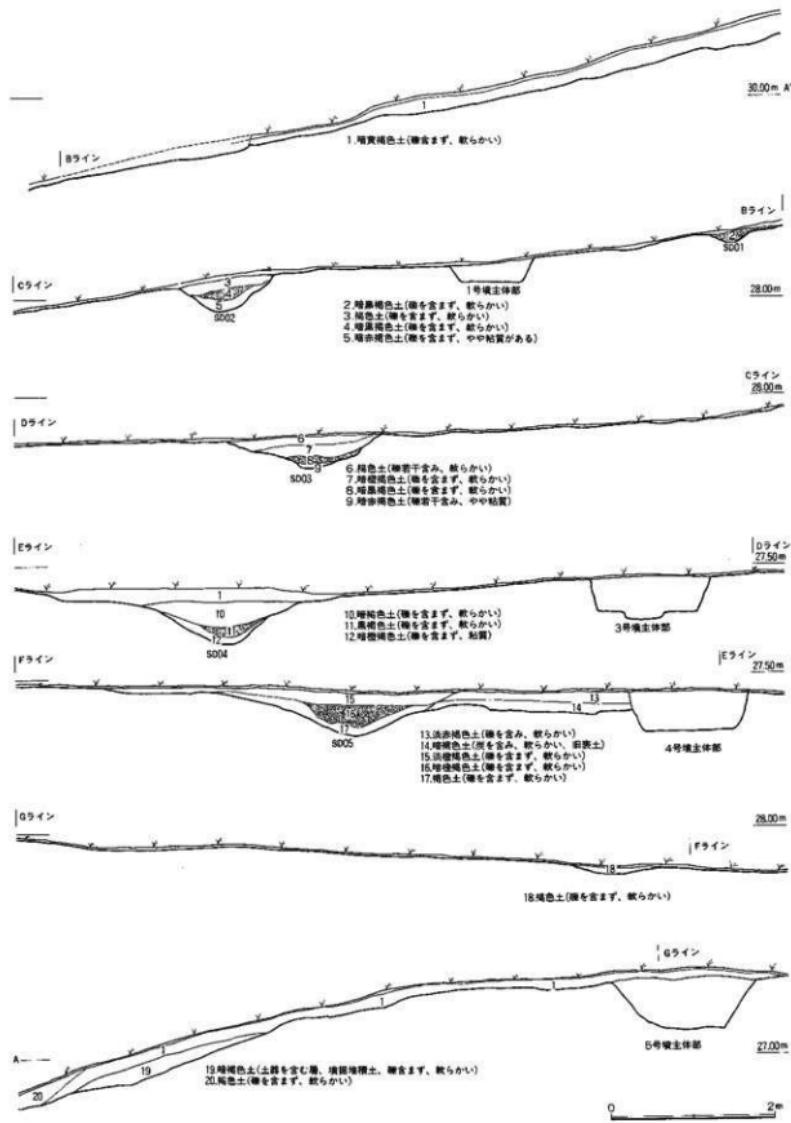
標高27m付近で検出しており、3、4号墳を区画している溝である。平面形は、直線的なもので北東側で広く「ハ」の字に広がるものである。規模は、幅1.6~2.3m、深さ0.1~0.3mを測り、全長9.6mにわたるものである。断面は、U字形を呈し、暗褐色土・黒褐色土・暗橙褐色土(第302図10~12層)が堆積している。遺物は、黒褐色土からは、土師器が出土している(第304図)。土師器は、小片が多く詳細の分かることは少ないが、第313図の8は、底部付近の破片であり、脚付の环になるものと考えられ、時期は、凡そ平安時代後半頃のものと推定される。

[S D05] (第304図)

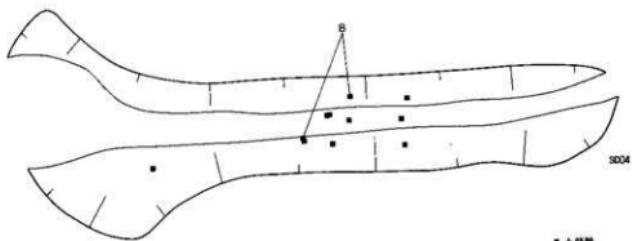
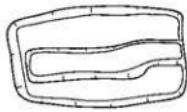
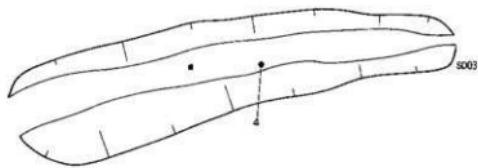
標高27m付近で検出し、5号墳を区画している溝である。平面形は南西側で南側に折れるものである。規模は、幅1.4m、深さ0.1~0.3mを測り、全長8.6mにわたるものである。断面形は、U字形を呈し、覆土は淡橙褐色土・暗橙褐色土・褐色土(第302図15~17層)が堆積している。遺物は、暗橙褐色土から多数の土師器と須恵器が出土している(第304図)。いずれの遺物も小片であるため、詳細については、不明なものである。



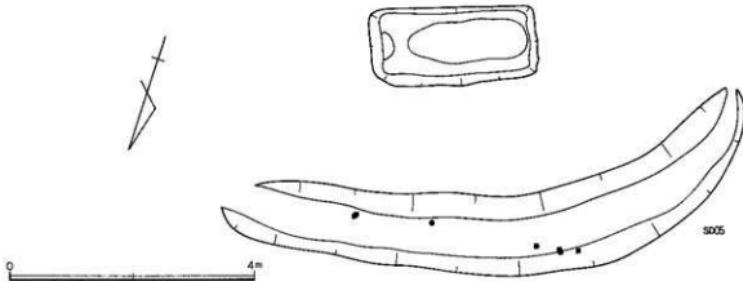
第301図 7区古墳群調査前測量図 ($S=1:200$)



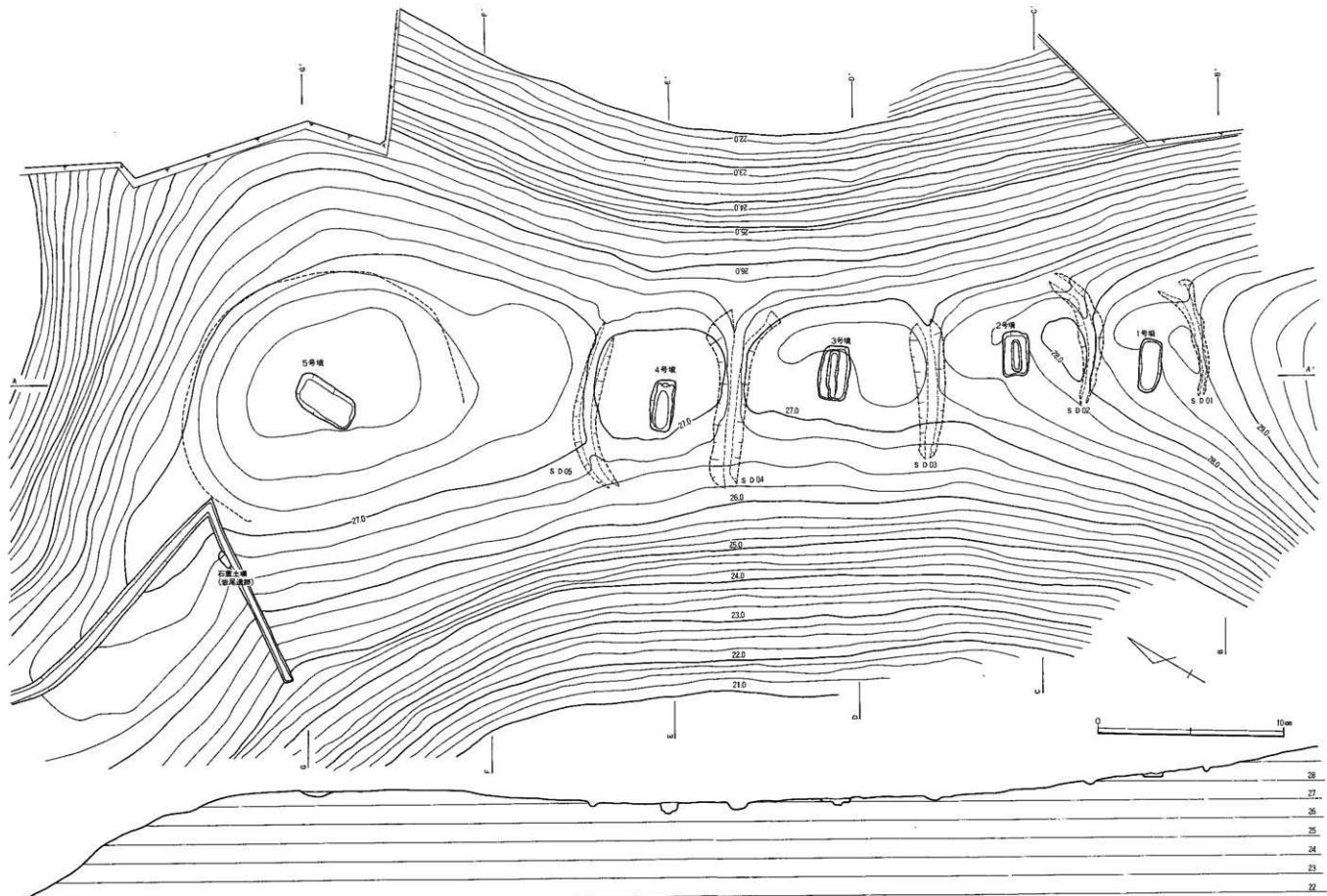
第302図 7区古墳群縦断土層実測図 (S=1:60)



● 土器部
● 漆器部



第304圖 7區SD03・04・05遺物出土狀況實測圖 ($S=1:40$)



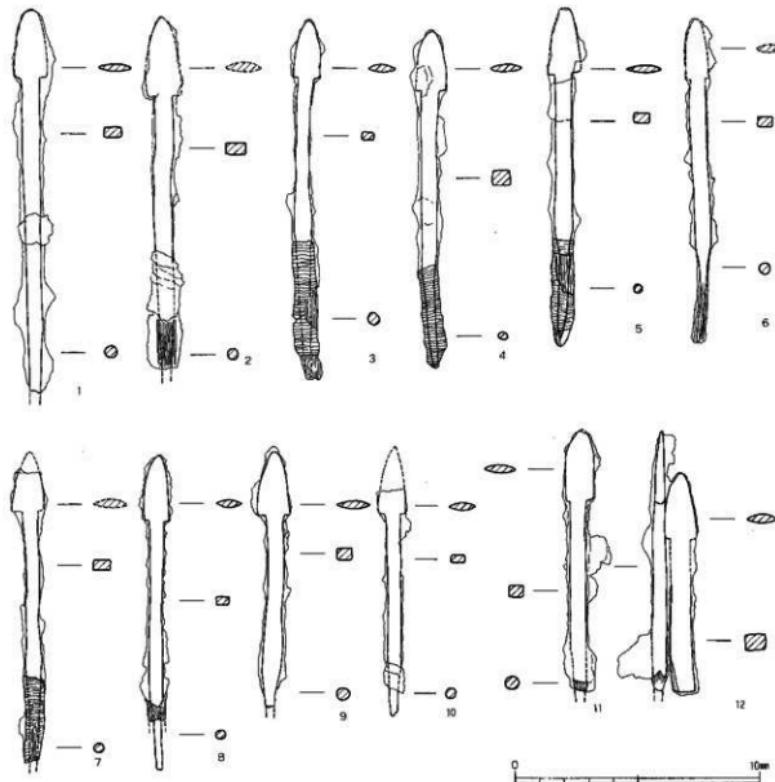
第303圖 7區古墳群調查後測量圖 ($S=1:200$)

(2)古墳群

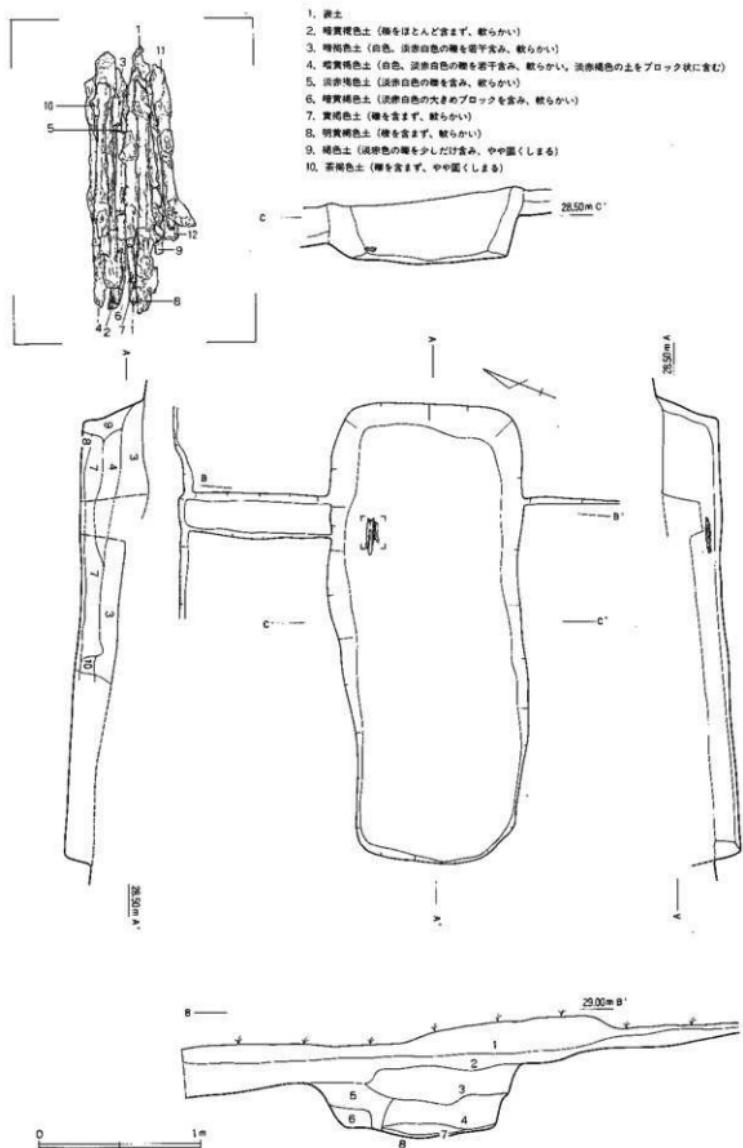
[1号墳] (第305図)

S D01、02によって区画された古墳である。墳丘は、基本的に地山を削りだして築造しているものと考えられ、盛土については、土層図（第302、306図）からも分かるように確認されなかった。墳形は、方墳と考えられ、東西6m以上、南北5.5mを測り、高さ0.7mと推定される。また、主体部は、溝で区画された範囲の中心部より南西側に寄った位置で検出した。本来古墳の中央部に主体部が存在しているものとすれば、区画溝はもう少し南西側に伸びていたものと推定される。

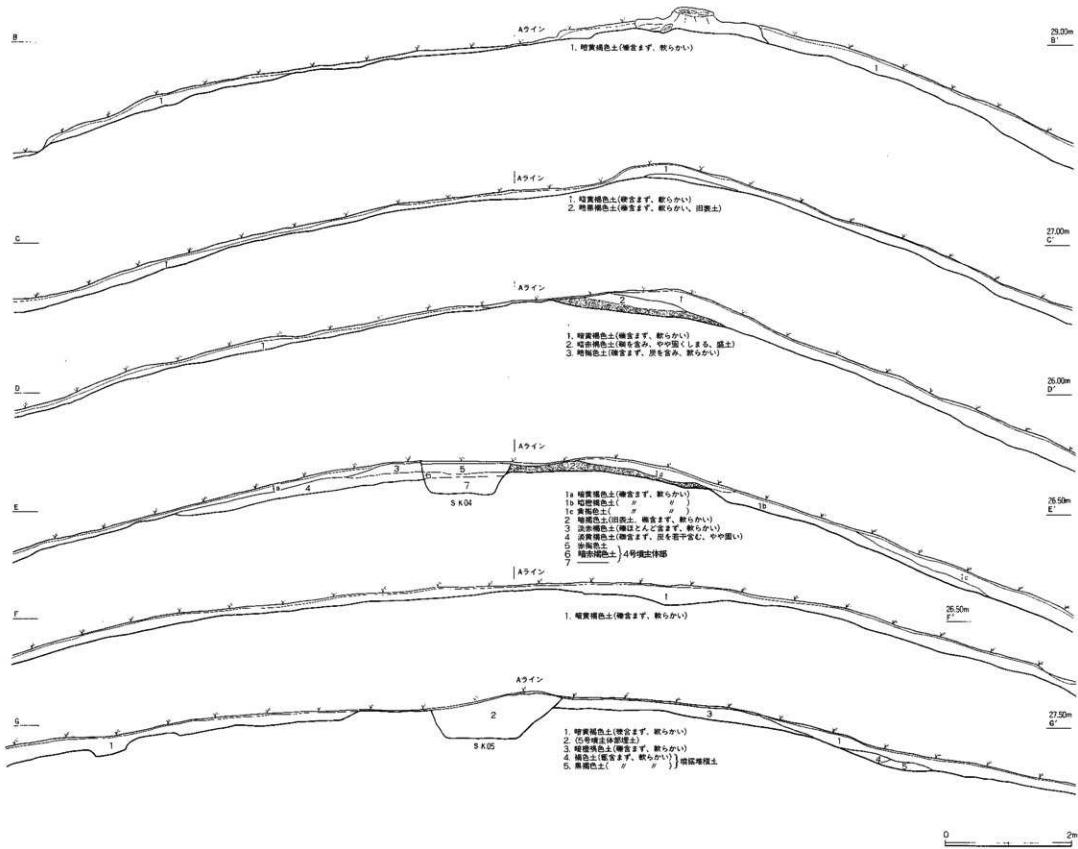
主体部（第307図）は、墓壇内に木棺を納めたものと考えられるものである。墓壇は、主軸をN-Eをとり、長方形を呈するもので、東側が幅広になるものである。規模は、長さ1.8m、幅は東側で1.2m、西側で1.0mを測り、深さは0.34mである。また、床面は平坦で、西側に向かって低く傾斜しているものである。



第305図 7区1号墳主体部出土鉄鏃実測図 (S=1:2)



第307図 7区1号墳主体部実測図 ($S=1:30$)



第306図 7区古墳群横断土層実測図 (S=1:60)

墓壙内の覆土（第307図）は、大きく人為的な埋土（5、6、8層）と木棺腐朽後の二次的な流土（3、4、7、8層）の2つの性格のものに分けられるものである。木棺は腐朽しており詳細は不明であるが、土層からその痕跡を伺うことができるものである。横断土層では、裏込めの5・6層の南（右）側に置かれていたものと考えられ、南壁に沿うように置かれている可能性が考えられる。一方、縦断土層では、裏込めの9層から西側に木棺が存在していたものと考えられる。また、西壁付近の状況については、土層断面を未開化の状態で除去しており不明である。

墓壙内からは、鉄鎌（第305図1～12）が12本まとまった状態で出土している。鎌身部を東側に向けたもので、墓壙内の土層観察から木棺外に副葬されたものと推定される。鉄鎌（第305図1～12）は、すべて長頭鎌であり、鎌身関部は直角のもので、関部（範被）は角のない不明瞭なものである。

また、鉄鎌は、その頭部（範被部）の長さから大きくA類、B類の2つに分けられるものである。A類（1、2）は、頭部長が10cm前後るもので、B類（3～11）は、頭部長が6.5cm～7.5cm程のものである。これらの鉄鎌は、頭部が幅広く厚い点や関部が不明瞭な点といった特徴から古墳時代中期のものと推定される。よって、本古墳は、古墳時代中期のものとして考えられる。

第123表 7区1号墳主体部出土鉄鎌観察表

(単位: cm)

| 番号 | 部種 | 全長 | 頭部長 (刀部) | 刃幅 | 頭部 | 刃部厚 | 頭厚 | 備考 |
|-----|----|---------|-------------|-----|-----|-----|-----|----------|
| -1 | 鉄鎌 | 15.6(8) | 2.8 | 1.3 | 0.7 | 0.3 | 0.5 | 基端部欠 |
| -2 | 鉄鎌 | 14.5 | 3.4 | 1.4 | 0.8 | 0.4 | 0.5 | 樹皮巻、木質残存 |
| -3 | 鉄鎌 | 14.9(8) | 2.4 | 1.1 | 0.5 | 0.3 | 0.3 | 樹皮巻、木質残存 |
| -4 | 鉄鎌 | 14.0 | 2.6 | 1.2 | 0.7 | 0.3 | 0.6 | 樹皮巻残存 |
| -5 | 鉄鎌 | 14.0 | 2.7 | 1.4 | 0.6 | 0.3 | 0.5 | 樹皮巻、木質残存 |
| -6 | 鉄鎌 | 13.3 | 2.4 | 1.0 | 0.6 | 0.3 | 0.4 | 木質残存 |
| -7 | 鉄鎌 | 12.1(8) | 2.5(8) | 1.4 | 0.7 | 0.3 | 0.4 | 樹皮巻残存 |
| -8 | 鉄鎌 | 12.9(8) | 2.7 | 1.1 | 0.6 | 0.3 | 0.4 | 木質一部残存 |
| -9 | 鉄鎌 | 10.6(8) | 2.7 | 1.3 | 0.6 | 0.3 | 0.5 | 基端部欠 |
| -10 | 鉄鎌 | 9.2(8) | 2.7(8) | 1.1 | 0.6 | 0.3 | 0.3 | 樹皮巻一部残存 |
| -11 | 鉄鎌 | 10.6(8) | 2.6 | 1.2 | 0.6 | 0.3 | 0.4 | |
| -12 | 鉄鎌 | 9.0(8) | 2.4 | 1.2 | 0.8 | 0.3 | 0.6 | 木質一部残存 |

[2号墳] (第308図)

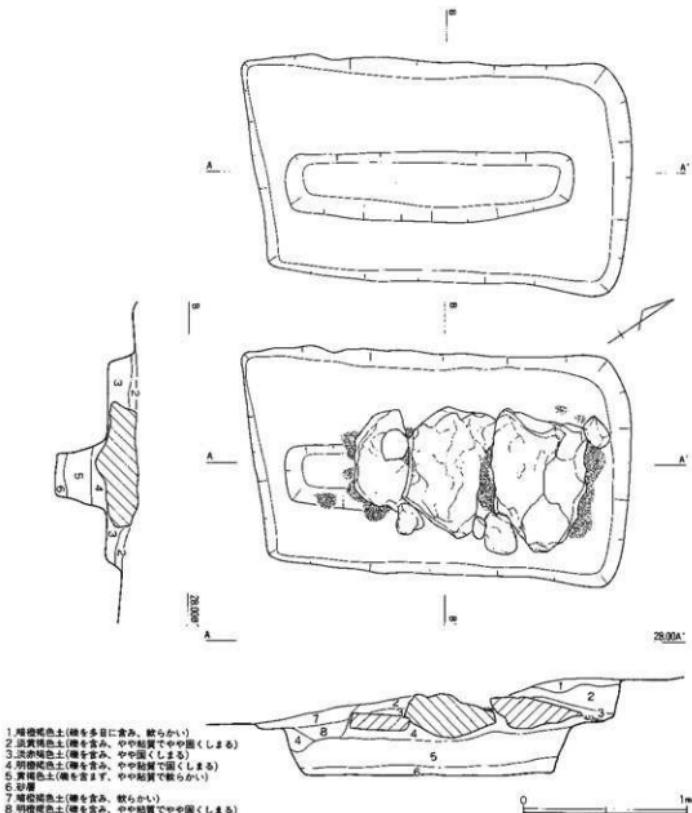
S D02、03によって区画された古墳である。墳丘は、基本的に地山を削り出して築造しているものと考えられる。また、盛土については、土層図（第302、306図）からも分かるように、北東部分の地山上に旧表土と考えられる層（第306図2層）を確認している。このことから本来は盛土を施して築造している古墳と思われる。墳形は、方墳と考えられ、東西7m、南北8.5mを測り、高さ1m程と推定される。

主体部（第308図）は、2段に掘られた墓壙上に自然石を置くことで蓋をするもので、いわゆる、「石蓋土壙」と呼ばれているものである。墓壙は、主軸をN-35°Eにとるもので、上面は長さ2.3m、幅1.35mの長方形を呈すものである。上面から深さ25cm程掘り下げた後に、中軸より南側に細長

い2段目が掘られている。2段目のものは、幅0.4m、長さ1.75m、深さ25cmを測るもので、底面は平坦で水平なものである。石蓋は3個検出し隙間は白色の粘土によって目張りされている。規模は西側のものが最大で東側のもの程小さくなるものである。また、石は大きさは異なるが、南北側の長さは80cm前後に揃えられているものであった。なお、西端部では石が存在せず、墓壙が覆われていないが、この部分にも本来は石が存在しており、後世の削平時に取り除かれたものと考えられる。

墓壙内の覆土（第308図）は、大きく墓壙埋め戻し土（1層～3層）と二次的な流入土（4、5、7、8層）の2つの性格のものに分けられるものである。ただし、墓壙底面上の6層は砂であり意図的に敷かれているものと考えられる。また、この砂層上面からは、人骨と思われるものを検出しているが小片のため詳細については不明である。

古墳の時期については不明確であるが、1号墳と相前後する時期である可能性が考えられる。



第308図 7区2号墳主体部実測図 (S=1:30)

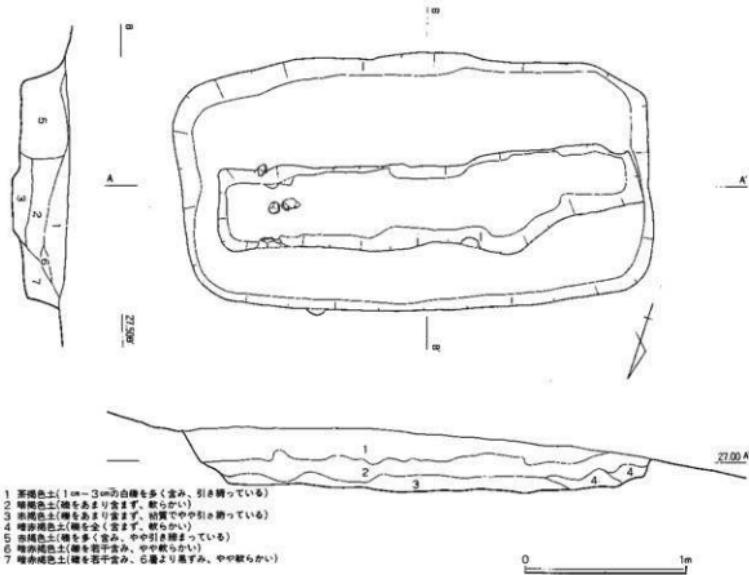
[3号墳] (第309図)

S D03、04によって区画された古墳である。墳丘は、基本的に地山を削り出して築造しているものと考えられが、若干の盛土を施しているものと思われる。盛土については、土層図（第302、306図）からも分かるように、北東部分の地山上で旧表土（第306図3層）と地山礫を含む暗黒褐色の礫上（2層）を確認している。墳形は、方墳と考えられ、高さ0.7m程度を測り、東西10m、南北10.5mのもので、溝で区画された古墳の中では、再大規模のものである。

主体部（第309図）は、2段に掘られた墓壙内に木棺を納めていたものと推定される。墓壙は、主軸をN-72°-Eにとるもので、上面は長さ2.9m、幅1.6mのやや隅丸の長方形を呈すものである。上面から深さ20cm程度掘り下げた後に、中軸より北側により2段目のものが浅く掘られている。2段目のものは、幅0.5m、長さ2.6m、深さ0.15mを測るもので、西端部分が南側に屈曲している不整形な長方形を呈している。おそらくこの部分に木棺が安置されていたものと推測されるものである。

墓壙内の覆土（第309図）は、大きく裏込め土（4層～7層）と木棺腐朽後の2次的な流土（1層～3層）の2つの性格のものに分けられるものである。木棺は腐朽しており詳細は不明であるが、土層からその痕跡を検討すると、横断土層では、裏込めの5・7層の間に置かれていたものと考えられ、これは、2段目に掘り回された部分と凡そ一致するものであった。また、縦断土層では、明確に確認することができなかった。

古墳の時期については明確にできないが、1号墳と相前後する時期のものであろう。



第309図 7区3号墳主体部実測図 (S=1:30)

[4号墳] (第310図)

S D04、05によって区画された古墳である。墳丘は、基本的に地山を削り出して、若干の盛土を施して築造しているものと考えられる。盛土については、横断土層図(第306図)で分かるように、北東部分の地山上に旧表土層(2層)が認められ、南西部分では盛土(3・4層)を確認している。また、縦断土層(第302図)でも旧表土(14層)と盛土(13層)が確認でき、他の古墳に比べ盛土の遺存状況が良好なものであった。本古墳の状況から考えて、溝によって区画された古墳は、基本的に盛土を墳頂部に施しているものである可能性が高いものと推測される。

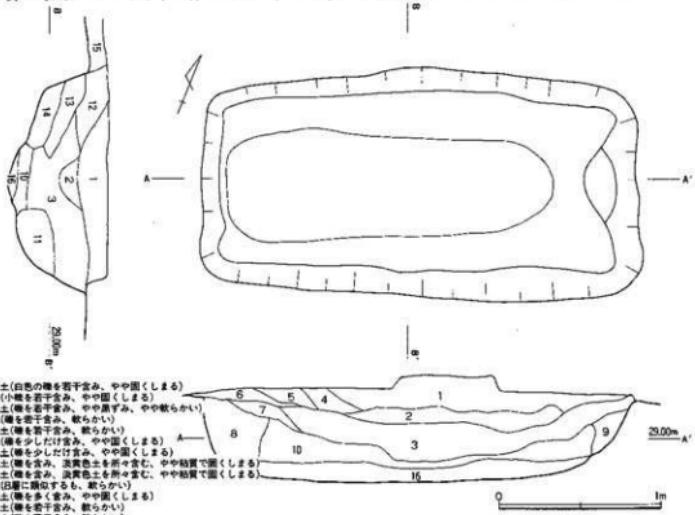
主体部(第310図)は、墓壙内に木棺を納めたものと考えられるものである。墓壙は、盛土が施された後に掘られたものであり、主軸をN-66°-Eにとるものである。平面形は、やや隅丸の長方形を呈するもので、底面が浅く不整形な楕円形に凹められたものである。

墓壙の規模は、長さ2.7m、幅1.3m、深さ0.6mを測る。底面は、横断面から分かるように中心部に向かって傾斜し、中心部は浅くU字形に凹むものである。底面に存在する深い凹みは、長径2.0m、短径0.6mを測り、西側がやや幅広になるものである。

墓壙内の覆土(第310図)は、非常に複雑なもので解釈が困難なものであるが、大きく墓壙埋め戻し土(8、9、11層~14層)と二次的な流入土(1層~7層、10層)の2つの性格のものに分けられるものである。ただし、最下層の16層は、非常に粒子の細かいもので、別の性格もつ土層と思われるものである。

木棺は腐朽しており詳細は不明であるが、墓壙の底面の形状から棺は底が湾曲しているものと考えられるものである。可能性として舟底状の木棺が想定されるが、明確にはできないものである。

古墳の時期については不明確であるが、1号墳と相前後する時期である可能性が考えられる。

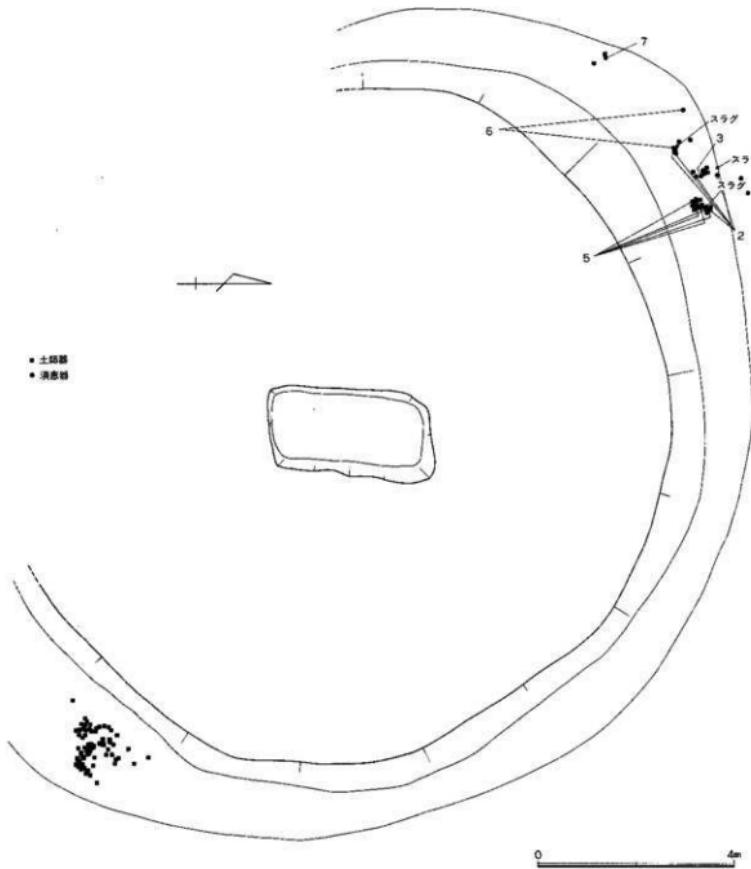


第310図 7区4号墳主体部実測図 (S=1:30)

[5号墳] (第312図)

尾根頂部が広がる部分に立地し、北側は現状を残すものであるが、南側は後世の削平によって改変されているものである。墳丘は、基本的に地山を削りだして築造しているものであり、北側の斜面部分には、狭いテラスを廻らし墳裾としているものである。墳形は円墳で、径15m、高さ0.8m程度を測るものである。

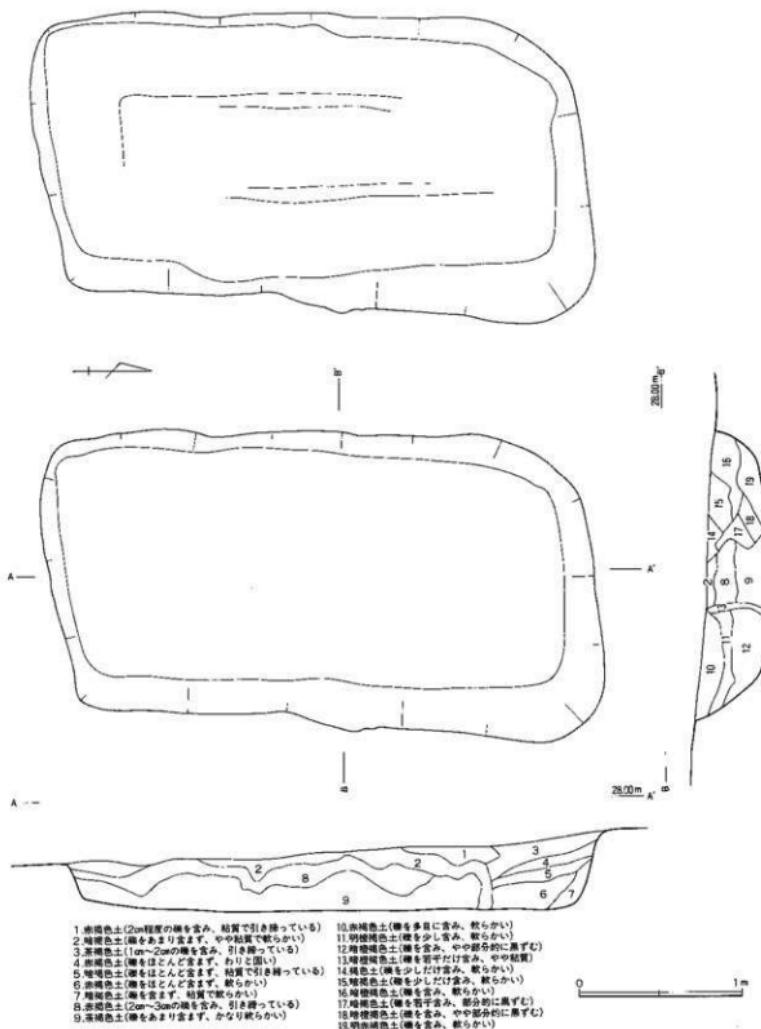
墳裾部分には、暗褐色系の土（第306図4・5層、第302図19層）が堆積し、須恵器、土師器、鉄滓が出土している（第313図）。遺物は、北西部と南東部の2か所から集中して出土しているものである。



第311図 7区5号墳墳裾遺物出土状況実測図 ($S=1:100$)

ある。墓壇は、主軸を南北にとり、平面形は、長方形を呈すものである。規模は、長さ3.4m、幅1.8mを測り、深さは0.4mである。床面は平坦で、若干北側に向かって低く傾斜しているものである。

墓壇内の覆上（第312図）は、大きく人為的な埋土（3層～7層、10～19層）と木棺腐朽後の二次

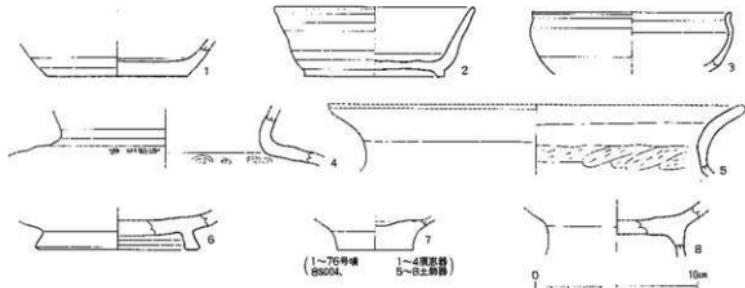


第312図 7区5号墳主体部実測図 (S=1:30)

的な流土（1、2、8、9層）の2つの性格のものに分けられ、2・13層は、木棺の痕跡と解釈できるものであった。木棺は腐朽しており詳細は不明であるが、底面から5cm程上のところまで掘り下げる段階で、平面的に比較的明瞭な痕跡を確認している。木棺の痕跡部分（第312図上段）と思われる部分は、暗褐色を呈し、他と区別できるものであった。側板の痕跡部分は9cmで、幅は外法で0.68mを測るものである。また、小口部分は不明瞭で、組合せ方については明らかにできなかった。なお、長さは2.3m以上のものと推定される。

墳壙部分で出土した遺物（第313図1～7）には、須恵器（1～4、6）、土師器（5、7）、鉄滓（図版20-1）がある。1～3の須恵器は環で、1、2は底部に糸切り痕を残すものであり、3も底部に糸切痕を残すものと形態から推測されるものである。時期は、3点とも奈良時代～平安時代にかけてのものと推測される。7の土師器は、柱状高台をもつもので、底部には糸切り痕が残るものである。時期は、平安時代後半と推測されるものである。全体的に、出土遺物は、奈良時代以降のものであり、直接古墳の築造時期に関係するものと考えることができないものである。

本古墳の時期は、墳壙から出土している遺物が、直接関わらないものであり、明確にできないが、他の古墳と隔てのない時期のものとして推測している。



第313図 7区古墳群出土土器実寸図 (S=1:30)

第124表 7区土器観察表

(単位: cm)

| 番号 | 器種 | 法 量 | | | 形 態 上 の 特 徴 | 調 整 | 色 調 成 | 分 類 | 備 考 |
|----|----------|--------|-----|-----------|------------------------------------|--------|-------------|--------|--------|
| | | 口径 | 底高 | 腹紐 | | | | | |
| 1 | 杯 | - | - | 9.0 | 外面・凹板なし、底部圓錐底あり 内面・凹板なし、静止なし | やや不良 | | | |
| 2 | 杯 高台付 | 12.4 | 4.3 | 8.8 | 外面・凹板なし、底部圓錐底あり 内面・凹板なし | 良好 | | | |
| 3 | 杯 | 12.2 | - | - | 外面・凹板なし 内面・凹板なし | 良好 | | | |
| 4 | 壺 | - | - | - | 外面・口縁部凹板なし、瓶部たたき 内面・口縁部なし、瓶部たたき | 良好 | | | |
| 5 | 壺 | 26.0 | - | - | 外面・横なし、内面・口縁部端部横 なし、箱底・横方向の削り | 良好 | | | |
| 6 | 壺 底部 | - | - | 10.4: 高台付 | 外面・凹板なし、 内面・なし | 良好 | | | |
| 7 | 土師器 杯 | - | - | 4.6 | 外面・なし、底部圓錐底あり 内面・凹板なし | 良好 | | | |
| 8 | 杯 土師器 | - | - | - | 外面・なし 内面・なし | 良好 | | | |

(3)小結

これまで述べてきたように本調査区では、古墳時代中期と推定される5基の古墳から構成される古墳群を検出した。ここでは、検出した古墳について整理し、若干の検討を加えておきたい。

各古墳の概要をまとめると以下のようになる。

| (墳形) | (墳丘規模) | (主体部) | (主体部主軸) | (副葬品) |
|---------|------------------|-------|-------------|-------|
| ・1号墳一方墳 | 6×5.5m、高さ0.7m | 箱形木棺 | 東西(N-68°-E) | 鉄鎌12本 |
| ・2号墳一方墳 | 7×8.5m、高さ1m | 石蓋土壙 | 東西(N-35°-E) | なし |
| ・3号墳一方墳 | 10×10.5m、高さ0.7m | 箱形木棺 | 東西(N-72°-E) | なし |
| ・4号墳一方墳 | 7.5×10.5m、高さ0.5m | 舟形木棺 | 東西(N-60°-E) | なし |
| ・5号墳円墳 | 径15m程、高さ0.8m | 箱形木棺 | 南北 | なし |

以上の検出した古墳の中で、5号墳の様相が他のものに比して異なっている点が指摘されるものである。5号墳は、丘陵の尾根頂部の広がる部分に立地し、1~4号墳とは異なり、溝で区画して墳丘を築成するものではない。また、主体部の主軸が南北をとるもので、東西方向に主軸をとる他の古墳と異なるものである。このように5号墳は、様々な点で他と異なる性格をもつ古墳であるが、それが時期差や被葬者の階層等に起因するものであるかは、判断材料が少なく明確にはできないものである。

そこで、本遺跡の他の調査区で検出している古墳と比較検討してみたい。他の調査区で古墳時代中期以前と推定される古墳として、1区1号墳と5区3号墳が挙げられる。

| (墳形) | (墳丘規模) | (主体部) | (主体部主軸) | (副葬品) |
|----------|-------------|-------|------------|-------------|
| ・1区1号墳円墳 | 径11m、高さ1m | 消失 | 不明 | 周溝より須恵器、土師器 |
| ・5区3号墳円墳 | 径11m、高さ0.6m | 木棺か? | 南北(N-1°-W) | なし |

以上の2つの古墳は、尾根頂部が広がり、眺望が良好な位置に存在するもので、5号墳と類似した立地のものである。さらにが円墳である点も5号墳と一致しており、このことから眺望が良い尾根の広がる部分に立地する古墳は、円墳であると考えられるものである。また、5区3号墳の主体部は、主軸を南北にとるものであり、この点についても5号墳と一致するものである。

時期的には、1区1号墳が、出土須恵器から出雲1期(TK47並行)と考えられるものであるが、このことから5号墳、5区3号墳も同時期として捉えて良いものかは、現段階では明確にできない。

また、同一丘陵に位置している島田遺跡、寺床遺跡等には、古墳時代中期と推定される古墳群が存在している。これらを見ると、島田1号墳、寺床2、4号墳では、出雲1期の須恵器が出土しており、本遺跡の1区1号墳と同時期のものである。墳形は、島田1号墳が円墳で寺床2、4号墳が方墳であり、必ずしも出雲1期のものが円墳とは限らないものであることが分かる。また、寺床遺跡では、本調査区で検出したものと同じように、溝で区画された古墳が少なくとも4基存在し、古墳時代中期後半以降のものと考えられている。このことから本調査区の古墳群も同時期である可能性は高い。

以上、5区及び同一丘陵上の古墳について検討してきたが、墳形の相違の背景や横穴墓と時期的にどのような関係があるかについては未解明な点が多い。そして、今後の調査及び周辺地域の古墳群との検討を要することは言うまでもないが、それらを検討していく上で本調査区の古墳群は、一つの検討材料を提供したものと考えられる。

第7節 8区の調査

概要

8区は、島田池遺跡の北西側の丘陵斜面とその下方に存在する谷状の緩斜面である。造構が位置するのは、丘陵の斜面とその下方の緩斜面に分けられる。8区からは、掘立柱建物址3棟、土壙2基、段状造構4、溝状造構1、その他の造構1である。

掘立柱建物址

S B01 (第317図)

丘陵斜面の下方を削り出して平坦面を作っており、ほぼ南西を向いて位置している。床面が一部流出しており、平坦面の規模は現状で長辺が12.0m、短辺は3.5mを計り、高さは最も高いところで約1.1mである。平坦面の斜面側に溝が2つあり、北側のものは幅約24cm、南側のものは約34cmである。平坦面からは桁行3間(4.6m)の掘立柱建物址が検出された。柱間の距離はそれぞれ約1.5mである。柱穴の規模は検出面で円形をしており、径約35cm、深さ約40cm前後のものが多く、埋土は淡灰黄～淡黄茶褐色土である。梁行に対応する位置からは柱穴になると思われるピットは検出されなかった。床面や埋土から須恵器、土師器が出土した。床面と考えられる淡灰黄褐色土から出土した土器は少なく、いずれも小片である。(第327・328図15・16)。また、埋土より鉄が出土した。(第336図7)

S B02 (第317・319図)

谷底部の緩斜面の北側に位置している。S B01との前後関係は不明であるが、SD01やSB03には先行すると考えられる。ほぼ南北方向に長軸を持つ、桁行3間(7.3m) 梁行2間(4.7m)の掘立柱建物址である。柱間の距離はそれぞれ約2.4mである。柱穴は円形～楕円形で、その規模は検出面で径約0.6～0.8m、深さ約0.4～0.5mの比較的大きいものが多い。柱穴の断面の観察から、柱の太さは約10cm程度であったと推測される。ほとんどの柱穴の埋土から土師器小片が出土した。

建物址の北寄りの部分に長楕円形の土壙SK02が検出された。

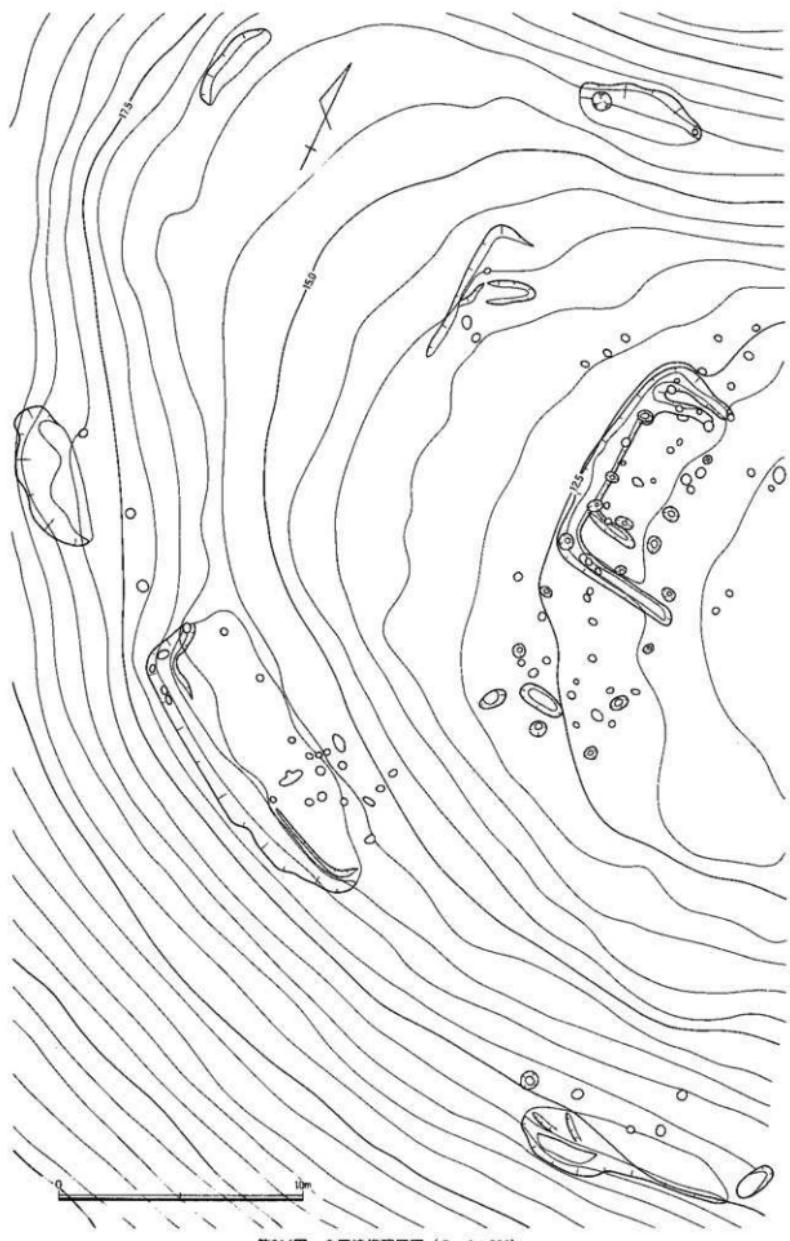
床面は検出できなかつたが、柱穴や埋土から須恵器・土師器が出土した。(第328図)

S B03 (第317・318図)

谷底部の緩斜面の南側に位置している。S B03に伴うと考えられる溝SD01の検出面ではSB02の検出面ではSB03は確認できなかつたので、SB03はSB02に後出すると考えられる。ほぼ南北方向に長軸を持つ、桁行3間(4.2m) 梁行2間(3.0～3.2m)の掘立柱建物址である。柱穴距離はそれぞれ約1.4～1.5mである。柱穴は円形～楕円形が多く、その規模は検出面で約0.3～0.6m、深さ約0.3～0.5mである。埋土は暗褐色～淡茶褐色土のものが多い。埋土から土師器小片が出土したものがある。

建物址のやや南寄りの位置から、焼土と思われる赤褐色土が集中して検出された。

床面と考えられる面や柱穴(第329図1～11)、埋土と考えられる淡茶褐色土から須恵器・土師器が出土した(第329図12～19)。また、埋土から輪の羽口が出土しており、鍛冶を行なったと考えられる(第336図1、2)。



第314図 8区造構配置図 ($S=1:200$)

段状遺構

段状遺構1（第320図）

谷部斜面の西側、調査区の西部に南を向いて位置している。斜面側が一部流失しており、平坦面の規模は現状で長さ8.9m、幅1.4mで、高さは最も高いところで1.0mである。柱穴を検出することはできなかったが、断面の観察では何度かの使用がうかがえる。まず高い側に深さ約30cm程度斜面をカットした面がつくられ、次にそれを切る形で谷側に面がつくられる。最後に面の中程を約30cm程度カットして、最後の面がつくられており、最低3回の使用面を想定することができる。柱穴を検出できなかったので、掘立柱建物址ではなく、段状遺構と考えた。

埋土から弥生土器と考えられる小破片が出土し、この遺構の時期としては、すぐ西側にあるSK01と関連があると考えられ、弥生時代中期末と考えられる。

なお、床面に遺存していた炭化物を学習院大学年代測定室に計測していただいた。結果は後述するが、炭素14年代では弥生時代中期を中心とする時期が出ている。

段状遺構2（第321図）

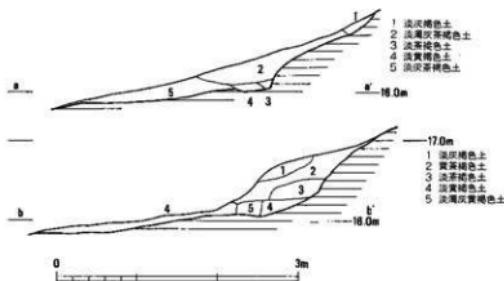
谷部斜面の中程に南西方向を向いて位置している。斜面を削り出して平坦面を作っており、平坦面の規模は現状で長さ5.4m、幅1.4mで、高さは最も高いところで約0.8mを測る。斜面側に2つビットを持つが、その性格は不明である。この遺構の付近から須恵器細片が出土した。

この遺構の時期は直接伴う遺物がないので不明であるが、遺構の下方から須恵器の壺片が出土している（第331図8）ので、他の遺構同様8世紀後半代の時期が考えられる。

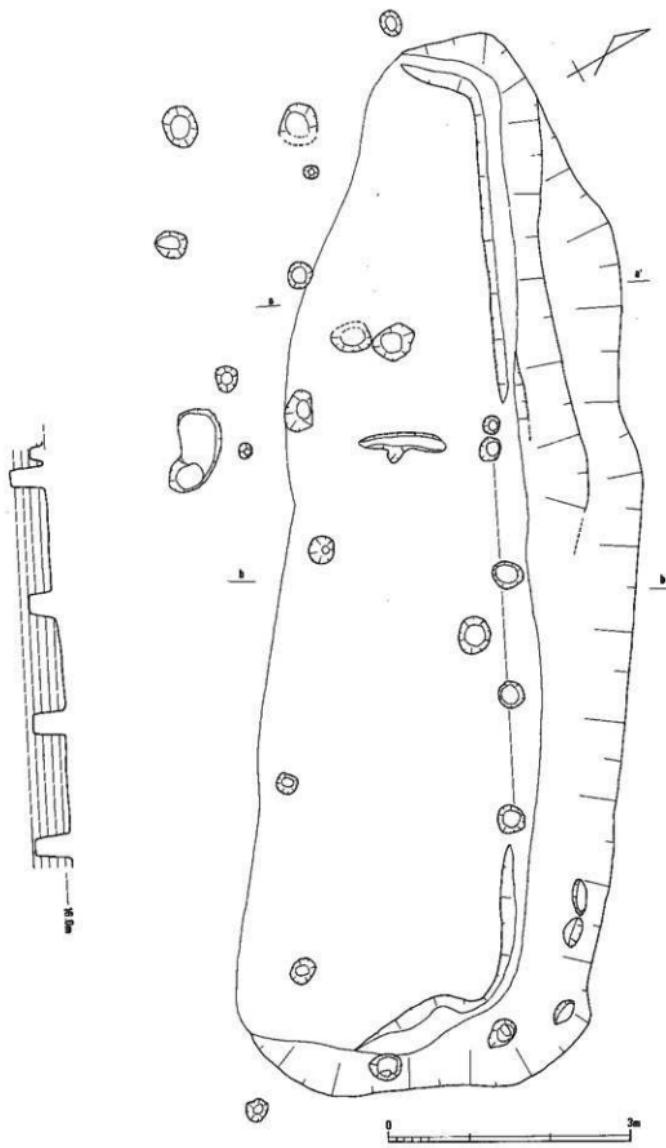
段状遺構3（第321図）

谷部の奥まった所の下方の、傾斜変換点付近に北西を向いて位置している。斜面を削り出して平坦面を作っており、平坦面の規模は現状で長さ3.7m、幅0.8mで、高さは最も高い所で約0.4mを測る。埋土は淡灰黃褐色土である。

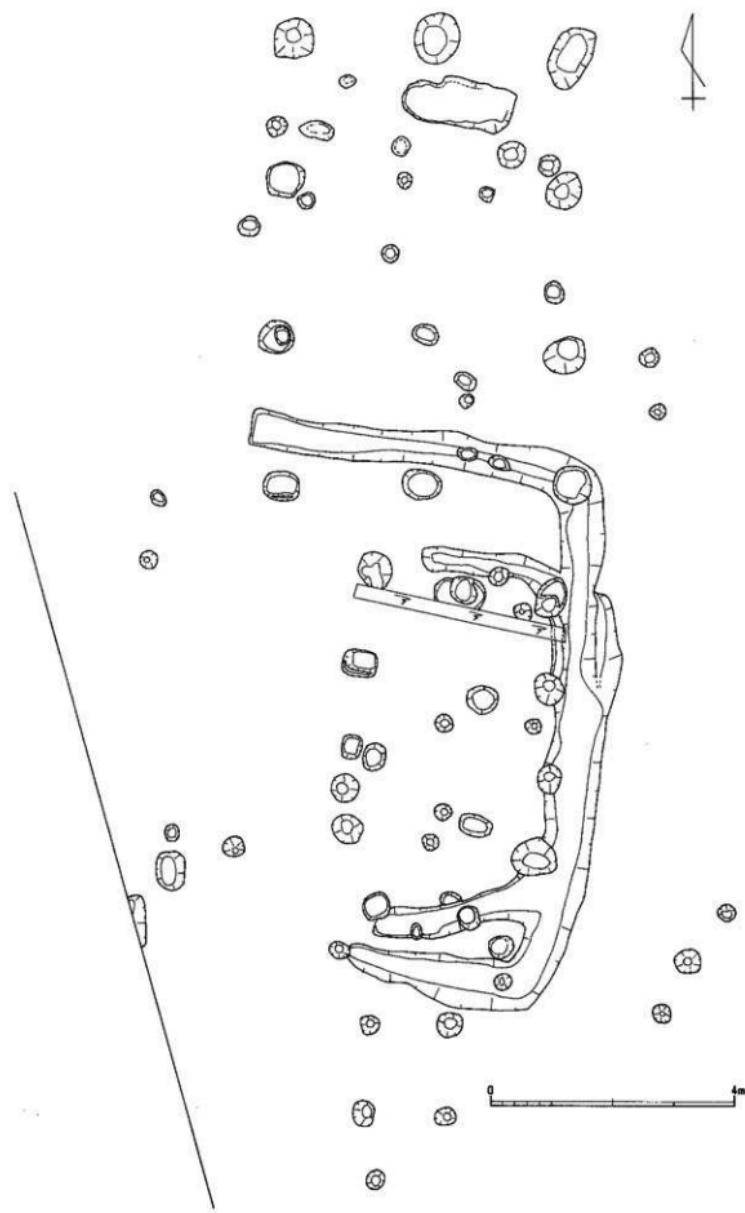
遺構に伴う遺物が出土しなかったので時期は不明であるが、他の遺構同様8世紀後半代の時期が考えられる。



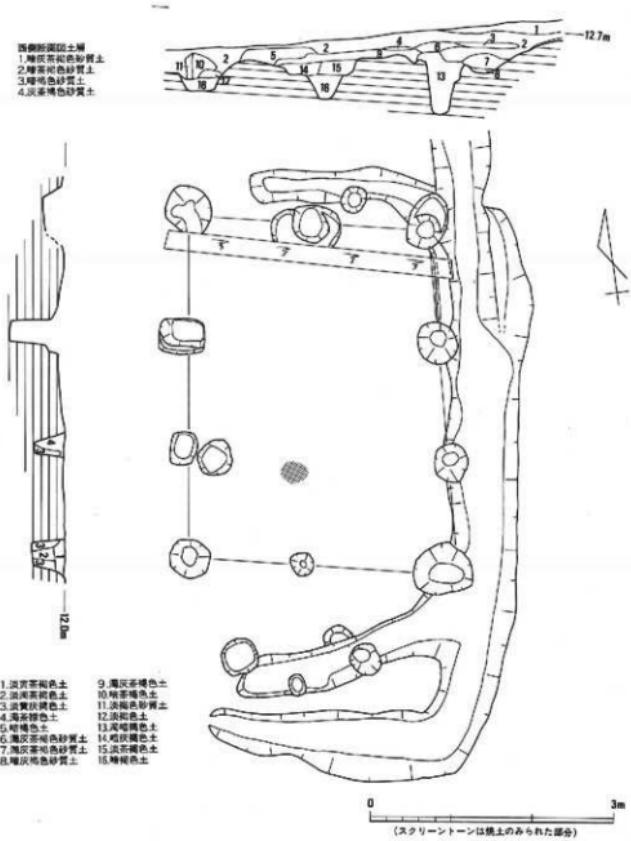
第315図 8区SB01土層断面図 (S=1:60)



第316図 8区SB01遺構実測図 (S=1:60)



第317図 8区SB02・03造構実測図 ($S=1:80$)

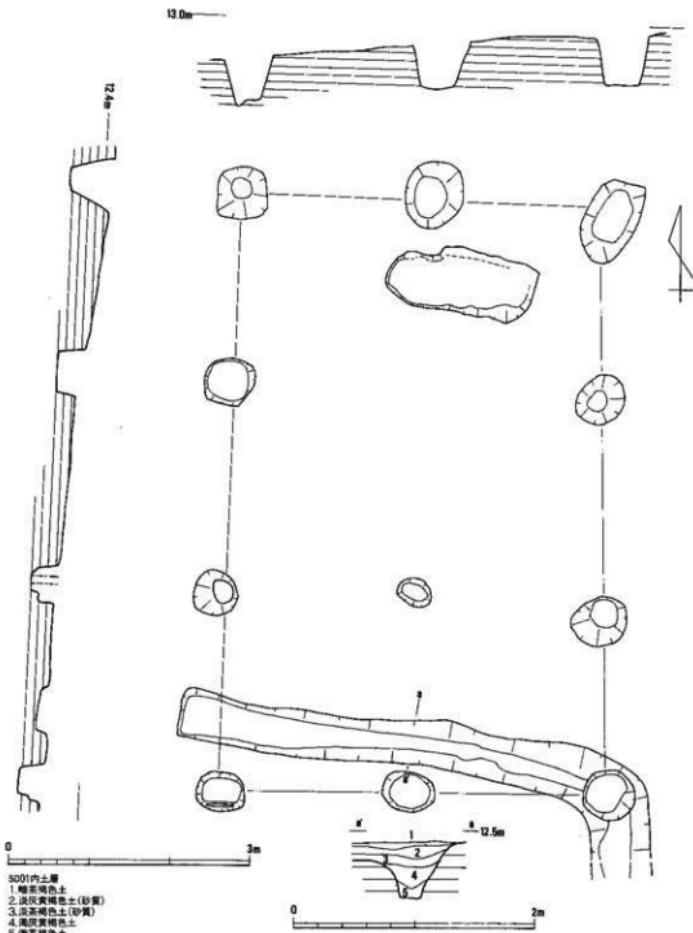


第318図 8区SB03造構実測図 (S=1:60)

段状造構4（第321図）

谷部斜面の下方に、ほぼ北を向いて位置している。斜面を割り出して平坦面を作り出しておらず、平坦面の規模は現状で長さ5.2m、幅0.9mで、高さは最も高い所で約0.8mを測る。埋土は3層に分かれる。

埋土からは須恵器細片が出土した。また、この造構の東側や周辺から須恵器の甕などが出土した（第331図9～13）が、これらの遺物が直接この造構に伴うかどうかは不明であるが、この造構の時期は8世紀後半と考えられる。



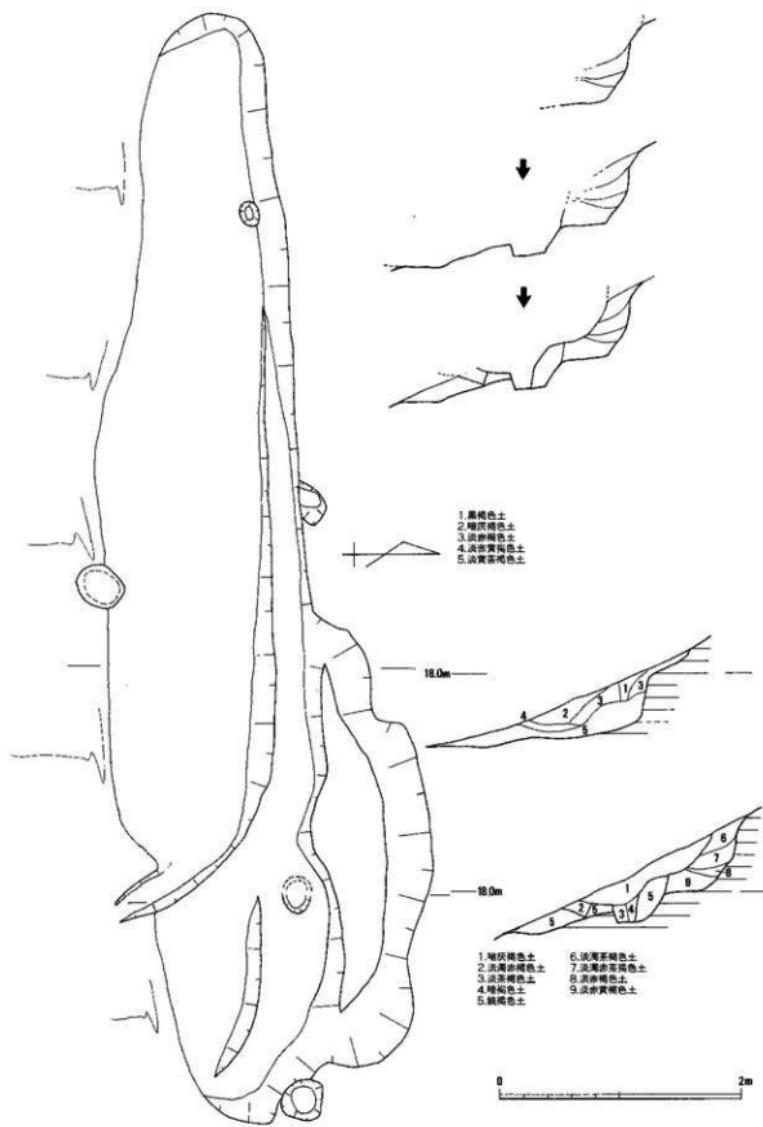
第319図 8区SB03・SK02・SD01遺構実測図 (S=1:60)、SD01土層断面図 (1:40)

溝

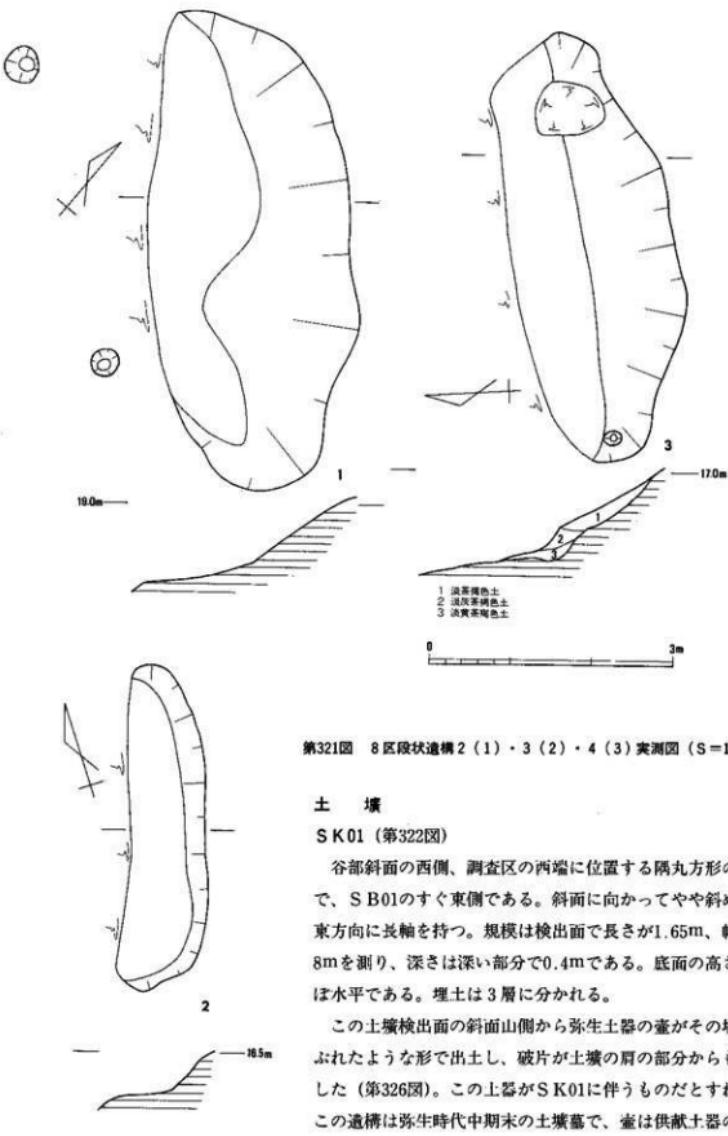
S D01 (第317図)

S B03に伴うと考えられる、断面逆台形の溝である。S B03の周囲を「コ」字形に巡るが、何度も掘り替えがあるようであるが把握できなかった。検出面での長さは16.6m、幅は0.6~0.8mを測り、深さは最大で約0.3mである。埋土は2層に分かれる。

埋土から須恵器・土師器片が出土した (第331図 1~7)。



第320図 8区段状造構1実測図 ($S=1:40$)



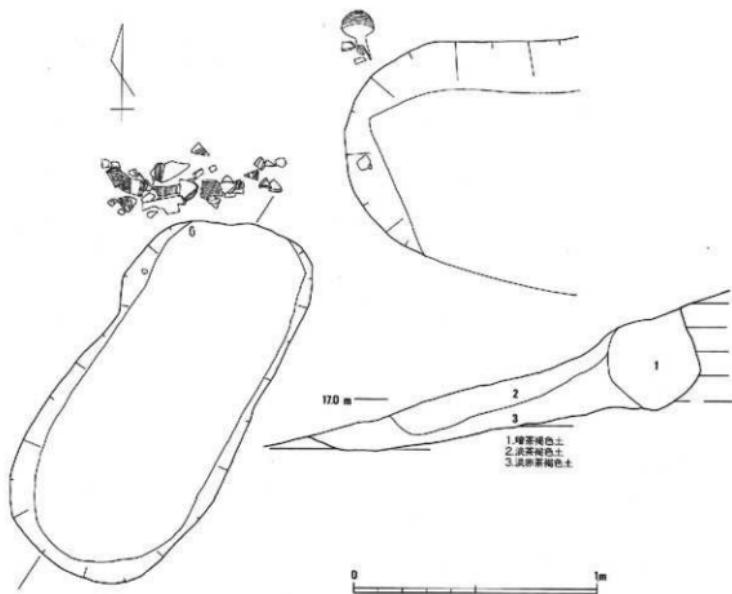
第321図 8区段状遺構 2(1)・3(2)・4(3)実測図 ($S=1:60$)

土壤

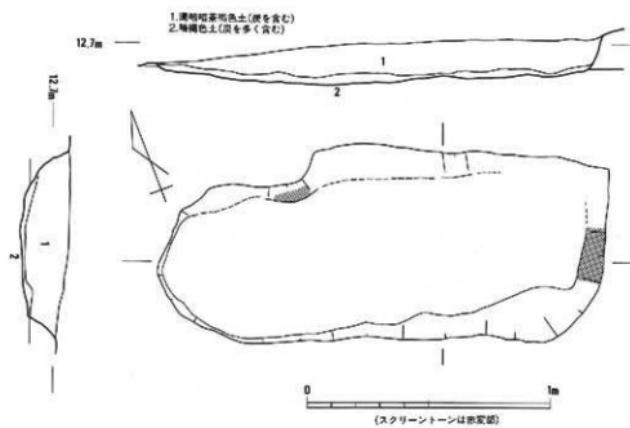
S K01 (第322図)

谷部斜面の西側、調査区の西端に位置する隅丸方形の土壤で、S B01のすぐ東側である。斜面に向かってやや斜めの北東方向に長軸を持つ。規模は検出面で長さが1.65m、幅は0.8mを測り、深さは深い部分で0.4mである。底面の高さはほぼ水平である。埋土は3層に分かれる。

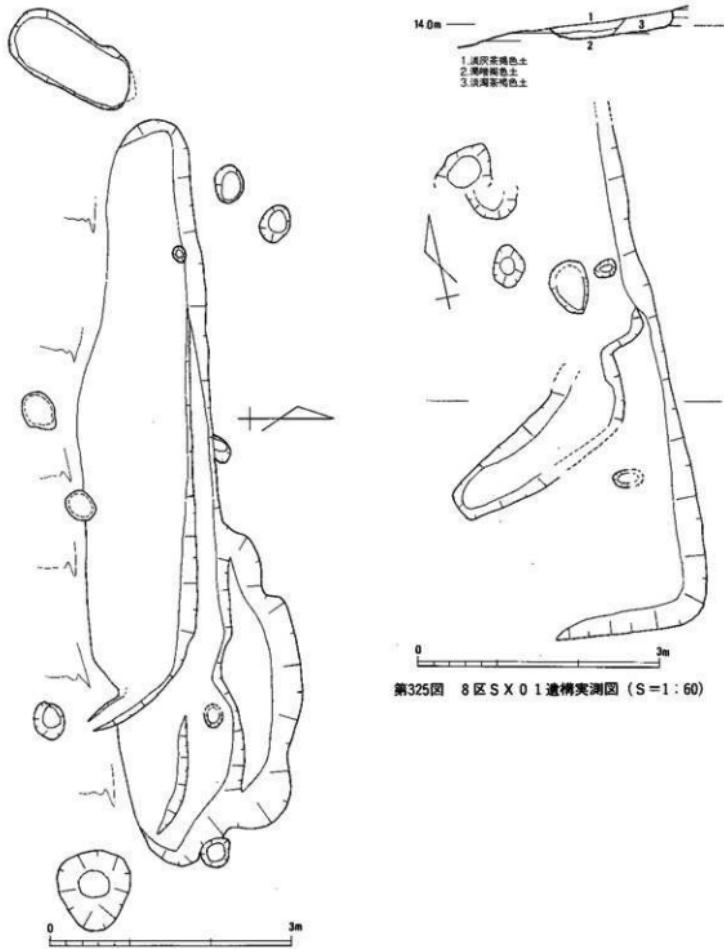
この土壤検出面の斜面山側から弥生土器の壺がその場でつぶれたような形で出土し、破片が土壤の肩の部分からも出土した(第326図)。この土器がS K01に伴うものだとすれば、この遺構は弥生時代中期末の土壤墓で、壺は供獻土器の可能性がある。



第322図 8区SK 0 1 造構実測図 ($S=1:20$)



第323図 8区SK 0 2 造構実測図 ($S=1:20$)



第325図 8区SK 01造構実測図 (S=1:60)

第324図 8区段状造構1、SK 01造構実測図 (S=1:60)

SK 02 (第323図)

S B02の北側で検出した、隅丸長方形の土壙である。ほぼ東西方向に長軸を持ち、検出面での規模は、長さが1.83m、幅は0.82mを測り、深さは約0.2mである。埋上は土器細片や炭を含んだ濁暗茶褐色土で、底面に炭を多く含んだ暗褐色土が薄く堆積していた。埋上から土師器細片と鉄滓（第336図6）が出土した。土壙の北側と東側の壁面が赤変しており、鉄滓や炭の出土と合わせてこの土壙は鐵冶を行なった場所と考えられる。

その他の遺構

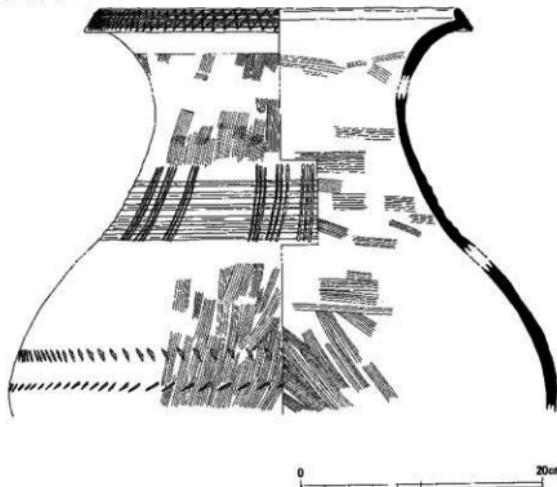
S X01 (第325図)

谷部の南側緩斜面に位置する。緩斜面を削り出して平坦面を作っており、ほぼ南北方向に長軸を持つ。規模は検出面で長さが6.2m、幅は2.8mを測り、深さは約0.2mである。ピットと溝状の落ち込みが検出されたが、建物址とは考えにくい。埋土は3層に分かれる。

この遺構の性格は不明であるが、埋土から円面鏡（第330図5）と広口壺（同4）の他、須恵器が出上した（同2・3）。遺構の性格は不明であるが、出土遺物から時期は8世紀後半代と考えられる。

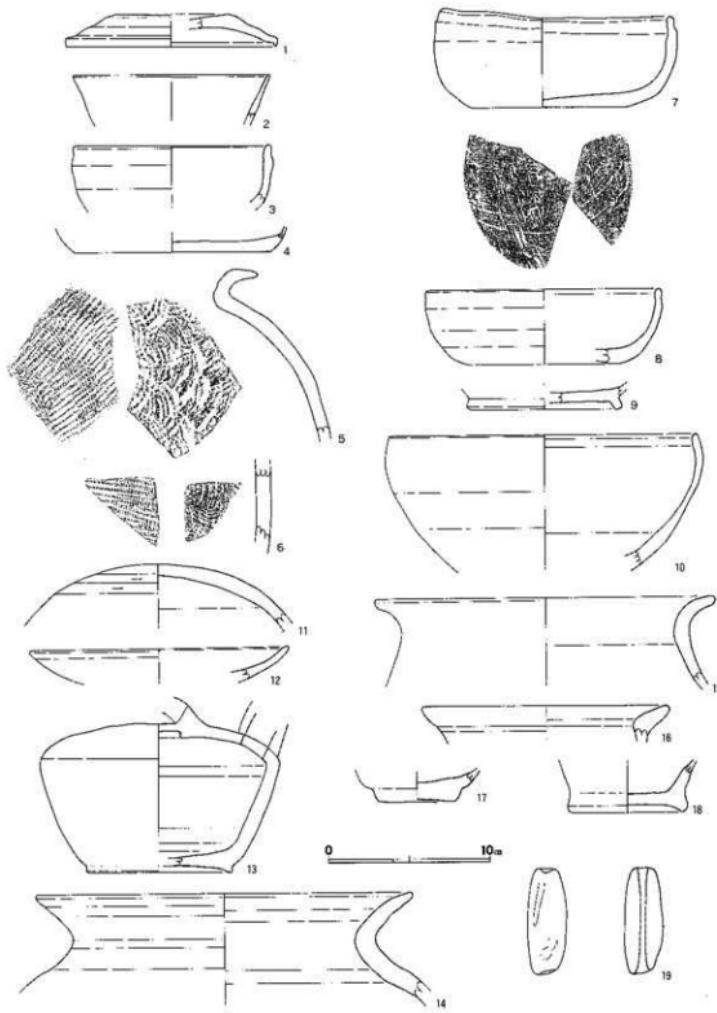
8区出土遺物

S K01出土遺物（第326図） 弥生時代の加飾広口壺である。破片から図上で復元した。やや張る胴部からなだらかに頸部を経て口縁部へ移行する。口縁部端部は下方に少し垂れ下がったのち、上方に大きく拡張する。断面の観察によると、擬口縁を作らずに一気に口縁部の整形を行なったようである。口縁部端部には5条の細い凹線文（A種凹線文）が施され、更にその上からヘラ状工具による斜格子文が施されている。右下がりの格子目を先に施した後、左下がりの格子目を施す。頸部のやや下方には6条の太く深い凹線文（B種凹線文）が施され、その上から彈力性のある細い繊維を数本束ねて一つにしたものを3本合わせて一単位にした原体を、縦に凹線文の上から3つづつ構造文風に施している。この3本×3つの文様は、破片からではいくつあったのか正確な数は不明であるが、頸部の復元径と施文部位から推定すると、少なくとも6つは施されていたと推定される。胴部の最大径付近にはハケ原体によると思われる列点文が2つ、それぞれ逆方向に施されている。外面は口縁部少し下よりタテハケメ、内面は胴部最大径付近より上はヨコハケメ、それより下はナナメハケで調整されており、ヘラケズリは観察できなかった。

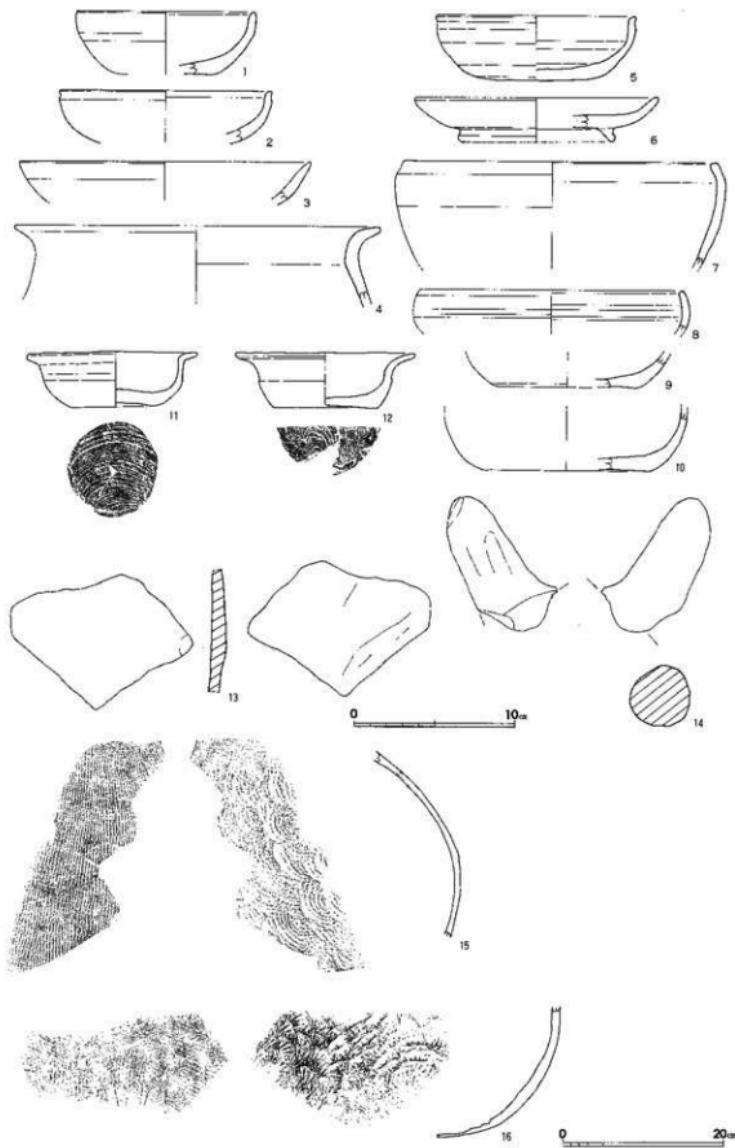


第326図 8区 SK01出土弥生土器実測図 (S=1:4)

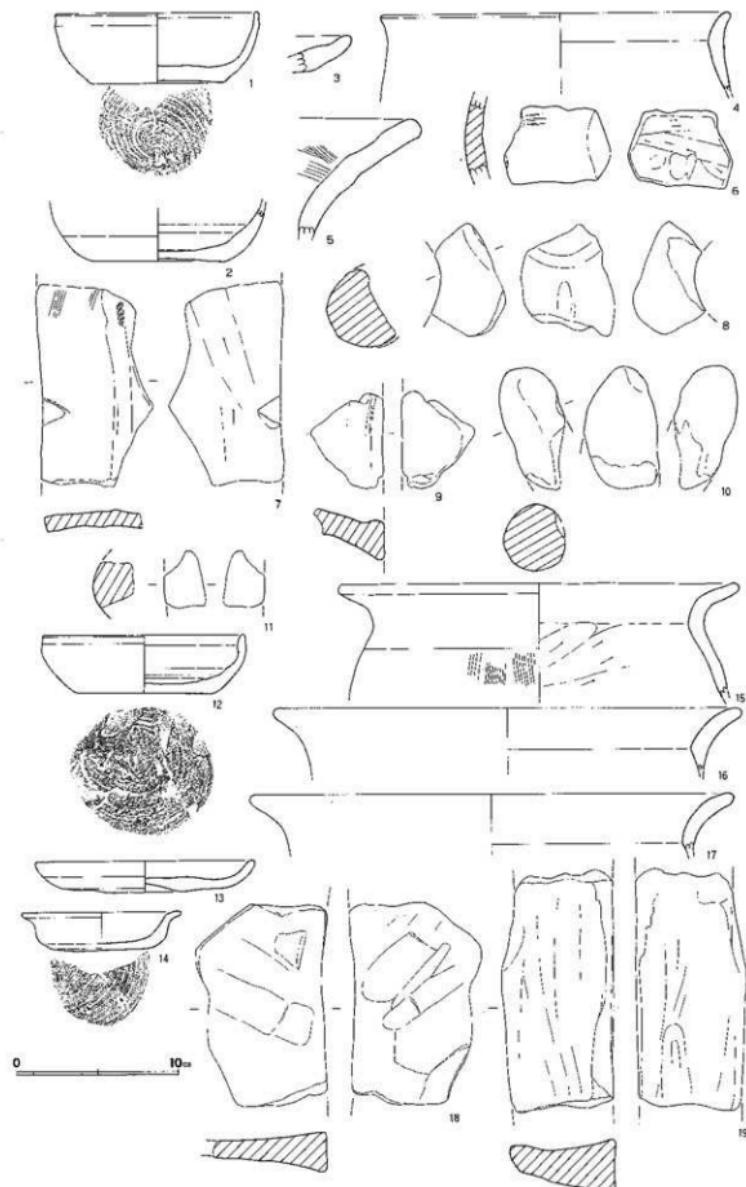
S B 01出土遺物（第327図、第328図15・16） 1～6は床面と思われる位置からの出土であるが、いずれも小片である。5は須恵器の蓋である。強く屈曲して口縁部に至る。カキ目が右下がりの斜め方向に施されている。10は鉄鉢形土器である。肩部には稜を持たず、口縁部端部はわずかに肥厚するが面は持たない。13は平瓶である。高台を持ち、肩部で強く屈曲する。把手や注口部は剥落している。



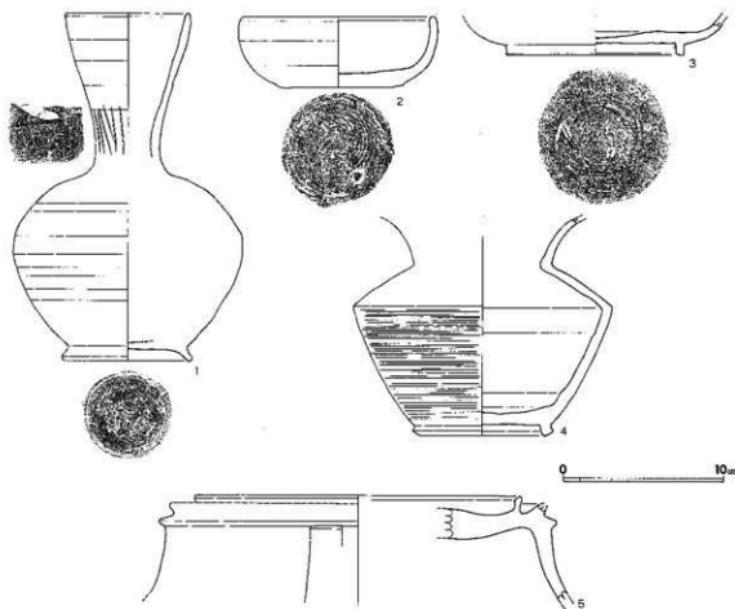
第327図 8区S B 0 1出土遺物実測図 (S=1:3)



第328図 8区SB01・02出土遺物実測図 (S=1:3, 1:6)



第329图 8区SB03出土遗物实测图 ($S=1:3$)



第330図 8区段状遺構1付近・SX 01出土遺物実測図 (S=1:3)

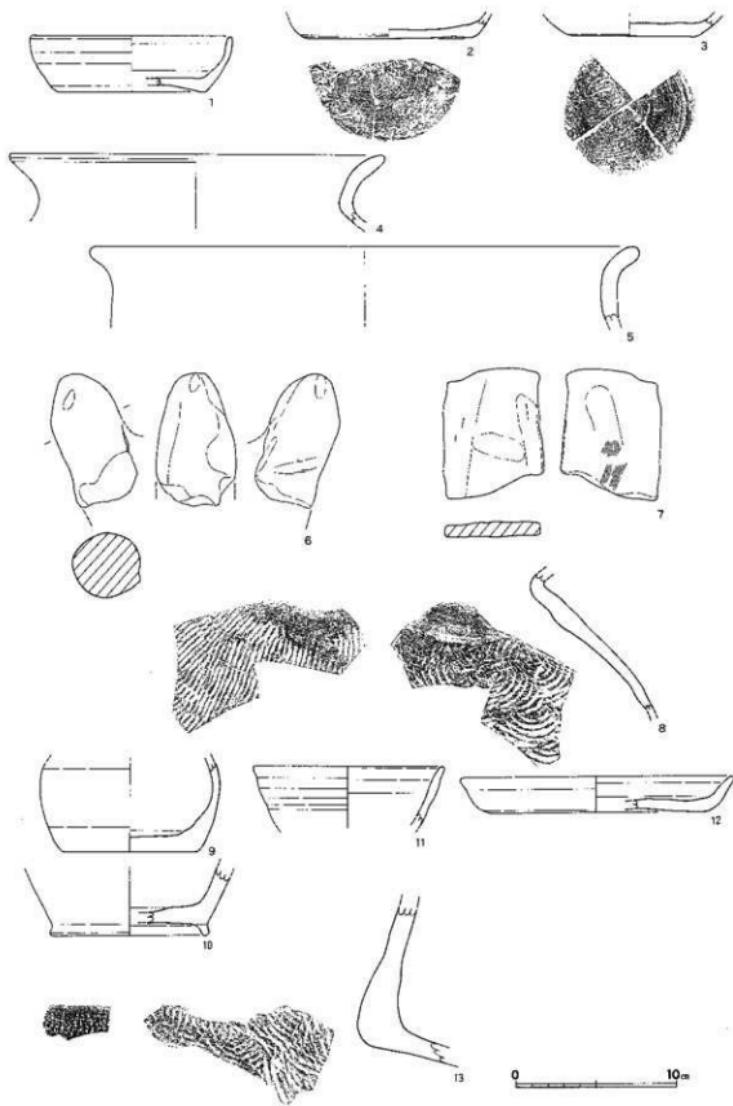
19は上鍾である。中程が膨らんだ円筒形をしている。第328図15・16は共に須恵器の甕である。1は胴部、2は底部付近と思われる。16の内面には15とは異なる放射状の當て具痕が残されている。

S B02出土遺物（第328図） 1～4は柱穴の埋土から出土した。6は高台を持つ。11と12は灯明皿である。共に口縁部は細く、12はやや斜め上方に口縁部が伸びるが、11は強く屈曲して横方向に伸びる。底部は回転糸切りである。7は鉄鉢形土器である。肩部に稜を持たず、口縁部端部は若干面を持つ。14は土製支脚と思われる。断面はほぼ円形である。13は移動式窓の破片であるが、どの部分かは不明である。

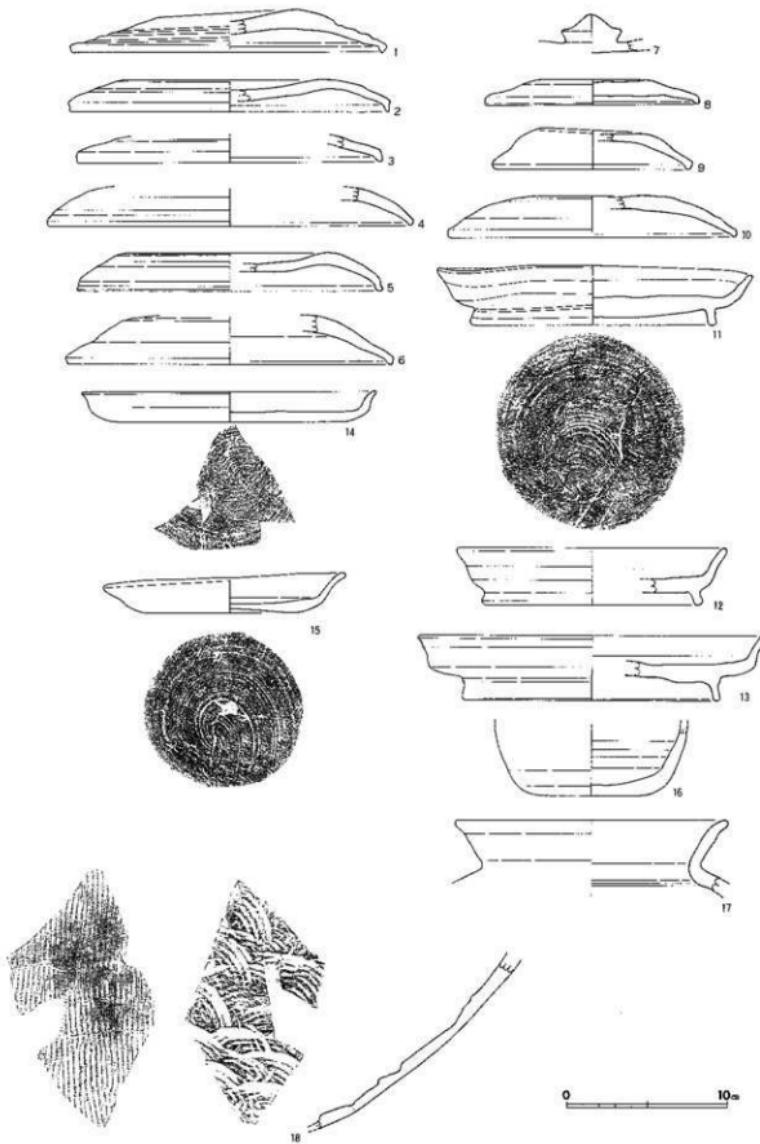
S B03出土遺物（第329図） 1は体部は丸みをもち、口縁部の下は凹線文状に凹む。4は土師器の甕で、頸部の屈曲は緩い。3・6・7・9は移動式窓片である。7は突帯が剥離した痕が見られる。7、8は土製支脚片である。5・10は柱穴からの出土である。5は土製支脚、10は移動式窓の焚口の上部と思われる。14は灯明皿で、口縁部は若干大きく短く屈曲する。18、19は焚口の側部と思われる。共に剥離している。

段状遺構1付近出土遺物（第330図1） 段状遺構1の西端の上方で出土した、長頸甕である。胴部は張って偏球形をしており、そこから緩やかに聞く口縁部へと続く。頸部は細く、外面には6本のヘラ記号が縦方向に施されている。底部は高台を持ち、回転糸切り痕を持つ。この上器は段状遺構1に直接伴うものではないが、埋土の最終的な堆積の時期に伴うものではないかと推定される。

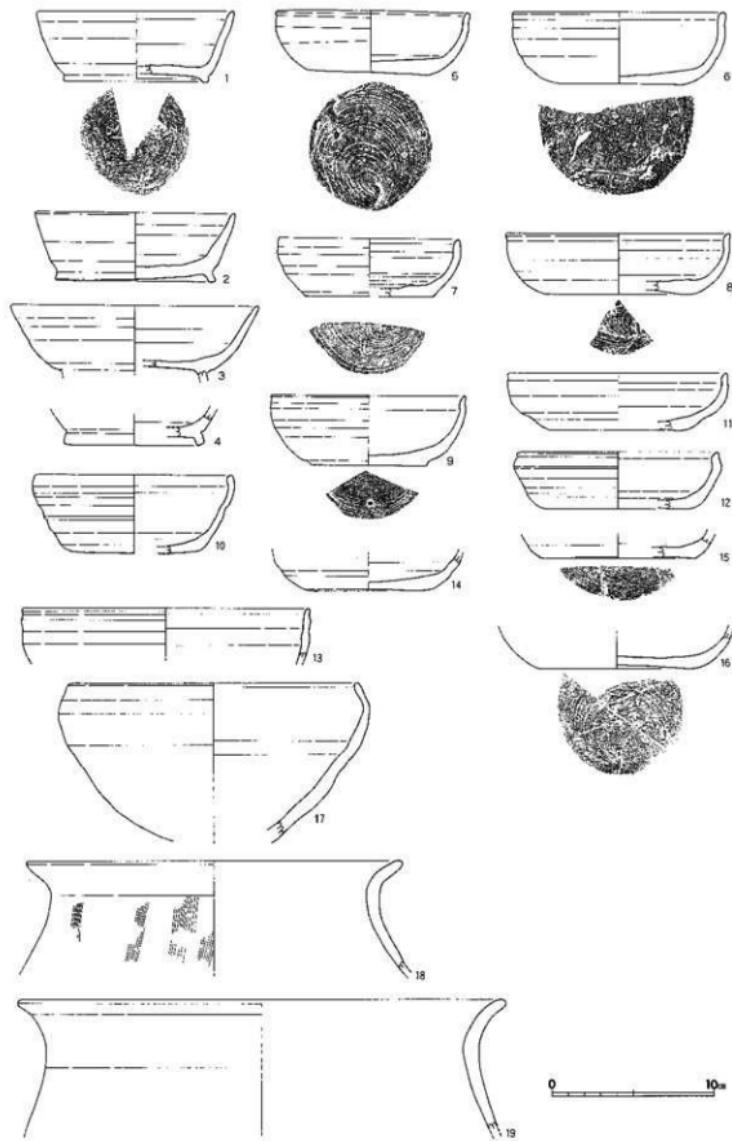
段状遺構2付近出土遺物（第331図8） 須恵器の甕の頸部付近である。外面はタタキ、内面は同心円



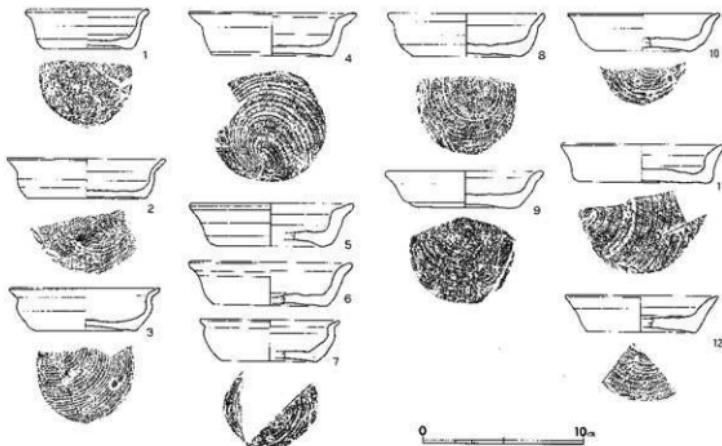
第331図 8区SD 01、段状造構2・4出土遺物実測図 (S=1:3)



第332圖 8區遺構外出土遺物實測圖（1）（ $S=1:3$ ）



第333図 8区遺構外出土遺物実測図(2) (S=1:3)



第334図 8区遺構外出土遺物実測図(3) (S=1:3)

状の当て具痕をそのまま残しており、頸部のすぐ下の当て具痕をナメ消している。

段状造構4付近出土遺物(第331図9~13) 段状造構4の東側で出土した。いずれも須恵器である。

9は盃の胴部下半と思われる。10は高台を持ち、盃の底部と思われる。13は蓋の頸部で、頸部は厚手である。他に図示しなかったが、甕片が出土している。

S D01出土遺物(第331図1~7) 2、3は回転糸切りを行なっている。底部のみで全形は不明である。6は移動式甕、7は土製支脚である。

S X03付近出土遺物(第330図2~5) 3は高台を持つ須恵器である。2も3も底部は回転糸切りを施す。5は圈脚円面鏡である。長方形の透かしを持つが、小片であるので透かしの数は不明である。陸部には摩滅痕はあまり見られない。4は肩部で強く屈曲し、頸部から大きく開く口縁部を持つので、広口盃と思われる。胴部外面にはカキメが施されている。高台を持ち、全体に薄手である。

遺構に伴わない遺物(第332図~第335図) 遺構に伴わない遺物は、特徴的なものだけを図示した。

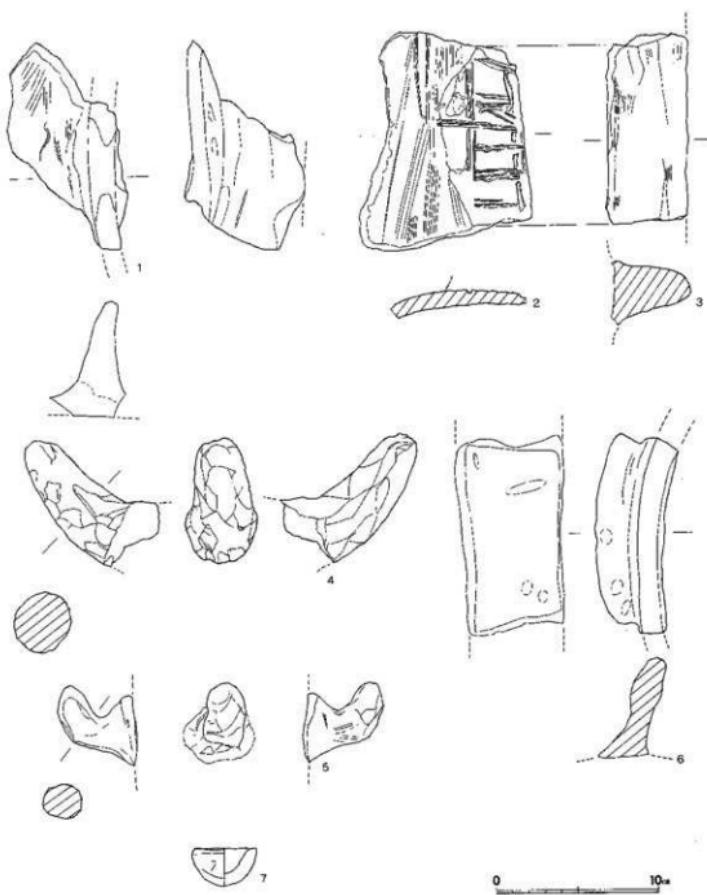
第332図1~10は蓋である。環蓋は宝珠つまみを持つ9の他は持たないものがほとんどである。宝珠つまみを持つないものは、1~3のように端部が屈曲して面を持って垂下するものと、単に垂下するものがある。1~6は径約19~22cmであるが、8・9は径が約12~13cm程度でやや小さい。他に図示しなかったものが1点あるが、1~3と同様の特徴を持つ。

11~13は盤である。いずれも底部外面には回転糸切り痕を残し、低い高台を持ち、体部は外反する。他に図示しなかったものが2点ある。

14・15は皿である。体部は短く立ち上がる。共に底部には回転糸切り痕を残す。他に図示しなかったものが1点ある。

16は盃の胴部下半と思われる。

第333図1~12は坏である。その内1~4・9は高台を持つものである。1、2は直線的に体部が伸びるが、3は体部がやや内湾気味で、1や2よりやや大きい。9は平高台で、体部は緩やかに内湾し、

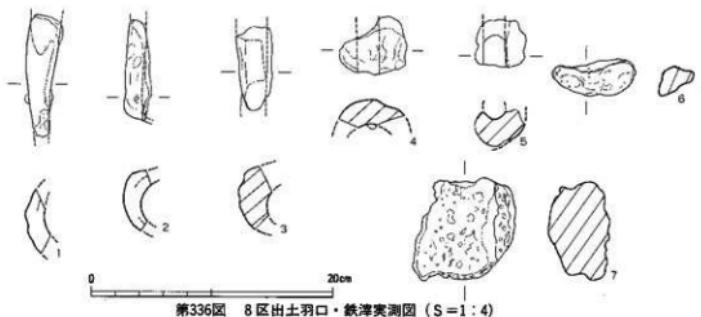


第335図 8区造構外出土遺物実測図 (4) ($S=1:3$)

口縁部端部は小さく屈曲して外方を向く。高台を持つない環は、5～8のように体部が丸みを持つものや、10～12のように体部中程でわずかに屈曲するものがある。高台を持つ環は他に1点、後者のような特徴を持つ環が他に最低3点ある。

17は鉄鉢形土器である。体部上方で屈曲して内湾する。口縁部端部は丸くおさめて面は持たない。他に鉄鉢形上器は1点ある。

第334図は灯明皿である。これらの土器の多くは、SB02などの位置する緩斜面の上方(東側)で出土したが、造構は検出できなかった。灯明皿は、1のように体部が薄く、若干屈曲するもの(A1)、



第336図 8区出土羽口・鉄津実測図 (S=1:4)

2や3のように体部が薄くて屈曲が強いもの (A 2)、4~6のように体部は厚手で屈曲が強いもの (B 2)、8~12のように厚手で屈曲が弱いもの (B 1)、7のように胴が張るもの (C) の5種に分けることができる。器形が分かるもので図示しなかったものは、A 1が4点、A 2が2点、B 1が4点、B 2が3点ある。この内9は淡黄褐色である。

第332図7は甕の口縁部である。18は須恵器の甕である。底部付近と考えられ、同心円状の当て具痕が強く器壁に食い込んでいる。破片の一つがSB03の柱穴の一つの埋土内から出土した。

第333図18、19は土師器の甕の口縁部である。胴部外面の調整はタテハケメ、内面はヘラケゼリである。他に甕の口縁部は最低4点ある。

第335図1~3、6は移動式竈の破片である。2と3は接合するが、2の接着面にはヘラ状工具でハシゴ状に凸凹を付けている。他に移動式竈片は数点出土している。

5は瓶や甕の把手と思われる。中程で強く屈曲する。把手の断面は若干角のある楕円形である。調整はナテと思われる。

4は土製支脚片である。断面はほぼ円形である。調整はナテと思われる。他に土製支脚片は3点出土している。

7は手づくね土器である。厚手で、ナテ調整と思われる。

羽 口 (第336図1~5) 1、2はSB03の埋土から出土した。図面の下の方は還元されて暗褐色を呈しており、その側が灰側になると思われる。厚さは約2cm前後である。

鉄 津 (第336図6・7) 6はSB02内のSK02より出土した。磁性を持ち、重さは81.13gを測る。やや丸みを持っている部分があるので、楕円形の可能性を持つ。7はSB01の埋土より出土した。重さは355.07gを測る。表面は気泡が抜けたような凸凹が多数あり、精練済の可能性を持つ。他にもSB02などの造構の周辺からは鉄片が出土している。

小 結

①SK01出土の弥生土器は、回線文を持つので弥生時代中期後葉に比定される。その中で、口縁部端部を下方よりもむしろ斜め上方に拡張するのは、弥生時代後期初頭の土器に見られる特徴であり、頸部の回線文の上から縦に6つ(以上)の横描文を施しているのは、位置的に考えて中期後葉の広口甕の頸部に散見される棒状浮文の退化したものと考えられる点からも、中期後葉のなかでも後期初頭に

近い時期が与えられよう。

この時期の造構は山陰では少ないが、鳥取県米子市青木遺跡 J S X04⁽¹⁾では土壙墓に壺などを供獻する例があるので、S K01も同様の例と考えたいが、なぜ斜面に位置するのかは不明である。

段状造構 1 もは同時期の造構と考えられるが、性格は不明である。斜面側に盛土を行ない、柱穴が地表面まで達しない何らかの建物が存在したのかもしれない。

②S B01をはじめとする一連の造構は、出土土器から8世紀後半代の時期が与えられる。その中で特徴的な遺物として、S X01付近から出土した円面鏡が挙げられる。近くからは須恵器の広口壺も出土しており、8区に存在したS X01や掘立柱建物で使用されていたのかもしれない。

付近の遺跡で円面鏡を出土した遺跡としては、松江市出雲国庁跡⁽²⁾や同寺の前遺跡⁽³⁾がある。島田池遺跡は出雲国庁のあった意宇平野の東端に位置しており、この遺跡ないし遺跡付近に国庁と関係を持つ建物が存在したのかもしれない。また、検出された3棟の掘立柱建物跡からは、いずれも鉄洋や羽口といった、鍛冶に関する遺物が出土した。総点数は多くはないので、比較的短期間に鍛冶がこれらの造構で行なわれたと思われる。他には、S B01と02のそれぞれ埋土から1点ずつ出土した鉄鉢形土器が挙げられる。鉄鉢形土器は他に造構に伴ってはいないが2点出土しており、隣接する岸尾遺跡からも丘陵上から1点出土しているので、8区周辺で合計5点出土することになる。また、造構に伴ったものは多くないが灯明皿が出土している。

註

- (1)青木遺跡発掘調査団編 1976 「青木遺跡発掘調査報告書」 P.239 掘団363P 1
- (2)町田章編 1970 「出雲国庁跡発掘調査概報」 松江市教育委員会 P.38 第19図2~5
- (3)瀬古諒子 1995 「寺の前遺跡発掘調査報告書」「松江市文化財調査報告書」第62集 松江市教育委員会・(財)松江市教育文化振興事業団 P.13 第13図37

| Code No. | 試料 | 年代 (1950年よりの年数) |
|-----------|----------------------|-----------------|
| Gak-19070 | 炭化物 from 烏根東出雲町烏田池遺跡 | 2060±90 |
| 8区 | S B 0 1 (現段状造構 1) 床面 | 110B.C |

段状造構 1 の床面より出土した炭化物を学習院大学年代測定室に依頼して年代測定を行なった結果、上記のような結果を得た。段状造構 1 の時期は、この測定結果では弥生時代中期に属する確立が高いことがわかった。段状造構 1 の時期は SK01 と同様に弥生時代中期末に属するのではないかと思われる。

第125表 8区 S B01出土土器観察表

(単位: cm)

| 番号 | 器種 | 法 量 | | | | 形態上 の特徴 | 調 整 | 色 調 成 | 分 類 | 備 考 |
|------|-----------|--------------|------|------|------|---------------------|---------------------|-------------|--------|--------|
| | | 口径 | 基高 | 腹径 | 脚径 | | | | | |
| 27-1 | 壺 | 13.0 | 2.0 | — | — | 口縁端に凹を待ち下へ伸びる | 外面部へら削り 内面なで | 暗灰褐色 良好 | 16%以下 | |
| 2 | 环? | 12.0 | 2.6 | — | — | 口縁は若干尖り気味 | 内外模なで | 暗灰褐色 良好 | 26% | |
| 3 | 环 | 12.1 | 3.5 | — | — | 端部は丸くおさめる | 内外模なで | 暗灰褐色 良好 | 16%以下 | |
| 4 | 环 | — | 1.0 | — | 12.0 | | | 暗灰褐色 不良 | 30% | |
| 5 | 甕 | — | — | — | — | | | 暗青灰褐色 良好 | | |
| 6 | 甕 | — | — | — | — | | | 暗青灰褐色 良好 | | |
| 7 | 鉢 | 14.4 16.2 | 6.0 | — | — | 端部は丸くおさめ、口縁下に凹線 | 内面模なで 底切り後模いなで | 暗灰褐色 良好 | 85% | |
| 8 | 环 | 14.3 | 4.5 | — | — | 端部は丸くおさめる | 内外模なで 底部糸切り | 暗灰褐色 良好 | 25% | |
| 9 | 环 | — | 0.9 | — | 8.8 | 高台を持つ | なで 底部糸切り? | 淡暗褐色 良好 | 25% | |
| 10 | 鉄鉢形 土器 | 19.0 | 7.9 | 19.7 | — | 口縁端はわずかに肥厚 | 内外模なで | 淡灰褐色 良好 | 60% | |
| 11 | 甕 | 7.9 | 3.2 | — | — | | 外面部へら削り 内面模なで | 赤褐色 良好 | 25% | |
| 12 | 皿 | 15.9 | 1.9 | — | — | 端部は丸くおさめる | なでか? | 暗灰褐色 良好 | 15% | |
| 13 | 平瓶 | — | 10.1 | 14.8 | 8.8 | 肩部で強く底曲 汁口と取手を欠く | 内外なでか? 底部糸切り後模なで | 淡灰褐色 良好 | 40% | |
| 14 | 甕 | 23.2 | 5.5 | — | — | 端部は丸くおさめる | 模なで 外圍たたき | 灰褐色 良好 | 25% | |
| 15 | 土師器 甕 | 26.8 | 4.8 | — | — | | 外面部模なで 内面へら削り | 淡灰褐色 良好 | 20% | |
| 16 | 环? | 15.0 | 1.7 | — | — | 端部は丸くおさめる | 内外模なで? | 淡灰褐色 良好 | 10%以下 | |
| 17 | 七輪器 爐 | — | 1.4 | — | 4.6 | 突出してやや上げ底 | 内外模なで 一部だけ? | 淡灰褐色 良好 | | |
| 18 | 土師器 爐 | — | 2.7 | — | 7.0 | やや上げ底 | 模なで | 淡灰褐色 良好 | | |
| 19 | 土揮 | 2.4 | 6.4 | — | — | | なで | 暗灰褐色 良好 | | |

第126表 8区 S B01(15・16)・S B02出土土器観察表

(単位: cm)

| 番号 | 器種 | 法 量 | | | | 形態上 の特徴 | 調 整 | 色 調 成 | 分 類 | 備 考 |
|------|-----------|--------|-----|------|------|------------------|----------------|--------------|--------|--------|
| | | 口径 | 基高 | 腹径 | 脚径 | | | | | |
| 28-1 | 环 | 11.0 | 3.8 | — | — | 端部はやや尖り気味 | 内外模なで | 暗灰褐色 良好 | 15% | |
| 2 | 环 | 13.0 | 3.1 | — | — | 口縁下齊干凹む | 内外模なで | 淡灰褐色 良好 | 25% | |
| 3 | 环 | 17.9 | 2.3 | — | — | | 内外模なで | 淡灰褐色 良好 | 15% | |
| 4 | 土師器 甕 | 22.4 | 4.2 | — | — | | 内面へら削り | 淡灰褐色 良好 | 15% | |
| 5 | 环 | 12.2 | 3.9 | — | — | 口縁は屈曲して外方を向く | 内外模なで 底部糸切り | 淡灰褐色 やや小臭 | 40% | |
| 6 | 皿 | 14.9 | 2.7 | — | 9.4 | 脚端部は若干肥厚する | 内外模なで | 淡灰褐色 良好 | 25% | |
| 7 | 鉄鉢形 土器 | 26.3 | 6.2 | 21.4 | — | 端部は軽く面を持つ | 内外模なで | 淡灰褐色 良好 | 20% | |
| 8 | 鉢 | 16.0 | 2.3 | — | 17.2 | | 内外模なで | 淡灰褐色 良好 | 10% | |
| 9 | 环 | — | 1.6 | — | 8.6 | | 模なで 底部糸切り | 淡灰褐色 やや不臭 | 25% | |
| 10 | 环 | — | 3.4 | — | 10.4 | | 磨減して不明 | 淡灰褐色 不良 | 33% | |
| 11 | 皿 | 10.4 | 3.3 | — | 4.9 | 口縁で大きく屈曲して水平に伸びる | 内外模なで 底部糸切り | 紫灰褐色 良好 | 90% | |

| | | | | | | | | |
|---------|------|-----|-----|-----|-------------------|------------------|------------|-----|
| 12 盆 | 16.9 | 3.3 | - | 6.4 | ゆるやかに膨曲して斜め上方に伸びる | 内外模なで 底部同様名切り | 暗赤褐色 良好 | 30% |
| 13 カマド片 | - | - | - | - | - | へら削り模なで | 淡黄褐色 良好 | |
| 14 土製支脚 | - | - | 3.9 | - | - | - | 良好 | |
| 15 壁片 | - | - | - | - | - | 外曲たなび 内曲当て具痕 | - | |
| 16 壁片 | - | - | - | - | - | - | - | |

第127表 8区 S B03出土土器観察表

(単位: cm)

| 番号 | 器種 | 法 径 口径 基部 腹径 脚径 | 形態上の特徴 | 測 量 | 色 焼 成 | 分 類 | 備 考 |
|-------------|------|--------------------------------|--------|-------------------------|------------------|--------------|--------|
| 12-1 环 | 12.2 | 4.3 | - | 8.2 口縁下若干凹む | 内外模なで 底部同様名切り | 赤褐色 やや不良 | 30% |
| 2 环 | - | 3.0 | - | 8.2 | 内外模なで 底部同様名切り | 淡灰褐色 不良 | 口縁を欠く |
| 3 カマド | - | - | - | 内曲若干凹む | - | 淡黄褐色 良好 | |
| 4 土師器 裏 | - | - | - | - | - | - | |
| 5 カマド | - | - | - | - | 外面はけ 内側はけ | 淡黄褐色 良好 | |
| 6 カマド | - | - | - | - | - | 淡黄褐色 良好 | |
| 7 カマド | - | - | - | 刺織模を持つ | 外曲なで 内曲へら削り | 淡小黄褐色 良好 | |
| 8 土製支脚 | - | - | - | - | - | 淡山褐色 良好 | |
| 9 カマド | - | - | - | 接合面 | なで | 淡黄褐色 良好 | |
| 10 上置支脚 | - | - | 3.8 | - | 剥落して不明 | 淡赤褐色 良好 | |
| 11 上置支脚 | - | - | - | - | - | 淡赤褐色 良好 | |
| 12 环 | 12.2 | 3.5 | - | 8.2 縫部は丸くおさめる | 内外模なで 底部同様名切り | 暗灰褐色 良好 | 完形 |
| 13 盆 | 13.4 | 1.9 | - | 8.0 上げ底 | 内外模なで 底部同様名切り | 淡赤褐色 やや不良 | 25% |
| 14 盆 | 9.7 | 2.3 | - | 6.2 縫部は短く斜め上方に伸び、丸くおさめる | 内外模なで 底部同様名切り | 淡紫褐色 良好 | 60% |
| 15 土師器 裏 | 24.4 | 6.5 | - | - | 外曲はけ 内曲へら削り | 淡黄褐色 良好 | 20% |
| 16 土師器 裏 | 28.6 | 3.7 | - | - | - | 淡灰褐色 良好 | 10%以下 |
| 17 土師器 裏 | 29.6 | 3.2 | - | - | - | 淡灰褐色 良好 | 10%以下 |
| 18 カマド | - | - | - | - | 剥り後なで | 淡赤褐色 良好 | |
| 19 カマド | - | - | - | - | なで | 淡赤褐色 良好 | |

第128表 8区段状遺構1付近・S X01出土土器観察表

(単位: cm)

| 番号 | 器種 | 法 径 口径 基部 腹径 脚径 | 形態上の特徴 | 測 量 | 色 焼 成 | 分 類 | 備 考 |
|----------|------|--------------------------------|--------|----------------------|--------------------------|------------|--------|
| 33-1 長頸壺 | 7.5 | 21.0 | 14.2 | 7.6 壺部は6本のヘラ記号 | 内外模い模なで | 暗灰褐色 良好 | 95% |
| 2 环 | 11.8 | 4.3 | - | 7.7 壺部は丸くおさめる | 内外模い模なで 底部同様名切り | 淡灰褐色 良好 | 完形 |
| 3 壺部 | - | 1.8 | - | 8.9 高台を持つ 壺部に両持つ | 内外模なで 底部同様名切り | 淡灰褐色 良好 | 壺部を残す |
| 4 平瓶 | - | 9.6 | 16.0 | 8.6 壺部で強く屈曲 高台を持つ | 外曲かきめ (6~7条/cm) 内曲模なで | 暗灰褐色 良好 | 30% |
| 5 四面鏡 | 20.1 | 5.6 | - | 真力透透し 壺部は曲を持つ | 白釉模で 調査は不明 | 灰褐色 良好 | 10%未満 |

第129表 8区 S D01・段状遺構2・4出土土器観察表

(単位: cm)

| 番号 | 器種 | 法 口径 | 高さ | 脚径 | 形態上の特徴 | 調 整 | 色 調成 | 分 類 | 備 考 |
|------|----------|---------|-----|------|------------------|----------------------|------------|--------|--------|
| 12-1 | 环 | 12.4 | 3.4 | — | 9.2 帽部は丸くおさめる上げ底 | 内外模なで 底部同軸底切り | 淡灰 良好 | 30% | |
| 2 | 底部 | — | 1.1 | — | 9.8 | 内面なで 底部同軸底切り | 淡灰褐色 良好 | 50% | |
| 3 | 底部 | — | 0.8 | — | 8.1 | 内面なで 底部同軸底切り | 暗灰 良好 | 75% | |
| 4 | 上部器 裏 | 22.9 | 2.6 | — | — | 模なで | 淡茶褐色 良好 | 20% | |
| 5 | 上部器 裏 | 33.4 | 4.2 | — | — | 模なで | 淡黄褐色 良好 | 10%以下 | |
| 6 | 上張 支脚 | — | — | — | — | なで | 淡赤褐色 良好 | | |
| 7 | カマド | — | — | — | — | 外曲はけ後なで 内凹へら削り後なで | 淡黄褐色 良好 | | |
| 8 | 裏 | — | — | — | — | 外曲たき上方なで 内面凸出具痕 | 淡灰褐色 良好 | 10%以下 | |
| 9 | 裏 | — | 5.3 | 11.2 | 8.6 | 内外模なで 底部同軸底切り | 暗褐色 良好 | 70% | |
| 10 | 蓋? | — | 3.5 | — | 9.4 高台を持つ | 内外模なで | 淡灰 良好 | 40% | |
| 11 | 环 | 11.6 | 3.5 | — | — | 内外模なで | 淡灰褐色 良好 | 25% | |
| 12 | 裏 | 16.6 | 2.2 | — | 13.4 | 内外模なで 底部同軸底切り | 淡灰褐色 良好 | 20% | |
| 13 | 裏 | — | 9.4 | — | — | 外曲たき 内面凸出具痕 | 淡灰褐色 良好 | 10%以下 | |

第130表 8区包含層出土土器観察表(1)

(単位: cm)

| 番号 | 器種 | 法 口径 | 高さ | 脚径 | 形態上の特徴 | 調 整 | 色 調成 | 分 類 | 備 考 |
|------|----|---------|-----|----|-----------------------|-------------------|------------|--------|--------|
| 12-1 | 蓋 | 19.2 | 3.1 | — | — 4条の凹痕をもつ | 外曲同軸へら削り 内面模なで | 暗紫褐色 良好 | 60% | |
| 2 | 蓋 | 19.8 | 1.9 | — | — | 内曲同軸へら削り 内面模なで | 暗灰 良好 | 10% | |
| 3 | 蓋 | 19.0 | 1.5 | — | — | 外曲同軸へら削り 内面模なで | 淡灰褐色 良好 | 15% | |
| 4 | 蓋 | 22.6 | 2.3 | — | — 帽部は肥厚するが蓋は持たない | 外曲同軸へら削り 内面模なで | 淡灰 良好 | 20% | |
| 5 | 蓋 | 19.0 | 2.3 | — | — 帽部は肥厚するが蓋は持たない | 外曲同軸へら削り 内面模なで | 淡灰褐色 良好 | 30% | |
| 6 | 蓋 | 19.9 | 2.9 | — | — 帽部は蓋を持つ | 外曲同軸へら削り 内面模なで | 淡灰褐色 良好 | 25% | |
| 7 | 蓋 | — | 2.3 | — | — 宝珠つまみ | 灰褐色 良好 | | | |
| 8 | 蓋 | 13.2 | 1.5 | — | — つまみを持つ へら削り縫1条 | 外曲同軸へら削り 内面模なで | 暗灰 良好 | 50% | |
| 9 | 蓋 | 12.1 | 2.5 | — | — 端部は若干の面をもつ | 外曲同軸へら削り 内面模なで | 暗灰 良好 | 80% | |
| 10 | 蓋 | 18.0 | 2.5 | — | — 帽部は肥厚するが蓋は持たない | 外曲同軸へら削り 内面模なで | 暗灰 良好 | 35% | |
| 11 | 皿 | 19.2 | 3.6 | — | 14.4 高台を持つ | 内外模なで 底部同軸底切り | 暗茶褐色 良好 | 90% | |
| 12 | 皿 | 15.6 | 3.4 | — | 13.0 高台を持つ | 内外模なで | 暗茶褐色 良好 | 15% | |
| 13 | 皿 | 21.0 | 3.9 | — | 15.2 高台を持つ 帽部に若干の凹 | 内外模なで 底部同軸底切り | 暗灰 良好 | 25% | |
| 14 | 皿 | 14.6 | 2.4 | — | 9.0 | 内外模なで 底部同軸底切り | 淡茶褐色 良好 | 85% | |
| 15 | 皿 | 18.0 | 1.8 | — | 14.0 帽部はやや外方へ伸びる | 内外模なで 底部同軸底切り | 淡灰褐色 良好 | 25% | |
| 16 | 蓋? | — | 4.0 | — | 6.0 | 内外模なで | 暗灰 良好 | 40% | |
| 17 | 蓋 | 16.8 | 3.5 | — | — | 内外模なで | 暗灰 良好 | 10%以下 | |

| | | | | | | | |
|----|---|---|---|--------------|-----------------|-----------|-------|
| 18 | 甕 | - | - | 下方ほど強く当て具がある | 外側なたき 内側当て具痕 | 淡灰白 良好 | 10%以下 |
|----|---|---|---|--------------|-----------------|-----------|-------|

第131表 8区包含層出土土器観察表(2)

(単位: cm)

| 番号 | 器種 | 法 径 | 量 | 形態上の特徴 | 調 整 | 色 調 | 分 類 | 備 考 |
|-----|----------|--------|-----|--------|-------------------------|-------------------|------------|--------|
| 331 | 环 | 12.0 | 4.3 | - | 8.4 高台を持つ | 内外横なで 底部回転糸切り | 灰褐色 良好 | 90% |
| 2 | 环 | 12.1 | 4.1 | - | 9.2 高台を持つ | 内外横なで 底部回転糸切り | 灰褐色 良好 | 40% |
| 3 | 环 | 15.2 | 4.2 | - | 7.8 高台を持つ | 内外横なで | 暗灰 良好 | 15% |
| 4 | 环 | - | 1.7 | - | 7.8 高台を持つ | 内外横なで | 暗灰 良好 | 25% |
| 5 | 环 | 12.2 | 3.2 | - | 7.4 口縁下が若干凹む | 内外横なで 底部回転糸切り | 淡灰 良好 | 完形 |
| 6 | 环 | 12.8 | 4.4 | - | 7.6 口縁下が若干凹む | 内外横なで 底部回転糸切り | 淡灰 良好 | 50% |
| 7 | 环 | 11.0 | 3.5 | - | 7.8 底部回転糸切り | 内外横なで 底部回転糸切り | 暗灰褐色 良好 | 30% |
| 8 | 环 | 13.8 | 3.7 | - | 9.2 底部回転糸切り | 内外横なで 底部回転糸切り | 灰白色 良好 | 20% |
| 9 | 环 | 11.8 | 4.2 | - | 7.0 口縁はわずかに外方に向く | 内外横なで 底部回転糸切り | 淡茶 良好 | 20% |
| 10 | 环 | 12.2 | 4.7 | - | 8.2 口縁は若干内側を向く | 内外横なで | 灰褐色 良好 | 20% |
| 11 | 环 | 13.4 | 3.5 | - | 8.0 底部回転糸切り | 内外横なで 底部回転糸切り | 淡灰褐色 良好 | 20% |
| 12 | 环 | 12.2 | 3.4 | - | 9.2 口縁は屈曲して外方向に向く | 内外横なで | 灰茶 良好 | 25% |
| 13 | 环 | 17.6 | 2.9 | - | - | 内外横なで | 暗灰 良好 | 15% |
| 14 | 环 | - | 1.7 | 11.0 | - | 内外横なで 底部回転糸切り | 灰褐色 不良 | 70% |
| 15 | 环 | - | 1.0 | - | 9.6 底部回転糸切り | 内外横なで 底部回転糸切り | 暗灰 良好 | 25% |
| 16 | 环 | - | 2.0 | - | 9.8 底部回転糸切り | 内外横なで 底部回転糸切り | 淡灰 良好 | 60% |
| 17 | 鉢形 土器 | 17.7 | 9.3 | 19.2 | - 口縁幅は丸くおさめる | 外側回転へら削り 内側横なで | 暗灰 良好 | 25% |
| 18 | 土器 | 23.0 | 6.3 | - | - 外側縁はけ 内側へら削り・なで | 内外横なで 底部回転糸切り | 淡灰褐色 良好 | 20% |
| 19 | 土器 | 30.0 | 7.7 | - | - 内側横なで | 内外横なで 底部回転糸切り | 淡灰褐色 良好 | 10% |

第132表 8区包含層出土土器観察表(3)

(単位: cm)

| 番号 | 器種 | 法 径 | 量 | 形態上の特徴 | 調 整 | 色 調 | 分 類 | 備 考 |
|------|----|--------|-----|--------|----------------|------------------|--------------|--------|
| 34-1 | 甕 | 7.6 | 2.4 | - | 5.2 底部回転糸切り | 内外横なで 底部回転糸切り | 灰褐色 良好 | 50% |
| 2 | 甕 | 9.8 | 2.4 | - | 7.2 底部回転糸切り | 内外横なで 底部回転糸切り | 灰褐色 良好 | 40% |
| 3 | 甕 | 8.9 | 2.6 | - | 6.0 底部回転糸切り | 内外横なで 底部回転糸切り | 暗灰 良好 | 40% |
| 4 | 甕 | 10.2 | 2.6 | - | 7.5 底部回転糸切り | 内外横なで 底部回転糸切り | 暗灰褐色 良好 | 80% |
| 5 | 甕 | 10.2 | 2.6 | - | 6.6 底部回転糸切り | 内外横なで 底部回転糸切り | 暗灰褐色 良好 | 20% |
| 6 | 甕 | 10.1 | 2.6 | - | 7.0 底部回転糸切り | 内外横なで 底部回転糸切り | 灰褐色 良好 | 50% |
| 7 | 甕 | 8.5 | 2.5 | - | 5.8 底部回転糸切り | 内外横なで 底部回転糸切り | 淡灰 良好 | 40% |
| 8 | 甕 | 9.8 | 2.6 | - | 6.6 底部回転糸切り | 内外横なで 底部回転糸切り | 灰褐色 良好 | 70% |
| 9 | 甕 | 9.8 | 2.2 | - | 6.2 底部回転糸切り | 内外横なで 底部回転糸切り | 淡灰褐色 やや不良 | 60% |

| | | | | | | | | |
|----|---|-----|-----|---|-----|-------------------|----------|-----|
| 10 | 皿 | 9.1 | 2.3 | — | 5.6 | 内外模などで 底部回転糸切り | 淡灰 良好 | 50% |
| 11 | 皿 | 9.9 | 2.3 | — | 7.8 | 内外模などで 底部回転糸切り | 紫灰 良好 | 45% |
| 12 | 皿 | 7.4 | 2.2 | — | 3.3 | 内外模などで 底部回転糸切り | 灰 良好 | 20% |

第133表 8 区遺構外出土土器観察表(4)

(単位: cm)

| 番号 | 器種 | 法 量 | | | | 形態上の特徴 | 調 整 | 色 調 度 | 分 類 | 備 考 |
|------|------------|--------|-----|----|----|---------------|----------------|-------------|--------|--------|
| | | 口径 | 器高 | 縁付 | 脚柱 | | | | | |
| 15-1 | カマド | — | — | — | — | | | 淡赤黄褐色 良好 | | |
| 2 | カマド | — | — | — | — | ヘラで格子目に凸凹をつける | 外面はけ 内面へら削り | 赤黄褐色 良好 | | |
| 3 | カマド | — | — | — | — | ミと接合 | | 淡赤黄褐色 良好 | | |
| 4 | 土質支御 | — | — | — | — | | | 赤褐色 良好 | | |
| 5 | こしき | — | — | — | — | 強く屈曲 | | 淡黄褐色 良好 | | |
| 6 | カマド | — | — | — | — | | なで | 淡黄褐色 良好 | | |
| 7 | 手づくね 土器 | 3.7 | 2.3 | — | — | 全体に厚手 直腹 | なで | 淡黄褐色 良好 | | 完形 |



写真4 横穴墓土葬剥ぎ取り作業風景

第8節 調査の成果と課題

島田池遺跡では検出した遺構の中で、特に横穴墓は、これまで出雲地方で調査されたものの中で、最大規模のものであった。また、ほんどのものが未盗掘であり、遺存状況が良好なものであったことから、その様相や問題点が明らかになるものであった。本節では、各調査区で検出した横穴墓を再整理し、島田池遺跡の横穴墓群の様相について若干の検討を加え、本遺跡の結びとしたいと思う。

1、遺構について

(a) 横穴墓の形態と時期

横穴墓の出土須恵器を目安に各部位の形態に着目すると、その時期ごとの形態の変遷について知ることができる。そして特徴的な形態の出現をもって時期区分すると大きく3つの時期に分けて考えられるものである。それをまとめたのが第337図である。以下、時期ごとに様相について述べてみたい。

①島田池1期

出雲編年3期（註1）にほぼ相当するもので、本遺跡での横穴墓の導入期にあたる。横穴墓は、4区で1基（12号）、5区で1基（2号）、6区で3基（6・8・12号）の計5基確認している。

横穴墓は、狭く短めの墓道で、玄室は天井部の丸いものである。そして玄室プランは、奥行きの長い縦長のものと、正方形に近いものの2つのタイプが見られる。また、玄門手前の削り込みは、奥行きが短く閉塞石等の受けとしての機能を持ち、本稿で「閉塞部」と呼称しているものである。

閉塞部から検出している閉塞石は、基本的に削石及び自然石を積み上げたものである。但し6区12号横穴墓は、1枚の凝灰岩の切石で閉塞するものであり、どちらかと言えば「島田池2期」とした時期に良く見られるものである。また、その凝灰岩は島田池遺跡の横穴墓群で普遍的に使用される石材と明らかに異なり、黒色のガラス質岩片を含み、「荒鳥石」と呼称される石材と同質である。

また、玄室内での埋葬配置をみると、側壁に平行して左右に埋葬するものだけである。

②島田池2期

須恵器では出雲編年4期にはほぼ相当し、横穴墓の数が増加し、盛行期として捉えられる時期である。

横穴墓は、1区で1基（2号）、4区で11基（4・6・11・14・17号）、5区で1基（1号）、6区で5基（1・7・10・13・14号）の合計18基確認している。

この時期のものは、「島田池1期」と同じく幅の狭い墓道を持つが、その全長が非常に長いものを見られる。ただし、4区の横穴墓は、全長が短く、あまり変化が認められないものが多い。

玄室プランは、正方形かやや横長のものが大部分であるが、4区11号横穴墓は奥行きの長い縦長のものである。立面形は壁と天井部の境に軸線が認められる「家形」を呈するものが出現する。「家形」の横穴墓は3基認められ、平入と妻入の2者が存在し、その外のものは、前代と同様な形態で天井部が丸いものである。特に4区と5区の横穴墓はすべて天井の丸いものである。また、閉塞部の構造は、浅い削り込みを施すものだけであり、前代と変化の多いものが多いが、4区15号、6区10号・13号横穴墓のように平面的には奥行きのものも認められるようになる。

閉塞石は、削石（4区6・9・11・17、5区1号）のものと切石のもの（1区2号、6区7・10・14号）が認められ、本遺跡で普遍的な凝灰岩を加工した切石が閉塞に用いられるのがこの時期からである。切石で閉塞するものには、1枚のものと2枚のものが存在し、特に切石1枚で閉塞するものは、

| | 形態 | 埋葬配置 | 閉塞石 | 後背墳丘 | 須恵器 |
|-----------|-----------|----------|-----|--------|-----|
| 横穴墓 1期 | | 左右配置 | | 方墳 | |
| 横穴墓 2期 | | 左右配置 | | | |
| 横穴墓 3期 | 0 10m | 奥壁配置 | | 方墳 | |

第337図 横穴高密度図

すべて玄室が家形に加工されているという共通点を持つものである。

玄室の埋葬配置を見ると、左右に配置するものが大部分であるが、4区7号横穴墓は奥壁に平行して埋葬されるものであった。これは、小規模な玄室の横穴墓であり、例外的なものと考えられる。

③島田池3期

須恵器では出雲編年5期～6期前半に対応するものである。様相がこれまでと大きく変わる時期である。

横穴墓は、1区で3基（1・3号）、4区で1基（5号）、6区で5基（2・4・5・9・11号）の合計9基確認しており、4区では、急速に墓造数が減少する。

この時期は、幅広の前部を持つものが出現していることが一つの特徴として挙げられるが、4区5号横穴墓と6区2号横穴墓は幅の狭いものである。

玄室のプランは、正方形かやや横長のものだけである。そして、立面形は家形のものと天井部の丸いものの2つのタイプが認められ、また家形のものは平入りが多くなる点が指摘される。

また、玄門部前面に狭道部を付設するようになる点が特徴であり、これは、それまでの閉塞部に比し割り込みの奥行きが平面的、立面的に長くなり、明らかに異なるものである。なお、6区2号横穴墓は、割り込みが浅いもので狭道部を付設していないものである。

閉塞石は、割石（1区3-C号、4区5号）と切石（1区1・3-B号、6区2・4・5・9・11号）の2者が存在している。特に切石で閉塞するものは、1例を除き2枚で閉塞するものである。

埋葬配置は、これまでの横穴墓と大きく変わり、奥壁に平行して埋葬をおこなうものが出現し、4区5号横穴墓以外では、埋葬配置がその形態となる。また、家形石棺や石床が玄室内に置かれるのもこの時期であり、6区4号、5号横穴墓のように奥壁に平行した削り出しの屍床を設けたものも認められる。以上のように、この時期には、埋葬配置が変わるだけでなく、石棺や屍床の形態等に前代の様相とは大きく異なる埋葬施設を設けたものが認められる。

(b) 横穴墓を主体部とする古墳（後背墳丘）について

本道跡の尾根上には、横穴墓を主体部とする古墳と考えられるものが存在している。それらは、その特徴から横穴墓を主体部とするものとして考えたが、その特徴とは以下の通りである。

- ・立地が横穴墓の存在する斜面側にかなりせりだしている点
- ・墳丘縁及び周溝から須恵器甕片が出土し、下方の横穴墓出土のものと接合する点。
- ・墳丘部分からは主体部が検出される例が無い点。
- ・墳丘と主軸をほぼ同一にする横穴墓が斜面に存在している点。

以上の4点から横穴墓を主体部とする古墳として認識したが、それらは、1区で2基（2・3号墳）、4区で4基（1・2・3・4号墳）、5区で5基（2・4・5・6・7号墳）検出している。

これらの古墳の時期について、主体部である横穴墓の出土須恵器から決定し、その古墳の様相について、時期ごとに見てみると以下のようになる。（第337図参照）

①島田池1期

5区5号墳（主体部6区12号）、6号墳（6区8号）、7号墳（6区6号）が該当し、すべて方墳である。規模は、一辺7m程であり、須恵器甕の破片が出土するものは5号墳のみである。

②島田池2期

1区2号墳（主体部2号）、4区1号墳（10号）、2号墳（12号）、3号墳（15号）、4号墳（17号

?）、5区2号墳（6区7号）、5区9号墳（5区1号）の合計7基確認している。前代と同じく方形のものが存在するが、前方後方形のものが3基築造されている点が特徴的である。また、前方後方墳と考えた場合には、出雲では最も新しい時期のものと考えられる。

③島田池3期

5区4号墳（主体部6区5号）の1基を確認している。コ字形に周溝を廻らせるものであり、一辺6mのものである。

以上のように横穴墓を主体部とする古墳が各時期にわたり存在しているが、基本的に前方後方形と方形の2者が存在している点が指摘できる。また、墳丘の築造方法において、確実に墳丘盛土を確認できたものは、前方後方形のものに限られる点が指摘される。

(c) 墓道・前庭部の堆積状況と遺物出土状況

横穴墓の墓道・前庭部の調査結果から、追葬時の状況や須恵器等による儀礼行為の様相が確認されている。また、これらの土層堆積状況と遺物出土状況には、ある程度の共通性を見出すことができるものであり、そのことについて以下整理しておきたい。

①土層堆積状況（註2）

墓道・前庭部の土層には、必ずと言って良いほど黒色または暗褐色を呈す厚い土層が認められるものであった。この層は、地山礫を含む比較的明色系の層の上面で認められるものであった。また、黒色土直下の地山礫を含む層には、間層として褐色系の層が認められた。

黒色を呈す層の性格としては、基本的に埋め戻し後の埋土上面に形成された腐食土として解釈して良いものと考えられる。また、間層として認められる褐色系の層も同じような腐食土として解釈できるものと考えられる。以上のように黒色や褐色を呈す土層の性格を腐食土として考えた場合には、それを鍵層として一回の埋葬に伴う埋土の単位を決定する要因になるものと考えられ、本報告書では、そのように解釈し、記述している。また、特に黒色を呈す層は、その厚みと色調から長期間にわたって形成されたものである可能性が高いものと思われる。

さて、横穴墓の墓道・前庭部では、前述の黒色土及び褐色系の層が形成された後にそれを削り込んだ侵入の痕が認められ、基本的にその掘削面を埋葬時の面として考えている。またその面は、ほぼ水平に削り込むものが多いが、黒色土を削り込むものは、玄門方向に向かって傾斜するものであり、他の埋葬面と異なる状況のものである。

以上のような状況から黒色土を削り込んで侵入する行為は、それ迄の侵入行為とは、掘り返し時の状況が明らかに異なるものであり、ある程度の時間的な間隔をおいて行われた行為として考えられ、単なる埋葬行為とは異なるものである可能性が高い。さらに、基本的に黒色土以下の埋土を埋葬に伴うものとした場合、黒色土は最終埋葬後の埋土上面に形成されたものと推測可能である。

②遺物出土状況

遺物は、基本的に前述の腐食土層から出土するものであり、また、腐食土によって出土する須恵器の器種が異なっている状況が認められた。

黒色土からは、須恵器甕・横瓶の破片が基本的に出土し、埋土の間層として認められる褐色系の上層からは、それ以外の器種が出土するものであった。なお、玄門・義務部付近では、そのような出土状況が認められないが、追葬時に何度も掘り返される部分であり、擾乱を受けやすい状況が原因として考えられる。

③まとめ

以上①・②で述べたような状況から考えるに、前庭部の埋葬時の状況を復元すると、埋土は、何度かにわたる埋戻し土の堆積によって形成され、埋葬（追葬）に伴う掘削の度に削られたものと考えられる。そして、最終の埋葬終了時の埋め戻し後に須恵器壺・横瓶等が破碎され散布されたものと考えられる。また、黒色土を傾斜をもって掘削する行為が認められるものは、4期以降の横穴墓に多く、その時期以降に埋葬行為とは異なる何らかの儀礼行為として行われているものと推測される。

2、遺物について

多数の出土遺物の中で、その中で須恵器、鉄製武器、須恵器壺・横瓶について概略であるが、その様相について述べてみたい。

(a) 須恵器

横穴墓で出土する器種について検討する場合、追葬等についての考慮が必要かと思うが、今回は1つの横穴墓出土の須恵器をすべて対象とした。そして、須恵器の1つの器種が横穴墓総数のうち何穴から出土しているかまとると以下になる。

蓋壺は100%、直口壺は81%、甕は55%、高环は42%、提瓶は32%、有蓋高环は19%の割合になり、基本的に横穴墓に副葬される普遍的な須恵器は、蓋壺と直口壺であると考えられる。

次に、各器種の中でその一部について概略を述べたい。なお、各器種ごとの型式分類については、大谷晃二による分類案を慣用する。

高環 長脚系と短脚系のものの両者が認められる。長脚系で、平な底部に直立する環部が付き、脚部が細長く2段透しの大谷分類でA型の系列のものは、出雲3期～5期にかけての全ての時期で認められる。一方、2段透して脚部が広がるB型の系列のものは、出雲3・4期に該当するものは認められず、出雲5期に該当するものが認められる。

低脚系のものは、出雲3～5期に該当するものが認められるものである。ただし、4区12号横穴墓出土品の中で、大谷分類のA2型とA3型の中間的な要素をもつも高环（第143図53～55）が出土している。この高环は、外反する環部に突帯状の稜線が廻り、脚部の透しの下には2条の沈線が廻るものであり、横穴墓出土のこの系列では最古相を尾すものである。

以上のように、鳥田池遺跡の横穴墓出土の高环は、基本的に長脚系A型、低脚系A型の系列のものが主流をなしているものである。

有蓋高环 2段透しと1段透しのものの2者が認められる。基本的に大谷の編年觀では、出雲3期に限られるものであったが、近年の調査例や本遺跡の例から出雲4期～5期にかけて認められるようになったものである。2段透しのものは、大谷分類のC型の系列になり、透しは3方向に施すものが出雲3期～5期に該当する時期に認められる。また、4区12号横穴墓では、3方千鳥に施すものが出土しており、高井横穴墓（註3）出土の3方透しを施すものに、形式的に先行するものと考えられる。

一方、1段透しのものは、大谷分類のD型の系列になるもので、透しは3方向に施すものが出雲4期～5期にかけて認められる。4期と5期のものでは、ほとんど差の無いものであるが、5期のものは、やや立上りが低く、器高も低いものである。

提瓶 基本的に出土するものは、口縁端部が薄手の二重口縁のものと直立する単純な筒状の口縁が出土している。大谷分類では、前者がB型、後者がC型に該当する。B型は、出雲3期～4期に認

められ、中心は4期のものである。そして、C型は出雲5期を中心に認められ、出雲4期では、1例ほど可能性のあるものが存在するだけである。基本的にB型からC型に変遷している。

平 瓶 多種多様な形態のものが出土しているが、回転ヘラ削りが施されない蓋環と共に伴するもので出雲5期以降の器種と考えられるものである。

まとめ 以上須恵器についてその様相の一側面だけではあるが概略を述べてきた。島田池遺跡の横穴墓群から出土するもので有蓋高环が他の横穴墓群に比し多く出土し、型式的に連続するものである点が一つの特徴と考えられる。今回は、厳密に比較検討を行なわず、問題があるが、今後器種及びその型式の出土頻度等を比較検討することで、ある程度の地域性等が確認できる可能性が考えられる。

(b) 鉄製武器

本横穴墓群では、未盗掘の横穴墓が多いことから副葬品の遺存状況が良好であった。このことから出土した鉄製武器類から横穴墓の被葬者の階層性について、ある程度の検討が可能なものである。

群集墳の階層性については、すでに指摘されているところであり、それらの研究(註4・5)をもとに整理したものが、第338図である。以下時期ごとに説明したい。

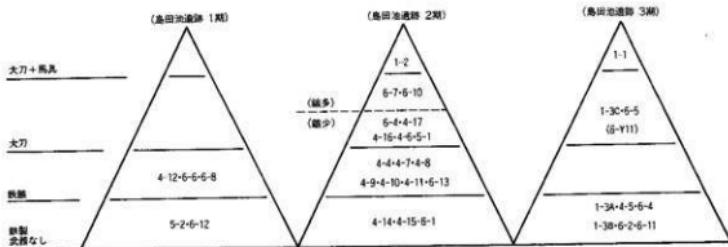
①島田池1期(出雲3期) 大刀・馬具等を持つ横穴墓は存在しておらず、鉄鎌を持つものと持たないものに分かれるものである。

②島田池2期(出雲4期) (A) 大刀と馬具を持つもの、(B) 大刀を持つもの、(C) 鉄鎌のみを持つもの、(D) 鉄製武器を持たないものの大きく4つに分かれるものである。さらに、(B)の大刀を持つものは、鉄鎌の数量で2つに細分できるものである。なお、大刀を持つものは、4区6号横穴墓を除き鉄鎌も伴うものである。

また、副葬品と墳丘との関係を見ると、階層上位の横穴墓である1区2号横穴墓、6区7号横穴墓が前方後方墳の主体部である。このことから、前方後方墳は階層上位のそれも大刀と鉄鎌を多量に副葬する階層以上の墳丘として考えられる。

次に、副葬品と玄室の天井形態の関係を見ると、階層上位の1区2号横穴墓、6区7号・10号横穴墓の3穴すべては、家形を呈すものである。そして、それ以下の階層では、天井部の丸いものである。このことから、階層上位のものと玄室が家形であることは、ある程度間連性をもつものである可能性が考えられる。

また、この時期の階層を見ると、(B)・(C)が最も多く、鉄鎌を持つ階層以上の被葬者が造営主体であるものと考えられる。



第338図 横穴墓群階層模式図

③島田池3期（出雲5期） この時期の横穴墓は、玄室内に副葬品が皆無のものが存在するなど、かなりの遺物が玄室外に持ち出されている可能性が高いものである。このことから、様相の把握が困難であるが、前代と比較すると単純な様相が見てとれるものである。

階層性は、(A) 大刀と馬具を持つもの、(B) 大刀を持つもの、(C) 鉄製武器を持たないものの3分して考えられるものである。また、鉄鎌を持つものは1区1号横穴墓のみであり、鉄鎌の副葬が減少する。なお、6区9号横穴墓は、玄室内に石床を設置している点から、大刀を持つ階層にとりあえず比定している。

④まとめ 以上のように各期の様相について見てきたが、階層構造は支群（調査区）によって格差が認められるものである。島田池1期では、1区の横穴墓群を全て調査していないこともあり、明確でないが、島田池2・3期での階層上位のものは、1区の横穴墓で占められている。そして、その次のランクには6区のものが占め、その下位に4区のものが占めている状況が見られる。全体的に、4区の横穴墓は、鉄鎌を持つ階層か鉄製武器を持たない階層にまとまるものである。

このように、各支群が各集団の墓域として認定できるならば、集団間においても階層差を認めることができるものであり、1区の墓域の集団は、各時期を通して優位に立ちえたものと考えられる。

(c) 須恵器甕

島田池遺跡の横穴墓及び後背墳丘では、多数の須恵器甕・横瓶の破片が出土している。これらは、出土総数が130個体程にのぼるものであり、接合作業は十分なものと言えないが、異なる横穴墓間で接合関係が認められ、時には、支群が異なる横穴墓間でも接合する例が認められた。なお、ある程度の破片数が確認されるものについては図化し、破片数の少ないものについては、図化をおこなわなかった。以下、図化したものについて、その形態的特徴及び接合関係について述べたい。

①甕・横瓶の形態と出土状況について（第339図～第368図）

破碎された状態で出土する甕には、口頸部が長く、波状文を施す大型のもの（第339図～第357図）と口頸部が短い中型のもの（第358図～第367図）の2つのタイプが認められる。そして、それよりも小型のものは、玄室内に副葬されており、大小により出土位置・状態が異なるものである。

大型の甕は、41個体図化している。主的に出土する横穴墓で時期ごとに見ると、島田池1期の横穴墓で1個体、島田池2期の横穴墓で7個体、島田池3期の横穴墓で22個体確認される。この様相から考えると大型甕は、島田池3期の横穴墓で破碎される例が非常に多いことが分かる。また、後背墳丘では、総数で13個体確認される。その中で多いものは、1区2号墳と5区2号墳であり、前者で3個体、後者で6個体出土しており、前方後方形のものは多い傾向が確認される。

形態的には、口縁端部・口頸部の沈線・波状文、胴部形態等が分類の指標となるものであるが、バリエーションが非常に多いもので、型式的な傾向が把握できないものであった。その中で、特徴的な個体がいくつか存在している。第334図3の甕は波状文だけでなく竹管文を施すもので、出雲地方では極めて珍しい例である。この甕は、1区3号横穴墓の前庭部出土のもので、この横穴墓からは、その他の須恵器で子持壺・異形平瓶等が出土しており、特異な須恵器を出土している。また、第346図1の甕は直立する口縁部を持ち、ほとんどの個体が広がる口縁をもつて特殊なものである。

中型の甕は、47個体図化している。主的に出土する横穴墓で時期ごとに見ると、島田池1期の横穴墓で5個体、島田池2期の横穴墓で13個体、島田池3期の横穴墓で19個体確認している。基本的に島田池2・3期の横穴墓で破碎される例が多いものである。また、後背墳丘では、1区2号墳の南側

第134表 横穴墓構造一覧表

| 区 | 横穴墓 | 墓道・前庭部 | | 玄門 | | | | 漢道 | | | |
|---|------|--------|-------|------|------|--------|----|------|------|------|----|
| | | 幅 | 長さ | 幅 | 長さ | 高さ | 断面 | 幅 | 長さ | 高さ | 断面 |
| 1 | 1号 | 1.15 | (9.6) | 1.0 | 0.6 | (0.88) | 方 | 1.1 | 1.55 | 1.2 | 方 |
| | 2号 | 1.0 | 7.8 | 0.95 | 1.75 | (0.97) | ? | | | | |
| | 3号 | | | | | | | | | | |
| | -A号 | | | 0.85 | 0.75 | 0.63 | 丸 | | | | |
| | -B号 | 2.2 | 9.8 | 0.8 | 0.9 | 0.65 | 方 | 1.08 | 0.78 | 0.88 | 方 |
| | -C号 | | | 0.88 | 0.65 | 0.7 | 方 | 0.95 | 0.97 | 0.95 | 方 |
| | | | | | | | | | | | |
| 4 | 4号 | 0.6 | 8.7 | 0.65 | 1.3 | 0.85 | 方 | | | | |
| | 5号 | 1.2 | 6.0 | 0.77 | 0.95 | 0.78 | 丸 | 1.05 | 0.8 | 0.92 | 方 |
| | 6号 | 1.2 | 7.36 | 0.75 | 1.25 | 0.87 | 丸 | | | | |
| | 7号 | 0.43 | 5.3 | 0.6 | 1.0 | 0.6 | 丸 | | | | |
| | 8号 | 0.54 | 5.54 | 0.65 | 0.8 | | ? | | | | |
| | 9号 | 0.8 | 3.84 | 0.7 | 0.9 | (0.5) | 丸 | | | | |
| | 10号 | 0.52 | 4.4 | 0.55 | 1.29 | 1.3 | 方 | | | | |
| | 11号 | 0.54 | 5.1 | 0.6 | 1.1 | 0.8 | 方 | | | | |
| | 12号 | 0.46 | 5.3 | 0.56 | 1.0 | (0.65) | ? | | | | |
| | 13号 | 0.6 | 3.8 | 0.45 | 1.08 | (0.53) | ? | | | | |
| | 14号 | 0.68 | 4.1 | 0.5 | 1.15 | 0.76 | 丸 | | | | |
| | 15号 | 0.48 | 4.8 | 0.5 | 1.68 | 0.67 | 方 | | | | |
| | 16号 | 0.6 | 7.3 | 0.66 | 1.26 | 0.86 | 丸 | | | | |
| | 17号 | 0.68 | 8.3 | 0.84 | 1.2 | 0.98 | 丸 | | | | |
| | | | | | | | | | | | |
| 5 | 1号穴 | 0.9 | 5.7 | 0.8 | 1.45 | 0.83 | 丸 | | | | |
| | 2号穴 | 0.96 | 2.4 | 0.68 | 1.1 | | ? | | | | |
| | | | | | | | | | | | |
| 6 | 1号穴 | 0.6 | 8.16 | 0.78 | 1.3 | 0.73 | 丸 | | | | |
| | 2号穴 | 0.8 | 5.76 | 0.7 | 0.84 | 0.84 | 方 | | | | |
| | 3号穴 | 0.85 | 1.7 | 0.56 | 1.4 | | ? | | | | |
| | 4号穴 | 0.9 | 6.6 | 0.77 | 0.9 | 0.77 | 方 | 0.98 | 0.7 | 0.95 | 方 |
| | 5号穴 | 1.0 | 9.6 | 0.9 | 0.9 | 0.7 | 方 | 1.0 | 0.9 | 0.97 | 方 |
| | 6号穴 | 0.7 | 4.5 | 0.54 | 0.9 | 1.1 | 方 | | | | |
| | 7号穴 | 0.8 | 10.7 | 0.75 | 1.3 | 0.94 | 丸 | | | | |
| | 8号穴 | 0.46 | 4.30 | 0.5 | 1.05 | 0.86 | 方 | | | | |
| | 9号穴 | 3.4 | 8.50 | 0.62 | 1.03 | 0.95 | 方 | 1.15 | 1.06 | 1.15 | 方 |
| | 10号穴 | 0.74 | 7.46 | 0.78 | 1.7 | 1.0 | 丸 | | | | |
| | 11号穴 | 2.3 | 7.1 | 0.85 | 1.1 | 0.7 | 丸 | 1.04 | 0.77 | 0.98 | 方 |
| | 12号穴 | 0.7 | 3.3 | 0.59 | 0.78 | (0.86) | 方 | | | | |
| | 13号穴 | 0.7 | 6.1 | 0.7 | 1.55 | 0.77 | 方 | | | | |
| | 14号穴 | 1.4 | 9.5 | 0.76 | 1.3 | (0.95) | ? | | | | |

* 玄門・漢道断面：丸（天井と側壁の界線が不明瞭）、方（天井と側壁の界線が明瞭）

* 玄室断面：丸天（軒線が無いもの）、家（軒線があるもの）

* 出土須恵器：1～8（出雲1期～出雲8期 大谷晃二「出雲地域の須恵器の編年と地城色」『島根考古学誌』第11集1994年による）

| 玄室 | | | 開口方向 | 閉塞施設 | 後背墳丘 | 出土須恵器 | | | | | | | |
|------|------|--------|------|---------|---------|-------|---|---|----|----|---|---|--|
| 幅 | 長さ | 高さ | 断面 | | | 3 | 4 | 5 | 6A | 6B | 7 | 8 | |
| 2.97 | 2.8 | 1.65 | 家 | S-12°-E | 切石2枚 | 不明 | ○ | ○ | ○ | ○ | | | |
| 2.45 | 2.15 | (1.6) | 家 | S-7°-W | 切石1枚 | 前方後方 | ○ | ○ | | | | | |
| 1.9 | 0.9 | 0.68 | 丸天 | N-82°-W | 割石 | | | ○ | | | | | |
| 2.45 | 2.3 | 1.2 | 丸天 | S-70°-W | 切石2枚 | | | ○ | ○ | | | | |
| 2.23 | 2.25 | 1.3 | 家 | S-8°-W | 割石 | | | | ○ | | | | |
| 1.98 | 2.03 | 1.35 | 丸天 | S-69°-E | 切石? | | ○ | | | | | | |
| 2.3 | 2.2 | 1.22 | 丸天 | S-81°-E | 割石 | | ○ | ○ | ○ | ○ | | | |
| 2.48 | 2.2 | 1.18 | 丸天 | S-85°-E | 割石 | | ○ | | | | | | |
| 1.95 | 1.46 | (0.78) | 丸天 | N-47°-E | | | ○ | | | | | | |
| 2.05 | 1.97 | 1.02 | 丸天 | N-44°-E | | | ○ | | | | | | |
| 1.63 | 1.70 | 1.0 | 丸天 | N-47°-E | 割石 | 前方後方 | ○ | ○ | | | | | |
| 2.65 | 2.54 | 1.32 | 丸天 | N-80°-E | | | ○ | | | | | | |
| 1.53 | 1.92 | 1.05 | 丸天 | S-69°-E | 割石 | | ○ | | | | | | |
| 2.1 | 2.02 | 1.04 | 丸天 | S-63°-E | 割石 | 方 | ○ | ○ | | | | | |
| 1.8 | 1.03 | (0.7) | 丸天 | S-44°-E | | | ○ | | | | | | |
| 1.45 | 1.7 | 0.92 | 丸天 | S-64°-E | | | ○ | | | | | | |
| 1.9 | 1.95 | 1.1 | 丸天 | S-62°-E | | 方 | ○ | | | | | | |
| 1.93 | 1.85 | 0.94 | 丸天 | N-73°-E | | | ○ | ○ | | | | | |
| 2.56 | 2.44 | 1.48 | 丸天 | N-86°-E | 割石 | 不明 | ○ | ○ | ○ | | | | |
| 2.3 | 2.48 | 1.3 | 丸天 | N-76°-W | 割石 | 不明 | ○ | | | | | | |
| 2.5 | 2.05 | 1.07 | 丸天 | N-58°-W | 割石 | | ○ | | | | | | |
| 2.15 | 1.85 | 1.05 | 丸天 | N-50°-W | | | ○ | | | | | | |
| 2.2 | 1.98 | 1.12 | 丸天 | S-85°-W | 割石・切石1枚 | | | ○ | | | | | |
| 2.35 | 2.2 | | (丸天) | S-74°-W | 割石? | | | | | | | | |
| 2.5 | 2.23 | 1.32 | 家 | S-64°-W | 切石2枚 | | ○ | ○ | | | | | |
| 2.95 | 2.35 | 1.2 | 家 | S-59°-W | 切石2枚 | 方 | ○ | ○ | ○ | ○ | | | |
| 1.95 | 2.3 | 1.14 | 丸天 | S-53°-W | 割石 | 方 | ○ | | | | | | |
| 2.5 | 2.5 | 1.45 | 家 | S-30°-W | 切石1枚 | 前方後方 | ○ | | | | | | |
| 1.65 | 2.3 | 1.02 | 丸天 | S-19°-E | 割石 | 方 | ○ | ○ | | | | | |
| 2.7 | 2.05 | 1.5 | 家 | S-14°-E | 切石2枚 | | | ○ | | | | | |
| 2.85 | 2.64 | 1.3 | 家 | S-8°-E | 切石1枚 | | ○ | | | | | | |
| 2.35 | 2.25 | 1.3 | 丸天 | S-15°-E | 切石2枚 | | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | |
| 2.05 | 1.96 | (1.1) | 丸天 | S-12°-E | 切石1枚 | 方 | ○ | ○ | | | | | |
| 2.7 | 2.45 | 1.15 | 丸天 | S-2°-W | | | ○ | ○ | | | | | |
| 2.45 | 2.4 | (1.05) | (丸天) | S-10°-W | 切石2枚 | | ○ | ○ | | | | | |

第135表 島田池遺跡（横穴墓群）出土遺物一覧表①

| 横 穴 墓 | 須 惠 器 | | | | | | | | | | | | | | | |
|-------------|-------|-----------|--------|--------|---|---|---|---|-----|---|---|-----|---|---|---------------|-------------|
| | 环 | 完 形・復元 完形 | | | | | | | | | | | | | | |
| | | 高 蓋 | 高 身 | 堤 | 平 | 横 | 直 | 広 | 短 | 長 | 子 | 頭 | 持 | 甕 | ミニ チュ ア | 脚 付 椀 |
| | | セ ット | 杯 | 高 环 | 瓶 | 瓶 | 瓶 | 壺 | 壺 | 壺 | 壺 | 壺 | 甕 | 甕 | 甕 | 甕 |
| 1区 1号 | 玄室 | 16 | 10 | 11 | 4 | 2 | 1 | 4 | 4 | | 1 | | | | | 1 |
| | 前庭 | 7 | 10 | | 8 | 2 | 2 | 5 | 3 | 6 | | | | | | 1 |
| 2号 | 玄室 | 12 | 8 | | 2 | | 2 | 1 | | 1 | | | | | | |
| | 墓道 | 4 | 5 | 6 | 1 | | 1 | | | 1 | | | | | | |
| 3号 | A玄室 | 2 | 3 | 1 | 1 | | | | | | | | | | | |
| | B玄室 | 7 | 9 | 7 | 3 | | | 3 | | 1 | | | 2 | 1 | | |
| | C玄室 | 1 | | | | | | | | | 1 | | | | | |
| | 前庭 | 10 | 10 | | 4 | 4 | | 5 | 1 | | | 1 | 5 | | | 1 |
| 4区 4号 | 玄室 | | | | | | | 1 | | | | | | | | |
| | 墓道 | 25 | 18 | | | | 1 | | (1) | 1 | | | | | | |
| 5号 | 玄室 | 7 | 5 | | | | 1 | | | | | | | | | |
| | 前庭 | 6 | 3 | | | | | | 2 | | | 2 | | | | 1 |
| 6号 | 玄室 | 15 | 13 | | | 2 | | | 2 | 1 | 1 | | | | | |
| | 墓道 | 4 | | | | | | | | | | | | | | |
| 7号 | 玄室 | 5 | 7 | | | | | 1 | | | | | | | | |
| | 墓道 | | | | | | | | | | | | | | | |
| 8号 | 玄室 | 6 | 7 | | | | | | | | | | | | | |
| | 墓道 | | | | | | | | | | | | | | | |
| 9号 | 玄室 | 9 | 13 | | 1 | | 1 | | 1 | | | | | | | |
| | 墓道 | | 1 | | | | | | 1 | | | | | | | |
| 10号 | 玄室 | 2 | 1 | | | | | | | | | | | | | |
| | 墓道 | 1 | 1 | | | 1 | | | | | | | | | | |
| 11号 | 玄室 | 2 | 2 | | | 1 | 1 | | | 2 | | | | | | |
| | 墓道 | | | | | | | | | | | | | | | |
| 12号 | 玄室 | 15 | 15 | 11 | 3 | 2 | 2 | | | 1 | 1 | | | | | |
| | 墓道 | | | | | | | | | 1 | | | | | | |
| 13号 | 玄室 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 墓道 | | | | | | | | | | | | | | | |
| 14号 | 玄室 | 3 | 4 | | | | | | | | | | | | | |
| | 墓道 | 1 | 1 | | | | | | 1 | | | | | | | |
| 15号 | 玄室 | 11 | 13 | | | 1 | | | | | | | | | | |
| | 墓道 | | 1 | | | | | | | | | | | | | |
| 16号 | 玄室 | 19 | 17 | 3 | 2 | | 2 | 1 | | 5 | | | | | | |
| | 墓道 | 1 | 2 | | | | | | | | | | | | | |
| 17号 | 玄室 | 11 | 14 | 6 | | | 1 | 1 | 1 | 2 | 2 | (2) | 1 | | | |
| | 墓道 | 3 | 3 | | | | | | | | | | | | | |

| 土師器 | | 鉄製品 | | | | | | 装身具 | | | | | | 製造時期 | |
|-----|---|-----|----|----|----|----|----|-----|----|----|----|-----|----|------|------|
| 完形 | | 大刀 | 馬具 | 鐵金 | 弓子 | 刀斧 | 鐵鑑 | 鍛鑄 | 耳環 | 勾玉 | 管玉 | 切子玉 | 丸玉 | ガラス玉 | |
| 壺 | 瓶 | 刀 | 具 | 鐵 | 金 | 子 | 斧 | 鑑 | 鑄 | 玉 | 玉 | 玉 | 玉 | 玉 | |
| 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | | | | | 2 | 1 | | | 3 | | 出雲5期 |
| | | ○ | | | | | | | | | | | | | |
| | | 2 | ○ | 10 | 1 | 1 | | | 3 | 5 | 3 | 5 | 7 | | 出雲4期 |
| | | | | | | 1 | | | | | | | | | |
| 1 | | | | | | 1 | | | | | | | | | 出雲5期 |
| 1 | 1 | | | | 2 | | | 2 | 10 | 2 | | | | | 出雲5期 |
| | | 1 | | | 1 | | | | | 2 | | | | | 出雲6期 |
| 1 | | | | | | 1 | | | | | | | | | |
| | | | | | 1 | | | | | | | | | | 出雲4期 |
| | | | | | | 1 | | | | 1 | | | | | 出雲5期 |
| 2 | 1 | | | | | | | | | | | | | | 出雲4期 |
| | | 1 | | | | 1 | | | | 1 | | | | | 出雲4期 |
| | | 1? | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | 3 | 1 | | | | | | | | | | 出雲4期 |
| | | | | 1 | | | | | 1 | | | | | | 出雲4期 |
| | | | | 3 | 2 | | | | | | | | | | 出雲4期 |
| | | | | 3 | | | | | | | | | | | 出雲4期 |
| | | | | 3 | 2 | | | | | | | | 20 | | 出雲4期 |
| | | | | 11 | 2 | | | | | | | | | | 出雲3期 |
| | | | | | | | | | | | | | | | 時期不明 |
| | | | | | | | | | 1 | | | | | | 出雲4期 |
| | | | | | | 1 | | | | 2 | 1 | | | | 出雲4期 |
| 1 | | 1 | 7 | 3 | | | | | 3 | 1 | | | | | 出雲4期 |
| | | 2 | 9 | 2 | | | | | 1 | | | | | | 出雲4期 |
| | | | | | | | | | | | | | | | |

第136表 島田池遺跡（横穴墓群）出土遺物一覧表②

| 横 穴 墓 | | 須 惠 器 | | | | | | | | | | | | | | | |
|-------------|-----|-------------|----|---|----|------------------|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 完 形・復 元 完 形 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | 环 | | 高 | | 高 蓋 高 环 | | 甕 | | 堤 | | 平 | | 横 | | 直 | |
| | | 蓋 | 身 | セ | ソ | ト | 杯 | 甕 | 瓶 | 甕 | 瓶 | 甕 | 瓶 | 甕 | 甕 | 甕 | 甕 |
| 5区 | 1号 | 玄室 | 2 | 2 | | | 1 | | | | | | | | | | |
| | | 墓道 | 6 | 6 | | | | | | | | | | | | | |
| | 2号 | 玄室 | 5 | 6 | | | | | | | | | 1 | | 1 | | |
| | | 墓道 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 6区 | 1号 | 玄室 | 1 | 3 | | | | | | | | | 1 | | | | |
| | | 墓道 | 1 | | | | | | | | | | | | 1 | | |
| | 2号 | 玄室 | 3 | 3 | | | | | | | | 1 | | 1 | | | |
| | | 墓道 | 2 | 1 | | | | | | | | | | | | | |
| | 3号 | 玄室 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | 墓道 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 4号 | 玄室 | 4 | 3 | 2 | | | | | | | | | | | | |
| | | 前庭 | 5 | 3 | 1 | | | | | | | | 1 | | | | |
| | 5号 | 玄室 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | 前庭 | 7 | 8 | 2 | 1 | | | 1 | | 1 | | 1 | | | | 1 |
| | 6号 | 玄室 | 5 | 5 | | | | | | | 1 | | | | | | |
| | | 墓道 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 7号 | 玄室 | 1 | | | | | | | | | | 1 | | | | |
| | | 墓道 | 10 | 3 | | 2 | 7 | 2 | | | | | 1 | | | 2 | 2 |
| | 8号 | 玄室 | 3 | 3 | 12 | 3 | | | 2 | 2 | | | 1 | | 1 | | |
| | | 墓道 | 5 | 6 | | | | | 1 | | | | 2 | | | | |
| | 9号 | 玄室 | | | 1 | | | | | | | | | | | | |
| | | 前庭 | 1 | 3 | | 1 | | 1 | | 2 | | 1 | | | | | |
| | 10号 | 玄室 | 2 | 3 | | | | | | | | | | | | | |
| | | 墓道 | 8 | 1 | | | | 1 | | | | 1 | | | | | |
| | 11号 | 玄室 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | 前庭 | 5 | 3 | | | 1 | | | | | | | | 1 | | |
| | 12号 | 玄室 | 3 | 4 | | | | | | | | | 1 | | 1 | | |
| | | 墓道 | 1 | | | | 1 | | | | | | | | | | |
| | 13号 | 玄室 | 8 | 8 | 12 | 7 | 2 | 2 | 1 | | | 3 | 1 | 1 | | | |
| | | 墓道 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 14号 | 玄室 | 2 | | 7 | 1 | | | | 2 | 1 | | 1 | | 1 | | |
| | | 墓道 | | | | 1 | | | | | | | | | | | |
| | 15号 | 玄室 | 1 | | | | | | | | | | | | 1 | | |
| | | 墓道 | 1 | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | |

テラス（S X03）で4個体、5区2号墳で6個体と大型の甕と同様に前方後方形の墳丘で多数出土している。

形態的に見ると、バリエーションに富むもので、型式学的な傾向が把握できないものであった。全体的な特徴としては、口径が20cm前後にまとまるものであり、かなり規格的に作られている可能性が考えられる。また、第365図4のように焼成時に破裂している個体がいくつか見られ、実際に容器として使用されたものか疑わしいもののが存在する。このことから甕類は破裂するためだけに使用された器種として考えることもできる。

横瓶（第368図）は、島田池3期の横穴墓から主体的に出土しており、この時期から出現する器種であり、また、甕類と同様に破裂される性格を持つ器種である。形態的には、口径13cm前後とまとまるものであるが、胴部最大径はバリエーションが多い。

②甕・横瓶の接合関係について

横穴墓及び後背墳丘等から出土している甕・横瓶の接合関係については、第137・138表に整理しているので、詳細についてはそれに譲るが、接合関係の全体的な特徴を整理すると以下の通りになる。

- ・いくつかの遺構で出土したものが接合する個体と1つの遺構で完結している個体が存在する。
- ・築造時期の異なる横穴墓間で接合する例が多く存在する。
- ・接合する破片の遺構ごとの割合を見ると、主体的に出土する遺構が1つ存在し、それ以外の遺構では少量であり、比率に大きな差が認められる。
- ・主体的に出土する遺構からは、口縁～頸部にかけての部分のはほとんどが出土し、少量出土する遺構のものは、胴部の破片だけである例が多い。
- ・支群ごとに出土量を見ると、4区の横穴墓及びそれに伴う後背墳丘から出土する個体数が非常に少ないものである。
- ・支群の異なる横穴墓の須恵器床で接合関係が認められる。（1区1号横穴墓と6区4号横穴墓）

③まとめ

以上述べてきたように島田池遺跡では、最終埋葬後に須恵器甕及び横瓶の破碎散布といった何らかの儀礼行為が行われ、儀礼の対象となる横穴墓以外にも前代の横穴墓等に破片が散布されていたものと考えられる。このような儀礼の背景には、姻戚関係を反映したものと解釈する説（註6）もあり興味深いが、そこまでは明確にできないものの、ある程度の集団間の結び付きが背景に存在していることは間違いないものと思われる。

3、まとめ

ここまで述べてきたような点について、本横穴墓群と他地域の横穴墓群の様相とを比較検討して結びたいと思う。

①形態 本遺跡の横穴墓は、出雲5期（島田池1期）で大きな変化が認められるものである。形態的には羨道部が付設し、いわゆる「意宇型」横穴墓と呼ばれるものが出現するが、周辺地域では、すでに出雲3期に出現（註7・8）しており、1段階遅れて出現している点が指摘され、また、そこが本横穴墓の特徴でもある。

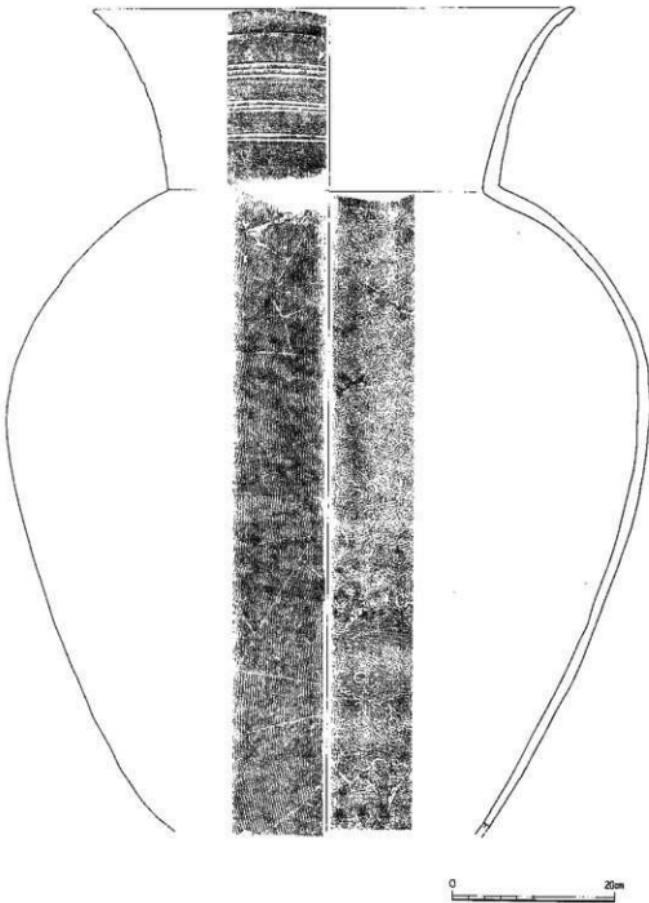
②埋葬配置 また、出雲5期で認められる埋葬配置の変化は、新たに影響を受けて成立したものである可能性が高く、その系譜が問題視されるものである。この時期の埋葬配置で九州地方に系譜を求め

第137表 横穴墓群須恵器接合関係

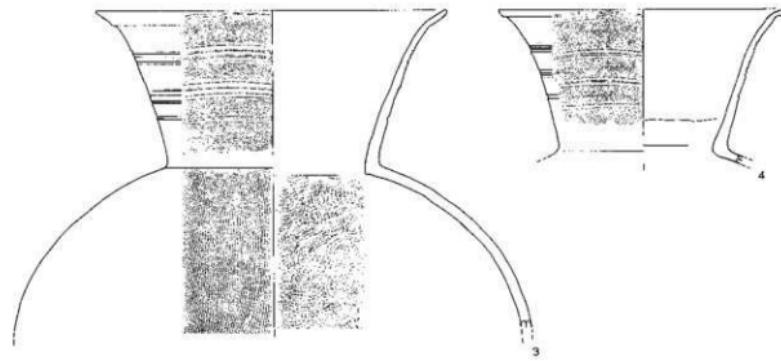
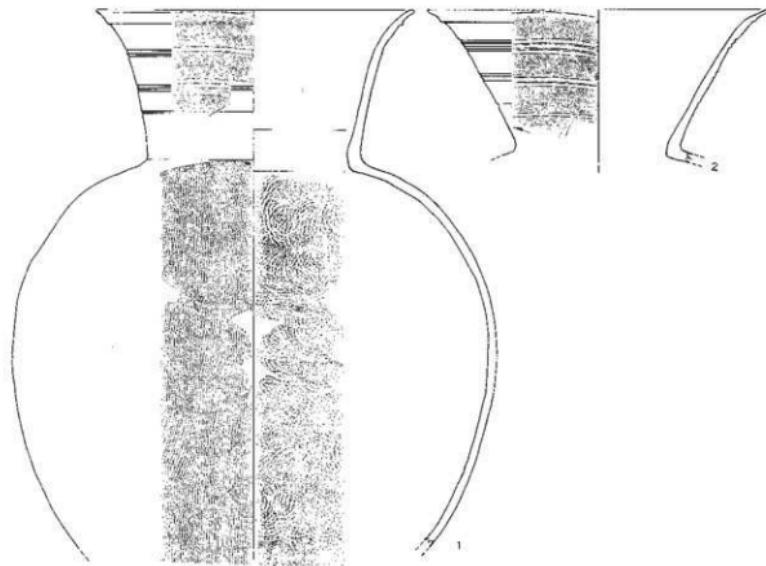
| 品種 | 古墳・横穴墓 |
|----------|---|
| 大妻(1)-① | 1区2号墳 |
| 大妻(2)-① | 1区2号墳 |
| 大妻(2)-② | 1区2号墳、(1区3号横穴墓) |
| 大妻(2)-③ | 1区2号横穴墓、1区S X03、1区2号墳 |
| 大妻(2)-④ | 1区S X03、(1区2号墳) |
| 大妻(3)-① | 1区2号横穴墓、2区2号横穴墓、3区3号横穴墓、4区2号墳 |
| 大妻(4)-① | 1区1号横穴墓 |
| 大妻(4)-② | 1区1号横穴墓 |
| 大妻(5)-① | 1区2号横穴墓、6区3号横穴墓、1区1号横穴墓 |
| 大妻(5)-② | 1区2号横穴墓、1区1号横穴墓、1区3号横穴墓 |
| 大妻(6)-① | 1区3号墳、1区2号横穴墓 |
| 大妻(6)-② | 1区3号横穴墓 |
| 大妻(6)-③ | 1区3号横穴墓 |
| 大妻(7)-① | 1区3-B号横穴墓 |
| 大妻(7)-② | 4区5号横穴墓(左・前) |
| 大妻(8)-① | 5区2号墳、6区4号・7号・9号・14号横穴墓 |
| 大妻(8)-② | 5区2号墳 |
| 大妻(9)-① | 5区9号墳、5区1号横穴墓 |
| 大妻(9)-② | 5区西侧尾根、6区9号横穴墓 |
| 大妻(9)-③ | 5区2号墳、6区9号横穴墓 |
| 大妻(10)-① | 5区2号墳、6区11号横穴墓、12号横穴墓、13号横穴墓 |
| 大妻(10)-② | 5区2号墳、5区西侧尾根、4区尾根 |
| 大妻(10)-③ | 5区2号墳 |
| 大妻(10)-④ | 5区西侧尾根、6区13号横穴墓 |
| 大妻(11)-① | 5区2号墳、5区4号墳、6区5号横穴墓 |
| 大妻(11)-② | 6区4号・5号・10号・12号横穴墓、5区4号墳 |
| 大妻(12)-① | 6区3号横穴墓、6区4号横穴墓、6区5号横穴墓 |
| 大妻(13)-① | 6区5号横穴墓、6区4号横穴墓、6区6号横穴墓 |
| 大妻(14)-① | 6区11号横穴墓、6区12号横穴墓、6区13号横穴墓、6区14号横穴墓、6区15号横穴墓、6区16号横穴墓、6区17号横穴墓、6区18号横穴墓、6区19号横穴墓、6区20号横穴墓 |
| 大妻(15)-① | 6区7号・9号・8号・10号・11号横穴墓 |
| 大妻(16)-① | 6区7号横穴墓 |
| 大妻(16)-② | 6区1号横穴墓、6区2号横穴墓、6区11号横穴墓、5区2号墳 |
| 大妻(17)-① | 6区9号横穴墓 |
| 大妻(17)-② | 6区9号横穴墓、6区8号墳、5区2号墳、5区斜面 |
| 大妻(17)-③ | 6区9号横穴墓、6区8号横穴墓 |
| 大妻(18)-① | 6区10号横穴墓、(11号横穴墓) |
| 大妻(19)-② | 6区11号横穴墓、5区斜面 |
| 大妻(19)-③ | 6区11号横穴墓、9号横穴墓、10号横穴墓、4号横穴墓 |
| 大妻(19)-④ | 6区14号横穴墓、6区13号横穴墓 |
| 大妻(19)-⑤ | 6区14号横穴墓 |
| 大妻(20)-① | 1区3号横穴墓 |
| 大妻(20)-② | 1区3号墳 |
| 大妻(20)-③ | 1区2号墳(S X03)、1区3号横穴墓 |
| 大妻(20)-④ | 1区2号墳(S X03)、1区3号横穴墓 |
| 大妻(20)-⑤ | 1区2号横穴墓 |
| 大妻(21)-① | 1区3号横穴墓 |

第138表 横穴墓群須恵器接合関係

| 品種 | 横穴墓 |
|--------|--|
| 妻01-② | 1区3号横穴墓、1区2号墳(S X03)、1区2号横穴墓 |
| 妻01-③ | 1区3号横穴墓、1区2号墳(S X03) |
| 妻01-④ | 1区3号横穴墓、1区2号横穴墓(S X03) |
| 妻01-⑤ | 4区3号墳 |
| 妻02-① | 4区1号墳、4区8号横穴墓 |
| 妻02-② | 4区12号横穴墓、4区11号横穴墓 |
| 妻02-③ | 4区16号横穴墓 |
| 妻02-④ | 5区2号墳、5区4号墳 |
| 妻03-① | 5区4号墳 |
| 妻03-② | 5区2号墳 |
| 妻03-③ | 5区4号墳 |
| 妻03-④ | 5区2号横穴墓、6区9号横穴墓 |
| 妻03-⑤ | 5区2号墳 |
| 妻03-⑥ | 5区2号墳、5区4号墳 |
| 妻04-① | 5区1号横穴墓、5区9号墳 |
| 妻04-② | 5区2号墳 |
| 妻04-③ | 6区1号横穴墓 |
| 妻04-④ | 6区4号横穴墓、6区5号横穴墓 |
| 妻04-⑤ | 6区4号横穴墓 |
| 妻04-⑥ | 6区4号横穴墓、5号横穴墓、6号横穴墓 |
| 妻05-① | 6区5号横穴墓、6区4号横穴墓、6区12号横穴墓 |
| 妻05-② | 6区5号横穴墓 |
| 妻05-③ | 6区2号横穴墓 |
| 妻05-④ | 6区2号横穴墓、(6区5号横穴墓)、(6区11号横穴墓) |
| 妻06-① | 6区7号・9号・12号横穴墓 |
| 妻06-② | 6区7号横穴墓、(11号横穴墓) |
| 妻06-③ | 6区7号横穴墓、6区5号横穴墓 |
| 妻06-④ | 6区8号横穴墓、6区9号横穴墓、6区7号横穴墓 |
| 妻07-① | 6区9号横穴墓、6区8号横穴墓 |
| 妻07-② | 6区9号・8号・9号横穴墓 |
| 妻07-③ | 6区9号横穴墓 |
| 妻07-④ | 6区9号横穴墓 |
| 妻07-⑤ | 6区9号横穴墓、6区8号横穴墓 |
| 妻08-① | 6区9号横穴墓、5区5号墳周辺 |
| 妻08-② | 6区11号横穴墓、(6区10号横穴墓) |
| 妻08-③ | 6区13号横穴墓 |
| 妻08-④ | 6区13号横穴墓(ス) |
| 妻08-⑤ | 6区14号横穴墓(ス) |
| 妻09-② | 6区14号横穴墓(ス)前、6区13号横穴墓、6区15号横穴墓 |
| 妻09-③ | 6区14号横穴墓(ス)後、6区15号横穴墓、6区16号横穴墓、6区17号横穴墓、5区尾根 |
| 妻09-④ | 6区15号横穴墓、6区14号横穴墓 |
| 横瓶00-① | 1区2号墳 |
| 横瓶00-② | 1区2号墳、(1区3号横穴墓) |
| 横瓶00-③ | 5区2号墳、5区4号墳 |
| 横瓶00-④ | 6区4号・(5号横穴墓) |
| 横瓶00-⑤ | 6区5号横穴墓・6号横穴墓・7号横穴墓、5区4号墳 |
| 横瓶00-⑥ | 6区5号横穴墓 |

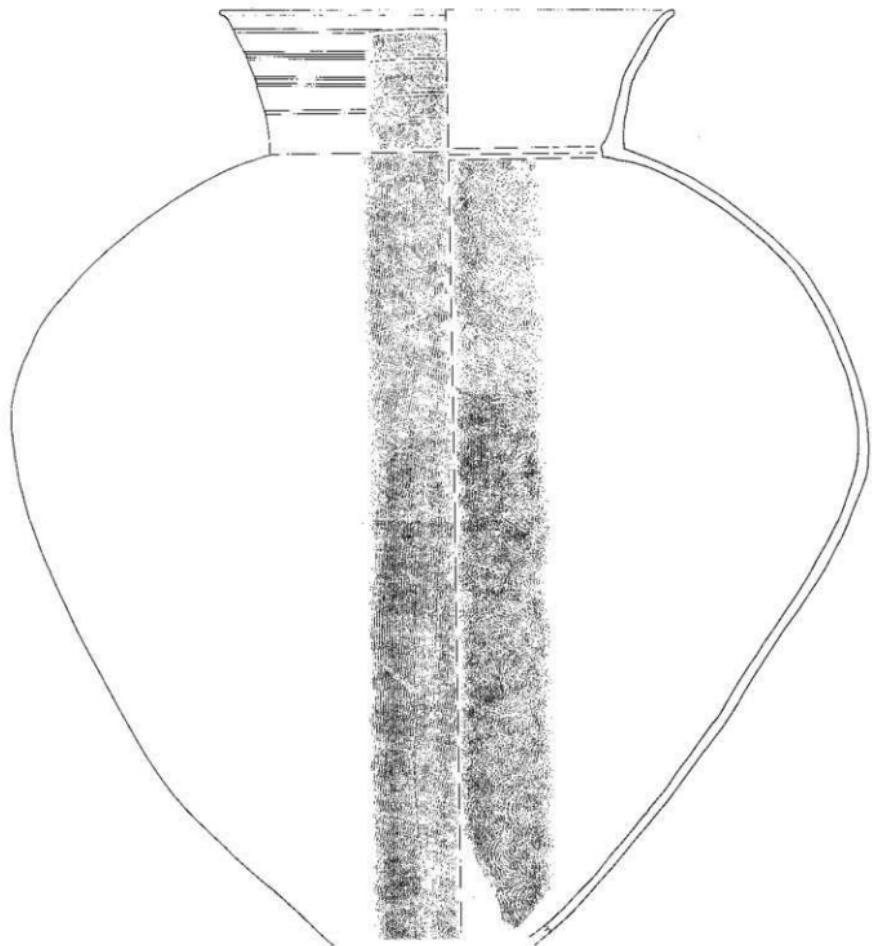


第339図 出土須恵器隻実測図 (1) ($S = 1:6$)



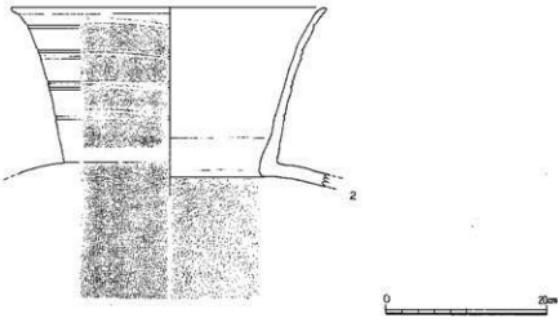
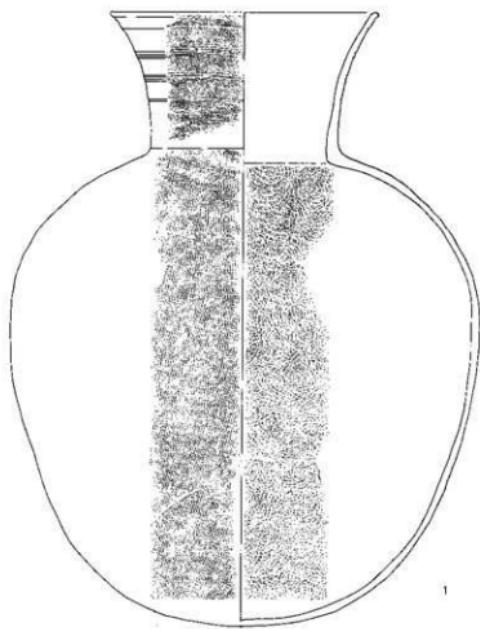
0 20cm

第340図 出土須恵器壺実測図(2) (S=1:6)

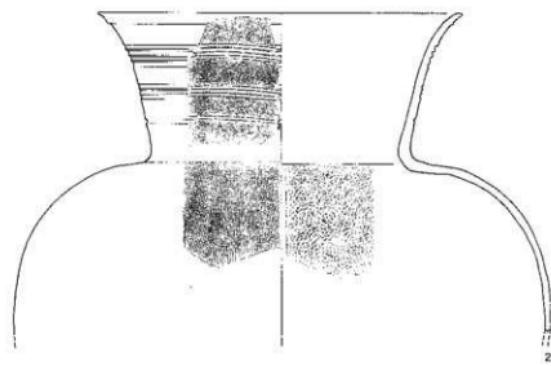
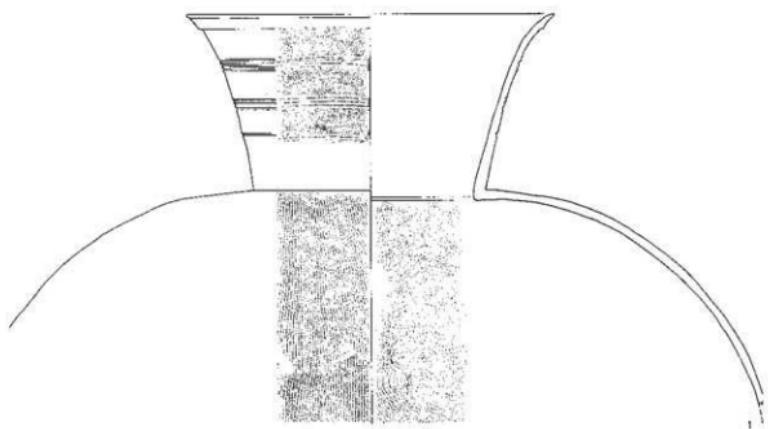


0 20cm

第341図 出土須恵器彫刻圖 (3) ($S=1:6$)

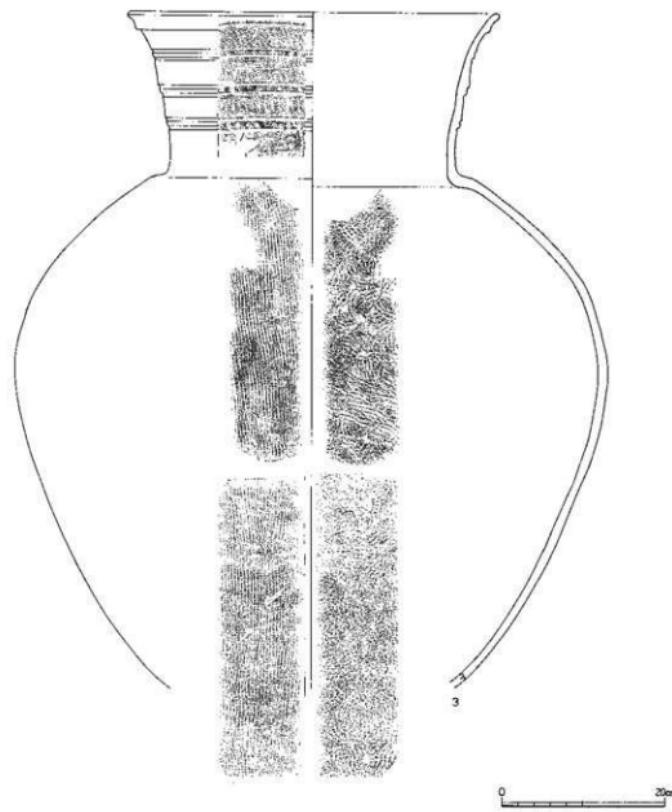
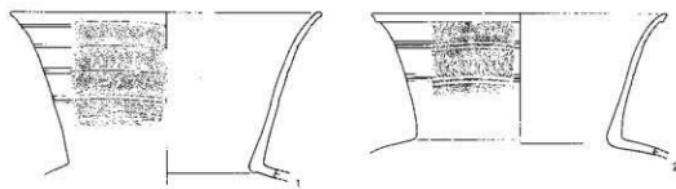


第342図 出土須恵器壺実測図(4)(S=1:6)

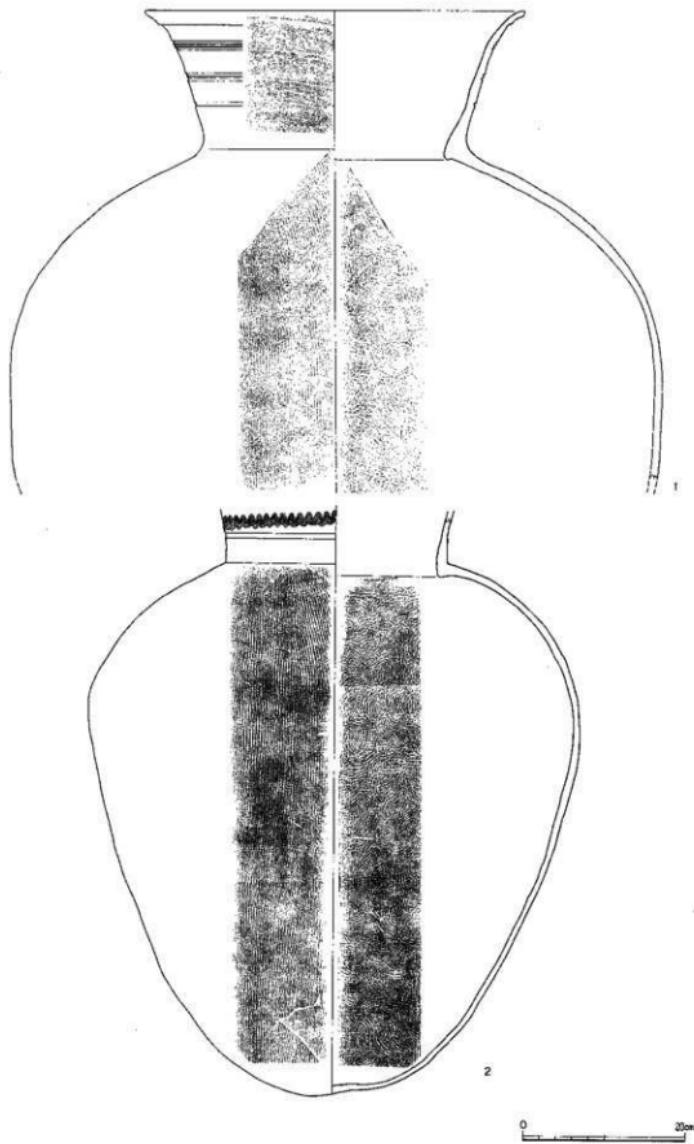


0 20mm

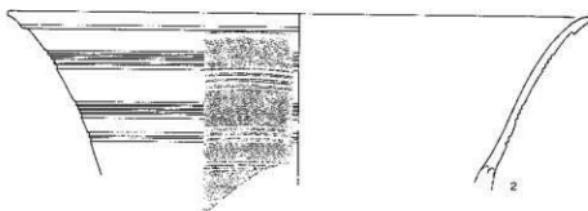
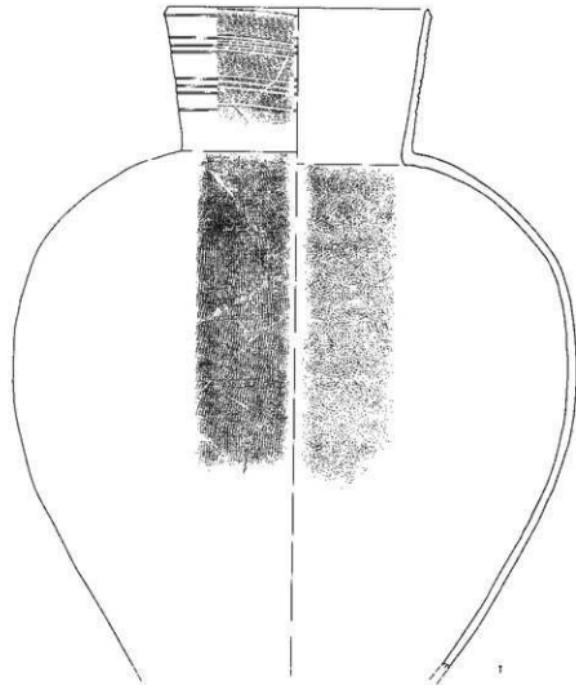
第343図 出土須恵器壺実測図(5) (S=1:6)



第344図 出土須恵器壺実測図 (6) ($S=1:6$)

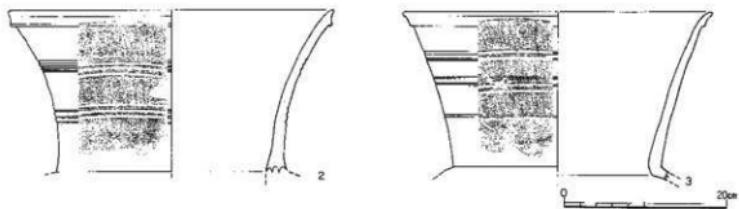
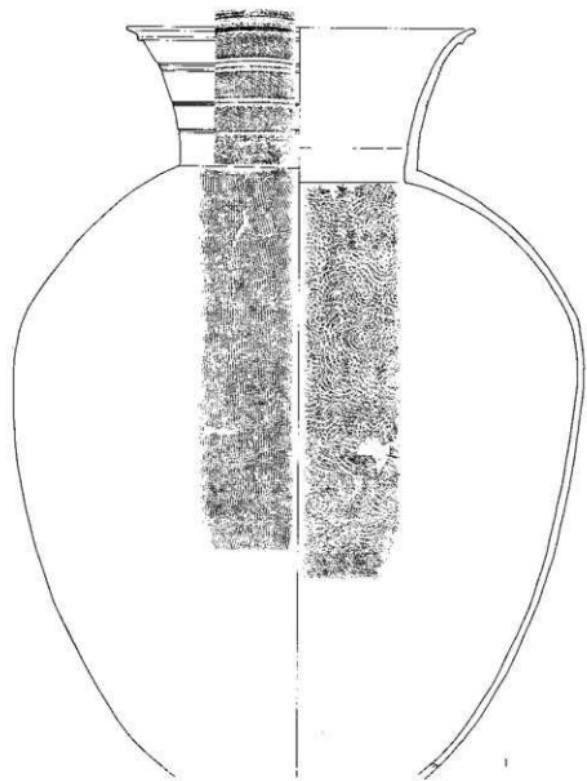


第345図 出土須恵器裏実測図(7) (S=1:6)

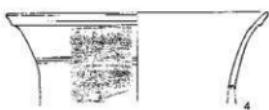
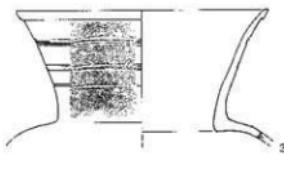
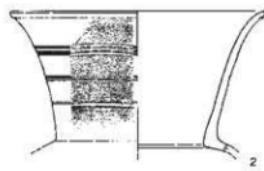
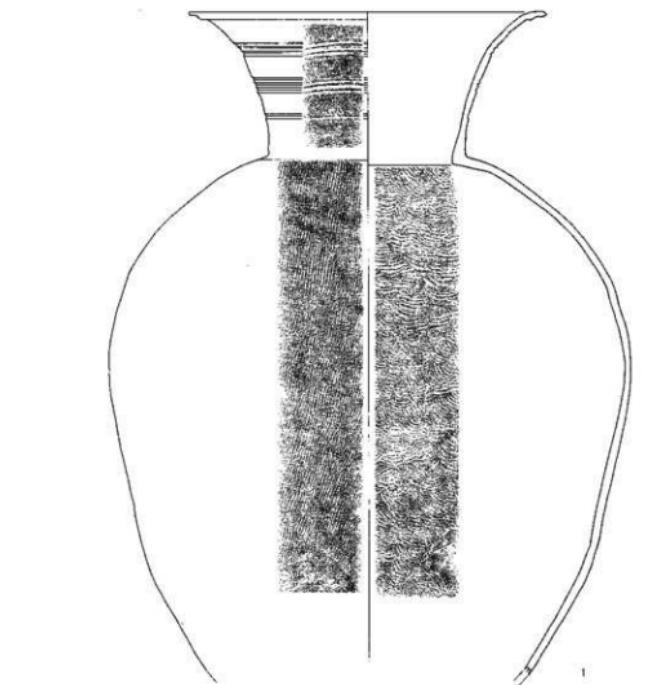


0 20mm

第346図 出土須恵器裏実測図(8) (S=1:6)

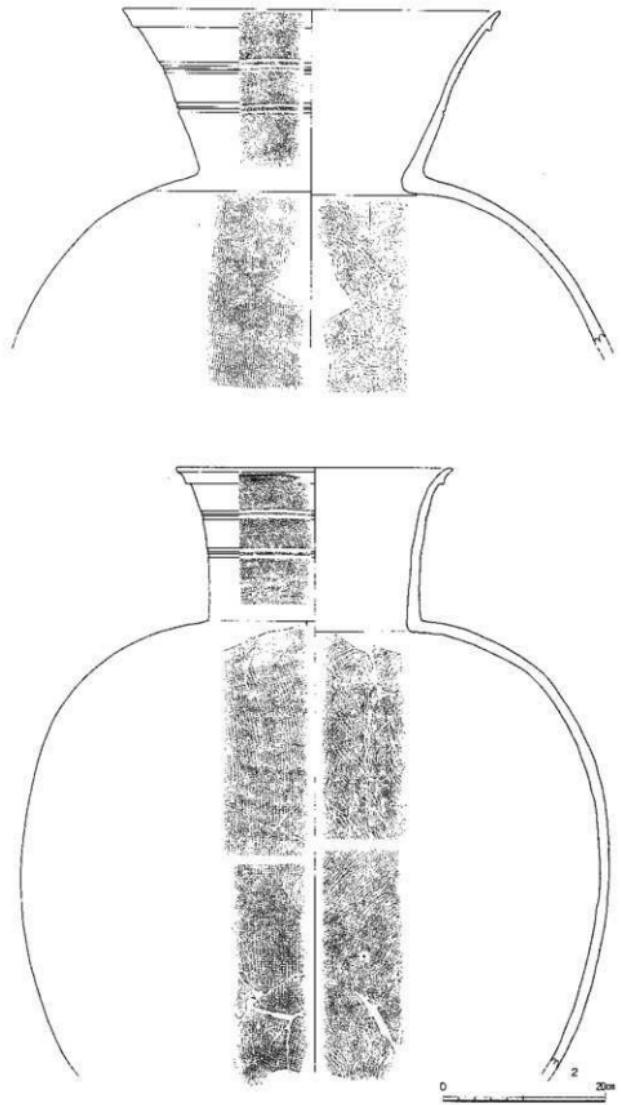


第347図 出土須恵器壺突洞図 (9) ($S = 1:6$)

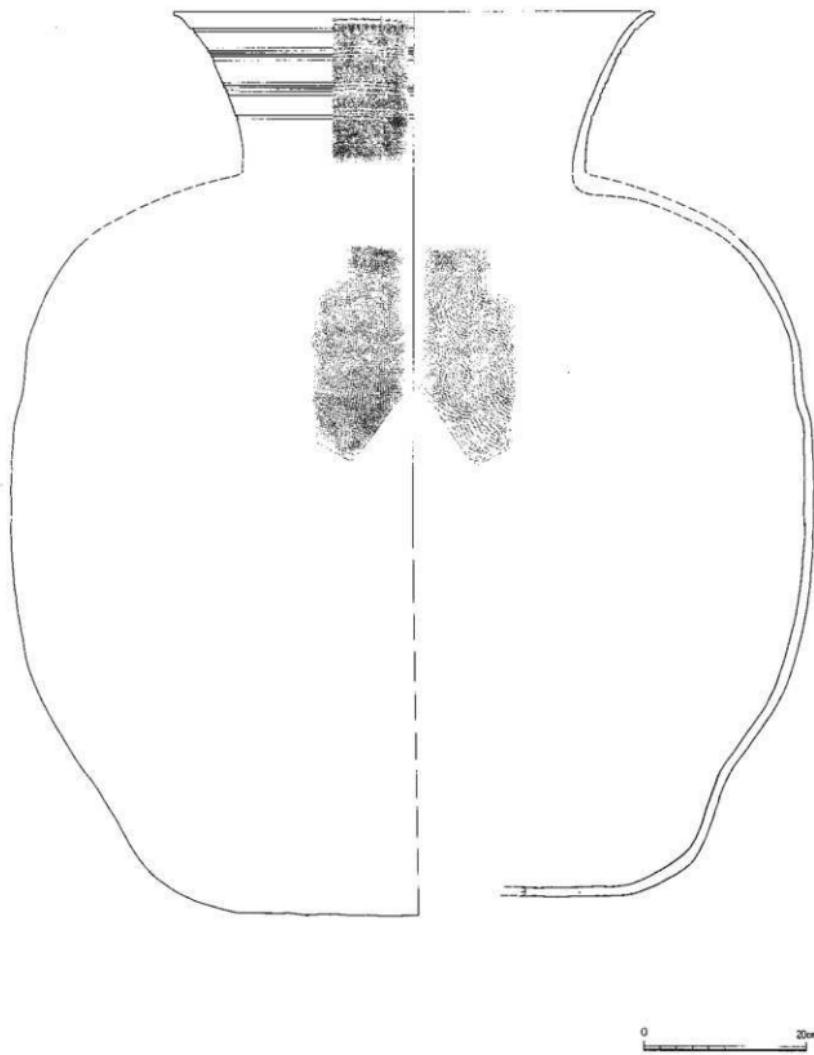


0 2cm

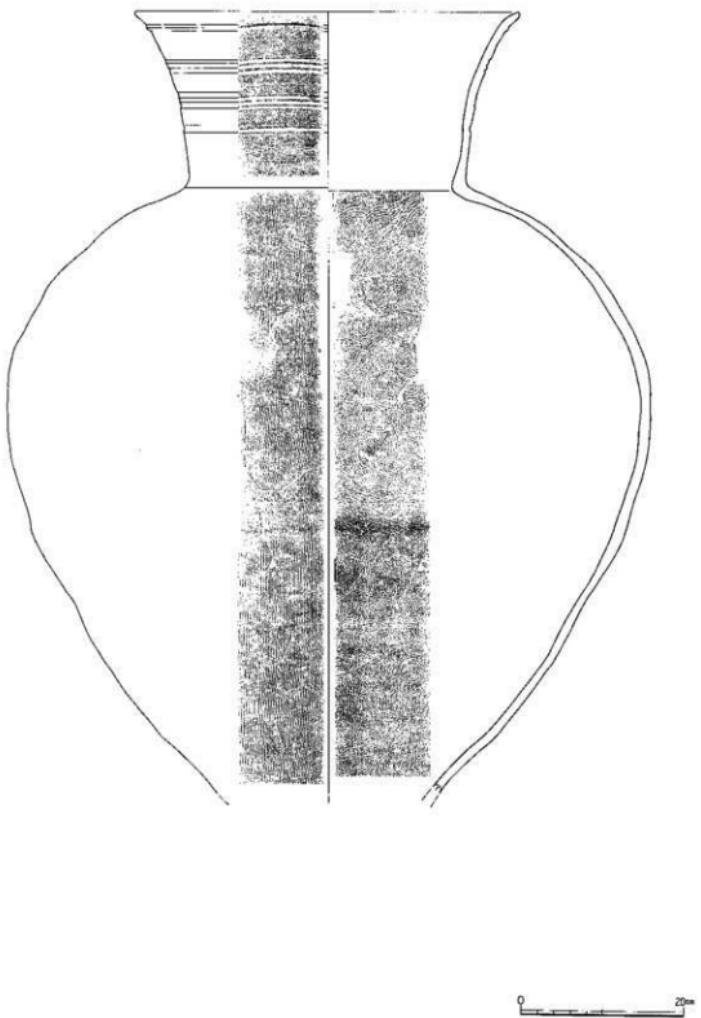
第348図 出土須恵器実測図 (10) ($S=1:6$)



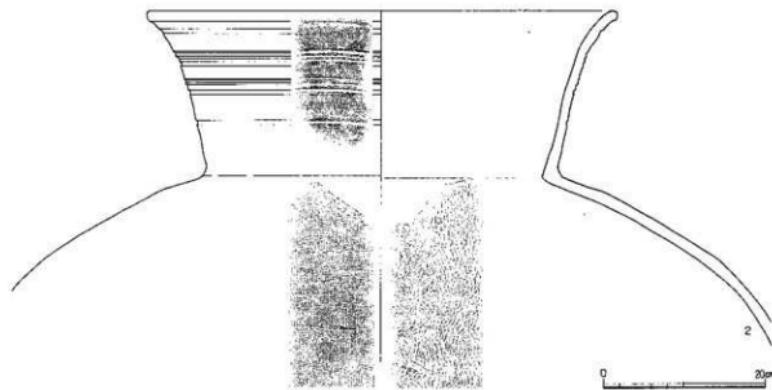
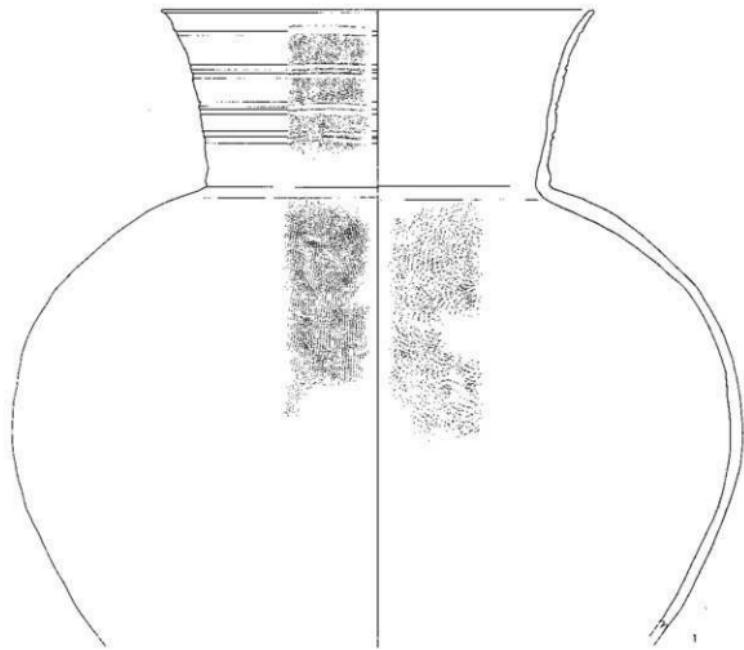
第349図 出土須恵器甕実測図 (11) ($S = 1:6$)



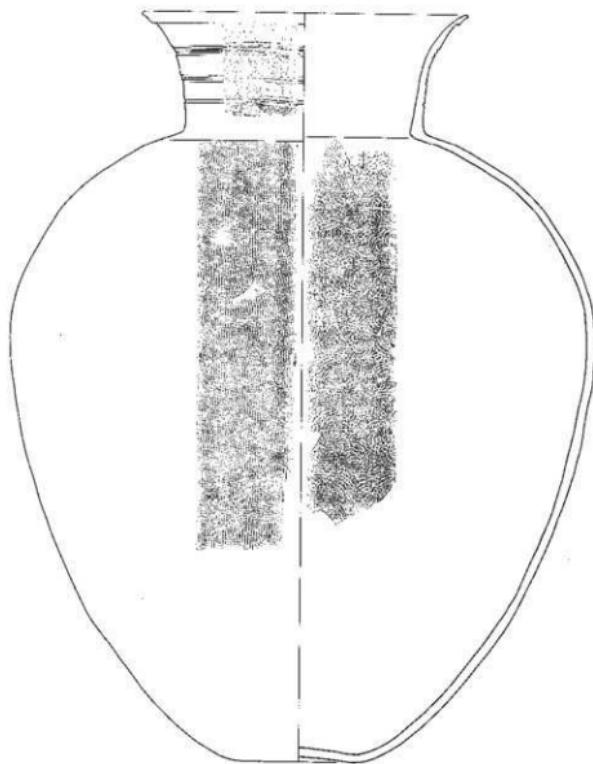
第350図 出土須恵器復元図 (12) ($S = 1:6$)



第351図 出土須恵器裏査測図 (13) ($S = 1:6$)

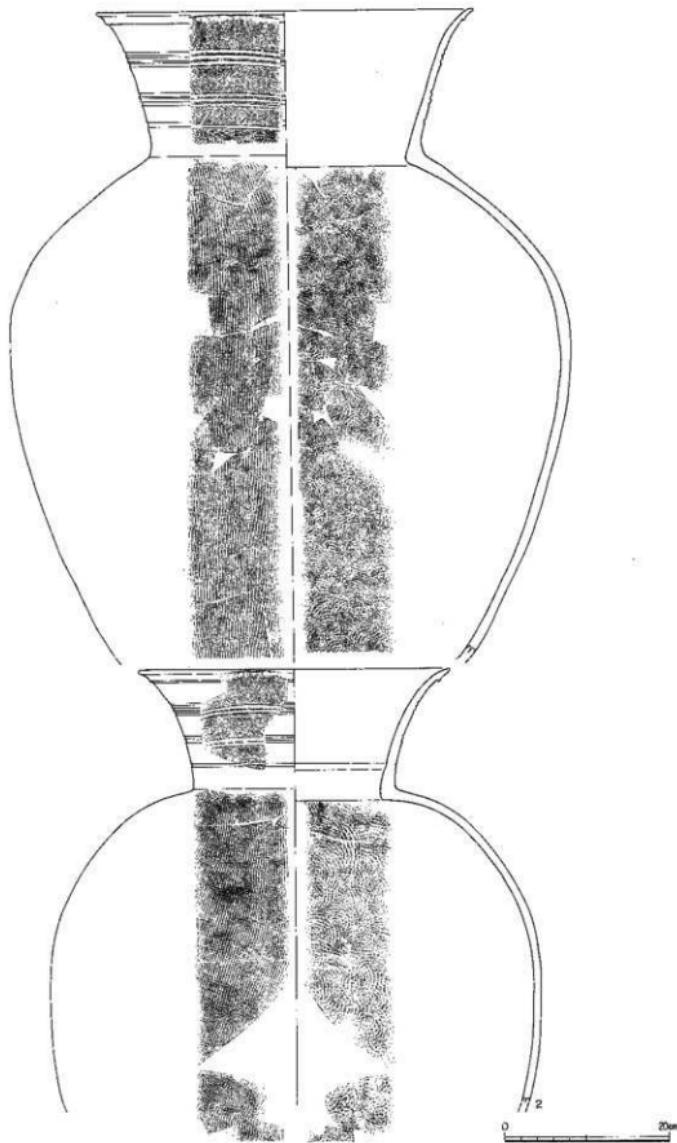


第352図 出土須恵器要実測図 (14) ($S=1:6$)

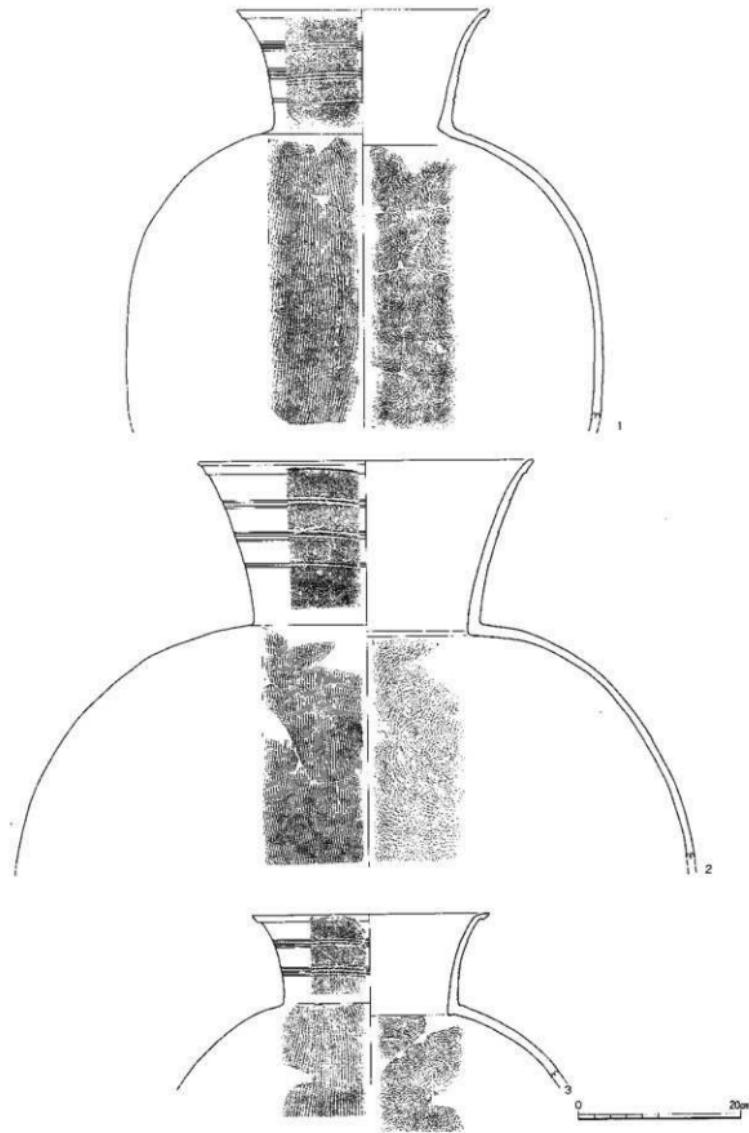


0 20cm

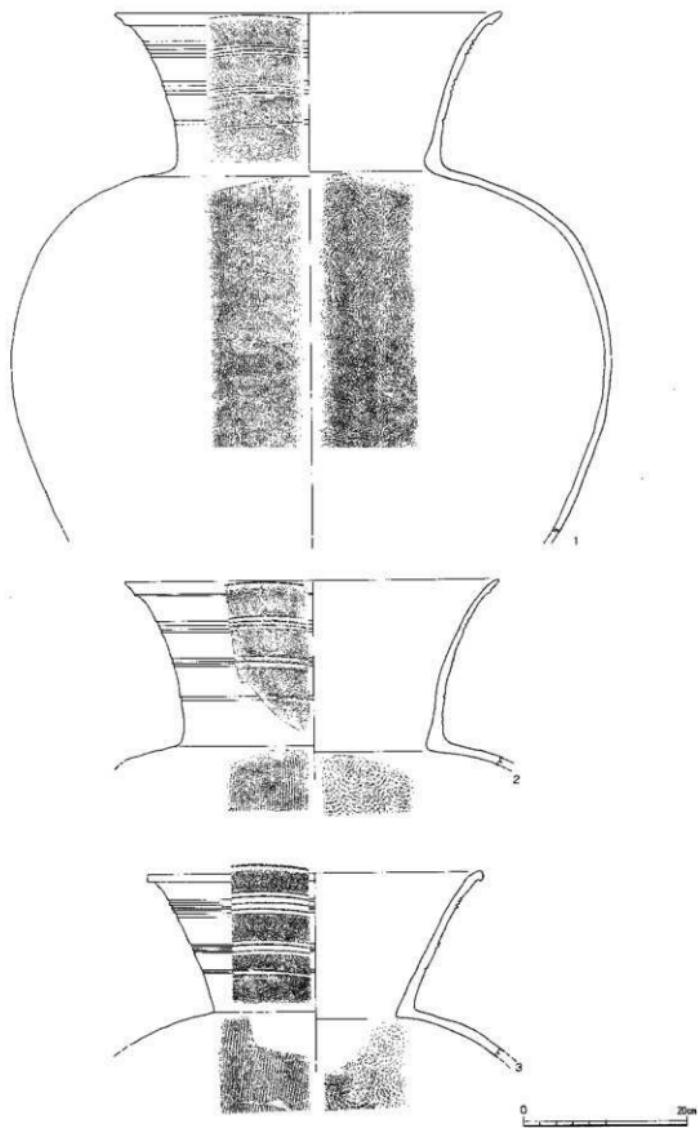
第353図 出土須恵器壺突洞圖 (15) ($S = 1:6$)



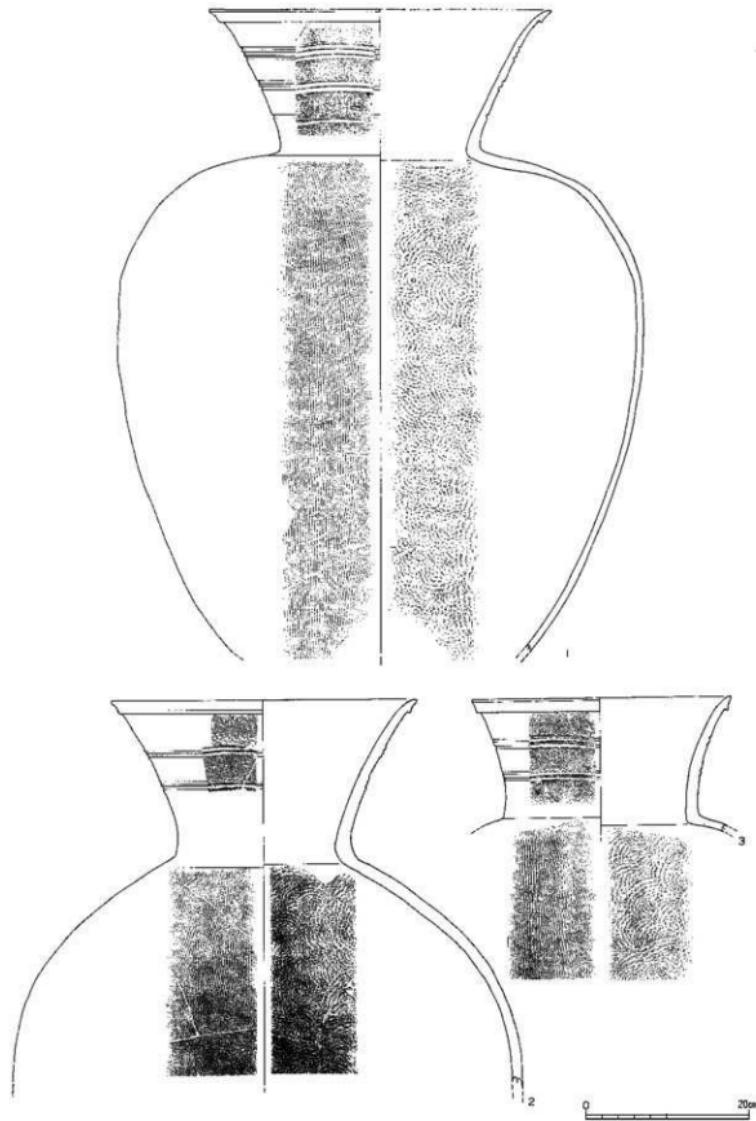
第354図 出土須恵器実測図 (16) ($S=1:6$)



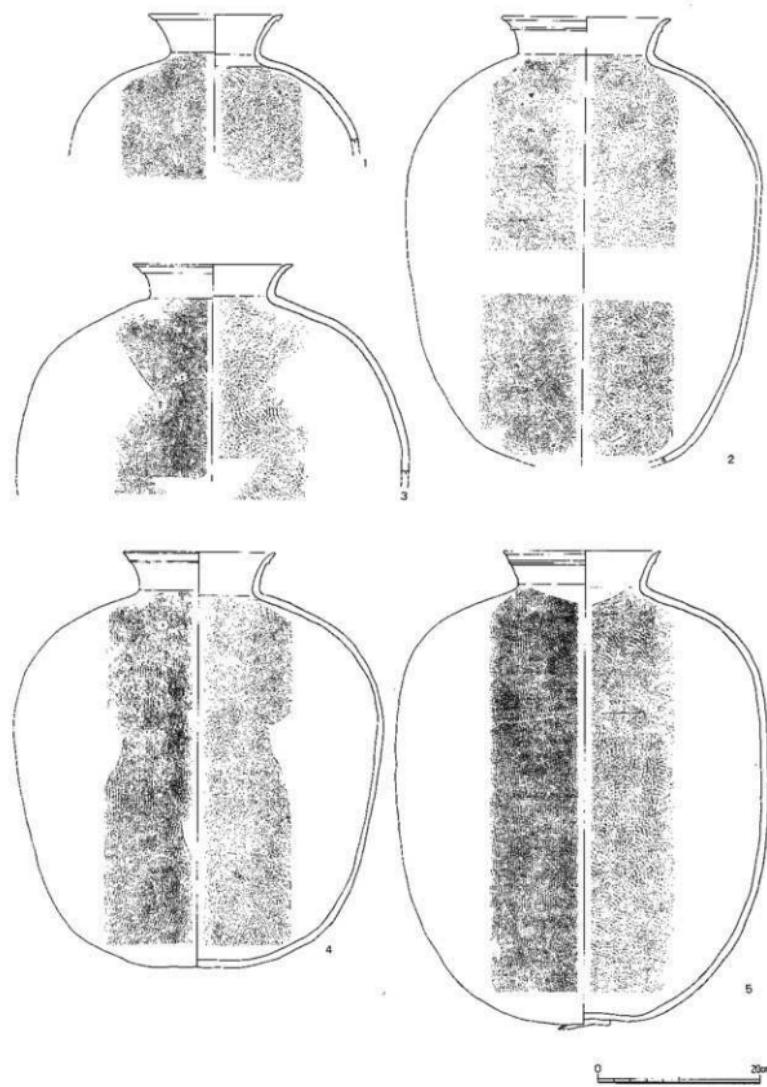
第355図 出土須意器壁実測図 (17) ($S = 1:6$)



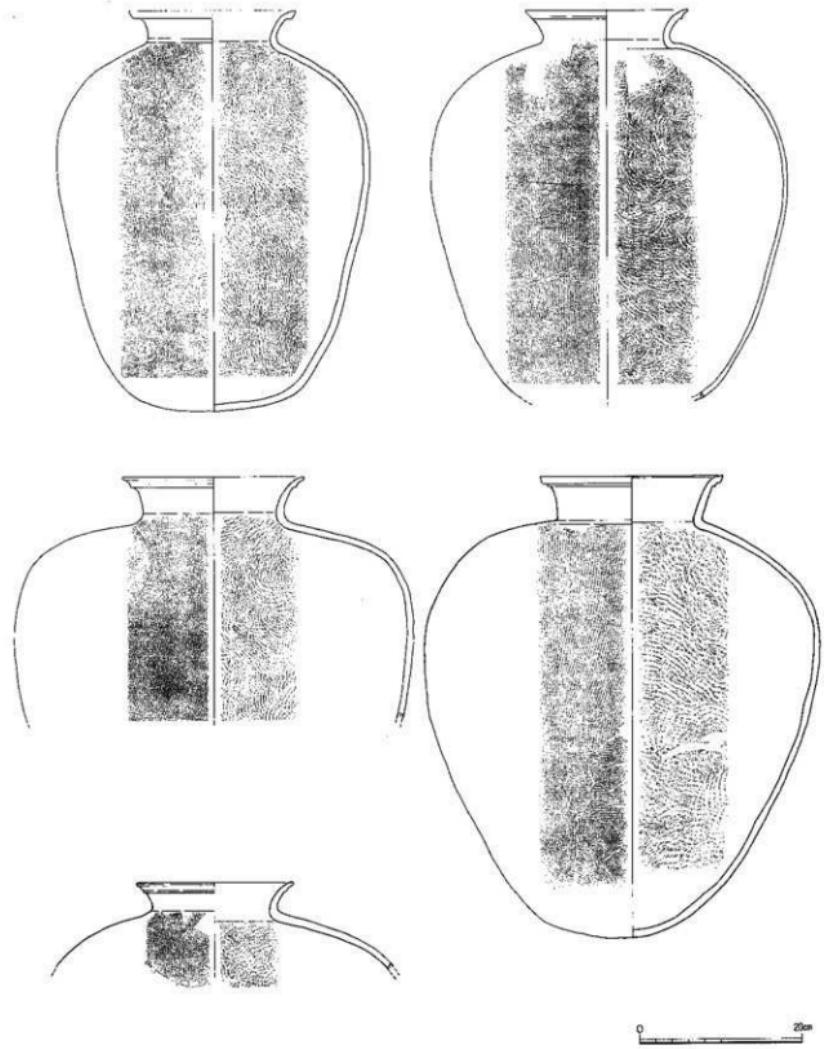
第356図 出土須恵器壺実測図 (18) ($S=1:6$)



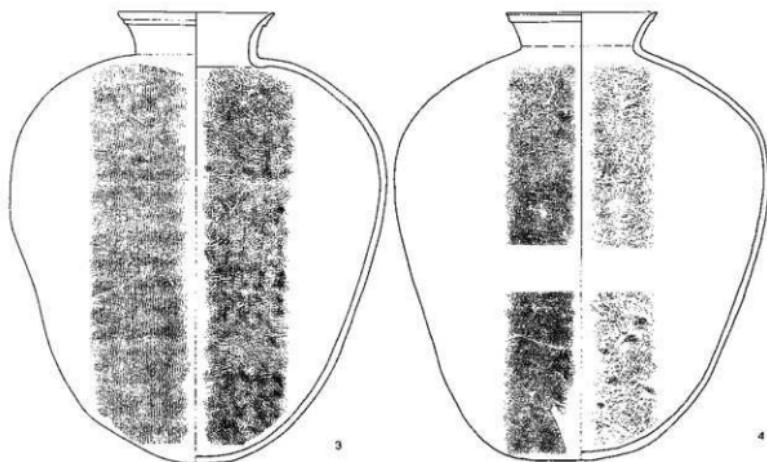
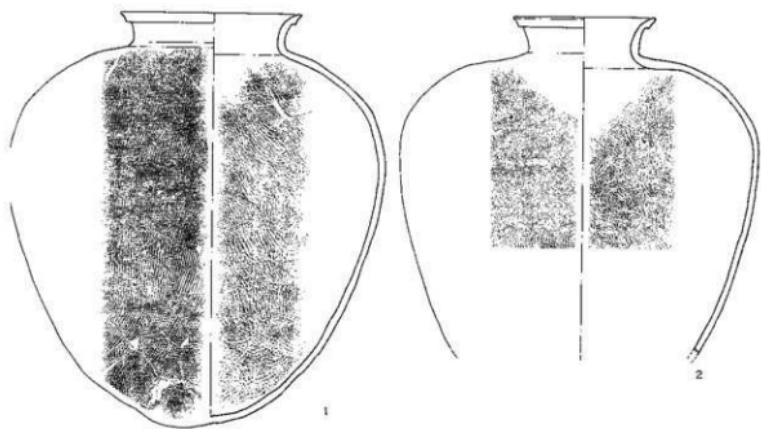
第357圖 出土須器麥測圖 (19) ($S = 1:6$)



第358図 出土須恵器壺実測図 (20) ($S=1:6$)

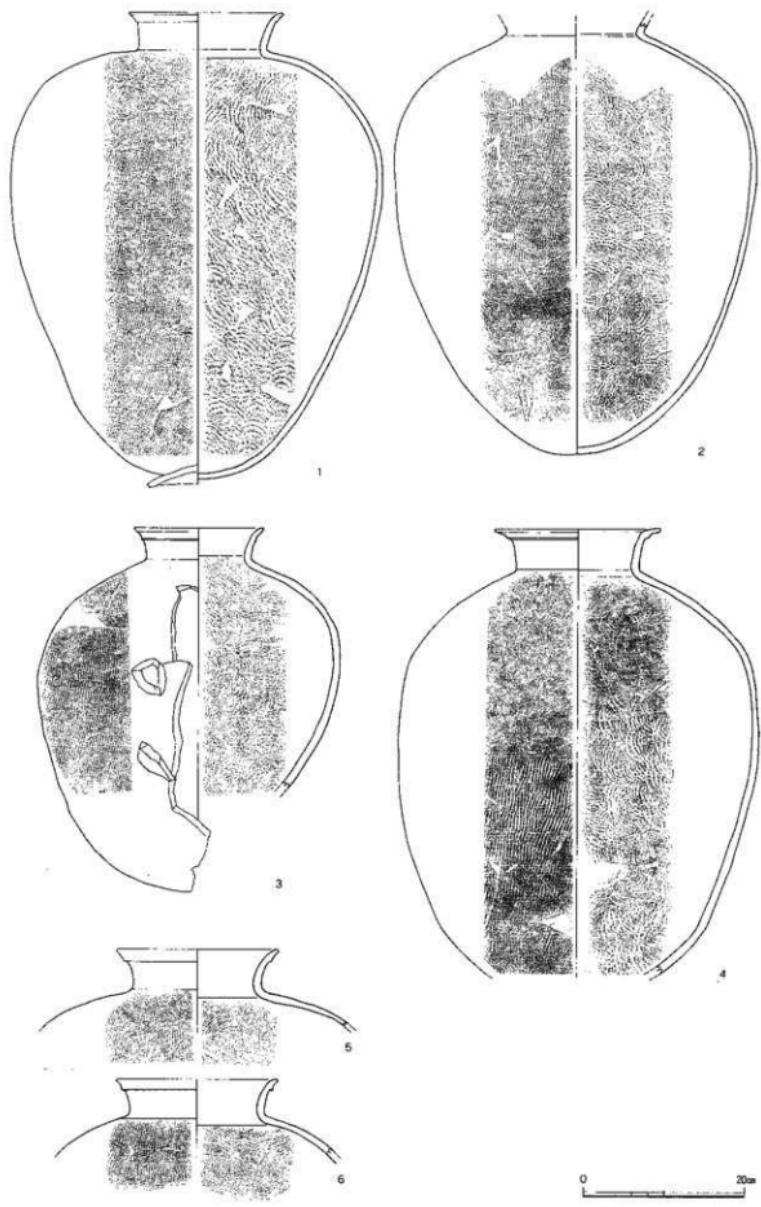


第359図 出土須恵器變奏圖 (21) (S=1:6)

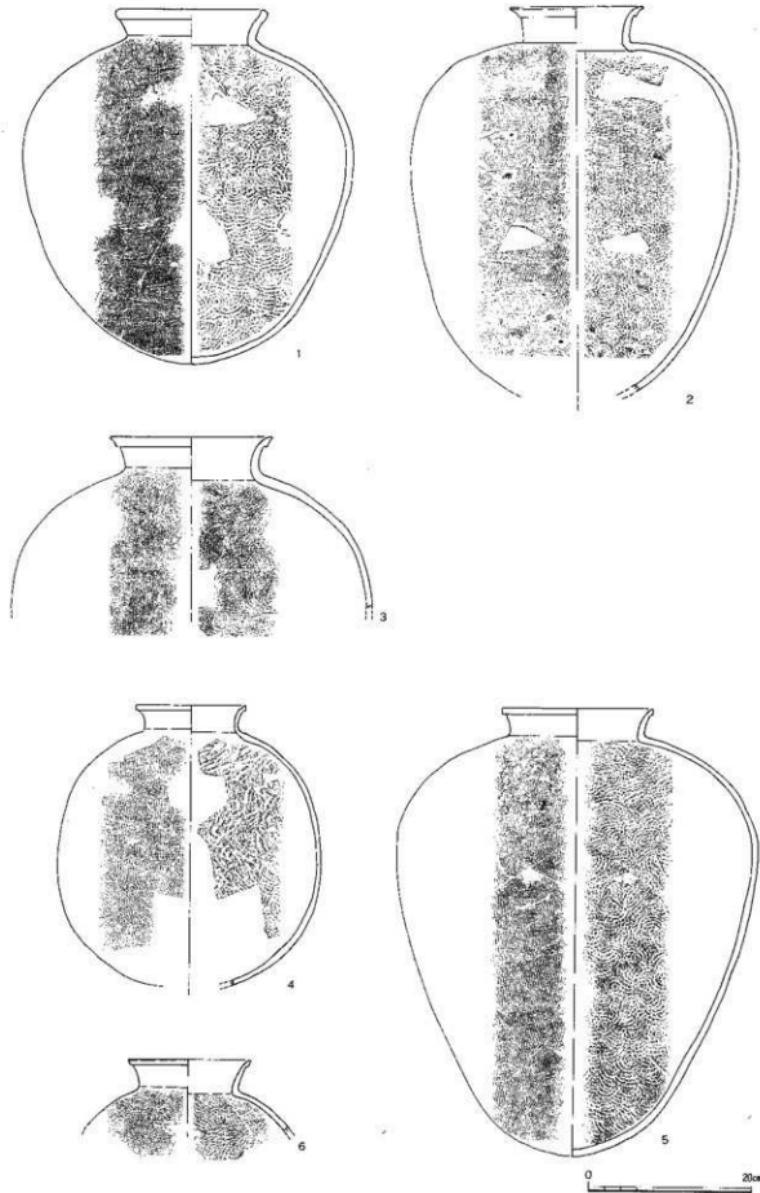


0 20cm

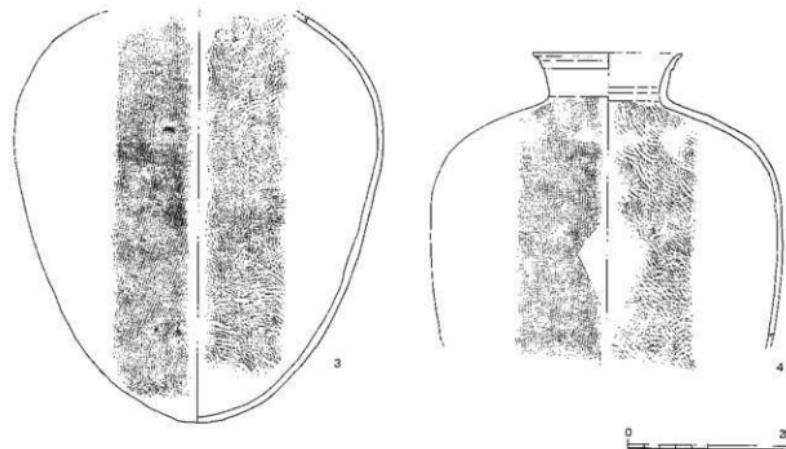
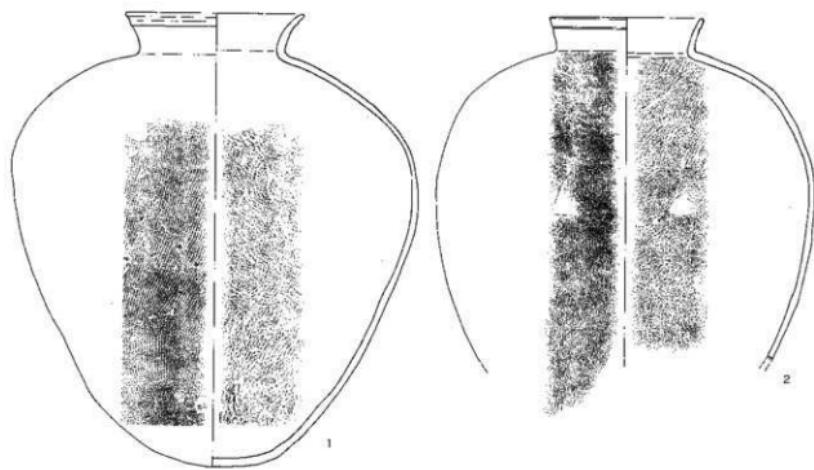
第360図 出土須恵器壺実測図 (22) ($S = 1:6$)



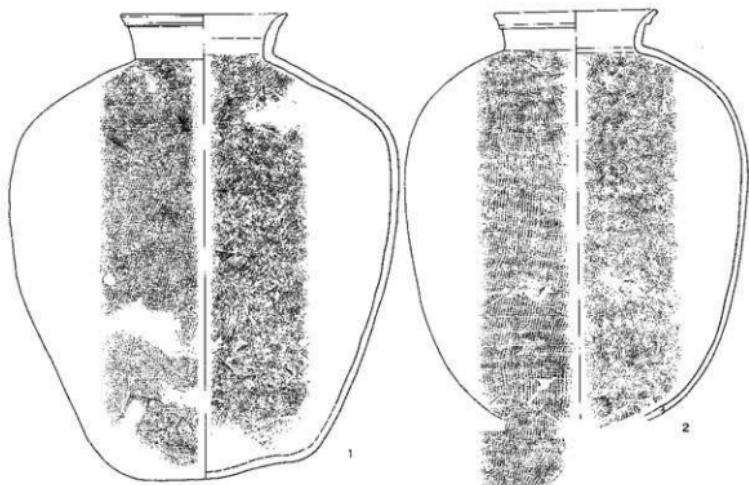
第361図 出土須恵器壺実測図 (23) ($S=1:6$)



第362図 出土須恵器壺実測図 (24) ($S=1:6$)

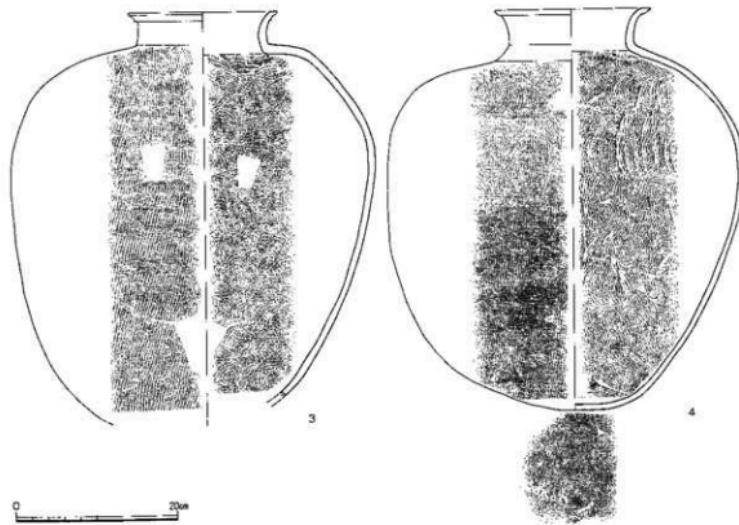


第363図 出土須志器壺実測図 (25) ($S = 1:6$)



1

2

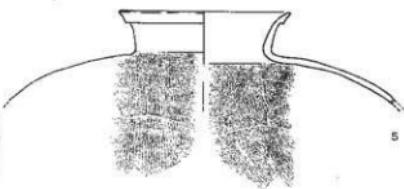
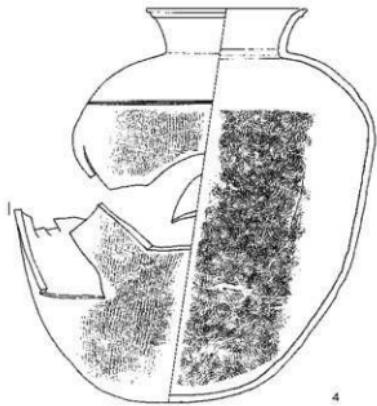
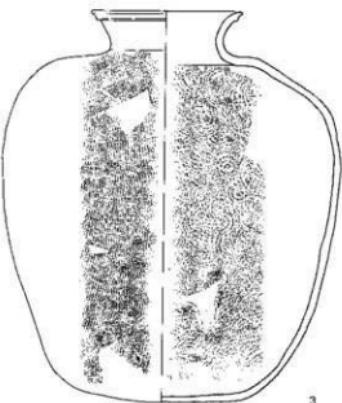
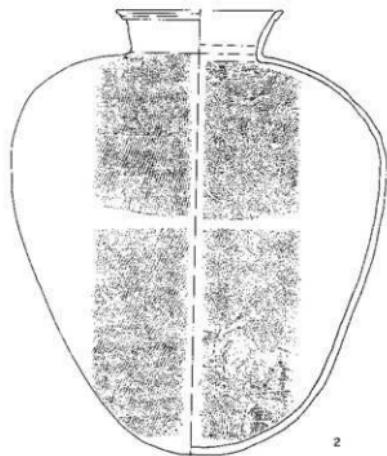
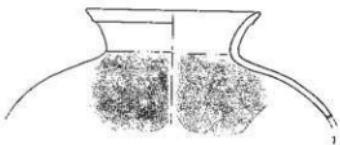


3

4

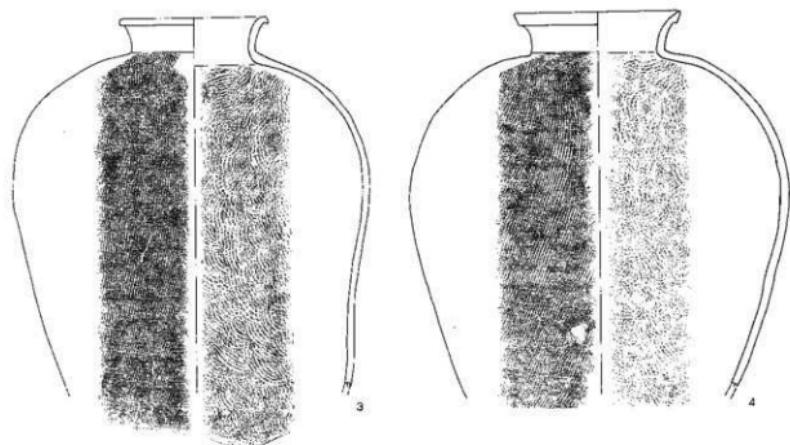
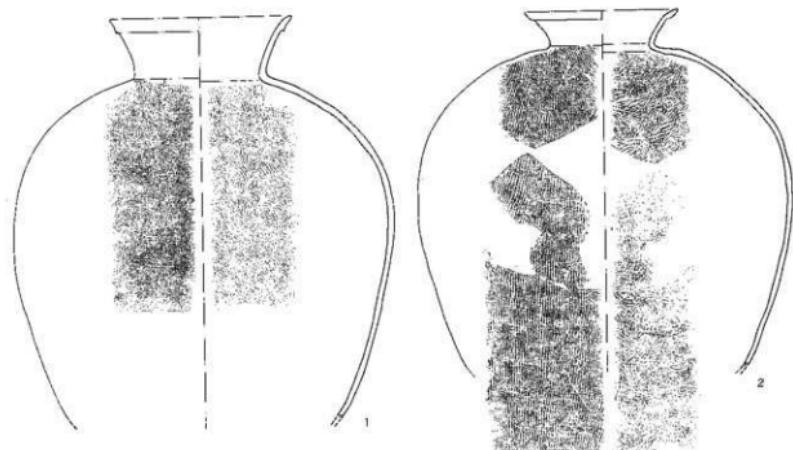
0 20mm

第364図 出土須烹器壺実測図 (26) ($S = 1:6$)



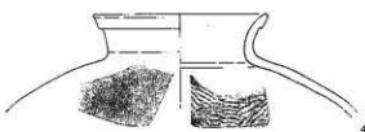
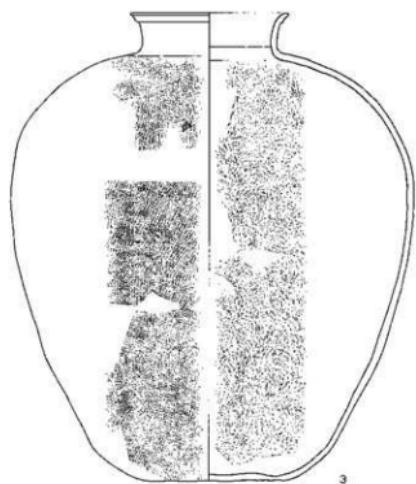
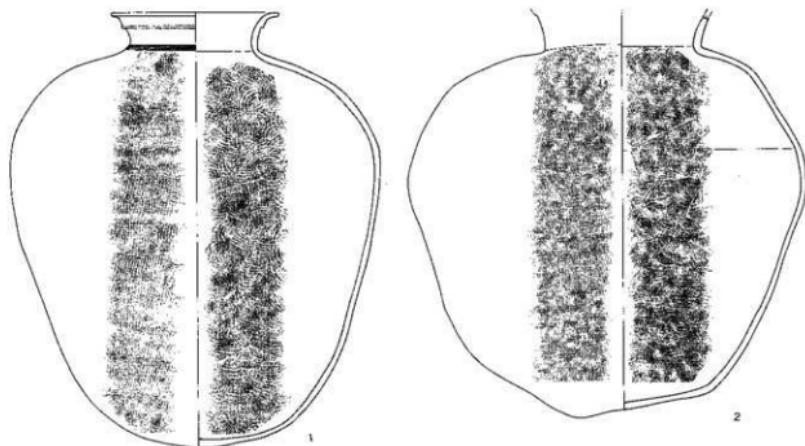
0 20cm

第365図 出土須恵器隻実測図 (27) ($S=1:6$)



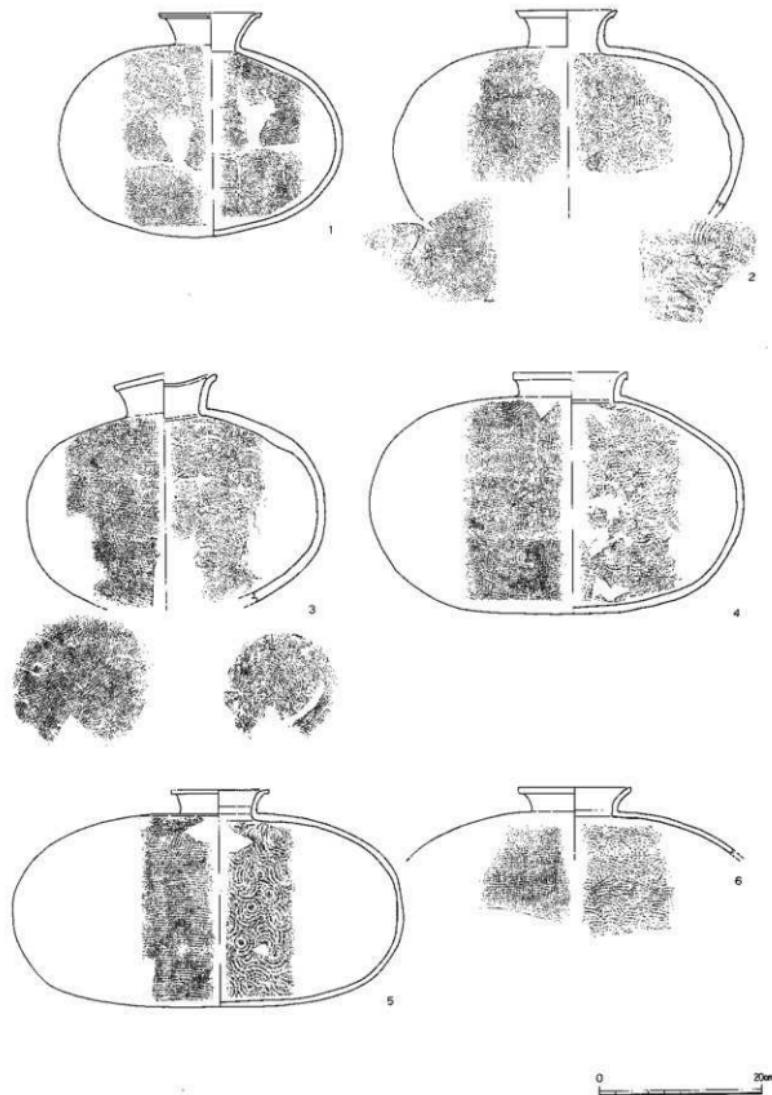
0 20m

第366図 出土須恵器実測図 (28) ($S=1:6$)



0 20cm

第367図 出土須恵器壺実測図 (29) ($S = 1:6$)



第368図 出土須恵器横瓶実測図 ($S=1:6$)

第139表 出土甕觀察表

(単位: cm)

| 番号 | 法量 | | | 文様 | 焼成 | 備考 沈縫 上から |
|----------|----|----|------|-------------|----|-----------------|
| | 口径 | 器高 | 腹最大径 | | | |
| (1) 1 | 59 | — | 79 | 波状文 3段 | 良好 | 沈縫 3.3.2 |
| (2) 1 | 39 | — | 61 | 波状文 4段 | 良好 | 沈縫 2.2.1 |
| 2 | 42 | — | — | 波状文 3段 | 良好 | 沈縫 3.2.1 |
| 3 | 43 | — | 66 | 波状文 3段 | 良好 | 沈縫 3.3.1 |
| 4 | 36 | — | — | 波状文 3段 | 良好 | 沈縫 3.2.1 |
| (3) 1 | 56 | — | 106 | 波状文 3段 | 良好 | 沈縫 3.3.1 |
| (4) 1 | 33 | 76 | 58 | 波状文 3段 | 良好 | 沈縫 2.2.1 |
| 2 | 39 | — | — | 波状文 3段 | 良好 | 沈縫 1.2.2.1 |
| (5) 1 | 45 | — | — | 波状文 3段 | 良好 | 沈縫 3.3.1 |
| 2 | 45 | — | 68 | 波状文 3段 | 良好 | 沈縫 4.3.1 |
| (6) 1 | 38 | — | — | 波状文 4段 | 良好 | 沈縫 1.1.2.2 |
| 2 | 37 | — | — | 波状文 2段 | 良好 | 沈縫 2.2 |
| 3 | 46 | — | 73 | 波状文 3段 | 良好 | 竹管文 2.2.2 |
| (7) 1 | 46 | — | 80 | 波状文 3段 | 良好 | 沈縫 3.2.1 |
| 2 | — | — | 60 | 波状文 1段以上 | 良好 | 沈縫 1 |
| (8) 1 | 33 | — | 70 | 波状文 3段 | 良好 | 沈縫 2.2.1 |
| 2 | 72 | — | — | 波状文 3段 | 良好 | 沈縫 4.4.2 |
| (9) 1 | 43 | — | 70 | 波状文 3段 | 良好 | 沈縫 3.2.1 |
| 2 | 40 | — | — | 波状文 2段 | 良好 | 沈縫 3.3 |

第140表 出土甕觀察表

(単位: cm)

| 番号 | 法量 | | | 文様 | 焼成 | 備考 |
|-----------|----|-----|------|-----------|----|---------------|
| | 口径 | 器高 | 腹最大径 | | | |
| (9) 3 | 38 | — | — | 波状文 3段 | 良好 | 沈縫 2.2.1 |
| (10) 1 | 44 | — | 64 | 波状文 3段 | 良好 | 沈縫 3.3.1 |
| 2 | 31 | — | — | 波状文 3段 | 良好 | 沈縫 3.2.1 |
| 3 | 31 | — | — | 波状文 3段 | 良好 | 沈縫 3.2.1 |
| (11) 1 | 46 | — | — | 波状文 2段 | 良好 | 沈縫 3.2 |
| 2 | 34 | — | 72 | 波状文 2段 | 良好 | 沈縫 2.2 |
| (12) 1 | 58 | 110 | 98 | 波状文 3段 | 良好 | 沈縫 3.3.1 |
| (13) 1 | 47 | — | 79 | 波状文 3段 | 良好 | 沈縫 3.3.1 |
| (14) 1 | 53 | — | 90 | 波状文 3段 | 良好 | 沈縫 1.2.2.2 |
| 2 | 29 | — | — | 波状文 3段 | 良好 | 沈縫 1.2.2.1 |
| (15) 1 | 40 | 92 | 72 | 波状文 3段 | 良好 | 沈縫 3.2.1 |
| (16) 1 | 46 | — | 70 | 波状文 3段 | 良好 | 沈縫 3.3.1 |
| 2 | 38 | — | 61 | 波状文 3段 | 良好 | 沈縫 3.2.1 |
| (17) 1 | 31 | — | 60 | 波状文 3段 | 良好 | 沈縫 3.3.1 |
| 2 | 42 | — | — | 波状文 3段 | 良好 | 沈縫 2.2.1 |
| 3 | 30 | — | — | 波状文 2段 | 良好 | 沈縫 3.3 |
| (18) 1 | 48 | — | 74 | 波状文 3段 | 良好 | 沈縫 4.3.1 |
| 2 | 46 | — | — | 波状文 3段 | 良好 | 沈縫 3.2.1 |
| 3 | 42 | — | — | 波状文 3段 | 良好 | 沈縫 4.3.1 |

第141表 出土甕觀察表

(单位: cm)

| 番号 | 法量 | | | 文様 | 焼成 | 備考 |
|------|----|----|----------|----|-----------|-------------------|
| | 口径 | 器高 | 制最大径 | | | |
| (19) | 1 | 42 | — | 65 | 波状文 3段 | 良好 沈線 3.2.1 |
| | 2 | 38 | — | 63 | 波状文 2段 | 良好 沈線 2.2 |
| | 3 | 32 | — | — | 波状文 2段 | 良好 沈線 2.2 |
| (20) | 1 | 16 | — | — | — | 良好 |
| | 2 | 21 | 55 | 44 | — | 良好 |
| | 3 | 19 | — | 48 | — | 良好 |
| | 4 | 18 | 51 | 45 | — | 良好 |
| | 5 | 19 | 59 | 46 | — | 良好 |
| | 6 | — | — | — | — | — |
| (21) | 1 | 20 | 49 | 38 | — | 良好 |
| | 2 | 20 | — | 44 | — | 良好 |
| | 3 | 22 | — | 48 | — | 良好 |
| | 4 | 19 | — | — | — | 良好 |
| | 5 | 22 | 57 | 49 | — | 良好 |
| (22) | 1 | 22 | 51 | 46 | — | 良好 |
| | 2 | 18 | — | 44 | — | 良好 |
| | 3 | 19 | 55 | 47 | — | 良好 |
| | 4 | 19 | 55 | 46 | — | 良好 |
| (23) | 1 | 19 | 57 | 46 | — | 良好 |
| | 2 | — | 54 以上 | 45 | — | — |

第142表 出土甕觀察表

(单位: cm)

| 番号 | 法量 | | | 文様 | 焼成 | 備考 |
|------|----|----|----------|----|----|------------------|
| | 口径 | 器高 | 制最大径 | | | |
| (23) | 3 | 16 | — | 37 | — | 良好 |
| | 4 | 20 | 56 以上 | 44 | — | 良好 焼成時 に破裂 |
| | 5 | 20 | — | — | — | 良好 |
| (24) | 1 | 19 | 44 | 41 | — | 良好 |
| | 2 | 17 | 50 以上 | 41 | — | 良好 |
| | 3 | 20 | — | 44 | — | 良好 |
| (25) | 4 | 14 | 35 | 34 | — | 良好 |
| | 5 | 19 | 55 | 44 | — | 良好 |
| | 6 | 15 | — | — | — | 良好 |
| (26) | 1 | 22 | 52 | 50 | — | 良好 |
| | 2 | 19 | — | 47 | — | 良好 |
| | 3 | — | 50 以上 | 46 | — | 良好 |
| | 4 | 18 | — | 44 | — | 良好 |
| (27) | 1 | 20 | 57 | 48 | — | 良好 |
| | 2 | 18 | 50 以上 | 42 | — | 良好 |
| | 3 | 18 | — | 45 | — | 良好 |
| | 4 | 19 | 49 | 44 | — | 良好 |
| (27) | 1 | 22 | — | — | — | 良好 |

れば、肥後地方の「コ」字形の屍床をもった横穴墓（註9）が類似したものであり、あるいは、その地方との交流から造りだされたものかも知れない。

③後背墳丘 今回の調査では、後背墳丘の存在がかなり普遍的に認められ、基本的に横穴墓は、古墳の主体部として穿たれたものと考えられる。そのように考えた場合には、横穴式石室との違いは、主体部構造の違いとしてのみ捉えられることになる。そして、本遺跡は石棺式石室の分布域である出雲地方東部に含まれる。その石棺式石室と副葬品（註10）から比較すると、石室からは、装饰大刀・金銅装の馬具等が出土しており、階層的に石室の方が上位にあるものと考えられる。よって、横穴墓は、大刀・鉄製馬具をもつ階層以下の者の主体部として採用されたものと推測される。ただし、安来平野周辺では、金銅装の大刀・馬具等を出土する横穴墓（註11）が存在し、地域によりに様相が異なる可能性が考えられる。また、墳形についても地域性が認められる可能性が考えられるものである。本遺跡では、前方後方墳が確認され、また意宇平野周辺では中竹矢2号横穴墓（註12）でも前方後方墳が

第143表 出土鑿觀察表

(单位: 吨)

| 番号 | 法量 | | | 文様 | 焼成 | 備考 |
|-----------|----|----|----------|----------|----|----|
| | 口径 | 器高 | 制最大級 | | | |
| (27) 2 | 21 | 55 | 46 | | 良好 | |
| | 3 | 18 | 48 | 41 | 良好 | |
| | 4 | 20 | 48 | 37 以上 | 良好 | |
| | 5 | 21 | — | — | 良好 | |
| (28) 1 | 23 | — | 47 | | 良好 | |
| | 2 | 19 | — | 46 | 良好 | |
| | 3 | 18 | — | 44 | 良好 | |
| | 4 | 20 | — | 47 | 良好 | |
| (29) 1 | 20 | 53 | 45 | | 良好 | |
| | 2 | — | 50 以上 | 50 | 良好 | |
| | 3 | 20 | 57 | 50 | 良好 | |
| | 4 | 22 | — | — | 良好 | |

第144表 橫瓶觀察表

(单位: cm)

確認されている。このような状況から意宇平野周辺では、横穴墓を主体部とする前方後方墳がいくつか存在している可能性が考えられる。これに対して、安来平野周辺では、前方後円墳と考えられるものがいくつか存在しており（註13）、意宇平野周辺と異なる様相をもつものである。

④須恵器破碎散布儀礼 本横穴墓では、須恵器甕類の墳丘と前庭部における破碎散布の状況が確認でき、接合関係についても新たな知見を得ることができた。このような様相は、山陰（註14・15）及び九州（註16）でも類例が認められ、かなり普遍的に行われた儀礼行為である可能性が高いものである。また、今後の検討によっては、類例が増加するものと考えられ、一つの横穴墓分析の方法となるものと思われる。

以上述べてきたような事柄については、これまで明らかにされていなかったものもあり、今後の類例の増加を待って具体的に再検討すべき点が多い。また、横穴式石室も含めて考えていく必要があることは言うまでもない。

今回は、不十分な検討でおわっていることから、今後、さらに詳細な検討を重ねていくことで、当地域の古墳時代後期の様相を明らかにしていかなければならないと考える。

註

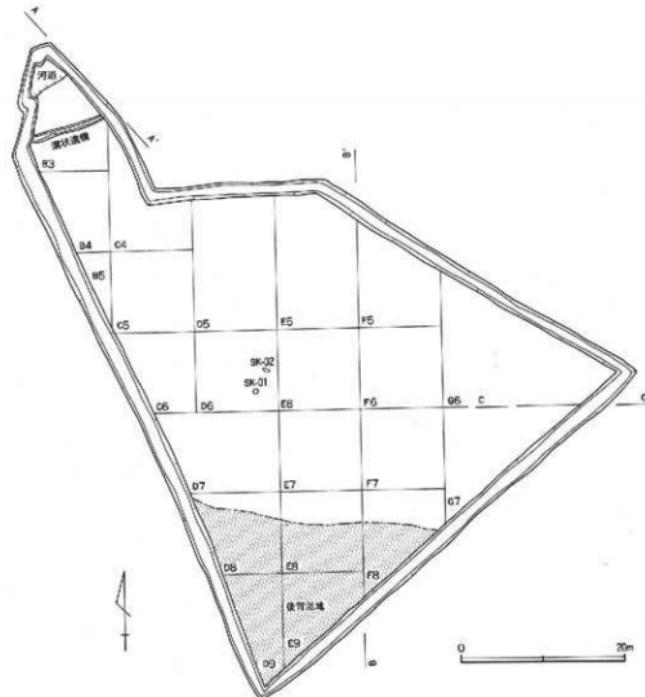
- 1、大谷晃二「出雲地域の須恵器の編年と地城色」『島根考古学会誌』第11号1994年
- 2、土層の解釈については、上ノ原横穴墓群の調査を参考とした。『上ノ原横穴墓群』I～III 大分県教育委員会1990～1992年
- 3、池田満雄・青森市良「東出雲・高井横穴」『島根県埋蔵文化財調査報告書』第Ⅰ集 島根県教育委員会1969年
- 4、近藤義郎「前方後円墳の時代」1983年
- 5、新納泉「装飾大刀と古墳時代後期の兵制」『考古学研究』119 1983年
- 6、註2と同じ
- 7、「高広遺跡発掘調査報告書」島根県教育委員会1984年
- 8、「十王免横穴墓群発掘調査報告」「菅田考古」第10号 島根大学考古学研究会1968年
- 9、「装飾古墳調査報告書」熊本県教育委員会1983年
- 10、「向山古墳発掘調査報告書」2 松江市教育委員会1996年
- 11、註7と同じ
- 12、「国道9号バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書」第Ⅳ集 島根県教育委員会 1983年
- 13、「岩屋口北遺跡・白コクリ遺跡」1997年
- 14、「陰田」鳥取県教育委員会1984年
- 15、「大裕山横穴墓群」鳥取県教育文化財団1987年
- 16、註2と同じ

第5章 鶴貫遺跡の調査

鶴貫遺跡は、標高1.5m前後に位置し、調査前は水田であった。調査は、1992年度のトレンチ調査の結果を基に、1993年に重機による耕作土の除去後に開始した。また、調査にあたり、遺跡を一辺10mの正方形の調査区（第6図）に基本的に分けて調査した。そして、各調査区ごとに土層観察用のベルトを東西方向と南北方向に設け、土層を確認しながら東側から西へ向かって精査していく。

調査の結果、溝状造構、土壙の外に旧河道、後背湿地を検出し、縄文時代後期以降の遺物を確認した。また、調査によって得られた土層堆積の状況は、周辺を含めた古環境の復元につながる貴重な発見となった。

それでは、以下調査によって検出した造構、遺物及び土層堆積状況等について順をおって説明したい。なお、堆積状況から復元される古環境の検討については、第6章の方で、中村唯史氏によって詳細に述べられているので、その点については後章を参照いただきたい。



第1図 鶴貫遺跡調査後実測図 (S=1:600)

第1節 遺構と遺物

(1) 土層堆積状況

[B 3 調査区] (第2図)

遺跡の北端部は、B 3 調査区として調査し、旧河道と考えられる落ちこみを検出している。規模は、上端の一部を確認しているのみで詳細は不明であるが、深さ1.8m程のものと考えられる。

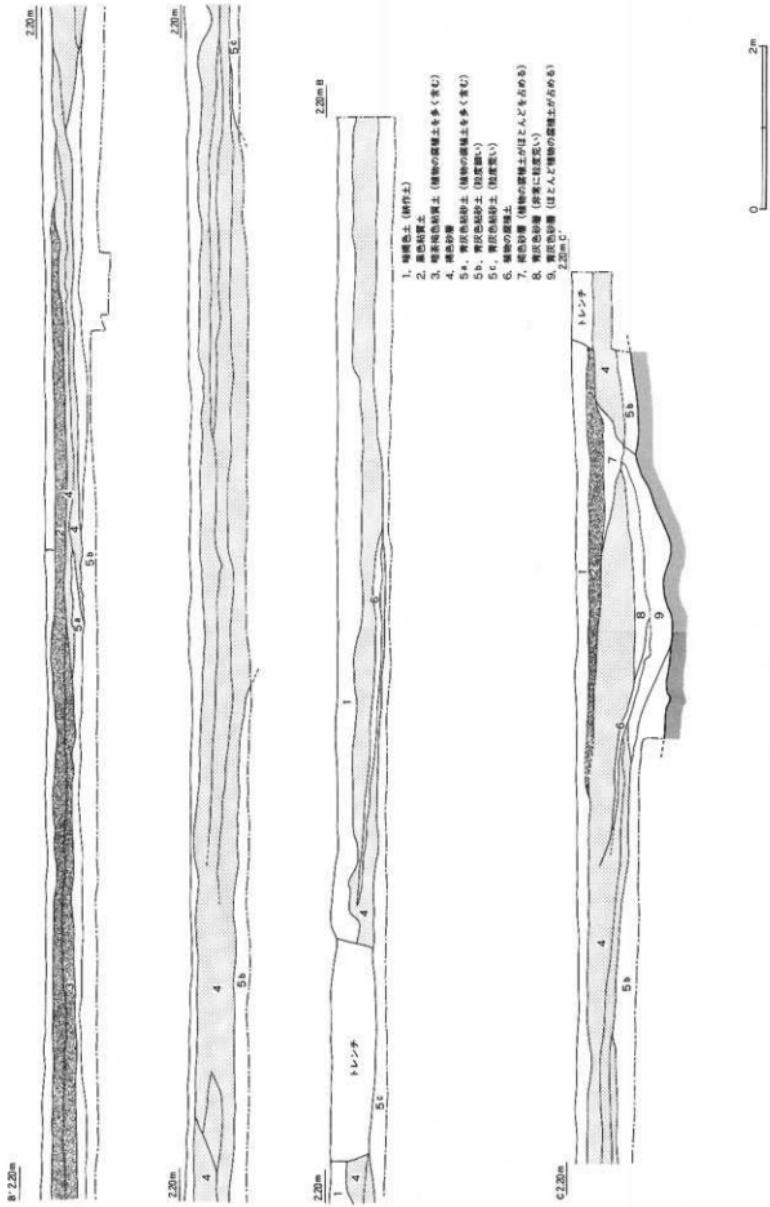
旧河道は、遺跡の大部分で確認されている黄褐色砂層と青灰色砂層(9~11層)を削り込んで形成されており、最深部の底近くでは、基盤層である砂岩が認められるものである。

旧河道内の堆積状況は、下層から青灰色砂層(7層)、青灰色粘土層(6層)、青灰色粘質土(5層)、黒色粘土層(8層)、茶褐色粘質土(4層)、茶褐色土(3層)、黒色粘質土(2層)の順に堆積しているものである。

以上の堆積層は、遺物を含むものであり、旧河道底近くの6層からは、縄文時代後・晚期の土器が出土し、その上層である4、5、8層からも縄文時代後・晚期の土器が出土している。そして、3層からは弥生時代前・中期の土器が出土しているが、殆どのものが中期に属し、前期に属すものは数点であり、3層でも下部から出土している。また、2層からは、弥生時代後期の遺物と中世の土器が出土している。なお、遺物は3層出土の弥生時代中期の土器が大半を占め、土器以外に分銅形土製品、管玉の未成品等が出土している。

以上の土層堆積状況及び遺物出土状況から考えて、この旧河道は、基盤層上に青灰色砂層、黄褐色砂層が堆積した後に、それらの層を削り込んで形成されたものと考えられる。そして、形成された時期は、底部付近に縄文時代後・晚期の遺物を含む堆積層が認められることから、縄文時代後期・晚期以前と考えて良いものと思われる。





第3図 鶴賀遺跡後背湿地周辺土層実測図 ($S=1:60$)

[後背湿地]

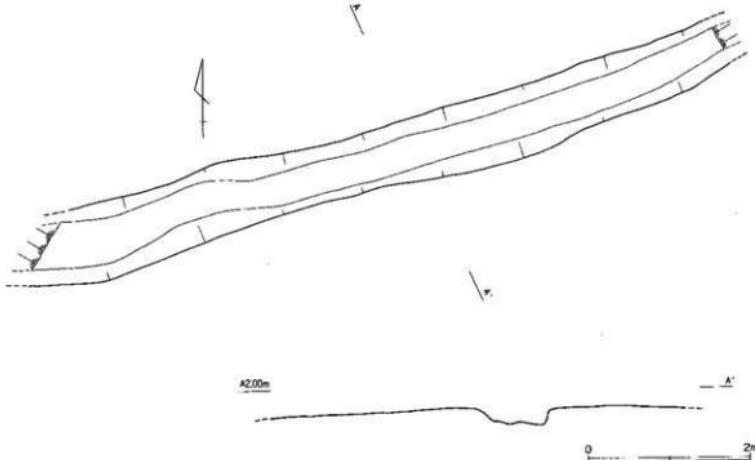
遺跡の大部分では、耕作土下より黄褐色の砂層（第2図4層）が確認され、その下層からは青灰色の砂層（第2図5層）を検出している。青灰色の砂層の上面は、標高1.5m付近にあたり、その下は、基盤層の砂岩にあたる。以上が遺跡で認められる基本的な層序であるが、南側の調査区では、黄褐色の砂層が認められないものである。この部分は、黄褐色の砂層で形成された地帯の後背にできた凹みと考えられ、その堆積層の状況から湿地であったと考えられる。この後背湿地（第3図）として捉えられる部分の堆積状況は、青灰色砂層の上面に暗茶褐色粘質土（第3図3層）、黒色粘質土（第3図2層）の順に堆積しているものである。また、後背湿地の2、3層は、遺物を含むものである。

なお調査区の北東端部（第3図下段）では、黄褐色砂層を削り込むように小規模の旧河道が認められ、2層からは、土師器（第10図18）が出土している。

(2)遺構

[溝状遺構] (第4図)

調査区の北西端付近の砂層上面で検出している。平面形は、東西に直線的に延びる細長いもので、幅0.7m、深さ0.1~0.16mを測る浅いものである。また、長さは9.0mを測るが、調査区外にも延びるものである。覆土は、褐色砂層（第2図12層）が堆積するものであり、遺物を含むものである。遺物は、小片で詳細の分かれるものはないが、周辺では、弥生時代中期の土器が多数出土していることから、同時期のものと推定される。なお、本遺構は、その壁を明確に検出することが困難なものであったことから、人為的な溝として判断して良いものか問題点が残るものである。自然にできた流路として考えた方が良いものかもしれない。

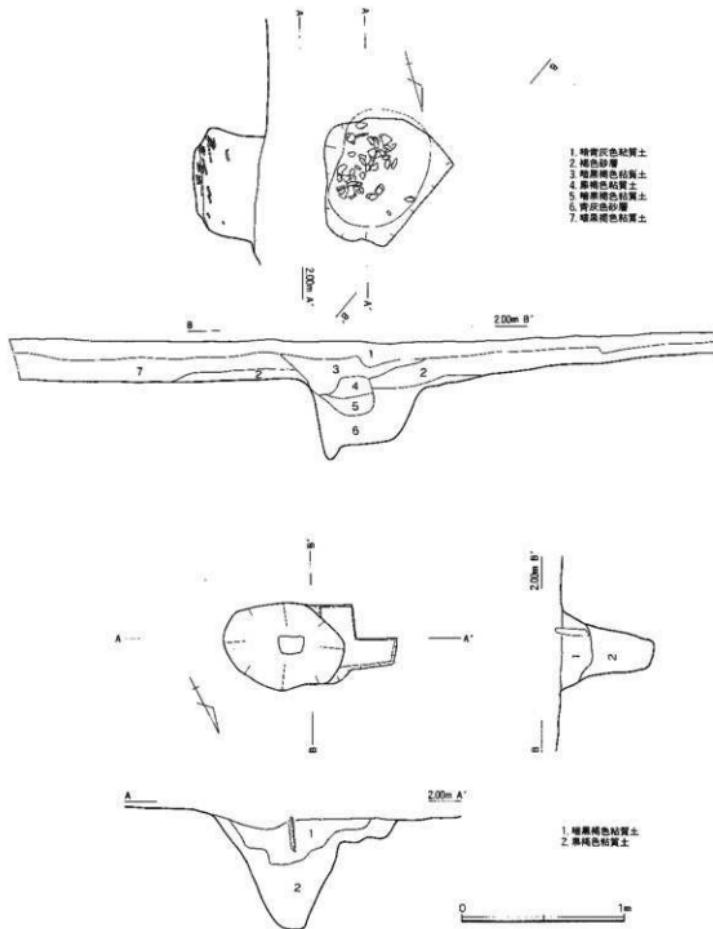


第4図 騙貫遺跡溝状遺構実測図 ($S=1:60$)

[SK 01] (第5図)

調査区の中心付近の砂層上面で検出した土壤である。平面形は、不整な格円形を呈すものである。規模は、上面で長軸0.86m、端軸0.65m、深さ0.45mを測るものである。また、覆土は、暗黒褐色粘質土(3~5層)が堆積しているものである。

遺物は、土壤底面付近から弥生土器が破片の状態で出土し、壺と甕(第10図28)が各1個体ずつ確認された。甕は、口径不明なもので、外面ミガキ、内面ハケ後ミガキを施すものである。



第5図 精實遺跡土壤 (SK 01・02) 遺構実測図 ($S=1:30$)

遺構の性格としては、土器を施棄したものと考えられるものであり、弥生土器は、時期的には前期のものと推測されるものである。

[SK 02] (第5図)

遺跡の中心部の砂層上面で検出し、SK 01の北側に位置する土壠である。平面形は楕円形を呈し、底に向かって狭まるものである。規模は、上面で長軸0.75m、短軸0.55、深さ0.7mを測るものであった。覆土は、底面から黒褐色粘質土層（2層）、暗黒褐色粘質土層（1層）の順に堆積しているものであった。

遺物は1層から板状の木製品（第16図22）が出土しているのみで、他に遺物は認められなかった。

時期、性格等については不明なものである。

(3)遺物

[B 3 区出土遺物]

遺跡の北西端に相当するB 3 調査区からは、弥生時代中期を中心とする遺物が多數出土している。その出土状況（第6図）を見ると、平面的には、溝状遺構—旧河道に向けて全面的に認められるものである。また、立面上には、大きく上下に2つに分かれるもので、上面のものは、標高1.8m付近に集中し、旧河道付近では、標高1.0m付近まで遺物がまとまって認められる。一方、下面のものは、やや間をおいて0.5m～0m付近に散見されるものである。上層では、上面が3層に下面が4層～6層、8層に対応するものである。以下、これらの出土遺物について、各層位ごとに述べていきたい。

3層出土遺物（第7図、第8図18～26、第9図1～4、第16図21）

本層からは、弥生土器（第7・8図1～24、26）、分銅形土製品（第8図25）、石礫（第9図1）、玉類未成品（第9図2～4）、木製品（第16図21）が出土している。

（弥生土器） 弥生土器は径の分かるもので、壺（1～5、10）、甕（6～9、11）、鉢（12、13）、高杯（14、15）、底部（16、17）が出土している。

1、2は、口縁部が朝顔条に大きく開くもので、広口壺の口縁と考えられる。口縁端部が上下に拡張するもので、拡張部外側には柳状工具により斜交子文を施すものであり、1は、内面にも波状文を施している。調整は外側ハケ、内面ヨコナデである。口径は、1が24cm、2が28.5cmである。

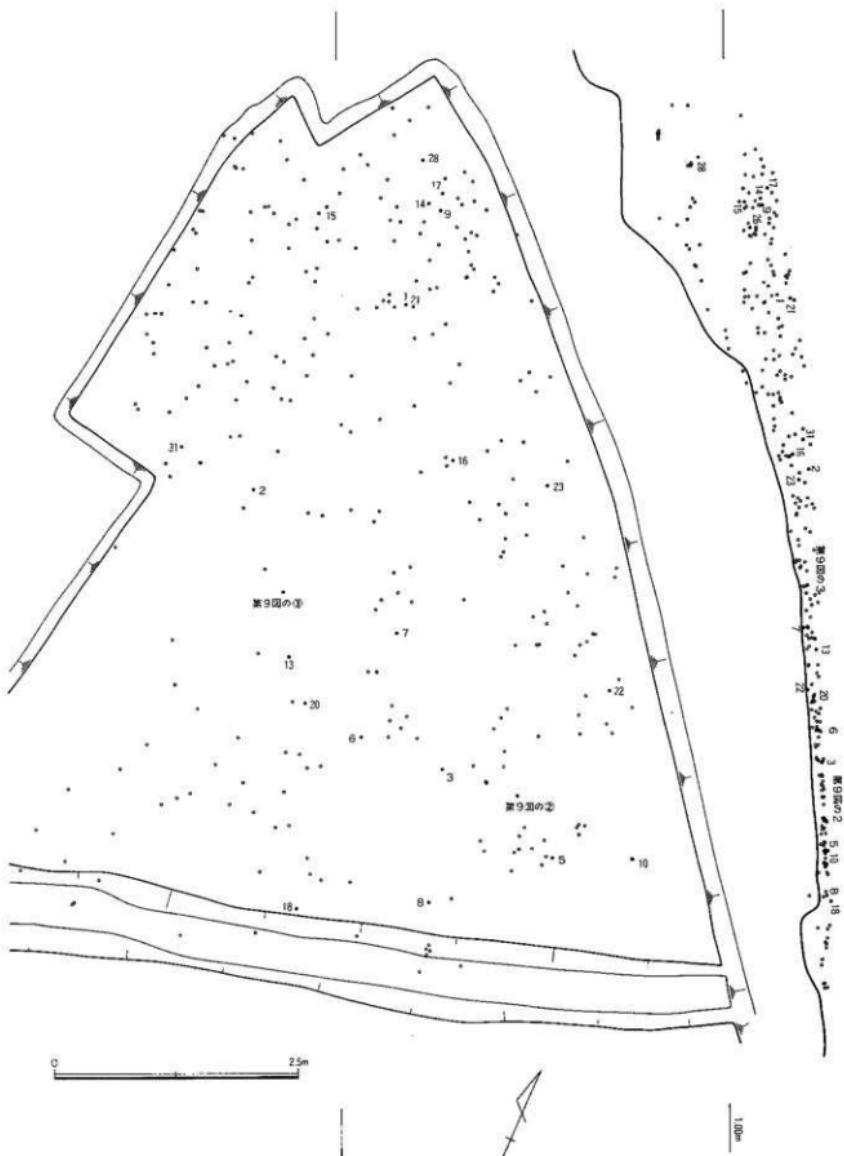
3、4は、短く外反する口縁をもつ壺である。調整はヨコナデであり、口径は、3が18.0cm、4が17.4cmを測るものである。

5は、壺の口縁部と考えられるものである。口縁端部は拡張され面をもつもので、口頸部には断面三角形突帯文を付けているものである。調整は、内面ハケで、口径は31cmを測る。

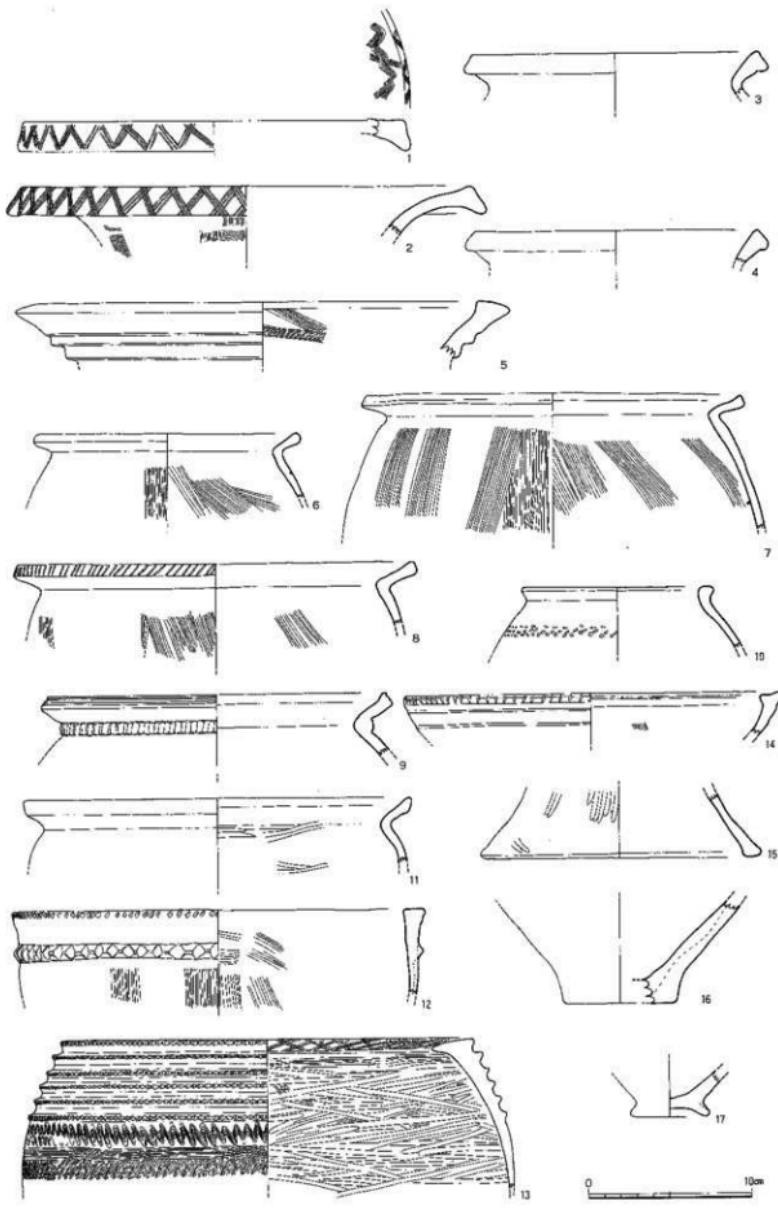
6、7、8、9は、「く」字状に屈折する口縁をもつ甕であり、6～8は、胴部内外面にハケを施すものである。口縁端部は拡張され平坦面を有し、そこに8は刻目を、9は凹線文を施すものである。

10は無頸壺であり、口径12cmを測り、胴部上半に列点文を施すものである。

11、12、13は鉢である。13は、口縁端部を厚くし平坦面をつくる。そして、口縁端部は、円形浮文と斜格子文で装飾され、外面は、突帯文、波状文、直線文、列点文で所持しと飾られているものである。内面の調整は、ハケのち横方向のミガキであり、口径は25.8cmを測るものである。



第6図 騰貴遺跡B3区遺物出土状況実測図 (S=1:50)



第7図 勢實遺跡B-3区出土土器実測図(1)(S=1:3)

14、15は、高环の口縁部と底部である。14は、口縁端部が肥厚するもので、外面に刻目文、凹線を施すものである。内面調整はハケであり、口径23.4cmを測るものである。

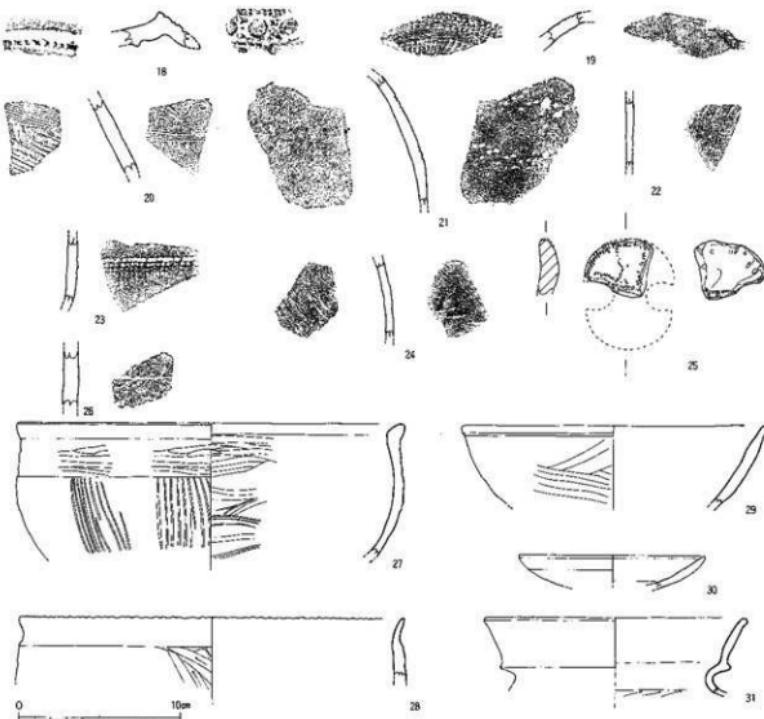
18～24、26は、小片の文様部分の破片である。ほとんどのものは、弥生時代中期に属するものと考えられるものであるが、26だけは、ヘラ描きの直線文が施されたもので、弥生時代前期に属する可能性が考えられるものである。

(分銅形土製品) 25は、分銅形土製品の上半、又は下半部の一部である。現長4.8cm、中央部幅2.0cm、厚さ1.0cmを測り、最大幅は、推定で6.9cmと考えられる。表面の文様は、縁部からくり込み部にかけて2条1単位の列点文を施し、縁から切り込み部に向けては1条1単位の列点文が施されている。また、側面から裏面へ斜めに貫通孔が6個確認される。時期的には、同一層出土の土器と同じく弥生時代中期のものと考えられる。

(石器) 第9図1は、安山岩製の石鏃である。長さ13.8cm、最大幅5.1cm、厚さ1.3cmを測る。

2～3は、緑色凝灰岩製の管玉未成品と考えられるものである。4は、角柱状のもので、長さ4.8cm、径2cm程のものである。側面の1面には擦り切りの痕と考えられる細長い溝が認められる。

(木製品) 第16図21は、長方形を呈す板状の建築材である。全長40.9cm、幅12.0cm、厚さ2.7cmを



第8図 鶴賀遺跡B3区出土土器実測図(2)(S=1:3)

測るもので、各端部に方形の割り込みを設けているものである。上端部には、中央に2個所割り込みが設けられ、左右側面側の端部は表裏とも削られ断面が三角形を呈するものである。下端部は、中央に1個所割り込みが設けられ、また、左側面側は、裏面が半分程割り込まれているものである。

6層出土遺物（第8図27～29）

27は、鉢である。頸部と腹部の境に段をもつもので口径24.4cmを測るものである。腹部外面には、沈線文が上下方向に施されたもので、内面はミガキによる調整である。

29は、浅鉢である。口縁端部外側が浅い沈線状を呈し、口径18.9cmを測るものである。

本層出土の3点の土器は、绳文時代後期～晩期にかけての時期に属するものと考えられる。

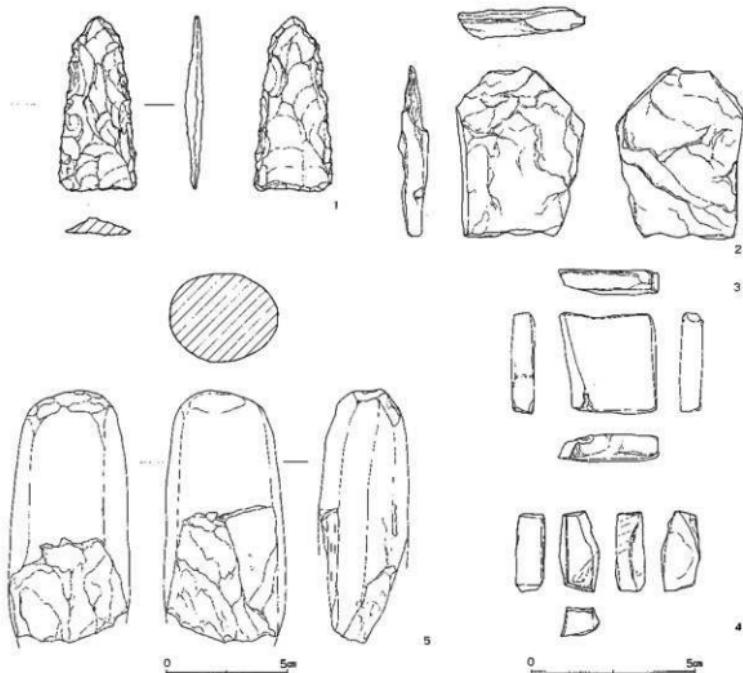
2層出土遺物（第8図30～31）

本層から出土した遺物は2点であった。30は、土師器皿であり、口径12.0cmを測る。京都系上師器と呼称されるもので、時期的には16世紀頃のものとして考えられる。

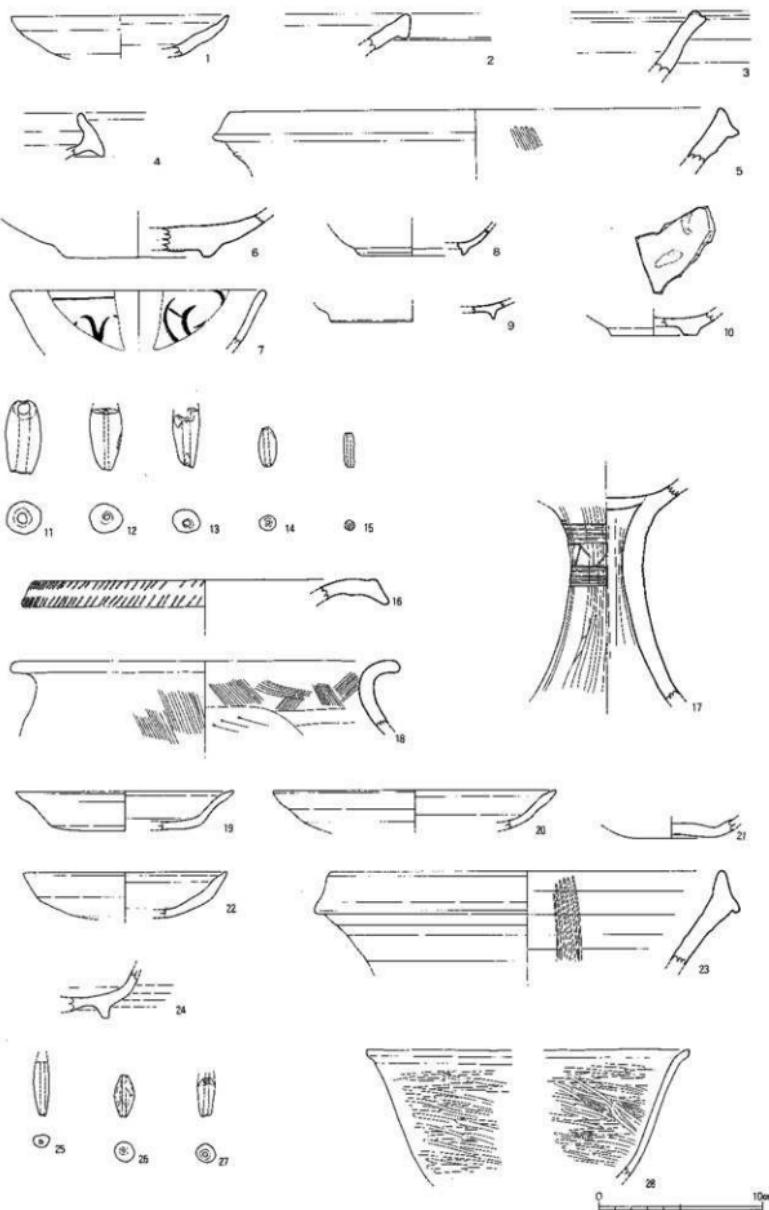
31は、複合口縁の甕であり、口径16.5cmを測るものである。弥生時代後葉のものと考えられる。

[後背湿地周辺出土遺物]

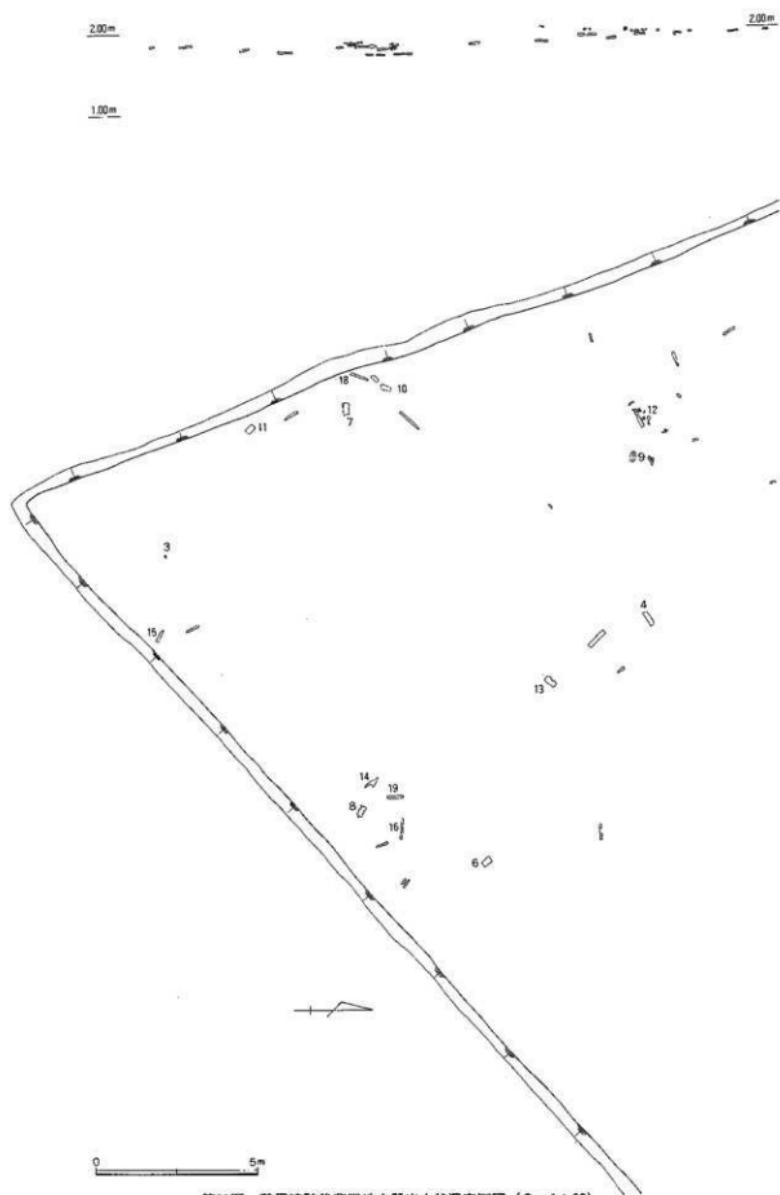
遺跡の南端部で検出した後背湿地からは、木製品を中心として土器、陶磁器、金属器等が出土して



第9図 鶴賀遺跡出土石器実測図 (S=2:3, 1:2)



第10図 納實遺跡後背湿地・SK 01出土遺物実測図 (S=1:3)



第11図 藤貫遺跡後背湿地木器出土状況実測図 ($S=1:60$)

いる。本製品は後背湿地でも南側の深い部分で出土し（第11図）、上下2層に分かれる包含層から出土している。包含層は、青灰色砂層（第3図5層）上に堆積した暗茶褐色

粘質土（第3図3層）とその上層の黒色粘質土（第3図2層）である。

以上の2つの層から出土した遺物について、層位ごとに以下述べたいと思う。なお、後背湿地外の黄褐色砂層上面の耕作土中から出土したものについても併せて述べることとした。

耕作土出土遺物（第10図1～15、第13図1）

耕作土から出土した遺物は、近世以前と考えられるものについて図化し掲載している。

（土師器） 第10図1は、口径13.5cmを測る皿で、内外面ともナテ調整で、16世紀代のものである。

（陶磁器） 陶磁器（第10図2～10）は、東播系鉢、越前系鉢、備前窯・摺鉢、青磁、白磁、唐津碗、常滑系壺、褐釉陶器、李朝刷毛目小皿、美濃天目・丸皿が出土している。なお、これらの中で図化したものはその一部であり、褐釉陶器、李朝小皿については、写真を掲載している。（カラー図版5）

2は小片であるが、東播系の鉢と考えられるものである。口縁部外面に粘土を貼つけ、肥厚させているものである。時期は、12世紀後半から13世紀前半頃のものと考えられる。

3は越前系の鉢であり、明確に産地が分からぬものである。口縁端部の上面と内面が沈線状に凹むものである。胎土は、1mm程の砂粒を含みやや粗いもので、色調は茶褐色を呈す。

4と5は、備前摺鉢の口縁部である。5は口径30.8cmを測るもので、内面に5本の条線をいれるものである。概ね15世紀頃のものと考えられる。

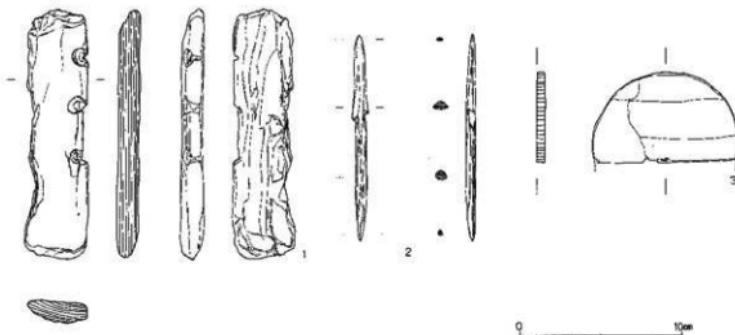
6と7は、中国製の青磁である。6は、盤の底部で、釉が高台から底部にまで及ぶもので、底径9.3cmを測るものである。7は、龍泉窯系梅で、蓮弁文を施すもので、口径16.0cmを測る。概ね16世紀後半頃のものと推定される。また、8と9は、中国製の白磁碗の底部である。

10は、唐津碗の底部である。底径5.3cmを測り、底部内面に砂目が残り、17世紀初頭のものである。

（木器） 火錐臼（第13図1）は、長さ15.1cm、幅2.2cm、厚さ1.2cmを測るものである。側端部に、



第12図 鶴賀遺跡出土鉄器実測図 (S=1:2)



第13図 鶴賀遺跡木器実測図 (1) (S=1:3)

径1.2cm程の孔が3つあるもので、孔の周縁部は焼け、黒色を呈すものである。

(石器) 石斧は(第9図5)は、先端部が欠けているもので、現状で全長15.6cmのものである。

2層出土遺物(第10図16、18~27、第12図1、2、第13図3、第14図4、5、第16図20、23)

本層からは、弥生土器、土師器、陶磁器、土鏡、金属器、木器が出土している。

(弥生土器) 小片が多く、全体の分かるものだけを図化している(第10図16、17)。

16は、朝顔状に広がる口縁をもつ壺の口縁端部である。口縁端部はわずかに拡張し、拡張した外面には、上下2段に列点文が施される。口径21.7cmを測るものである。

17は、高環の脚部である。上下2段の直線文とその間にヘラ描きの鋸歯文で飾るものである。調整は、外面に上下方向のヘラミガキがなされるものである。

(土師器) 土師器は、皿のみが出土しており、その中で4点だけ図化している。(第10図19~22)

19は、口径13.8cmを測るもので、口縁と底部の境が明瞭なものである。

22は、口径12.7cmを測るもので、口縁から丸みをおび底部に至るものである。口縁端部は尖り、内面に浅い段ができるものである。

以上の土師器は、京都系土師器皿として考えられるもので、16世紀代のものとして考えられる。

(陶磁器) 陶磁器は、青磁、美濃丸皿、備前摺鉢・甕、唐津、常滑系甕が出土している。この中で全形が分かるもの2点を図化している。

23は、備前摺鉢である。口径24.3cmを測るもので、口縁端部が上下に拡張するものである。内面には6本の条線が施されるものである。

24は、唐津の高台付の碗である。高台の下面の釉の剥ぎ取りが不良なものである。色調は乳白色を呈すもので、17世紀前葉のものである。

(金属器) 金属器では、小柄(第12図1)と煙管(第12図2)が出土している。

1の小柄は、鉄製の刀身の茎を銅板で覆ったものである。現状で全長15.0cmを測るもので、柄は長さ9.15cm、幅1.2cmであり、地板に文様を施しているものである。

2は銅製の煙管の雁首部である。火皿部は、径1.5cmの円形を呈し、脂返し部との間には、接合を補強する補強帯が認められる。管は、肩部から火皿部に向かって細くなり、脂返し部は直角に近く曲がる。また、側面には銅板を曲げた時の接合部分が確認される。時期は、17世紀後半と推定される。

(木器) 木器は、加工が施されたものを図化した。(第13、14図3、4、5、第16図20、23)

3は、円形を呈す薄い板状製品で曲物の底板と考えられる。径9cm、厚さ0.5cmを測るものである。

4は、側面の一方を欠く板状を呈すものである。左端部には方形の孔が空けられ、右端部には、2個所に割り込みが施されるものである。また、下端部には孔または、割り込みが設けられていたものと考えられる。現状で長さ16.8cm、幅5.4cm、厚さ0.4cmを測る。

5は、一方の側面を欠き、もう一方の側面に割り込みを設けた棒付き出下駄の一部である。3個所に孔が空けられているもので、長さ23.2cm、幅4.2cm、厚さ0.84cmのものである。

20は、両側面に2か所の割り込みを設けた板状製品である。表面には加工工具の痕が認められ、長さ14.0cm、幅7.9cm、厚さ1.0cmを測るものである。

3層出土遺物(第13図2、第14・15図6~19)

本層からは、弥生土器、木器が出土している。弥生土器は、小片のものばかりであり、全体が分かることは、皆無である。なお、破片の観察から弥生時代中期頃のものと考えられるものであった。

(木器) 加工がある程度施されているものの多くを図化している。木器は、鎌形のもの(2)、やや幅広の板状のもの(6~11)、やや長めの板状のもの(12、13)、鋤(14、15)、細長い板状のもの(16、17)、細長く厚いもの(18)、棒状のもの(19)が出土している。全体的に未成品のものが多い。

2は、木鎌である。全長12.5cmを測り、浅い割り込みが施され、鎌身部が表現されている。

7は、長さ19.4cm、幅9.0cm、厚さ0.8cmを測る板状のものである。中軸付近に3個所不規則に長方形の孔が空いているものである。

8は、長さ17.0cm、幅10.4cm、厚さ1.0cmを測る板状部分に、幅2.5cm程の柄と思われるものが付くものである。板状部分の側面には、台形の割り込みが2か所ずつ設けられているものである。

12は、長さ25.0cm、幅5.0cm、厚さ0.6cmを測るもので、棹付田下駄の一部と考えられるものである。各端部には、三角形の割り込みが設けられ、孔が3個所に空けられているものである。

14、15は、身が2支に分岐するナスピ形の鋤である。14は、全長22.5cmを測るもので、側面に割り込みをもつものである。

16、17は、両端部付近の側面に2個所の割り込みを施すものである。16は、全長30.0cm、幅2.3cm、厚さ0.9cmを測る。17は、全長20.6cm、幅1.8cm、厚さ0.9cmを測る。両者とも棹付き田下駄の一部の可能性が考えられる。

18は、端部付近に浅い割り込みが設けられているものである。割り込みは幅1.8cm程のものが、側面と表面の3面で確認される。建築材の可能性が考えられるものである。

第2節 調査の成果と課題

ここでは遺跡の調査成果について整理し、今後の調査で明らかにすべき点について述べたい。

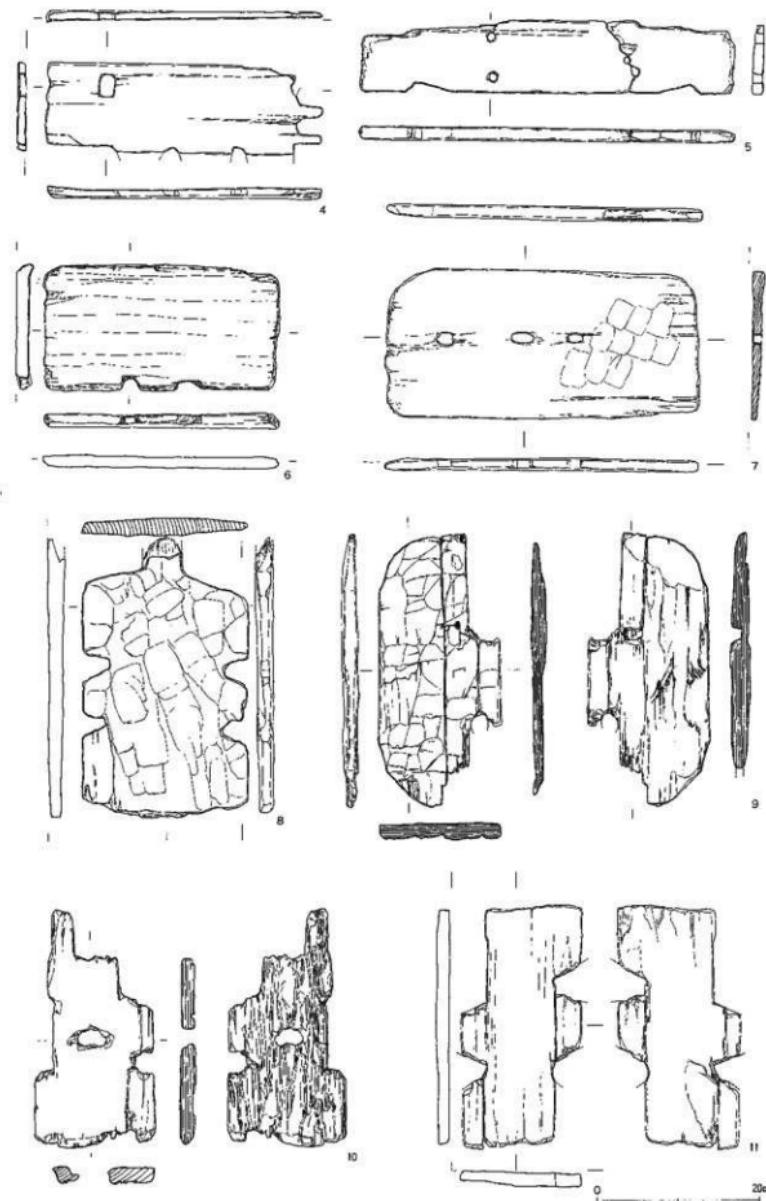
(遺跡の形成について) 遺跡は、堆積層によって形成されている。基盤層の砂岩上に青灰色砂層、黄褐色砂層の順に堆積するものであり、遺構、遺物及び、河道、後背湿地は、黄褐色砂層の堆積後のものである。

その黄褐色砂層の堆積時期については、SK01から弥生前期の土器が出土し、河道の最下層に縄文時代後・晩期の土器が含まれていることから、縄文時代後期以前であることは間違いないものと考えられる。また、このことは、黄褐色砂層の堆積によって形成された後背湿地から弥生中期以降の遺物が出土する点と矛盾するものではない。

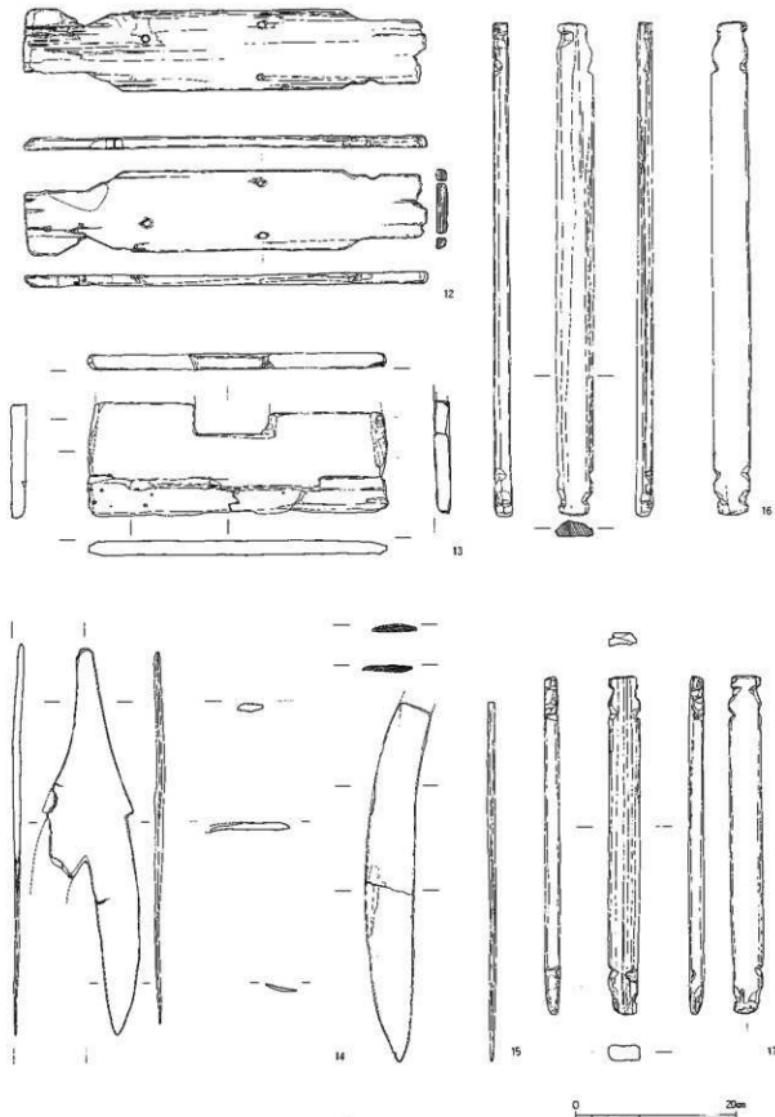
(出土遺物について) 出土遺物の時期的な出土量を検討すると、弥生中期に属するものが大部分を占め、弥生時代後期～平安時代にかけての遺物がほとんど見られないといった特徴が確認される。このことは、生活の場が低地付近であったのか遠い部分であったものかを反映している可能性が考えられる。また、そうした場合、付近に弥生時代中期の遺構の存在する可能性が考えられるものである。

また、出土遺物の中で、16世紀～17世紀に属するものには、青磁、白磁、褐釉陶器、朝鮮李朝時代の小皿といった輸入陶磁器が含まれており、付近に館跡等の存在する可能性を考える必要がある。

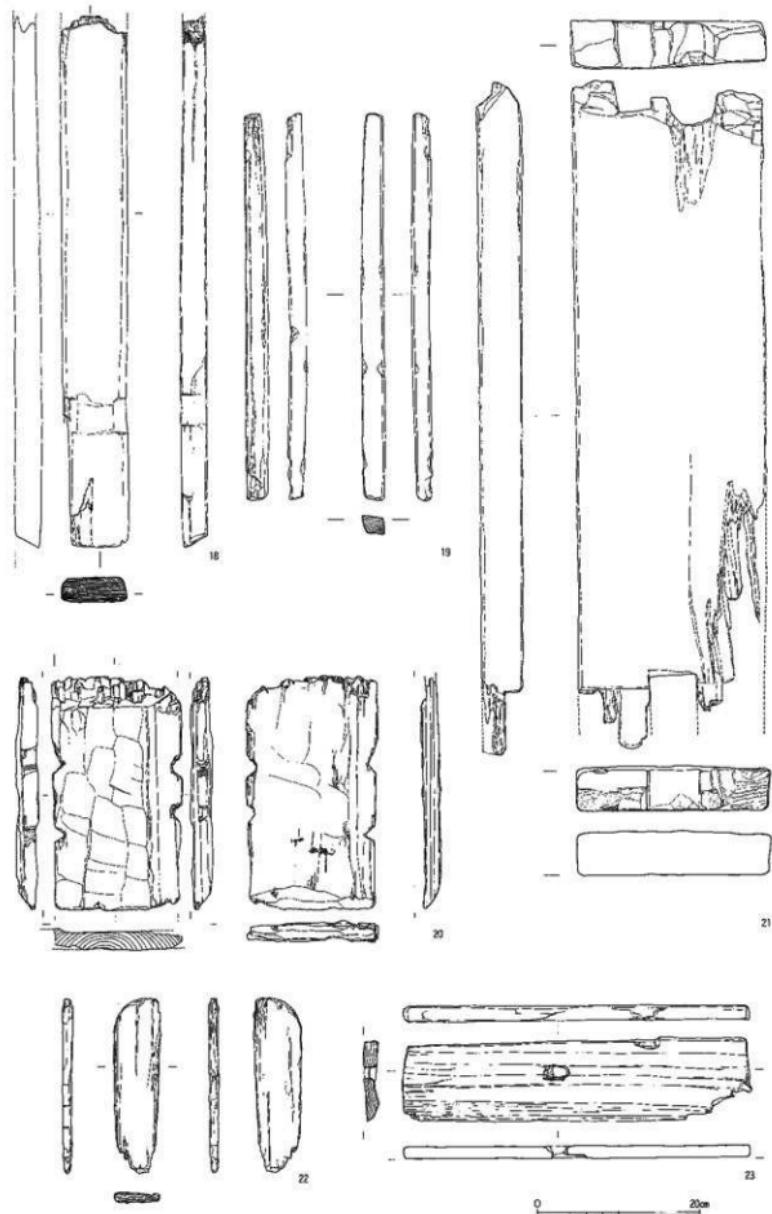
(今後の課題) 以上述べてきたように、本遺跡では意宇平野一帯の古環境を復元する上で、貴重なデータを提供したものと考えられ、また、出土遺物から付近に弥生時代中期の集落及び玉作工房が、中世では館跡の存在している可能性が指摘されるものである。今後の調査検討によって周辺の様相が明らかになることを期待したい。



第14図 鶴賀遺跡木器実測図 (2) ($S=1:6$)



第15図 萩貫遺跡木器実測図（3）（S=1:6）



第16図 藤賀遺跡木器実測図(4)(S=1:6)

第6章 自然科学分析

第1節 島田池遺跡1. 4調査区横穴墓群出土人骨について

鳥取大学医学部法医学教室

井上 晃 孝

鳥取県東出雲町の島田池遺跡横穴墓群は33横穴から成り、その内人骨が出土した横穴墓は14横穴である。

本横穴墓群の出土人骨の遺残性は、全般的には不良であったが、1区3-B号横穴、3-C号横穴、4区6号横穴と12号横穴の出土人骨の遺残性は、比較的良好で性別、年令と身長が推定できた。

確認された被葬者数は33体である。

以下、各横穴ごとに、出土人骨の概要を報告する。

歯牙は下記の略号で記載した。

- | | |
|-----------|-----------|
| ○：釘植歯牙 | r：歯根のみ |
| ○：埋伏歯 | △：遊離歯牙 |
| ×：欠（歯槽開放） | □：欠（歯槽閉塞） |
| C：龋歯（虫歯） | II：折損部位 |

最後に、島田池遺跡横穴墓群出土人骨一覧（付表）にまとめた。

1 区

[1号横穴墓]

玄室内には、人骨が若干遺残していた。遺残骨数もきわめて少なく、完形の骨はなく、その上脆弱化していた。

1. 骨の遺残性

きわめて不良で、完形の骨はない。頭骨、下肢骨と歯牙片のみ遺残していた。

2. 遺残骨名とその部位

頭蓋骨

頭 骨：前頭骨～頭頂骨～後頭骨（左右側頭骨、頭蓋底骨、顎面骨欠）

歯 牙：上、下、左、右不明の小白歯、大臼歯の歯冠破片

小白歯 3ヶ

大臼歯 5ヶ

下肢骨

脛 骨：左右不明の骨体中央部（圧平化）

3. 推定性別

頭骨の形態学的特徴、歯骨の骨体の大きさ、厚味と小、大臼歯の歯冠は破損しているが、比較的大きいので、男性骨と推定する。

4. 推定年令

頭蓋冠縫合の矢状縫合と人字縫合は開存している。歯冠は破損しているが、咬頭の咬耗は軽微で、エナメル質にとどまっており、ブローカーの1°であることから、年令は壮年前期（20代）位が推定される。

5. 推定身長

遺残骨からは、推定身長は不詳である。

6. 考 察

玄室内には、被葬者1体が確認された。しかし、玄室の遺物の配置状況から勘案すると、被葬者は少なくとも2～3体が埋葬されたものと推定される。

玄室入口に、頭骨が1ヶ遺残、その周囲に他の骨の遺残が少ないとからも、後世の祭祀の際、移動された可能性が高い。

他の被葬者の骨の遺残性が悪いのは、恐らく若年者（小児らの未熟骨）の被葬者の可能性もある。

7. まとめ

1区1号横穴墓の玄室内には、人骨が若干遺残していた。骨の遺残性はきわめて不良で、頭骨、歯骨と歯牙片のみが遺残していた。

遺残被葬者は1体、男性で年令は壮年前期（20代）位、身長は不詳である。

玄室の遺物の配置状況からみると、被葬者は少なくとも2～3体が推察された。

[2号横穴墓]

玄室内には、中央部と右側部に人骨が散在していた。

1. 骨の遺残性

遺残性はきわめて不良で、やや集骨状に散在していた。遺残骨数も少なく、完形の骨はない。

2. 遺残骨名とその部位

○中央部

頭蓋骨

頭骨：骨片化

歯牙：下顎左右不明大臼歯の歯冠片

脊椎骨

腰椎骨：Na不明の椎弓部

上肢骨

鎖骨：右；骨片化

不明：骨体の1部

上腕骨：不明；骨片化

不明：骨体中央部

橈骨：不明；骨片

下肢骨

寛骨：左；寛骨臼窓、大坐骨切片、腸骨体の1部

大腿骨：右；下端部

脛骨：左；骨体

：右；骨体

足骨：左；第1、2基節骨

：右；第1基節骨

その他

歯牙：左上顎乳犬歯（C）の歯冠

○右側部

頭蓋骨

頭骨：左眼窩～左頬骨部と右側頭部（錐体）

歯牙：左上顎第2乳臼歯（E）？の歯冠

下肢骨

大腿骨：不明；骨体中央部

脛骨：左（？）；骨体後面部

上肢骨

尺骨：不明；骨体の1部

3. 推定性別

玄室中央部の遺残骨をみると、壯年骨と小児（乳歯）の2体が検出された。

壯年骨の遺残骨をみると、全般的に骨が細く、きやしゃである。寛骨の大坐骨切痕は典型的な鈍角を呈し、女性骨と推定される。

次に、乳歯の左上顎乳犬歯（C）が遺残、小児の場合、歯冠のみでは性差がはっきりしないので、性別は不詳である。

玄室右側部の遺残人骨は、頭骨、上、下肢骨と乳歯1ヶであった。

頭骨は小さく、きわめて骨質がうすい。上、下肢骨もかなり小さい、乳歯は恐らく左上顎第2乳臼歯？であるので、小児骨が推定されるが、性別は不詳である。

4. 推定年令

玄室中央部には、女性骨と小児骨が遺残していた。女性骨は骨の大きさ、寛骨の形状と歯冠片から、年令は壯年位が推定される。

小児骨は乳臼歯のみであるので、年令は一応10歳前後位が推定される。

玄室右側部の人骨は、遺残性が不良であり、遺残骨はきわめて未熟骨であり、乳臼歯が遺残しているので、年令は10才前後位が推定される。

5. 推定身長

玄室内の被葬者3体は、骨の遺残性が不良につき、女性骨1体と小児骨2体の身長はいずれも不詳である。

6. まとめ

1区2号横穴墓の玄室内には、遺残性不良の骨が遺残していた。被葬者は3体である。

玄室中央部には、女性骨と小児骨が遺残、やや集骨状に遺残していた。

女性骨は年令壯年位、身長不詳である。

小児骨の年令は10才前後位、身長不詳である。

玄室右側部には、小児骨が若干遺残していた。骨の遺残性不良である。

小児骨の年令は10才前後位、身長不詳である。

[3 - B 号横穴墓]

玄室は全面に、人骨が無雜作に散在していた。追葬、祭祀の際、白骨化した骨がかなり集骨状に移動された形跡がある。

骨の遺残性は、比較的良好なものから不良のものまであった。

被葬者は5体で、男性2体、女性2体と性別不明の若年者1体であった。

1. 骨の遺残性

被葬者5体の骨の遺残性は、比較的良好なものから不良のものまであった。

男性骨は2体で、骨の遺残性は比較的良好で、年令、身長が推定できた。

女性骨は2体で、骨の遺残性は男性骨に比べてやや不良で、年令推定可能、身長不詳であった。

性別不明の若年者の骨の遺残性は、きわめて不良で、遺残骨は下顎骨の1部のみで、かろうじて年令推定可能、身長不詳であった。

2. 遺残骨名とその部位

玄室全面に、人骨が集骨状に散在していた。骨の採取番号はNo.1~73に達した。

これらの骨をすべて個体別に識別是不可能であるので、主要骨を中心に識別した。

頭蓋骨、下顎骨、寛骨、大腿骨、胫骨について記載する。

1) 頭蓋骨

①頭 骨 : No.63 完形

下顎骨 : No.64 左下顎枝欠、他完形

| | |
|---------------|----------------|
| ○○ | ○○○○ |
| ×× 6 5 ×××× | ×× 3 × 5 6 7 □ |
| 8 7 6 5 4 ××× | ×× 3 4 5 ××□ |
| ○○○○○ | ○○○ ○ |

②頭 骨 : No.16 右頭頂骨と右頭蓋底部欠、他完形

下顎骨 : No.15 下顎体3つに折損

| | |
|------------------|-----------------|
| ○○○ | ○○○ ○○○ |
| × 7 6 5 ×××× | × 2 3 4 × 6 7 8 |
| □ 7 □ ××××(2 1R) | 1 ×××× 6 ×× |
| ○ r r r | ○ |

③頭 骨 : No.68、69 瞬面骨、上顎骨と左右の側頭骨

下顎骨 : No.45 下顎体正中部折損、右下顎枝角欠

| | |
|----------------|-----------------|
| ○○○ | ○○○ |
| 8 7 6 ××××× | ××××× 6 7 8 |
| 1 6 5 4 3 2 1R | 1 2 3 4 × 6 7 8 |
| ○○○○○○ | ○○○ ○○○ |

④頭 骨 : No.47 後頭骨部と側頭骨

下顎骨：No.36 下顎体3つに折損、右下顎枝角欠

II 8 7 6 × 3 II 1 | 1 2 II 4 × 6 × ×
 ○○○ △△△△△△△

⑤下顎骨：No.37 右下顎体

II × × 6 × × II
 ○

2) 主要骨の個数、性別と個体数

| 骨名 | 採取No. | 左右 | 部位 | 性別 | 個体数 |
|-----|--------|-----|--------------|-------|-----|
| 頭骨 | 63 | | | ♂ 2 | 4 |
| | 16 | | | ♀ 2 | |
| | 67, 68 | | | ♀ (?) | |
| | 47 | | | | |
| 下顎骨 | 64 | | | ♂ 2 | 5 |
| | 15 | | | ♀ 2 | |
| | 45 | | | 不明 1 | |
| | 36 | | | | |
| | 37 | | | | |
| 寛骨 | 14 | 左) | ほぼ完形 | ♂ | |
| | 2 | 右) | 勝骨上部欠、他完形 | ♂ | |
| | 59 | 左) | | ♀ | 2 |
| | 42 | 左) | 大坐骨切痕部 | ♀ | |
| | 41 | 右) | 大坐骨切痕部 | ♀ (?) | |
| 大腿骨 | 66 | | | | |
| | 3 | 左) | 完形、骨長435mm | ♂ | |
| | 4 | 右) | 完形、骨長435mm | ♂ | |
| | 21 | 左) | 完形、骨長410mm | ♂ | 2 |
| | 20 | 右) | ほぼ完形、骨長410mm | ♀ | |
| | 30 | 左) | 近位一骨体中央部 | ♀ | |
| | 70 | 左) | 骨体中央部 | ♀ (?) | |
| 胫骨 | 71 | 右) | 骨体中央部 | | |
| | 9 | 左) | 下部欠 | ♂ | |
| | 12 | 右) | ほぼ完形、骨長350mm | ♂ | |
| | 17 | 左) | 骨体中央部 | ♂ | |
| | 19 | 右) | 骨体中央部 | ♂ | 2 |
| | 33 | 左) | 骨体中央部 | ♀ | |
| | 29 | 右) | 骨体中央部 | ♀ | |
| 股骨 | 65 | 不明) | 骨体の一部 | ♀ | |
| | 67 | 不明) | 骨体の一部 | ♀ | |

3. 個体数（被葬者数）

2) 主要骨の個数と性別の項で示したように、

頭骨：4体分（♂ 2、♀ 2）

下顎骨：5体分（♂ 2、♀ 2、不明 1）

寛骨：4体分（♂ 2、♀ 2）

大腿骨：4体分（♂ 2、♀ 2）

胫骨：4体分（♂ 2、♀ 2）

以上から、被葬者数は下顎骨が5体分遺残することから、5体が推定される。内訳は♂ 2体、♀ 2体、性別不明1体（若年者）である。

4. 推定年令

男性1（頭骨No.63、下顎骨No.64）の諸形態学的所見から、頭蓋冠縫合は矢状縫合のみ一部融合、口蓋縫合の切歯縫合は完全融合、口蓋骨縫合は下唇が融合、歯牙の咬耗度はプロカーブの2°であること

から、年令は壮年期（30代）が推定される。

男性2（頭骨No.16、下顎骨No.15）の諸形態学的所見から、頭蓋冠縫合の冠状縫合は右側頭一部融合、矢状縫合の頭頂部は融合がかなり進行している。歯牙の咬耗度はプロカーナーの2°であることから、年令は熟年（40才前後）位が推定される。

女性1（頭骨No.67、68、下顎骨No.45）の所見は、口蓋縫合の切歯縫合は外側部融合、内側部未融合、口蓋骨縫合は未融合、歯牙の咬耗度はプロカーナーの1°であることから、年令は壮年中期（20代後半）位が推定される。

女性2（頭骨No.47、下顎骨No.36）の所見では、下顎の8番が萌出していることから一応成人域、歯牙の咬耗度は大臼歯でも軽微であることから、年令は壮年前期（20代前半）位が推定される。

性別不明者の唯一の遺残骨は、下顎骨No.37のみで、年令推定は推察の域を出ないが、6番は死後欠で歯槽開放、完全に萌出していた。一般的に、M（6）は6才臼歯といわれ、6才位で萌出、6番の咬耗度はきわめて軽微であるので、年令は10代位が示唆される。

5. 推定身長

本横穴の被葬者5体のうち、長管骨が完形で、身長推定できたのは、男性骨2体にとどまった。とくに、男性骨では大腿骨が完形か、ほぼ完形であった。

男性1由来と推定される大腿骨長は435mmであるので、推定身長はビアソン法で163.0cm、藤井法で162.3cmである。

男性2由来と推定される大腿骨長は410mmで、推定身長はビアソン法で158.3cm、藤井法で156.1cmである。

女性骨1、2はいずれも完形の四肢骨が遺残していないので、身長はいずれも不詳である。

性別不明者（若年者）は、遺残骨が下顎骨のみであるので、身長は不詳である。

6. その他

被葬者5体（♂2体、♀2体、性別不明1体）の遺残骨をみると限り、骨折・疾患の特異的所見を認めない。

7.まとめ

1区3-B号横穴墓の玄室内には、人骨が集骨状に散在していた。

被葬者数は男性2体、女性2体と性別不明1体の5体である。

骨の遺残性は男性骨が最も良好で、次に女性骨、性別不明骨が最も悪かった。

男性1の年令は壮年期（30代）、身長は163.0cmである。

男性2の年令は熟年（40才前後）、身長は158.3cmである。

女性1の年令は壮年中期（20代後半）、身長不詳である。

女性2の年令は壮年前期（20代前半）、身長不詳である。

性別不明者の年令は若年者（10代）、身長不詳である。

[3-C号横穴墓]

玄室内には、2個所（左側中央部とほぼ中央部）に人骨が集骨状に遺残していた。

骨の遺残性は不良であるが、被葬者2体が識別された。

1. 骨の遺残性

きわめて不良で、完形の骨はない。

2. 遺残骨名とその部位

主要骨の個数、性別と個体数

| 骨名 | 採取No. | 左右 | 部位 | 性別 | 個体数 |
|-----|-------|----|---------------|----|----------|
| 頭骨 | 20 | 左) | 前頭骨(眼窩上縁~前頭部) | ♀ | 1 若年者 |
| | 21、22 | | 右側頭骨 | ♀ | |
| | 16 | | 前頭骨 | 不明 | |
| 寛骨 | 30 | 右) | 腸骨、大坐骨切痕部 | ♀ | 1 若年者 |
| | 15 | | 腸骨、大坐骨切痕部 | ♀ | |
| | 11 | | 腸骨片 | 不明 | |
| 大腿骨 | 8 | 左) | 骨体中央部 | ♀ | 1 若年者 |
| | 17 | | 現場での骨長420mm | ♀ | |
| | 12 | | 骨頭部~頭部 | 不明 | |
| 胫骨 | 1 | 左) | 骨体中央部 | ♀ | 1 若年者 |
| | 2 | | 骨体中央部 | ♀ | |
| | 29 | | 骨体中央部 | 不明 | |
| 上腕骨 | 4 | 不明 | 骨体中央部 | ♀ | 1 若年者 |
| | 9 | | 骨体中央部 | ♀ | |
| | 27 | | 骨体の1部 | 不明 | |

3. 推定性別

遺残骨名の項(主要骨の個数と性別)で要約したように、男性1体と性別不明の若年者1体である。

4. 推定年令

被葬者2体は、骨の遺残性不良のため、推察の域をでないか、男性骨は骨の大きさからして壮年期が推定される。

もう1体は若年者である。本屍骨の大腿骨近位部が未融合(骨端線離開)であることから、20才以下(10代前半か後半)が推定されるが、本屍骨からはそれ以上の年令区分は不詳で、推定年令は10代とした。

5. 推定身長

被葬者2体のうち、男性骨の推定身長はピアソン法で160.2cm、藤井法で158.6cmである。

若年者(10代)の推定身長は不詳である。

6. まとめ

1区3-C号横穴墓には、被葬者2体(♂1体と若年者1体)が埋葬されていたが、骨の遺残性は不良であった。

後世の骨の搅乱がみられた。

男性の年令は壮年位、身長はピアソン法で160.2cmである。

若年者の性別は不明、年令は10代位、身長は不詳である。

4 区

[5号横穴墓]

玄室内には、中央部と右側中央部の2個所に、人骨がやや集骨状に遺残していた。

骨の遺残性はやや不良であったが、被葬者は2体(♂、♀)で集骨状に混在していた。

1. 骨の遺残性

やや不良で、完成骨はない。

2. 遺 残 骨

主要骨の個数、性別と個体数

| 骨 名 | 個数 | 左右 | 性別 | 個体数 |
|-----|--------------|----------------------------|-----------|-------|
| 頭 骨 | $1 + \alpha$ | | 不明 | 2 (?) |
| 上腕骨 | 3 | 左1) 右1) 不明1 | ♂ ♀(?) | 2 |
| 大腿骨 | 4 | 左1) 右1) 左1) 右1) | ♂ ♀ | 2 |
| 脛 骨 | 4 | 左1) 右1) 右1) 不明1)? | ♂ ♀ | 2 |

3. 被葬者数（個体数）

玄室内には、人骨が散在、やや集骨状に遺残していた。

精査すると、被葬者（個体）数は2体（♂、♀）であった。

4. 推定性別

頭骨は破損骨片化して、性別判定不能、上腕骨、大腿骨と脛骨の形態学的特徴から、かろうじて性別判定が可能であった。

上腕骨は3ヶ（左1、右1、不明1）遺残、左右は♂、不明は♀（？）であった。

大腿骨は4ヶ（左2、右2）遺残、1対は♂、もう1対は♀であった。

脛骨は4ヶ（左2、右2）遺残、1対は♂、もう1対は♀であった。

以上から、被葬者は男、女の2体である。

5. 推定年令

遺残骨は、年令推定する部位が欠損しているが、骨の大きさからして、♂、♀とも一応成人域であり、年令は壮年期位が推察される。

6. 推定身長

遺残骨に完形骨の4肢骨がないので、被葬者2体（♂、♀）とも身長不詳である。

7. ま と め

4区5号横穴墓の玄室内には、人骨がやや集骨状に遺残していた。

被葬者数は2体（♂、♀）で、骨の遺残性は不良であった。

男性の年令は一応壮年期位、身長不詳である。

女性の年令は一応壮年期位、身長不詳である。

[6 号横穴墓]

玄室の中央やや奥部に、人骨が集骨状に遺残していた。

骨の遺残性はやや不良であった。

被葬者数は3体（♂2体、性別不明1体）であった。

1. 骨の遺残性

集骨状に遺残、骨の遺残性はやや不良であった。

2. 遺残骨、性別と個体数

| 骨名 | 部位 | 個数 | 左右 | 性別 | 個体数 |
|-----|-----------------|----|-------------|-------------|-----|
| 頭骨 | 右頭頂部 右側頭部 | 1 | | ♂ 1 | 1 |
| 下頸骨 | ほぼ完形 (正中部折損) | 1 | | ♂ 1 | 1 |
| 上腕骨 | 骨体中央部 | 5 | 右 1 不明 4 | ♂ 2 不明 1 | 3 |
| 尺骨 | | 4 | 左 2 右 2 | ♂ 2 | 2 |
| 大腿骨 | 完形骨 3 骨体 1 | 4 | 左 2 右 2 | ♂ 2 | 2 |
| 胫骨 | 骨体中央部 | 5 | 左 2 右 3 | ♂ 2 不明 1 | 3 |

3. 被葬者数

遺残骨、個数、左右別、性別と個体数から、被葬者数は3体である。

4. 推定性別

遺残骨を精査すると、

寛骨 2対、ともに♀骨

大腿骨 2対、ともに♀骨

胫骨 2対、ともに♀骨

以上から、男性骨2体である。

頭骨と下頸骨はともに♀骨であるが、男性2体のうち、いずれかの男性の頭骨と下頸骨に由来するか、現時点では特定しない。

上腕骨と胫骨から、もう1体が遺残するが、性別は不明である。

5. 推定年令

遺残骨をみる限り、すべて成人骨である。

男性2体は、ともに壮年期位が推定されるが、性別不明のもう1体は、成人骨であるが、それ以上の年令区分は不詳である。

6. 推定身長

大腿骨は2対遺存、両者はいずれも♀骨で、1対の大腸骨長(右)は430mm、もう1対の大腸骨長(左)は450mmである。

♂1(骨長:430mm)はビアソン法で162.1cm、藤井法で161.1cmである。

♂2(骨長:450mm)はビアソン法で165.8cm、藤井法で166.1cmである。

性別不明のもう1体の推定身長は不詳である。

7. まとめ

4区6号横穴墓の玄室内には、人骨が集骨状に遺残、被葬者数は3体(♂2体、性別不明1体)である。

男性骨2体の年令は、ともに壮年期位、うち、1体の身長はビアソン法で162.1cm、もう1体の身長はビアソン法で165.8cmである。

性別不明1体の年令は、一応成人域(それ以上の区分不詳)、推定身長も不詳である。

[7 号横穴墓]

玄室中央の奥部から玄室入口に向けて、人骨が集骨状に遺残していた。

当初、遺残骨の配列具合から、被葬者は1体（♂）と推定されていた。

人骨掘り上げ時、骨の中に、一部脊柱が混在していることが確認された。

本横穴墓の被葬者数は2体（♂、♀）であった。

男性骨（1号人骨）の遺残性は、やや良好で、遺残骨量も多い。

女性骨（2号人骨）の遺残性は、きわめて不良で、遺残骨量も少ない。

1号人骨

1. 骨の遺残性

比較的骨の遺残性はよく、ほぼ骨格順に遺残していた。白骨化後、上半身骨の1部が集骨状にまとめられていた。

2. 遺残骨名とその部位

頭蓋骨

頭 骨：ほぼ完形（左頭頂部～側頭部欠）

下顎骨：ほぼ完形（左右の下顎枝上部欠）

歯 牙：

| | | | | |
|-----|---|----|-----------|-----------------|
| ○○○ | r | ○ | ○ | ○○ |
| 8 | 7 | 6 | × 4 × × 1 | × 2 × 4 □ 6 7 □ |
| □ | □ | 6 | □ □ 3 2 1 | 1 2 3 4 5 □ 7 □ |
| ○ | ○ | ○○ | ○○○○○ | r |

脊椎骨

頸椎骨：2ヶ；Na.2（軸椎、歯突起）、Na.不明の椎体

胸椎骨：4ヶ；Na.不明の椎体

腰椎骨：5ヶ；Na.1～5（完形）

胸郭骨

胸 骨：胸骨体；骨片化

肋 骨：左；若干 両端欠

右；若干 両端欠

上肢骨

鎖 骨：左；ほぼ完形、骨長143mm

右；骨片化

肩甲骨：左；関節面とその周辺骨

右；関節面、外側縁、鳥口突起

上腕骨：左；骨片化

右；ほぼ完形、骨長310mm

尺 骨：右；ほぼ完形、骨長250mm

橈 骨：右；ほぼ完形（下端部1部欠）

下肢骨

寛 骨：右；腸骨体、閉鎖孔部

大脛骨：左；近位部欠

右；ほぼ完形、骨長435mm

脛 骨：左；ほぼ完形、骨長347mm

右；ほぼ完形、骨長347mm

踵 骨：左；破損化

右；破損化

距 骨：右；骨片

3. 推定性別

頭骨と下顎骨の諸形態学的特徴、上、下肢骨は大きく頑健で、粗面の発達が良好なことから、男性骨と推定する。

4. 推定年令

頭骨の頭蓋冠縫合と口蓋縫合の融合の程度からして、年令は壮年期位が推定される。

5. 推定身長

遺残する4肢骨長から、ビアソン法で平均身長161.5cm、藤井法で平均身長160.1cmである。

6. その他

本屍の遺残骨をみる限り、骨折・疾患らの所見はない。

2号人骨

1号人骨（♂）の遺残骨の中に、1部細く、小さい骨が混在していた。遺残骨数は少ない。

1. 骨の遺残性

遺残性はきわめて不良で、遺残骨数も少ない。骨は全般的に細く、小さく、繊細である。

2. 遺残骨名とその部位

胸郭骨

肋 骨：右；若干 両端欠

上肢骨

鎖 骨：右；両端欠

脊椎骨

腰椎骨：2ヶ；Na不明の椎体

下肢骨

踵 骨：左；破損化

3. 推定性別

遺残性不良、遺残骨数少ないが遺残骨は1号人骨（♂）の遺残骨と比して、全般的に細く、小さく、繊細であることから、女性骨と推定する。

4. 推定年令

遺残骨数が少なく、年令推定するには資料不足であるが、遺残骨の大きさからして、一応成人域と推定する。

5. 推定身長

完形の4肢骨がないので、身長は不詳である。

6. その他の

遺残性不良、遺残骨数が少ないので、骨折・疾患等は不詳である。

埋葬順序

1号人骨（♀）は遺残性も比較的良好で、遺残骨量も比較的多い。

しかるに、2号人骨（♀）の遺残性は不良、遺残骨量も少ない。

1号人骨（♀）と2号人骨（♀）は、ともに成人骨である。

遺残性と遺残骨量からみて、2号人骨（♀）が先に埋葬され（初葬）、次に1号人骨（♀）が追葬されたと推定する。

1号人骨が白骨化後、祭祀の際、横穴内に人の出入りがあり、1号人骨の上半部の骨が1部集骨状に動かされたものと推察される。

7. まとめ

4区7号横穴墓には、被葬者2体（♀、♀）が埋葬されていた。

1号人骨は骨の遺残性比較的良好で、推定性別は男性、推定年令は壮年期位、身長はピアソン法で161.5cmである。

2号人骨は骨の遺残性不良で、推定性別は女性、推定年令は一応成人域、推定身長は不詳である。

埋葬順序は2号人骨（♀）が初葬、次に1号人骨（♀）が追葬されたと推定する。

後世の祭祀の際、男性骨も1部集骨状に移動されたと推察する。

[8号横穴墓]

玄室の奥半分の左右の2ヶ所に、6ヶの人骨が散在していた。

骨の遺残性きわめて不良、被葬者数は2体である。

1. 骨の遺残性

きわめて不良で、完形骨もない。

風化が著明で、脆弱化が著しく、欠損骨で左右不明の長管骨片であった。

2. 遺残骨名とその部位

上肢骨

上腕骨：3ヶ；左右不明の骨体

前腕骨：1ヶ；左右不明の桡骨骨体

下肢骨

脛骨：1ヶ；左右不明の骨体

3. 個体数と推定性別

上腕骨が左右不明ながら、3ヶ遺残することは、2体が埋葬されたことになる。

遺残する上、下肢骨は風化が著しく、性差を判別しえず、2体の性別はいずれも不明である。

4. 推定年令

遺残する上、下肢骨の大きさは、一応成人域に達しているので、成人であるが、それ以上の年令区分は不詳である。

5. 推定身長

被葬者2体とも、完形骨がないので、いずれも身長は不詳である。

6. まとめ

4区8号横穴墓の玄室の左右の奥部に、遺残性不良の人骨が若干散在していた。

被葬者は2体で、性別はいずれも不明、年令はとともに成人域、身長はいずれも不詳である。

[10号横穴墓]

玄室内には、5ヶの人骨が散在していた。

被葬者は1体で男性骨であった。

1. 骨の遺残性

不良で、遺残骨数も少なく、完形骨もない。

2. 遺残骨名とその部位

頭蓋骨

頭 骨：右頭部欠（右前頭部、右頭頂部、右側頭部、右顎面部）

上顎骨には左右10ヶの歯牙釘植

下顎骨：齒槽開放、左右下顎枝上部欠

歯 牙：

| | |
|-----------------|-----------------|
| ○○○○○ | ○○○○○ |
| × 7 6 5 4 3 × × | × × 3 4 5 6 7 × |
| □ × × × × × × | × × × × × × × □ |

上肢骨

上腕骨：右；骨体

下肢骨

大腿骨：左；骨体中央部

右；骨体中央部

3. 推定性別

頭骨の諸形態学的特徴、下肢の大腿骨の大きさと筋付着部の粗面の発達が良好なことから、男性骨と推定する。

4. 推定年令

頭蓋冠縫合は冠状縫合の右側頭部のみ融合、他は未融合である。

口蓋縫合のうち、切歯縫合は完全融合、口蓋骨縫合は未融合である。

歯牙の咬耗度は、大臼歯のみエナメル質が平坦化、プロカーラーの1°、他の歯牙は咬耗（-）。

以上から、年令は壮年中期（30才前後）位が推定される。

5. 推定身長

遺残する上、下肢骨は破損骨であるので、身長は不詳である。

6. その他

本屍の下肢の大脛骨を見る限り、生前がっちりした体躯の男性が推察できる。

7.まとめ

4区10号横穴墓の玄室内には、人骨が若干遺残していた。

骨の遺残性は不良である。

被葬者は1体で、性別は男性、年令は壮年中期（30才前後）位、身長不詳である。

後世、骨の搅乱がみられた。

[11号横穴墓]

玄室左側に、被葬者1体が埋葬されていた。

玄室入口側を頭位にして左奥壁を足位とする仰臥伸展位で埋葬されていた。

玄室右側奥に須恵器が4ヶ散在しており、恐らくもう1体が埋葬されたと推察されたが、骨の遺残を認めなかつた。

1. 骨の遺残性

遺残性かなり良好で、頭、胸部を欠くが、ほぼ1体相当骨が骨格順に配列、遺残していた。

2. 遺残骨名とその部位

頭蓋骨

頭 骨：頸頂骨骨片化

下顎骨：下顎体骨片化

歯 牙：

| | | | | | | | |
|----|---|---|---|--|-----|---|---|
| 8 | 7 | 5 | 2 | | 5 | 6 | 7 |
| △△ | △ | △ | | | △△△ | | |

脊椎骨

腰椎骨：1ヶ；Na不明の椎体骨片

胸郭骨

肋 骨：1ヶ；左右不明Na不明骨片

上肢骨

鎖 骨：右；骨片化

上腕骨：左；骨体の1部

右；粉細骨片化

尺 骨：右；骨体骨片化

橈 骨：左；骨体の1部

下肢骨

寛 骨：左；腸骨体部

右；腸骨体部

大脛骨：左；ほぼ完形、骨長425mm

右；骨体のみ

胫 骨：左；骨体のみ

右；骨体のみ

膝 骨：右；骨体の1部
足 骨：左；距骨骨片
右；踵骨、舟状骨骨片

3. 推定性別

遺残寛骨の大坐骨切痕の形状、下肢骨の大腿骨と脛骨の大きさ、筋付着部の粗面の発達が良好なことから、木尾骨は男性骨と推定する。

4. 推定年令

遺残する上、下肢骨の骨端線は、完全融合していることから、一応成人域である。

歯牙の咬耗度はプロカーナの2°であることから、年令は壮年期位が推定される。

5. 推定身長

遺残左大腿骨長から、身長はピアソン法で161.0cm、藤井法で160.0cmである。

6. その他の

遺残下肢骨は比較的の遺残性が良好であったが、骨折・疾患・切創らの異常を認めない。

7. まとめ

4区11号横穴墓の玄室左側に、被葬者1体が仰臥伸展位で埋葬されており、骨の遺残性はかなり良好で、1体相当骨が骨格順配列していた。

被葬者は男性、年令は壮年位、身長は161.0cmである。

後世の骨の搅乱は認めない。

玄室右側に、もう1体埋葬されたと推察されたが、骨の遺残を認めなかった。

[12号横穴墓]

玄室内には、被葬者3体が埋葬されていたが、骨の遺残性やや不良で、遺残骨量も少ない。

玄室入口からみて、左側の人骨を1号人骨、中央部の人骨を2号人骨、右側の人骨を3号人骨と仮称する。

これら3体の遺骨は、かなり配列が乱れていた。

1号人骨

1. 骨の遺残性

遺残性やや不良で、頭骨と上、下肢骨が遺残するが、完形の骨はない。

2. 遺残骨名とその部位

頭蓋骨

頭 骨：骨片化

上肢骨

上腕骨：左；骨片化

右；骨片化

尺 骨：左；骨体骨片化

右；骨体の1部

橈 骨：左；骨体の1部

下肢骨

寛 骨：左；腸骨部、恥骨部の1部

右；腸骨の1部

大腿骨：左；近位、遠位1部欠

右；ほぼ完形、骨長433mm

脛 骨：左；骨体中央部

右；骨体中央部

腓 骨：右；骨体骨片

3. 推定性別

本屍の下肢骨（大腿骨と胫骨）は、頑健で太く、筋付着部の粗面の発達が良好なことから、男性骨と推定する。

4. 推定年令

寛骨の恥骨結合部の所見から、壮年中期（30代前半）位が推定される。

5. 推定身長

遺残右大腿骨長から、身長はビアソン法で162.6cm、藤井法で161.8cmである。

6. その他

本屍骨は完形骨がないので、はっきりしないが遺残骨をみる限り、骨折・疾患の有無は不詳である。

2号人骨

1. 骨の遺残性

遺残性やや不良、遺残骨量も多くなく、完形骨は全ない。

2. 遺残骨名とその部位

頭蓋骨

頭 骨：顔面（眼窩上縁）～前頭～頭頂部

下顎骨：左右の下顎体に分離、破片

歯 牙：

| | | | | | | | | | |
|-----|---|---|----|---|---|-----|----|---|----|
| ll7 | 6 | 5 | ll | — | — | ll5 | 6 | 7 | ll |
| ○○○ | | | | — | — | r | ○○ | | |

脊椎骨

頸椎骨：No.不明の椎体の1部

胸郭骨

肋 骨：左右不明の骨片 著々

上肢骨

上腕骨：左；骨体中央部骨片化

下肢骨

寛 骨：左；寛骨臼窓部と腸骨の1部

右：寛骨臼窩部と腸骨の1部
大腿骨：左：骨体骨片化

右：遠位部1部欠、骨長385mm

脛 骨：左：骨体骨片化

右：遠位部欠損

足 骨：左：踵骨骨片化

右：踵骨骨片化

3. 推定性別

本屍の頭骨の眉弓、眉間の隆起がない。

寛骨の大坐骨切痕の形状、上、下肢骨は細く、繊細で筋付着部の粗面の発達が悪いので、本屍骨は女性骨と推定する。

4. 推定年令

頸骨の頭蓋冠縫合の程度と歯牙の咬耗度から、年令は壮年中期（30才前後）位と推定する。

5. 推定身長

遺残右大腿骨長から、身長はピアソン法で140.3cm、藤井法で147.3cmである。

6. その 他

本屍骨は完形骨がないので、骨折・疾患の有無は不詳である。

3号人骨

1. 骨の遺残性

遺残性やや不良、遺残骨量も少なく、完形骨はない。

2. 遺残骨名とその部位

頭蓋骨

頭 骨：前頭～前額部

下顎骨：右下顎体（臼歯部）欠

歯 牙：

| | | | | | | | | | | | | |
|----|---|---|---|--|---|------|---|---|---|---|---|---|
| II | 3 | 2 | X | | X | X | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 |
| ○○ | | | | | △ | ○○○○ | | | | | | |

上肢骨

肩甲骨：右：鳥口突起と関節窩の1部

上腕骨：左：骨体中央部

下肢骨

寛 骨：左：寛骨臼窩部と腸骨体

右：腸骨体の1部

大腿骨：左：骨体中央部

右：ほぼ完成（脆弱化）、骨長395mm

脛 骨：左：骨体中央部骨片化

右：骨体中央部

3. 推定性別

本屍の頭骨の肩間、眉弓の隆起の程度、前頭結節の発達の程度、歯牙の歯冠径が小さい、寛骨と下肢骨の粗面の発達の程度からして、本屍骨は女性骨と推定する。

4. 推定年令

頭骨の頭蓋冠縫合はすべて未融合、歯牙の咬耗度はきわめて軽微、長管骨の遠近両端の骨端は融合していることから、年令は壮年前期（20代前半）位が推定される。

5. 推定身長

遺残右大腿骨長から、身長はビアソン法で142.1cm、藤井法で149.5cmである。

6. その他

遺残骨を見る限り、骨折・疾患の有無は不詳である。

7. まとめ

4区12号横穴墓の玄室内には、被葬者3体が仰臥伸展位で埋葬されていたが、骨の遺残性はやや不良であった。

1号人骨は男性、年令は壮年中期位、身長はビアソン法で162.6cmである。

2号人骨は女性、年令は壮年中期位、身長はビアソン法で140.3cmである。

3号人骨は女性、年令は壮年前期位、身長はビアソン法で142.1cmである。

[14号横穴墓]

玄室内には、玄室入口中央部と左入口部に須恵器8ヶまとめて散在していた。

人骨は左奥部に、2ヶ所に2ヶの骨が散在していた。

被葬者は少なくとも1体が埋葬されたと推察される。

1. 骨の遺残性

遺残性きわめて不良、遺残骨量も少なく、完形骨もない。

2. 遺残骨名とその部位

下肢骨

脛骨：右：骨体中央部

骨片：左右不明；下肢骨片

3. 推定性別

唯一の骨名のわかる右脛骨の骨体は、小さく、細く、繊細であることから、本屍骨は女性骨と推定する。

4. 推定年令

右脛骨の骨体は、小さく、細く、繊細であるが、一応成人域に達している。

脛骨の骨質が薄く、もろくなっている所から、年令は熟年（？）が推察される。

5. 推定身長

遺残骨に完形骨がないので、本屍の生前の身長は不詳である。

6. その他

本屍の遺残骨は少なく、完形骨がないので、骨折・疾患の有無は不詳である。